# 緋弾のアリア　防人の４５口径

白石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　防人の４５口径

【Ｎコード】
Ｎ８０８９Ｓ

【作者名】
白石

【あらすじ】
武力を行使する探偵「武偵」が当たり前となった時代、
一人の少女と一人の元陸上自衛隊特殊部隊隊員の少年が出会うとき物語は始まる

感想はご自由にどうぞ、ばんばん書いちゃってください！

# 主人公設定（前書き）

主人公設定です

# 主人公設定

主人公設定
名前　鷹山（たかやま）　勇治（ゆうじ）　あだ名　タカ

外見や性格など　髪は茶髪で身長１６５センチと男ながら小柄な体格ながらも
元陸上自衛隊の特殊部隊である特殊作戦群に所属し軍事作戦に参加していた、
性格はどこにでもいる高校2年といった感じである
また、下の能力の影響で栄養ドリンクを飲用している、
それと同じで体力回復のために甘いものを好んで食す

武偵としての能力　特殊部隊にいたということもあり、腕は確かなものであり
強襲科のＳランクであり、戦闘能力だけならアリアとほぼ同じ

武偵達との関係　キンジとは強襲科時代の親友でキンジが探偵科に移った後でも
会話することしばし
アリアとは同じ強襲科でアリアに模擬戦の相手を頼まれたことから関係がはじまる
白雪とはキンジとの知り合ったところから関係が始まっている
理子とはタカが自衛隊時代に一度だけ合ったこと

がある

（タカ本人は忘れている）

レキには自衛隊式の狙撃銃の構え方を教えたことがある

武装　自衛隊の主力アサルトライフルの豊和工業製８９式小銃、
ヘッケラー＆コッホ社のＭＰ５ｓｄ６
レミントン社のＭ３１ショットガンなど
拳銃はカナダのパラ・オーディナンス社製の
ハイキャパ（多段数）ガバメントタイプのＰ－１４・４５
を始めと
シグ社製のＰ２２０（９ミリ拳銃）やＦＮハイパワーなど
状況に合わせて使用する
近接戦闘用の武器として８９式小銃に着剣可能な８９式銃剣や
刃先がバネで飛んでいくスペツナズナイフを使う

能力　「スローモー」
その名の通り、相手の動きを低速で見ることが出来る能力である
飛んでくる弾丸ですら目視する事ができる、
しかし、欠点としてものすごく体力を消費するため１回で３分が限界である、
また気温などにも影響されやすい、負傷していると体力減少のスピードが速くなる
上で書いた、栄養ドリンクや甘いも好きもこの能力のため

その他　二輪免許を所有しており、バイクに乗れる
また、走行中のバイクから８９式やＭ３１、Ｐ－１４などを射撃することができる

あとチョコスティックバーを常時2〜3本持ち歩いている、

## 主人公設定（後書き）

どうでしょうか、自分の初、二時創作小説の主人公
自分は学生なのでどうしても更新が不定期になりがちですが
がんばって更新していきます
内容としてはアニメ１話から最終話までとなります
それでは次回から二時創作での処女作、緋弾のアリア　防人（さきもり）の４５口径
本格的にスタート！！

## 報告：模擬戦にて彼女と遭遇（前書き）

キンジがチャリジャックに巻き込まれる、数日前のこと
タカは強襲科の訓練室で共に運命を共にする事になる少女と遭遇する

## 報告：模擬戦にて彼女と遭遇

東京武偵高校　強襲科　訓練室
カチャ、カチャとマガジンに５．５６ミリＮＡＴＯ弾を装填していくのは、
俺、鷹山（たかやま）　勇治（ゆうじ）である、武偵校では銃および武器の携帯が義務となっている
そんな武偵校の学生の俺が愛用しているのは、
豊和工業製８９式小銃、自衛隊での正式ライフルで５，５６ミリＮＡＴＯ弾を使用し
単発、連射、３点バーストでの射撃が可能である
俺はこれにドットサイトを乗っけている
そして拳銃はカナダのパラ・オーディナンス社製のＰ－１４・４５を使っている
この銃は一見するとコルト社製のＭ１９１１Ａ１（ガバメント）と変わりがないが、
ハイキャパ（多段数）使用となっていて元のＭ１９１１Ａ１の総弾数４５ＡｃＰ弾７＋１なのにたいして
同じ４５ＡＣＰ使用しているのに総弾数は１４＋１という異様の多さ、
ＦＢＩの人質救助部隊やアメリカ海軍の特殊部隊ネイビーシルーズなどで使用されている拳銃である
まあ、他にもＭＰ５ＳＤ６やＭ３１ショットガンやＦＮハイパワーなど
色々使っているが説明するとキリが無いので使っているときに説明しよう
さて、そんなかんだで弾を装填し終えたマガジンをたたいて弾をきっちりと並べていると

「ちょっと、そこの８９式持ったアンタ！」
釘宮声で話しかけられたのでそっちを向いてみるとそこには小柄な少女がいた
「何だ、お前さん俺に用？」
「そう、私とちょっと模擬戦してくれない」
「いいけど、なんで俺なんかと？」
「あんたも、私と同じＳランクでしょ互角の戦いができるじゃない」
「なるほどね、ところでお前さん、名前は？」
「アリアよ、神崎・Ｈ・アリア、そういうアンタは？」
「鷹山勇治、みんなからはタカと呼ばれている」
「そうじゃあ、タカ早速始めるわよ」
「あいよ」
蘭豹が「死ぬまでやれ」というのでアリアも俺も本気であった
防弾制服と武器の準備を終えた俺とアリアは模擬戦をはじめた
「先手必勝いくわよ！」
アリアはそういうと、ガバメントを俺に向けて連射してきた
俺はこれをローリングで回避すると８９式のセレクターを単発にいれてアリアに向けて発砲
パン、パンと撃つと同時にアリアはこれを回避してまたもガバメントを発砲
俺はこれを８９式で打ち落とすとアリアのガバメントが弾切れしたのでアリアが近くの遮蔽物に隠れ
リロードしようとしたので俺は閃光手榴弾のピンを引き抜きすぐには投げず２～３秒持った後
アリアの隠れている遮蔽物に投げつけた
「！？」アリアがそうなった瞬間に閃光手榴弾が炸裂した
俺はこのときと同時に８９式のセレクターを連射にいれてぶっ放した
ダダダダダダ！！！
５．５６ミリ弾が遮蔽物を穴だらけにしていく
８９式のマガジンを撃ち切ったのでリロードしようとしたそのとき

後ろから気配がしたので
振り向くとそこには日本刀を2刀もったアリアが斬りかかってきたので俺はホルスターからP－14を取り出し発砲する
バス！、バス！、バス！と45口径弾が次々と発射されていく
アリアはこれを回避しながら接近してくる
俺のP－14も弾切れとなったので俺はスペツナズナイフを取り出し刃先を発射する
スペツナズナイフはロシアの特殊部隊のスペツナズで使われているナイフで刃先をとばすことが出来る
アリアもまさか相手の構えたナイフが飛んでくるものとは思わなかったのでまた
「！？」となり回避行動を取る、その間にも俺は89式銃剣を89式に着剣し
アリアに向かい突撃した、いわゆる「バンザイ攻撃」である
「はあああああ！！」
「うおおおおお！！」
ガキィン！と俺の銃剣とアリアの日本刀がつばぜり合いになった瞬間
「やめぇ！！」と蘭豹が模擬戦を中止させた
俺とアリアは刃物を放した
「あんた、自衛隊出身ね」
アリアにいきなりそんなことをいわれたので俺は驚いた俺が自衛隊員だったことは
まだ話していないからだ
「それもふつうのじゃない、特殊作戦群ね」
「何で分かった？」
「89式の使い慣れた様子、閃光手榴弾の投げ方を見れば陸上自衛隊の特殊作戦群でだったことぐらい簡単に分かるわよ」
「さすがは、Sランクの武偵といったところか」
そう俺が言うとアリアは

「アンタ見込みがあるは」
「見込み?、何の?」
「時期に分かるはずよ」
アリアはそういった、俺はこのとき何のことだか分からなかった
チャリジャックに巻き込まれるまでは・・・

## 報告：模擬戦にて彼女と遭遇（後書き）

どうも、白石です
ついに始まりました緋弾のアリア　防人の４５口径、本編
今回はキンジがチャリジャックに巻き込まれる前に
アリアとタカの出会いを書きました
次回はキンジのチャリジャック事件です、
タカの見せるバイクアクションにご期待下さい（過度にはしないでください）
あと、後付け設定ですがタカは普通免許や
ショベルカーなどの小型・大型特殊免許も持っています

## 空から降ってきた彼女（前書き）

タカとアリアが模擬戦をした数日後
もう一人の主人公のキンジは世にも珍しいハイジャックに巻き込まれていた

## 空から降ってきた彼女

「そのチャリには　爆弾　が　仕掛けてありやがります」

一見すると何のことだか分からない内容だがこれは、

俺の目の前にいる友人の遠山キンジがさらされている状況である、

簡単に言えばチャリジャックに

まきこれているってことだ、チャリは自転車のこと、つまり自転車

ジャックの事である

コントでしかないと思っていたけど自転車ジャックって本当にある

んだな（笑）

「（笑）ってやる前に援護しろタカ！！」

「悪りぃ」

俺はストリートバイクでキンジの援護に回っていた

そもそもなんでこんな事になっているのかというと・・・

キンジは7時58分のバスに乗り遅れたこれがきっかけでキンジと

俺そして彼女との

関係が本格的にスタートする事になる

「あ、もうこんな時間かよ！！」

俺は高2での初日、終業式の日から遅刻の危機であった

といっても昨日深夜アニメみていて結構遅くまで起きていた俺が悪いんだけど

しかし、時間はもうギリギリであった、

俺は８９式のストックを折りたたみ（俺持っている８９式は空挺部隊や戦車兵が護身用としてストックが折りたためるタイプ）

パラオートをホルスターにつっこんで焼けたトーストを食べながら制服に着替え

着替え終えるとコーヒーをぐいっと飲み干した後、玄関にあいてあるヘルメットをかぶり

寮を出た、俺は二輪免許を持っているのでバイク通学である、どうでもいいが二輪免許以外にも普通免許、特殊免許も持っている

乗っているのはストリートバイク（二人乗り可能）でバスに乗らなくてもあっさりと学校まで行ける

俺はバイクに乗ると同時にエンジンをかけ武偵高を目指して出発した

もうすぐ武偵校だな・・・

そんなことを思っていると目の前を強襲科時代の友人遠山キンジが必死になってチャリをこいでいた

「なんだ、あいつも遅刻寸前なのか」

そう生暖かい考えでは無かった、キンジの後ろを異常な形をしタイヤ付きカカシが追跡していた
しかもＵＺＩサブマシンガン付きという豪華仕様

「おいおい、キンジの奴朝っぱらからやること派手だねぇ」

俺はこういうと、胸ポッケに入れていた携帯を取りだし

キンジの幼なじみで俺の女友達の白雪にコール（電話）した、
ちなみにタクティカルスロートマイクシステムというのを使っていてバイクに乗りながらでも通話可能

プルルルル・・・ガチャッ
「はい、もしもし」

「おー白雪、俺だ、タカだ」

「タカちゃん、どうしたの電話なんて？」

「白雪、俺とキンジは始業式でれそうにない」

「なんで？」

「ん？簡単に理由（わけ）を説明するとキンジの奴が
タイヤ付き&豪華サブマシンガン付きのカカシに襲われている」

「えええええ！？」

白雪の驚く声を聞きながら

「だから、キンジの奴を援護してくる」

「あわわわわわ」

白雪のあわてふためく声をタクティカルスロートマイクシステムのイヤホンで聞きながら
俺はキンジを援護するためバイクを走らせていた

「タカちゃん、キンちゃんを助けて！」

「分かってるって！、じゃあ後でな」

俺ははそういうと、電話を切ってキンジの援護に回った

俺はキンジのチャリとタイヤ付き&ＵＺＩ付きカカシ
（正しくはセグウェイ、後はセグウェイで表記する）の後ろから俺は話しかけた

「よお、キンジ朝っぱらから派手だな！！」

「タカか！？、気楽なことといってないで何とかしてくれ！！」

「あいよ、あいよ」

そういうと、俺はホルスターからＰ－１４を取り出しセグウェイを射撃した

バス！バス！バス！とセグウェイに向けて４５口径弾を次々に撃ち込んでゆく

キンジを追跡する2台のうち1台のセグウェイが俺の撃った４５口径でバラバラになった

しかし、もう一台のセグウェイがこちらに向けてＵＺＩを俺に向けて連射してくる

ズガガガガガガガ！！！

「ちっ！、これじゃ援護できん！！」

と俺が弾をよけながらぼやいていると突然、この前聞いた声がした

空から

「ほらそこのバカ二人、さっさと頭を下げなさいよ！」

この声は、この前模擬戦をしたアリア、いったいどこから！？

そう思った矢先にアリアが空からパラグライダーで降りてきて

バリバリバリバリッ！とガバメント２丁拳銃でセグウェイを銃撃して大破させた後

アリアはもう一度パラグライダーをＵターンさせた後、あっという間にくるりと逆さづりになり

「いくわよ！、アンタ！全力で自転車こぐっ！」

そういうと、キンジとアリアは抱き合ったかと思うと空に舞い上がっていった

ドガアアアアアアアンッッッ！！

それと同時にキンジの乗り捨てたチャリが轟音を立て爆発する

そして、キンジとアリアの二人は近くの体育倉庫のドアを突き破って落下していった

「あの二人大丈夫か？」

俺はバイクを止めて８９式のストックをのばし体育倉庫に向かって走っていった

## 空から降ってきた彼女（後書き）

どうも、白石です
今回はなんといえばいいのか分からないボツ回となってしまいました
アリア、キンジとの会話は少なく、
前回予告したバイクアクションちょっとだけと言うまあ、何ともいえません
次回は体育倉庫での攻防戦を書きます会話多めに改良しますのでご期待下さい
あ、あと出来ればの要望なんですが感想も書いてくれるとうれしいです

## ヒステリアモード？何それおいしいの？（前書き）

キンジがチャリジャックに巻き込まれアリアがキンジを救助しその後体育倉庫に仲良く落下した後、タカは二人の後をついてきていた

**ヒステリアモード？何それおいしいの？**

がらがらと音を立てて体育倉庫に二人そろってつっこんだアリアとキンジの無事を確認するため

俺はバイクから降りて、８９式を持って体育倉庫に向かって走っていった

「アリア！キンジ！、大丈夫か！？」

「・・・・・へ・・・・・・へ・・・・・・」

「？」

「ヘンタイーーーーーー！」

「え、俺のこと！？」

心配してきてやったというのに変態の札が貼られるとは何とも理不尽、「解せぬ」と思ったら

変態呼ばわりされているのは、キンジの方であった

どういう状況下というと、アリアとキンジ二人が体育倉庫のドア突き破って中に入り、

そして中にあった跳び箱の一番上をとばして中に二人とも見事といわんばかりにホールイン

で、キンジの上にアリアが覆い被さっているのであるでアリアの目が覚めてキンジが変態呼ばわりされているというわけだ

「さっ、ささっ、サイッテー！！」

とアリアが言うや否やアリアはキンジに向けて

ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこと力はいっていないハンマーパンチ連発しているのである

「おっ！、おい、やっ、やめろ！」

「このチカン！恩知らず！人でなし！」

「おーい、お二人さーん」

俺が話しかけているのに気づかないでアリアはキンジ相手にハンマーパンチ連発

話を全く聞いちゃいないので、しょうがなく89式をフルオートにし、天井に向けて

ダダダダダダダ！！！

この連射音に二人とも俺の存在に気づいたらしく、俺の方を向いてきた

「た、タカ！？」

「タカ！？」

「ったく、二人そろって何やってんの？」

「タカ！、こいつ私の服を脱がそうとしたのよ！！」
「はあ？どういことキンジ？、アリアの服を脱がそうだなんて？」
「ち、違う！こ、これは、おれがやったんじゃない！というかお前はコイツのことしってるのか？」
「このまえ、模擬戦をした神崎・Ｈ・アリア」
「で、そういうアンタとコイツとの関係は？」
「コイツの名は遠山キンジ、俺の友人の一人」
「私の服を脱がそうとした奴と友達なの！？」
「だから、違うって！！」
「まあまあ、二人とも落ち着いて・・」
といった矢先であった
ガガガガガガンッ！！
突然の銃声が体育倉庫をおそった
「何だよいったい！？」
「うっ！まだいたのねっ！」
アリアは跳び箱の隙間から外を見て拳銃を取り出した

俺も体育倉庫の壁から半身で外見て８９式のマガジンを交換する

「「いた」って何がだ！」

「お前さんが襲われていたタイヤ＆ＵＺＩ付きのカカシだよ！！」

「「武偵殺し」のオモチャよ！」

ババッ！、ババッ！、ダダダダダダダ！アリアのガバメントと俺の８９式で撃ちまくっている間に

キンジは・・・・・

「・・・・・・」

何もしなかった

「キンジお前も応戦しろ！数で負けている！！」

「・・・・・・」

「ったく！」

スガガガガッ！ガキンッ！ガチッ！

俺の８９式とアリアのガバが弾切れの音を立てた、俺とアリアはマガジンを交換した

「ーーやったか」

「射程外に追っ払っただけだ」

「またすぐに奴ら出てくるわよ」

「強いなお前たち、それだけでも上出来だ」

「・・・あ、」

「・・・は？」

そいえば、キンジはあの能力があったかアリアは知らないけど

アリアはクールな口調のキンジに眉を寄せている

ああ、やるのかあれを

俺がそう思った矢先にキンジはアリアをお姫様だっこしてアリアをマットにおいて一言

「姫はそのお席でごゆっくり、な。銃なんか振り回すのは、俺だけでいいだろう」

おえええ！、なんともくっせえセリフ！！ゲロ吐きそう

そう俺が思っているにもかかわらずキンジはシルバーのＭ９２Ｆ取り出し外に出てセグウェイを撃つ

スガガガガガガガンッ！！

セグウェイはすべて吹っ飛ばされたキンジの撃った７発の銃弾に

セグウェイが完全に沈黙するとキンジ倉庫内に戻ってきた

キンジのあの状態やっぱりすげぇな・・・

あの状態を知らないアリアは呆然としている

その後は、キンジが優しくアリアをカバーしてやろうと思っていたのだろうがアリアはこれに逆上して
いろいろ、キンジにやっていたがあの状態でのキンジに勝てるわけもなく
逃げるキンジを見ながら、

「この卑怯者！でっかい風穴ーーーーーあけてやるんだからぁ！」

と叫んでいた

「おい、アリア」

後ろから俺が話しかけるとアリアはぎらっとこっちを見て

「あいついったい何なのよ！！」

「遠山キンジ、そしてあいつの今の状態はヒステリアモード」

「ヒステリアモード？」

「後で、ゆっくり説明してやるよ」

アリアが不思議そうな表情をしている中、俺とアリアは学校に行く

ための準備をしていた

## ヒステリアモード？何それおいしいの？（後書き）

どうも、白石です
今回は体育倉庫での銃撃戦とキンジのヒステリアモードについて書きました
次回でアニメ１話の部分は終わりそうです
更新はいつになるか分かりませんが、早ければ残りのゴールンデンウィーク中には
終われると思います、それでは次回もお楽しみに

**「ドレイになりなさい！」どういう事なの・・・（前書き）**

キンジをチャリジャックから無事アリアと一緒に救助したその日
俺は模擬戦でアリアの言ってた「見込み」の意味を知る

**「ドレイになりなさい！」どういう事なの・・・**

「ゆっくり説明してやるといったけど俺自身もヒステリアモードの事はよく分からん」

「分からないんだったら、説明するなんて言うな！！」

「いや、少しは分かる、３０秒程度の説明ならできる」

俺とアリアは教務科でキンジのチャリジャックの件を話してから新しい教室に向かっていた

ちなみに新しいクラスは2年Ａ組だ、

「で、３０秒で説明してヒステリアモードって奴を」

「ん、簡単に言うとキンジが何かの勢いでスイッチが入ると無敵のスーパーマンになるって能力

あと、どーして女にギザになるのかは不明、以上」

「１０秒で終わったじゃないアンタ！！」

「細かいこと気にすんな」

とアリアとぼやきながら2年Ａ組に向かっていった

「先生、あたしはアイツの席に座りたい」

その日のHR（ホームルーム）にてアリアが一言言いはなったと同時に
ガターンとギャグマンガ並みにずっこけてたキンジが
クラスの皆さんこれに、ワァー！と歓声を上げていた
俺はギャグマンガ並みにこけたキンジに話しかけた
「よかったな、春到来だね」
「よくねぇ！あいつさっき俺を殺そうとした奴だぞ、きっと殺されるぜ俺！」
「安心しろキンジ、いい墓買ってやるから」
「そういう問題じゃねぇ！」
とキンジと話していると
「よ・・・・良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！オレ、転入生さんと席変わりますよ！」
キンジの手を握りブンブン振りながら席を立った大男の名は
武藤剛気（むとうごうき）、車両科の優等生でスクーターに戦車に戦闘機、ロケットでも操縦可能という特技がある
「あらあら、最近の女子高生は積極的ねぇー、じゃあ武藤くん、席代わってあげて」

先生嬉しそうにアリアとキンジを交互に見て事情を知らない剛気の提案即ＯＫ

「ちょっ！」

とキンジが抗議しようとした、その時であった

「キンジ、これさっきのベルト」

と、アリアがキンジにベルトを投げつけていた

え、なんでアリアがキンジのベルト持ってるかって？、アニメか原作でも見てろバーロ！

キンジがベルトを受け取ると

ガタッと席を立ったのは、峰理子（みねりこ）である、なんかル○ン３世の峰○子ににてるね

ちなみ、彼女とは俺が教室に入ったときなぜか「はっ」とした顔で俺を見て

「ねえ、君、前に理子にあったこと無い？」と聞いてきた

「・・・いや、今日が初めてだと思うが」

「そう、君が自衛隊時代の頃に会ったと思うけど？」

「あ～もし、会ったて言うなら、お前さんと会ったんだろねいろいろあって忘れているかも」

「第二次朝鮮戦争ね」

「まあ、そんなとこだ」

俺が参加した第二次朝鮮戦争については後で簡単に詳しくは後日話そう、で話をもどそう

「理子分かっちゃった！キーくんとツインテールさんはキーくんがベルトを取るような行為をした！
つまり二人は熱い熱い、恋の真っ直中なんだよ！」

うん、見事なまでにはずれですよ理子さん、というかあなたと前に会ったことありましたっけ？

で、クラスは見事なまでに大盛り上がり

「キ、キンジがこんな可愛い子と！？」「影薄野郎と思っていたのに！」

などと、クラスのみんな新学期なのに異常なまでに団結している

「お前達なぁ！」

とキンジが机に伏せた瞬間

ずぎゅぎゅん！と４５口径弾の音が盛大に鳴り響く

「れ、恋愛だなんて・・・くっだらない！」

アリアがゆでだこの用に真っ赤になっている

武偵高では過度でなければ銃撃はＯＫ！である、自衛隊なら間違いなく軍法会議で銃殺が６０パーセント

残りは終身刑か不名誉除隊のどっちかだ、自衛隊じゃなくて良かったねアリア

「全員覚えておきなさい！そういう馬鹿なことを言う奴には・・・風穴あけるわよ！」

昼休みになり、好物のチョコバー口にくわえていたら女子が数人話しかけてきた

「ねえ、タカ彼女とどういう関係？一緒に登校してきたけど」

「ん？アリアのこと？この前模擬戦しただけだよ」

「彼女、キンジだけじゃなくてタカの事も教務課で調べていたわよ」

「俺のことも？」

「あ、あたしも聞かれたキンジの武偵としての実績はどうなのとか

「昔は強襲科で凄腕だった」と答えていたけど」

「私は、タカの事聞かれたわよ、自衛隊時代の頃や武偵としてはどうかって」

「なんて答えたの？」

「第二次朝鮮戦争で勲章もらった元ベテラン兵士、武偵としても有能って言ったわよ」

「お褒めの言葉ありがとう」

「しっかし、タカもキンジもついてないわよね、キンジは女嫌いなのにタカは同じ強襲科だし
あんなのとパートナー組む可能性有るんだし」

「まあ、上手くやっていくさ、戦場でドンパチやったように」

と話終える頃には昼休み終了間際であった

「ああ、疲れた」

俺は寮の自分の部屋にもどるや否や８９式とＰ－１４をガンロッカーにおいて

ベッド上に寝っ転がった

「しかし、キンジが武偵殺しに襲われたと言うことは、俺も可能性があるわけだ・・・」

俺は今朝のキンジのチャリジャックを思い出していた

「朝鮮戦争中の休暇中みたいなもんだな」

自衛隊時代に参加した第二次朝鮮戦争、日本は韓国にいる日本人救助のために自衛隊を派遣し
米軍、韓国軍と共同作戦を展開した、俺のいた特殊作戦群は拉致被害者救助のために北朝鮮内部まで侵攻した、そんな戦時中でも休暇があり、俺はよくミョンドンやソウルをぶらぶらしていたが、
北朝鮮の工作員によるテロがしばしばあった、武偵殺しはそんなもんだと俺は思っている

そんなことを考えていた矢先、携帯にメールが入ってきた

「ん？アリアから・・・」

画面には「タカ！、いますぐキンジの部屋まで来い！！、５分以内にこないと風穴あけるわよ！！」

と書かれていた

「ったく！」

俺は側にあった自衛隊時代に着ていたオリーブドラブのズボンと上着をぱっと着用して
ヘルメットをかぶり、バイクにまたがって探偵科男子寮まで走っていった

３分後、強襲科寮から探偵科の寮までは歩いていくと８分程度かかるが

バイクだと３分程度で到着する

俺はバイクから降りると、キンジの部屋まで走っていった

ピンポーン！というチャイムを鳴らすと同時に部屋の中からキンジが出てきた

「タカ、どうしたんだ？」

「アリアの奴にお前さんの部屋まで来るようにと言われてさ、アリアは？」

「中にいる」

「入っていいか」

「ああ」

キンジからの許可をもらって部屋に入ると、夕日に照らされたアリアがいた

「来たけどアリア」

「来たわねタカ！」

アリアはくるっと俺たち二人の方に振り返ると一言、言いはなった

「ーーキンジ、タカあんたたち、あたしのドレイになりなさい！！」

・・・・どういう事なの？

## 「ドレイになりなさい！」どういう事なの・・・（後書き）

どうも、白石ですやっとアニメ第１話部分終わりました
次回からはアニメ２話部分に入ります
あと、お気に入り登録してくれた皆さん、
お礼が言いたいので感想を書いてもらえないでしょうか、よろしく
お願いします
それでは、次回もお楽しみに

## 突撃！アリアのお宅訪問　キンジ編（前書き）

「ドレイになれ」と言われたタカとキンジこの後のドタバタ騒動をどうぞお楽しみに、今回はかなり長めです

## 突撃！アリアのお宅訪問　キンジ編

「・・・え～と、どういことでしょうかアリアさん？」

「二度も言わせないでよ、あんた達二人そろってあたしのドレイになるの」

「・・・・ありえんだろコイツ」

俺とキンジがポカーンとしている中、アリアは部屋に置いてあるソファーにポフッ！
という音を立て尻をおろした

「キンジ！さっさと飲み物出しなさいよ！気が利かないわね！」

「ちょっと待てよ！、ドレイって何のこ・・・」

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！１分以内！」

キンジがドレイの意味を聞こうとした際に飲み物の注文するアリア、キンジは納得いかなさそうだが
インスタントコーヒーをしぶしぶいれる、にしてもコイツ、イギリス人のハーフって聞いてたから
紅茶しか飲まないと思っていたらコーヒーも飲むんだな意外や意外
で今度は俺がドレイの意味を聞いてあげることにした

「で、アリア、ドレイの意味がよくわ・・・」

「タカは冷蔵庫の中身見て！もう夕飯の時間でしょ！」

「人の話をき・・・」

「ドレイはさっさと仕事する！話は後で聞く！」

聞かぬなら、聞くまで待とう、ホトトギス　（鷹山勇治・心の俳句）

なんて思いながらキンジの部屋の冷蔵庫をガラッとあける

中身空っぽ、なんとも節電、地球に優しい

「ってキンジ、冷蔵庫空っぽじゃねぇか、お前食べるものいつもどうしてんの？」

「食い物はいつも下のコンビニで買ってる」

「コンビニ弁当ばっかじゃ体に毒だぞ」

「うっせえ」

「コンビニ？」

「コンビニも知らんのかお前ホントいいとこ育ちだな」

クラスメートの女子から聞いたが、アリアはイギリスでもトップの名家の出身らしい

「うるさいわねぇ！あの小さなスーパーのことでしょ！」
スーパーは知ってるんだお前、コンビニよく知らないからスーパーも知らんと思っていた
これまた意外や意外
「じゃあタカさっさと買ってきて、あたし松本屋の「ももまん」7個ね」
「7個！？、よくはいるなチビのくせに」
「チビ言うな！」ズギュウン！ズギュウン！ズギュウン！
俺はガバメントで撃たれながら猛ダッシュでキンジの弁当聞いてコンビニまで走っていった

武偵が気をつけないといけないという物は3つ、闇、毒、そして女
女に気をつけろと言うことは自衛隊時代の頃から言われていた、
相手が女スパイであるからもしれないからだ
そして、その3つ目に当たるアリアは俺が買ってきたももまんを7つのうちすでに5つを平らげていた
キンジはハンバーグ弁当、俺はカツ丼を食べながら目で会話していた

アイコンタクト中

キンジ「何とかしろよお前、アリアと前から知りあってんだろ？」

タカ「んなこと言われたってどうすればいいのか分からんよ」

キンジ「授業か自衛隊でなんか習わなかったのかよ？」

タカ「強襲科でも自衛隊でも習うかこんな時の対処法！」

そんなアイコンタクトを取ってることも知らずアリアは７つめのももまんを食べようとしていた

「アリア、１つ聞いていいか」

「何を？」

「ドレイになれってどういう事なんだよ？」

「俺も知りたい」

キンジがそう聞くので俺も同じ事を聞く

「キンジは強襲科にもどってあたしのパーティーに入りなさい、タカは強襲科だからそのままで良いけど二人ともあたしと一緒に武偵活動をするの」

それを聞くとキンジは席をガタッと立ち上がり反論した

「何言ってんだ。俺は強襲科が嫌で一番まともな探偵科に転科したんだぞ、それなのに強襲科にもどれって言うのか！、それに俺は武偵校をやめて来年には普通の高校にいくんだぞ！そんなの無理だ！」

そう言えばキンジやめる予定だったよな武偵校を

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」

「聞け！人の話を！」

「「ムリ」、「疲れた」、「面倒くさい」。この3つは人間の持つ無限の可能性を自ら・・・・」

（長いので以下略）

「キンジとタカのポイントはそうねぇ・・・あたしと同じフロントね」

「フロント！？つまりポイントマンをやれっていうの！？戦時中でも2回しか経験無いぞ」

フロントとは、武偵がパーティー組んで行動する際の前衛のことで負傷率はダントツだ

自衛隊でもポイントマンと呼ばれ部隊が前進する際に先導する役で、敵の狙撃兵や地雷などにやられ

戦死する確率が高い

「2回もやってるんだったら問題ないでしょ、」

「で、でもなぁ・・・」

「戦争に比べたら武偵でのドンパチなんてかわいいもんでしょ」

「それはそうだが・・・」

「じゃあ決まりね」

「俺は良くないぞ、そもそもなんで俺なんだ」

「キンジ、太陽はなんで昇る、月はなんで輝く？」

話が飛びすぎですアリアさん、言葉のキャッチボールで受け取った
ボールはどこへ、
船に乗ってオレゴンまで行っちゃったんですか

それにしびれを切らしたキンジが単刀直入にアリアに言った

「とにかく帰ってくれアリア、俺は一人になりたいんだ」

「あ、俺も？」

「タカはもう少しいて良いぞ」

「まあ、そのうちね」

「そのうちっていつだよ」

「キンジが強襲科であたしのパーティーに入るまで」

「でももう夜だぞ？」

「何が何でもはいってもらうわ、時間がないの、うんと言わないなら――」

「言わないならどうするんだよ？」

「言わないなら泊まっていくから」

そうアリアが一言告げた際、キンジの顔が一瞬でこわばった

「ちょ、ちょ、ちょ待て！何を言ってるんだお前は！帰れうぇっ！」

「うるさい！泊まってくったら泊まるの！長期戦になるのも想定済みよ！」

部屋に置いてあるトランクは宿泊セットなのかアリアの

「今度は、タカのうちにも泊まるからねっ！」

「えっ！ちょ、それはマジ勘弁！！」

「出てけ！」

キンジではなくアリアが言ったこの言葉である

「なんで俺が出て行かないといけねぇんだよ！！」

「二人そろってお仕置きよ、頭冷やしてきなさい！」

俺とキンジは渋々、部屋を出てコンビニに向かった

「武偵殺しはいねぇよな？」

俺は足のホルスターに入れてたＭ３６チーフスペシャルリボルバーを取り出しそう言う

「さすがにいねぇだろ、ってかお前銃持ってたのかよ」
二人でぶつくさ言いながら漫画立ち読みして１０分後ぐらいにキンジの部屋にもどった
部屋に戻る際にキンジにこう聞かれた
「おまえ、あいつのパーティー入るか？」
「たぶんな」
「正気かよ！？、あんな奴とか！？」
「なんか、同じ運命に逆らってるような気がすんだよ、アリアも」
「運命に逆らっている？どういう事だ？」
「俺が小学生の時に妹一人残して親父もお袋も死んだ、こんな事あってたまるかって、運命に逆らうために自衛隊に入ったそしたらお隣で戦争始まって日本も突撃、それで地獄を見た、この地獄から生きてかえってやるんだって、そして、こんな運命ぶちこわすんだって決めたんだ、そんな感じが彼女からもするんだ」
「ふぅん」
「で、お前はどうすんだ」
「絶対にはいらねぇよ、アイツのパーティーなんか」
「まあ、しばらくすれば考えが変わるかもよ」

「変わるわけないだろ」

そんな会話しながら、俺とキンジは部屋に戻った

アリアはいなかった

「帰ったのか？」

「いや違うぞキンジ、トランクがあるし、トイレじゃないか？」

ちゃぽん　風呂場から音がする

「ああ、風呂らしい」

「そうか風呂入ってるのか」

「「え、風呂！？」」

俺とキンジが二人そろって驚いているときに追い打ちかけんとばかりに

・・・ピン・ポーン・・・・・

「「うおっ！！」」

この独特のチャイムは白雪！！

「キ・・・キンちゃん？タカちゃんもいるの？二人とも大丈夫？」

居留守は使えなくなった、俺とキンジは二人そろってでることにした

「あ、ああ。大丈夫」

「よ、よう！白雪、何しに来たんだ？」

巫女装束の白雪が包み持ってたっていた

「キンチャン、タカちゃん何してたの？」

「「何でもない！、何でもない！」」

二人そろって全力で否定

「そう、あ、あのね。これ」

包みを差し出して

「タケノコごはん作ったの。いま旬だし、それに私明日から合宿で、作ってあげられないから」

キンジが包みを受け取ると、白雪は赤くなった

「そ、それじゃ用は済んだし、さあ帰ろうな」

「そういえば、キンちゃん大丈夫だった？今朝の事件に巻き込まれたけど、ケガはない？」

「だ、大丈夫だ、も、元特殊部隊の俺がいてケガするわけないだろ！」

「そ、そりゃそうだ、コイツのおかげでピンピンしてるよ！」

「二人とも、今日変だよ？隠してることでもあるの？」

白雪の目から光が消えた、怖えええええ！！

俺とキンジはまたアイコンタクトした

アイコンタクト中

タカ「キンジ！白雪は俺が何とかする！！」

キンジ「どうすんだよ！」

タカ「バイクで送るっていってS研の寮までおくる、ついでに俺は家に帰る」

キンジ「白雪はそれで良いんだが、アリアはどうする？」

タカ「前向きに考えてるって言って」

キンジ「分かった！」

「なあ、白雪、寮まで送ってやろうか？」

「こんな格好だけど大丈夫なの？」

「大丈夫だ、ちょっと折りたためばバイクには乗れるよ」

「そう、じゃあお願いね」

「分かったすぐにでよう」

俺は玄関においていたヘルメットをとり

「キンジ、じゃあ帰るぜ」

「ああ、じゃあな！」

「じゃあね、キンちゃん」

こう言って俺はキンジの部屋を後にして、バイク置き場に向かい後部に白雪を乗せて

発進しようとしたとき

「～～～～～死ね！！」

って声が聞こえたような気がした

## 突撃！アリアのお宅訪問　キンジ編（後書き）

どうも、白石です
今回はアニメ2話最初の部分になります、次回はオリ話でアリアがタカの部屋を突撃訪問いたします、
あ、あと今月のニュータイプ見た限りではアニメは2巻までとなりそうです
ジャンヌが出てきたので、
それでは次回もお楽しみに！　感想はご自由にどうぞ

## 突撃！アリアのお宅訪問　タカ編（前書き）

さてさて、アリアと白雪の脅威から何とか逃れたタカだったが
それで終わりではなかった

## 突撃！アリアのお宅訪問　タカ編

白雪をS研の寮までおくった翌日、顔色の悪いキンジに話しかけられた

「おい、タカ」

「どうした？、キンジ顔色悪いぞ？」

「昨日、お前が白雪つれて帰った後、俺は死にかけたんだぞ」

「どういうこと？」

「朝っぱらから襲撃されたりといろいろあって、お前は逃げやがって！！」

「そうでもないよ、アリア、今日は俺の部屋に来るんだぞ」

「え？」

キンジが話しかけてくる5分前

「タカ！」

「ん？、アリア何のよう」

「アンタ、昨日私の許可無く帰ったわねぇ！！」

「だってしゃー無いだろ、お前が風呂入ってる間にいろいろと命の

危機が迫ってたんだから」

「命の危機ってどういう事！？」

「まあ、いろいろと・・・」

白雪が来ていたなんて死んでも言えないと黙っていたらアリアはじーっと俺を見たまま、

フンッ！とそっぽを1回向いて、また俺にむき直してこう言った

「まあいいわ、今日はアンタの部屋に泊まるから」

はい？、今俺の部屋に来るとかいいませんでした

周りの生徒みんなざわいついているし、

「アリア、二股かけるみたいよ」

「キンジとタカどっがいいか見極めるんじゃないの？」

な～んて、聞こえてるんですけどアリアさん

「じゃあ、放課後にバイク乗せてね」

「ちょ、ちょっとアリア！」

アリアは俺の声などどこ吹く風のように聞かず去っていった

「はあ、昨日も言った冗談だよな、射撃訓練でもするか・・・」

だが、その日のスコアは６０発撃って当たったのは半分の３０発で、
何とも言えぬ不調でいつもは厳しい
蘭豹ですら
「おまえ、体調でも悪いのか？」
と聞いてきた、体調は悪くないんですけど、気分的にきついです
とまあ、何とか授業を全部受けて放課後アサルトライフル使う後輩
を指導した後、
帰るため駐車場にむかって歩いていると
「来たわね、タカ！」
冗談じゃなかったー！！（泣）
「何をショックうけてんのよ？」
「いや、いろいろと、ていうかお前の宿泊セットキンジの部屋だろ」
「このリュックサックに全部入れてるから大丈夫よ」
今日、リュックサックで学校来ている理由はそれですかというか、
あのトランクの中身二人の部屋に泊まるための物だったんですか
「というか、お前そのヘルメットどこから持ってきた？」
「車両科から借りてきた」
「泊まる気満々ですね」

「そうよ、だからさっさと行くわよ！」
これ以上ブーたれてたら、またガバメント乱射されそうなので渋々アリアを乗せ寮まで走っていった
強襲科の寮に着いて、自分の部屋に向かっていると、
「なんだ、タカ、アリアと付きあってんのか」
「アリア、キンジだけじゃなくタカも付き合うのか何とも悪女だな」
なんて、聞こえているので自分の部屋に着いてからも聞こえてうるさいため
「アリアちょっと待ってろ」と言ってガンロッカーからＵＺＩをとって
ズドドドドドド！！！
これで静かになった、強襲科の寮はこんなかんだで壁が穴だらけなのだ
で部屋に戻るとアリアがガンロッカーの銃を全部出していた
「ＭＰ５ＳＤ６に、Ｍ３１ショットガン、ＦＮハイパワー、デルタエリートに、桜シグ（シグＰ２２０）ね、あんた８９式とＰ－１４以外にも持ってるのね」
「あと、ｍ３６もね」

ちなみに桜シグとは自衛隊で使われているシグＰ２００がグリップを日本の国花である桜のマークが入っているものに変えている物で桜シグと呼ばれる事がある

「で何で、俺の部屋に泊まりにきたの？」

「決まってるでしょ、アンタをパーティーにいれるためよ、昨日前向きに考えるって言ったらしいから
考えが変わる前にいれようとね」

「まあいいけどさ、本当に泊まっていくの？」

「当然よ！」

「っていうか、もう７時か飯にするか？」

「そうね、なんかあるの？」

冷蔵庫を開けてみるが何も無いのでコンビニいくことにした

「コンビニいくけど何買ってくる？」

「ももまん７個ね」

「昨日もじゃないかそれ？」

「いいから、さっさと買ってこい！！」

スギュウン！また撃ったよコイツ

で買って帰ってきて食べてると、アリアが聞いてきた

「で、パーティーに入るのアンタ？」

「まあ、そうなるかな、逆に聞くけど何で俺をいれようとするんだ？」

「アンタ、運命に逆らいたって思ってるでしょ」

「・・・なんで分かる」

「アンタの過去の記録全部見てみたけど、自衛隊に入ったのも、武偵になったのも運命に逆らうかもよ　うにね」

「そう言うお前は、運命に逆らいたって思ってるのか？」

「運命に逆らうんじゃなくて助けたい人がいるのよ」

「助けたい人？」

「・・・ママよ、武偵殺しの冤罪をかぶせられて事実上の終身刑をうけているのよ」

「・・・そうか、悪いことを聞いた、すまなかった」

「いいのよ、冤罪を晴らしてママを助けないといけないから、アンタも知ってた方がいいから」

子供のような体のアリアがこんなにも大きな指名を背負っていると

はおもいもしなかった
小柄な俺よりも大きな指名を・・・
俺にもう迷いは無かった
「・・・お前のパーティーに入るぜ」
「え?、ほ、本当!?」
「ああ」
そう言うとアリアは見たこと無い笑顔を浮かべていた
「じゃあ、明日から一緒に武偵活動ね!!」

## 突撃！アリアのお宅訪問　タカ編（後書き）

どうも、白石です
今回はタカのパーティー入りという話を書きました
次回はアリアがキンジをパーティー入りさせる話になります
なんか、わかりずらくてすいません、

Ｐ，Ｓ　番外編として緋弾のアリアＡＡのキャラでも出して、タカ、アリア、キンジ
に特殊部隊らしいことさせようと思っています

それでは、次回もお楽しみに

## 猫探しも楽じゃない&キンジ折れる（前書き）

タカがアリアのパーティー入りした翌日、キンジはアリアの脅威から逃れるべく
奮闘していた

注意※今回は最後おもいっきりとばしますのでご注意下さい

## 猫探しも楽じゃない&キンジ折れる

「ほらさっさと起きろ！、タカ！」

がすっ！

俺は朝っぱらから、アリアのストレートパンチを食らいそうになりベッドから飛んで逃げた

「なんだよ朝っぱらから！一瞬、自衛隊時代の夜襲迎撃訓練思い出しただろうが！！」

自衛隊でやった夜襲迎撃訓練、その名の通り、敵の夜襲に対応するための訓練で富士火力演習場などで
野営する時にたまに、教導隊の部隊が俺たちが寝ているときに襲撃してきて、
それを迎撃する訓練である

「朝ご飯出しなさいよ！お腹すくじゃない！」

「冷蔵庫に入ってるもん、適当に食ってろよ！！」

「なんか準備しなさいよ！」

「トーストも焼けねえのか、お前は！！」

と朝っぱらから００７やらポリスストーリーのような格闘しながら
寝室を出て、制服に着替えて
８９式とＰ－１４、Ｍ３６チーフスのマガジンの弾数を確認して、

トースターにパンいれて、アリアの格闘
回避しながら、何とも言えぬ朝の準備をする
トースターにいれた食パンがトーストになって出てきて、朝飯にする事にした
テーブルの上にトースト4枚（俺とアリアで2枚ずつ）とジャムと牛乳というシンプルな物
アリアはカップに入れた牛乳に砂糖を大さじ2杯というなんとも虫歯菌大喜びの物飲んでる
「お前、これ飲んだ後歯磨きしたら？」
「問題ないわよ、1時間で虫歯が出来る訳じゃないんだし」
そんなかんだで、準備を終えて部屋を出る際に俺は一言言った
「アリア登校時間をずらすぞ、お前先に出ろ」
「なんで？」
「ここが男子寮なのは分かってるよなお前、ここから一緒に出てきてみろ、一瞬で面倒なことになるぞ
それを回避するためだ」
「上手いこと言って逃げる気でしょあんた！」
「パーティー入りしてんだし、同じクラスだから逃げようがねえだろ！！」

「むぅううう」

「むくれてもだめだ、別々に出るぞ」

「やだ！逃がすもんか！がぅ！」

がぶっ、アリアが俺にかみついてくる

「いっだだだ！お前は軍用犬かよ！！」

早くも第2ラウンドしながら部屋を出てバイクに乗り込み武偵校に向かう

その数時間後・・・

キンジが目の前でがっくりと膝から崩れ落ちた

射撃訓練しようと思った矢先に、突然アリアに呼ばれて着いてきたらそこにキンジがいたのである

たぶんアリア対策を練ろうと依頼を受けて学校をでよとしていたところだろう、

そもそも武偵は依頼を受けて仕事をして報酬をもらう便利屋であり、個人的には傭兵やＰＭＣ（民間軍事会社）に近いと思っている、

俺も1年時には密輸拳銃の取り押さえや、麻薬取り締まり、鑑識科の暴力団への強制捜査の際に護衛として参加したりとさまざまな依頼を受けていた

「なんで・・・お前がここにいるんだよ・・・！」
「あんたがここにいるからよ」
「っていうか、なんでタカまでいる！？」
「コイツ、昨日あたしのパーティー入りしたのよ」
「お前気でも狂ったんじゃないのか！？」
「狂ってないよ、ちょっとこいつのパーティー辞めたいけど」
「なんだとおおお！！」
「でお前達いいのか、強襲科の授業さぼって」
「まあな、俺もコイツも卒業できるだけの単位はそろってるし」
「Ｓランクの野郎は楽でいいな」
「でアンタは普段どんな依頼うけてるのよ」
「Ｓランクのお前達に関係ないだろ、Ｅランクの奴にお似合いの依頼だよ帰れ」
俺にとってはどーでもいいことだけどアリアにとっては重要なことなので
「風穴あけるわよ」

とおどしていた、これにはしぶしぶキンジも

「・・・猫探しだ」

「猫探し？」

キンジによると青海に迷子の猫を探しに行くと言うことで俺とアリアもついて行くことになった

そして、今休憩がてらマックで買ってきたギガマックセット食べている状況だ

「あ、アリアそれ・・・」

「なによ、げぷ」

「それキンジのコーラ」

ぶぱぁ！

コーラが見後にリバースするや否や

「早く言いなさいよこのバカ！！」

俺を殴り飛ばした後、キンジも

「この変態！！」

と殴り飛ばされていた

そして、目的の猫が見つかったのは夕方になってからである

この翌日・・・

いろいろあってキンジが一回だけという条件付きで

アリアと俺のパーティー入りする事になったのである

## 猫探しも楽じゃない&キンジ折れる（後書き）

どうも、白石です
今回は無駄に話が長くなってしまいそうだったので
超ダイナミックに省略してしまいましたすいませんホント
次回からはアニメ３話にはいります、原作とアニメじゃ相当違っていますので
個人的にすきな原作道りでいきます
あと、前回予告した番外編はアニメだと５話、原作だと１巻オルメスと最終弾の
終わった後になります、ストーリーとしては緋弾のアリアＡＡのキャラが犯人グループに捕まってそれをタカとアリア、キンジをはじめとする特別救助チームが出動するという内容になります

それでは次回もお楽しみに

## ゲーセンほど金かかる娯楽施設は無い（前書き）

キンジが一回だけの条件でアリアとタカのパーティーに入った翌日の出来事である

## ゲーセンほど金かかる娯楽施設は無い

キンジが戻ってきた。

「明日無き学科」の強襲科に、この学科の卒業時生存率が９７，１％つまり１００人いたら3人死んで生きて卒業できない、任務遂行中か訓練中に死亡しているのだ

だが、自衛隊にいて戦争に行ってた俺には生存率９７，１％なんてほんとに大量に感じる

まあ、自衛隊での訓練生だった頃、訓練で毎月2～3人は死んでいたし

精神障害で自殺した奴を4人目撃して、

生還率１０～２５％の戦線に投げ込まれた俺だからこそ言えるのだが、

キンジは自由履修でアリアのパーティーに参加するのである、武偵はさまざまな技術が要求されるので

専門科目以外の授業も自発的に受けることが出来るので、俺もたまに狙撃科や車両科でやることがある

俺が８９式やＰ－１４、Ｍ３６チーフスの射撃訓練などをやっている時に、キンジは装備の確認や自由履修の

申請などですっかり時間を使い切ってしまっていた

まあ、それだけでもなく常にパーティー組んで行動する、強襲科では自然と生徒が

人なつっこくなるので・・・

「おー！、キンジ！戻ってきたか、さあ早く死んでくれ！！」

「うるせえ、佐藤おまえが死ね」

「キンジぃー！死んでくれる気になったのか、さっさと死んでくれ！！」

「じゃあ何でおまえは生きてるんだ、木下？おまえこそさっさと死ね」

強襲科では死ね死ね言うのが礼儀なので俺も、

「おー、キンジやっと申請終わったか、じゃあ早いとこ死んでくれ」

「自衛隊出身でいい気になってんじゃねよタカ、おまえこそ死ね」

まあ、こんな感じで絡んでいると時間もあっという間に過ぎるのである

その日、俺はバイクを車両科の定期検査に出したのでキンジと久々に一緒に帰ることになった

武偵校の生徒でバイクなどで通学するものは、
バイクなどを定期的に車両科や整備科に定期検査させることになっている
車両課や整備科の訓練がてら交流も兼ねてのことである、（注：オリジナル設定）

こんなかんだで一日を終えて、門のところにアリアがいた

アリアは俺たちの姿を確認すると小走りでやってきて一緒に歩き始める

「タカ、バイクはどうしたの？」

「定期検査に出した」

「そう、それにしてもキンジ・・・あんた人気者なのね、ちょっと意外だった」

「あんな奴らに好かれたくない」

「そんなこと言うな、キンジたった一回の辛抱だろ」

「俺はさっとやめたいんだよ、こんなところ（武偵校）」

「けどみんな、キンジのこと一目おいてる感じがするのよね」

それって、入学試験でのキンジのことを言うのか、

強襲科の志願者全員を１４階建ての廃屋に散らばってほかの受験者を捕縛しあうもので

俺は９人捕縛した、すべて特殊作戦群でやった技術を使って、あと抜き打ちでいた教官３人も

キンジは俺のとらえた９人を除いて全員捕らえた、その中に俺もいるのだが

そして教官を５人も

キンジにとっては封印したい過去である

「強襲科の中歩いていたキンジかっこよかったよ」

「・・・・」

「まあ、確かに決まってはいたな」

「うるせえよ」

「あたしには誰もよってこないのにね、まあ私は「アリア」だかいいんだけどね」

「「アリア」？」

「オペラでの独唱曲の意味だ、キンジ」

「じゃあ、俺とタカを奴隷にして3部合唱でもやるのか？」

「あんたもおもしろいこと言えるじゃない」

「「どこが？」」

こんな会話をしながら、ゲーセンに3人で行くことにした

「何これ？」

「ああ、これはＵＦＯキャッチャーだろ」

「子供っぽい名前ね」

ＵＦＯキャッチャーの中には所狭しとライオンとヒョウを足して２で割ったようなぬいぐるみが入っていた

「・・・・・かわいー・・・・・」

「久々にやってみるかな、得意なんだよなＵＦＯキャッチャー」

「へえ、タカそうなんだ」

「まあな」

そして５００円分やってみる、見事に撃沈

次いでやったアリアも撃沈していた

その間ドゴーン！！とパンチングマシーンに５００円の恨みをぶつけていると

アリアが「かぁーわぁーいいー！」といっていたのでＵＦＯキャッチャーの方をみてみると

キンジがとったようで二人そろって喜んでいた、

このとき何とも言えぬ平和な空気が流れていた、

しかし、これがすぐに破られることになるとは俺は思いもしなかった

## ゲーセンほど金かかる娯楽施設は無い（後書き）

どうも、白石です
今回はゲーセン部分を書きました次回はバスジャック部分になります
タカの能力をはじめて書きますので心配がありますががんばります
それでは次回もお楽しみに

## 伝令：救助作戦開始せよ（前書き）

キンジがアリアのパーティーに入った翌日の出来事
キンジがバスに乗り遅れたところから話を始めよう

## 伝令：救助作戦開始せよ

「のっ！乗せてくれ武藤！」

「そうしたいが無理だ！満員！チャリで来いよっ」

「チャリぶっ壊れてるんだよ、これ乗れないと遅刻しちまう！！」

「無理なものは、無理！男は諦めが肝心だぜ、１時間目フケちゃえよ！じゃあな！！」

「くそっ！、「じゃあな」じゃ無いだろ！！」

そんなことがあったとは知らない俺がバイクに乗って武偵校に向かっているとき、

キンジがトボトボと歩いているのを後ろから確認した

「よお、キンジどした？」

「ちょうど良いタカ！、乗せてくれ！！」

「いいけど、バスに乗り遅れたのか？」

「そんなこといいだろ！早くしてくれ！！」

「りょーかい」

こんな感じでキンジと二人乗りして学校について教室でボーッとしてたらアリアが

バシーン！といった感じに乱暴に教室のドアを開けて緊張感に満ちた顔でやってきた

「キンジ！タカ！急いでＣ装備に武装して！！」

「どうした、事件か！？」

「そうよ、急いで！！」

「わかった！」

「まじかよ・・・」

俺とキンジはＣ装備に身を包む、防弾ベストに強化プラスチックのタクティカルヘルメット、
無線機インカム、フィンガーレスグローブにベルトにはマガジンポーチがついていて俺はさらに
防刃使用のフルフェイスマスク、ゴーグルといった

どこから、どー見てもＳＷＡＴかＳＡＴの装備に見えるＣ装備は武
偵が「出入り」の際に着込むもので
強襲科が絡む際にはこれをつけないことが無いぐらいである

「しかし、何が起きたんだ？」

「小さいのであってほしいぜ」

俺とキンジが武装してグラウンドに出るとそこにはアリアと一緒に
狙撃科のレキがいた

レキは凄腕のスナイパーでSランクなのだが、感情を出さないのであだ名はロボット・レキ

こいつには前に特殊作戦群でやった狙撃体勢を教えたことがある

「レキ、お前もアリアに呼ばれたのか？」

「はい」

「アリア、何があったんだ？」

キンジがアリアに問いかける

「バスジャックよ、７時５８分に停留したハズのやつよ、爆弾が仕掛けられているわ」

「何だって！？」

「アリア、犯人は中にいると思うか？」

「多分いないはずね、タカ」

「だろうな、自爆が目的ならもうとっくに自爆しているはずだ」

朝鮮戦争中での休暇で巻き込まれた自爆攻撃ではすべて自爆兵がやってきて3分もすれば自爆していた

「キンジ、あんたの巻き込まれたチャリジャックで使われた遠隔操作の爆薬の電波と今回のバスジャックの爆弾の電波が一致したのよ、

つまり犯人は武偵殺しよ」

「何を言ってるんだ？武偵殺しはつかまったんじゃ？」

「それは真犯人じゃないわ」

「おかしいぞアリア、あのな・・・」

「事件はもう発生しているわ！細かいことでガタガタ言わないで！！」

「アリア、状況を説明しろ」

「被害者は武偵校の仲間よ！それ以上必要ないわ！！」

こいつ、先走り過ぎるぞ、こういう奴ほど真っ先にやられる、アリアがどこの国でも独唱曲（アリア）になるのがわかった、

そんなこと思った矢先、グラウンドに車両科のＵＨ－１が着陸した

「クソッ！やりゃいいだろ！！」

アリアは笑いながらキンジにこう言った

「万一の場合は、あたしが守ってあげるわ。」

俺は彼女を守ることになる気がした

ヘリに乗り現場に向かう間、俺は戦時中のことを思い出していた

何度もヘリに乗り、戦場に乗り込むのは何度やっても落ち着かないのである、それは今でも

しかし、それを抑えないといけないのである

「タカ、パラシュートをつけて降下するわよ」

「あいよ、キンジ覚えてるか空挺を？」

「なんとかな」

そして、ヘリから飛び出した俺たちはバスの上に転がりワイヤーを屋根に打ち込んだ

キンジは中に突入して状況を確認、アリアは爆弾の捜索、俺は８９式を構えて警戒

「タカ！アリアの言った通りだ遠隔操作されている」

「わかった、キンジ、アリアそちらの状況は？」

「爆弾を発見したわ！車体の下にプラスチック爆弾が３５００立法センチはあるわ！」

「なんだと！？、装甲車にも穴が開くぞ！！」

「潜り込んで解体する・・・」

俺はこのとき戦場で鍛えられた感覚で前向いた

「アリア！注意しろ！！」

ドン！とオープンカーがバスに追突する

ダダダッ！、ダダダッ！

バーストにした８９式でオープンカーを射撃する

ドゴォォォォン！

オープンカーが爆発炎上するのを確認した矢先にもう一台のオープンカーが搭載されたＵＺＩを乱射してきた

「伏せろッ！」

バスに向けて無数の銃弾が発射され、バスの窓を粉砕する

「ぐあっ！」

俺も防弾ベストに被弾して屋根に倒れるが、Ｐ－１４を取り出して発砲しまくる

「タカ！大丈夫！？」

「アリア！、お前のほうこそ大丈夫か！？ヘルメットはどうした！？」

「さっき衝突した際にブチ割れたわよ」

ホールドオープンしたＰ－１４のマガジンを落としてマガジン交換していたら

車体の下にいて何を逃れたアリアと合流した

そのとき、バスが妙なゆれをしたのでキンジに問いかけた

「キンジ、運転手は？」

「！！、頭ぶち抜かれて死んでいる！！」

「なんだと！、中にいる車両科に操縦させろ、いなければお前がやれ！！」

「あんた、やるわね・・・」

「アリア！そんな事言ってないで爆弾をどうするか考えろ！！」

そのとき、車内にいたキンジが出てきた

「アリア！、タカ！、大丈夫か！？」

「キンジ！ヘルメットどうしたのよ！」

「武藤に貸して運転させているんだよ！」

「危険よ！車内にもどっ・・・後ろっ！伏せなさい馬鹿！！」

そうアリアが言った矢先オープンカーがキンジに向けてＵＺＩを発

射する
キンジが死んだと思った矢先にアリアがキンジにタックルして被弾した
「アリア！！」
ワイヤーも切られて、バスの上から転落しそうになったので俺は９９式を屋根において
アリアに向かって飛び込んでアリアを空中でつかむ
ダンッ！とバスの壁にアリアをつかみながら激突する
そんな状況でも、ＵＺＩが俺たちを狙ってくる
俺は能力をつかった！
スローモー、俺の能力で相手の動きを低速で見ることができる能力である
俺の目の前にいるオープンカーが止まっている、俺はＰ－１４を向けて
ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！とぶっ放す
キュルルルル！　ドガアアアアン！！
オープンカーがスピンしてガードレールに激突して爆発炎上する
「キンジ引き上げてくれ！！」

「わ、わかった！！」

そのとき、レインボーブレッジにでてＵＨ－１からレキが見えた

「レキ！チャンスは今だけだやれ！！」

「了解」

そして、インカムからドラグノフを構えたレキが詩のようなことをつぶやいている

「ーー私は１発の銃弾」

「銃弾は人の心を持たない、故に、なにも考えないーー」

「ーただ、目的に向かって飛ぶだけ」

パァン！パァン！と鳴り響くドラグノフの銃声と同時にガラン、ガランとバスの下から爆弾が
転がり落ちていく、そして

ドウウウウッ！！！と海に落ちた爆弾が爆発し水柱が盛大にあがった

そして、ゆっくりとバスは停止した、

「キンジ、救急車呼んでくれ！！」

「わ、わかった！」

「アリア、しっかりしろ！、アリアーーー！！」

ぐったりとするアリアに俺は叫び続けた

## 伝令：救助作戦開始せよ（後書き）

どうも、毎度おなじみ白石です

今回はバスジャックの部分を書きました

アニメと原作じゃ相当違っていますよね、こちらでは原作道りに進めました

タカの能力あんまり書かなくてすいません、なかなかどのように書けばいいのか

思いつかなくて

次回は入院シーンとなります、それでは次回もお楽しみに

p,s　要望があったのでレキのセリフ追加しました、（5月28日）

## 作戦終了後、病室にて（前書き）

バスジャックでの、救助作戦は成功したもののアリアが負傷してしまう

今回のエピソードはアリアが病院に運ばれてからの話である

## 作戦終了後、病室にて

あの、バスジャックでアリアは負傷した、
しかし本当に幸運であった、かすり傷で済んだのだから
内部にも問題はなく外傷だけですんだのだから、
「あー、体が重いぜ、まじで重い・・・」
バスジャックで使った能力のスローモー、相手の動きを低速で見ることができる能力で
移動しているのも、停止しているように見えるのだが、１つ重大な欠点がある
体力を一瞬で半分以上使ってしまう、回復させるには３日間は休むことになるのだが、
学生にそれが出来るはずもなく、しょうがなく栄養ドリンクと甘いもの食べて回復を早めること
しかできないのだ
俺は体力が減って重くなった体を引きずりながら、アリアの入院している武偵病院の病室を探している
「お、ここか」
１０３３６とかかれた病室を発見し、ドアを開けようとしたところ
「私の探していた人はあんたじゃ、なかったんだわ・・・」

「・・・」

入っていいのかこれ、ものすごくシュールだぞ

「タカ・・・」

「・・・タカ」

ドアを開けて出てきたキンジと鉢合わせになり、アリアも俺の存在に気づいたらしい

「タカ、俺はもう帰るから」

「ああ、わかった」

「ふんっ、さっさと帰りなさいよ!!」

キンジと入れ替わるように俺は病室に入る

「・・・いいのか?せっかく見つけたパートナーの一人だろ」

「・・・所詮アイツはあたしにあわせられない奴だったのよ」

「ツンデレだなお前、キンジが心配だったんだろ?」

「っ!?そ、そんなわけ無いじゃない!!」

赤面したアリアはそう言うとそっぽを向いた、

しかしすぐに元の顔色に戻りキンジとは明らかに違う接しで俺に接してきた

「・・・あんた、あたしがやられた際にとっさ助けてくれたってね」

「ん、ああ」

「あんたには負けたわよ」

「なにがだ？」

「全部よ、全部、現場でのとっさの判断力と指揮能力」

「別に・・・」

そう言うと、アリアはまた一言ポツリとつぶやいた

「・・・あんたも、あたしの探していた人じゃないのね」

「！？」

「あたしを助けるために死ぬようなことしていたんでしょ、パートナー殺すようじゃ武偵失格だわ」

「何を言い出すんだお前は・・・？」

「だって、あたしを助けるために死にかけるんじゃ、あたしより上じゃない」

「だからといって、仲間を助けるために死ぬことは別に武偵じゃ当

たり前のことだろ」
実際にパートナーをかばって殉職する武偵は多い
けど、アリアはそれを認めないようである
「あたしの家系は相棒と組むことで活躍してきた、同然私にも相棒を作ることが求められてきた
　けど、キンジの奴はあわせられない、あんたは死んでしまうかもしれない・・・」
実際に探偵科の理子にギャルゲ3枚と交換で得た情報によると、
アリアの実家の「H」は警察か何かの名門で全員優秀なパートナーを組んで活躍していた
つまり、アリアはパートナーがいないと活躍できないのだ
キンジはアリアについてこれなくてパートナー失格
俺は死ぬかもしれないからパートナー失格
実際にパートナーを見つけても死んでしまえば元も子も無い
「だから、あたしのパートナー失格よあんた・・・」
「・・・お前の家系は相棒がいないといけないんだろ」
「けど、死んでしまったら元も子も無いじゃない！！」
「キンジと初めてあったときに感覚的に感じ取ったんだろ、俺の時

も」

「・・・」

俺が行ったことは図星だったようで目をそらしながら髪をいじっていた

「とりあえず、買ってきたももまんおいていくから」

「とりあえず、あんたもパートナー失格だからね」

「だったら、除隊通告かいて俺に渡せよ」

俺はそう言いつつ、病室を後にした

胸にわだかまりを抱えながら

## 作戦終了後、病室にて（後書き）

どうも、白石です

今回は自分で書いてなんだこりゃと思った駄文ですね

文学の神様、降りてきて！お願い！！

とりあえず、アニメ３話部分は今回で終了ですね

次回からはアニメ４話の部分になりますが、ここでお知らせがあります

実は今度の月曜日から定期テスト２週間前になるのでしばらくの間更新できません

楽しみにしている方たちには申し訳ないです

あと、今回参考にさせてもらった、緋弾のアリア～夜神の継承者～の作者のＡＬＯＮＥさん、ありがとうございました&すいませんでした（駄文の意味で）

それでは、次回もお楽しみに

## 再会　母と娘（前書き）

タカがアリアからパートナー失格を言い渡された数日後の出来事である

## 再会　母と娘

「あんたも、あたしの探していた人じゃないのね・・・」

バスジャックの数日後、アリアに言われたこの一言の理由を

俺は自衛隊で支給された鉄製のコーヒーカップにコーヒーを入れながら考えていた

アリアは俺が死んでしまうのを恐れてパートナー失格を俺に言い渡したのだとすると、

アリアは仲間の死を見たくないということ、

つまり死を恐れているんだろう

「俺の方が異常かもな・・・」

俺は死というものに対して鈍くなっている、朝鮮戦争に送られて

目の前で生と死が繰り返されている場所に半年いたわけだから

死が当たり前の用に感じでしまっているんだろう

だが、それでいいのかよアリア？

俺はそんなことを思いながらカップに入れたコーヒーを飲み干した

その日の午後であった、俺はアリアと遭遇した

バァン！、バァン！と学園島にある射撃場でＰ－１４とＭ３６チーフの射撃訓練をして射撃場を出たところであった

その近くにある美容院から出てきたのだった、しかしアリアは変貌していた

前髪を作っていた、しかし、その理由は一生消えない額の傷を隠すためのものである

俺は見ただけでそれが分かった、

「・・・」

アリアは重たい表情をしてモノレール駅に向かって歩き出した

俺はアリアの後を追っていた、

バイクは武藤がいじるために昨日持って行かれたので徒歩だったのが幸いした

モノレールの中で俺は考えていた

（デートじゃないよな・・・）

あんだけ暗い表情してデートの訳がないはずである、デートなら少なからず明るい表情は入るはず

そんなとことを考えながらアリアの後をついてきてたどり着いた場所は

「新宿警察署・・・！！」

俺は前にアリアから聞いた一言を思い出す、それと同時に

「なんでこんなところに特殊作戦群がいるのよ」

といわれ俺は一瞬固まってしまう

「気づいていたなら、さっさと言えよ」

「別にそんなことする必要あるの？」

不機嫌そうにアリアがそう言うも、いつもの覇気はなかった

「アリア、お袋さんに面会か？」

「・・・そうよ、どうせ追っ払ってもついてくるんだろうし一緒に来て」

そう言うと俺とアリアは署内に入った

面会室でアクリル板越しに出てきた美人がアリアのお袋さんであった

「まぁ・・・この方、アリアの彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママ」

「じゃあ、大切なお友達さんかしら？お友達を作るのさえ下手なアリアがねえ。ふふ。うふふ・・・」

「違うの、コイツは鷹山勇治、武偵校の生徒で、第二次朝鮮戦争で従軍した
　元陸上自衛隊の特殊作戦群隊員、そう言うのじゃないわ」

「・・・鷹山さん、初めましていつも娘がお世話になってます。アリアの母の神崎かなえと申します」

「あ、いえ、こちらこそ娘さんにお世話になってます・・・」

アリアはこれにムスッとしながらも、かなえさんに話しかけた

「ママ、時間がないから手短に話すけど・・・この前、武偵殺しの3人目の被害者が出たわ」

「まあ・・・」

「さらにもう一件、一昨日にバスジャックが起きてる、奴の活動は活発になっているわ。もうすぐ
　シッポを出すはずだわ。奴だけでも逮捕すればママの懲役が742年になるわ」

懲役742年！？俺はアリアの言葉に目が飛び出そうになる

「そして、イ・ウーの連中をぶち込んでやるわ」

「アリア、気持ちはうれしいけど「パートナー」は見つかったの？」

「それは・・・、どうしても見つからないの、誰もあたしについてこれなくて、
コイツはついてこれるけど自殺志願者だから・・・」
今度俺がムスッとする
「だめよ、失礼なこと言っては、それにあなたにはパートナーが必要なのよ
曾お爺さまにもお婆さまと同じように」
「・・・それは何度も聞かされたわよ・・・でも・・・」
「人生はゆっくり進みなさい。早く走る子は転ぶものよ」
「神崎。時間だ」
管理官が時計を見ながら告げる
「ママ、待ってて必ず全員捕まえるから」
「焦っては駄目よアリア。一人で先走ってはいけない」
「ヤダ！あたしはいますぐにでも助けたいの！」
「時間だ！」
アリアをなだめようとするかなえさんを、管理官が羽交い締めにするような形で引っ張り戻す
「やめろっ！ママに乱暴するな！！」

「落ち着けアリア！」

俺はアリアを押さえながら胸ポッケから自衛隊手帳を取り出してアクリル板に突きつける

「もう少し丁寧に扱ってやれ」

「失礼しました」

俺の手帳を見た管理官はかなえさんを離すと俺に対して敬礼してきた

アリアがちょっと驚く、しかし管理官はかなえさんを連れて面会室を出る

アリアは面会室を出た後、俺に聞いてきた

「あんた、何をしたの？」

「俺は国に尽くした英雄って訳で、ある程度のわがままは政府とかに言えるの」

「そう・・・、」

署の前でアリアはそう言いながらも目に涙を浮かべていた

「アリア・・・」

「泣いてなんかない」

そう言うアリアだが

「な・・・泣いてなんか・・・」

そして糸が切れたかのように

「ない・・・わぁ・・・うわあああああああああああ！」

「うわあああああああああ・・・ママぁー・・・ママあああああああ・・・・！」

泣き叫ぶアリアのそばに俺はただ立っていた、それだけしか出来なかった

## 再会　母と娘（後書き）

どうも、お久しぶりです白石です

テストやっと終わりました、今回からアニメ４話部分になります

今回はキンジお休みです、キンジファンの人すみません

今回の章ではタカにレミントンｍ３１とシグｐ２００（９ミリ拳銃）

使わそうと思っていますのでよろしく、

どーでもいいけど９ミリ拳銃、エアガンほしいけど高いんじゃー！！

あと、銃をｐ－１４からコンバットコマンダーかキンバーにでも変

えようかな思っているんですけど、変えるか変えぬべきか悩んでます

ご意見お寄せください

それでは次回もお楽しみに

## 繋がる過去と現在（前書き）

タカがアリアの母、かなえと面会した週明けの話である

## 繋がる過去と現在

東京が強風に見舞われた週明け、キンジの隣の席、強襲科の訓練室にアリアはいなかった

かなえさんとの面会の後、泣き続けていたアリアがアルタ前で泣きやむと「一人にして」と言ってきたので、俺とアリアはそこで別れた

あの日に、偶然見つけたアリアを尾つけて、かなえさんの所に行っていろいろ知ってしまった

アリアの母のかなえさんは「武偵殺し」の容疑者として捕まっている

そして、早くも二審まで有罪判決を受けている

下級裁隔意制度、証拠が十分にそろっている事件を最高裁まで迅速に執り行い、裁判が延滞しないようにする、最近出来た制度でこれを適用されたのだろう

それで受けた量刑は懲役８６４年、事実上の終身刑だ

また、それではだけでは無く武偵殺害の以外の件もあるようで、アリアはそれらすべてを冤罪として

最高裁までに覆そうとしているのだ、武偵として犯人を見つけるという方法で

それと面会室でも言ってた「パートナー」のこと

アリアの実家の「H」家は、貴族の名門でもあり、警察の名門でも

あるようでみんな優秀なパートナー
を組むことで活躍して、功績を残してきた
そのためアリアにも必然的にパートナーを作るのが求められるのだが
アリアはそれを見つけられない
それも当然である、アリアについてこれるのなんて滅多にいないだろ
ベトナム戦争では敵兵一人殺すために６万発飛んでくるといわれた
それ以上の銃弾をくぐり抜けてきた俺はアリアについて行けるだけ
の能力はあるのだが
戦場では一人の隊員の命を守るために死にかけることは当たり前の
ことであり、
俺はそれが武偵でも同じだと思っている
しかし、アリアはそれを認めないようである
自分のために死ぬ仲間（パートナー）を見たくないのだろう
そんなことを考えながら８９式を整備していると理子から電話がか
かってきた
「なんの用だ理子？」
「ねぇ、ゆーくん？強襲科の授業はもう終わりでしょう話があるの」
「なんだよキンジに話せよ同じ探偵科だろ？」

「だって、キーくん追試テストがあって遅くなるって言ってたんだもん、それにアリアに関係する話な　んだもんゆーくんも聞きたいでしょー？」

「・・・分かった、どこにいる？」

「台場のクラブ・エステーラに来て」

「分かった」

そう言うと俺は素早く８９式を組み立てストックを折りたたみバイクにまたがり理子の言ってたクラブ・エステーラに向かった

少し道に迷いながらバイクを走らせ、何とかクラブ・エステーラについた

時間は５時１５分で空はまだ青さが残っていた

店内にはいると同時に

「ゆーくぅーん」

と奥から小走りでやってきた、

ちなみにゆーくんとは理子が俺につけたあだ名で

いつもは上の鷹山にちなんだタカかそのまま鷹山で呼ばれることがほとんどなので、

下の方の勇治はあんまり呼ばれることもなく、それにちなんだあだ名もこいつが始めてだろう

「理子、キンジから聞いていたけど授業さぼって何やってたんだ」

このセリフからも分かるようにこいつは今日、学校さぼっているのである

「くふ、この勝負服のお着付けしてたのよ、キーくん気に入ると思うんだー、ゆーくんはどう思う？」

「勝負服っておまえなぁ・・・、何そのゴスロリ？」

理子の言う勝負服とはゴスロリ制服のことである、自分は洋服とかそんなものについては全く無知なので何とも言えないのである

「ゆーくん、ひどーい！今、理子ルートなのにー？」

「訳がわからないよ」（QB風に）

そんなことをした後、理子に押し込まれて入った個室の中で

理子の注文したモンブランとミルクティーと俺が頼んだチョコケーキを食べながら

話を聞くことにした

「で、話って何だ？」

「ゆーくんも、キーくんもアリアと喧嘩したってね」
「キンジの奴はしたけど、俺は一方的に別れ切り出されただけだ、そもそもお前に関係ないだろ」
「関係大ありだよぉ、ゆーくんもキーくんもアリアと仲良くしないと駄目なんだから」
「なんでだよ？」
「そうじゃないと理子が楽しくない！」
「訳がわからないよ」（本日2回目）
そんな中で理子は俺のホルスターからP－14を取り出して、
「ゆーくん、ガバメントもいいけど理子はシグ使ってる方が好きだなー、あの時のように」
「あの時？」
「それはゆーくんが思い出して、本来の話に戻るよ」
「ああ」
「警視庁の資料にあったんだけどねぇ・・・、過去に「武偵殺し」やられた人は2人だけじゃないかもしれないって」
「どういうことだ？」

「「可能性事件」っていうのがあってね、事故って扱いだけど実際の「武偵殺し」の犯罪かもしれないってヤツ」

「そんなのがあるんだ」

「で、こんなもの見つけちゃったんだ」

そう言うと理子は一枚の紙を見せつけてきた

「２００８年１２月２４日　浦賀沖海難事故　死亡　遠山金一武偵（１９）」

「これ、キンジのお兄さんでしょ？この事故シージャックじゃなかった？」

「・・・・・・」

俺は頭の中で何かが繋がりそうな気がして、理子の声など全く耳に入ってなかった

「いい」

理子の声で我に返る、理子は俺と目を合わすと目を細めて俺を押し倒しながら

「いいよ勇治、あの時と同じだよ、ゾクッときちゃう」

「理子！？」

そのとき一瞬頭の中を、自衛隊時代のある経験がよぎった

「ねー、勇治キンジがくるまでゲームみたいなことしよ？」

理子がアーモンドのようなにおいを漂わせながら俺に要求してくる

「誰にもばれないよ、アリアは今日の７時にイギリスに帰っちゃうし、白雪はｓ研の合宿だし」

そんなことを言う、理子を俺は軽く押しのけた

「そう言うのは本命とやれ、じゃあな」

そう言うと俺はクラブ・エステーラを出て寮の自分の部屋に戻った

ふとクラブで聞いたことを思い出しながら考えていた、

俺はふと理子の言っていたシグのことを思いだし、ガンロッカーからシグｐ２２０（９ミリ拳銃）

を手に取りベットに寝っ転がりながらシグを上に向けたそのとき

「！！」

頭の中を駆け抜けるように理子の言ってたことを思い出した

確かに俺は自衛隊の時、理子に会っていた

それと同時に理子から聞いた武偵殺しの話と過去の事件が一本の線で繋がった

その線の先は、取り返しのつかないエンディングに繋がっている
ヤバイ、今すぐ動かないと！
俺はピストルグリップのＭ３１ショットガンを取り出し弾を装填しながら携帯でキンジに電話した
「キンジ！アリアがヤバイ！！」
「ああ、分かってるバイクですぐに来てくれ！」
「すぐに準備を終えて行く！途中で合流しよう！！」
「分かった！」
俺は虫の知らせがしたのでシグをホルスターに入れ、猛ダッシュで部屋を出て
バイクにまたがった
そして、エンジンを入れると同時に急発進した
アリア、お前が俺をパートナーから外すのはいい、
けど武偵殺しにはあっていけない
お前は殺されてしまうんだ！！

## 繋がる過去と現在（後書き）

どうも、白石です

いやー、今回は長かったです、書いていて疲れました

というかタカと理子ほとんど絡ましていなかったような、まあいいけど

ふと書きながら思っていたんですけど、理子って殺人未遂以外に何をやらかしそうですかね？

金銭泥棒なんてしなさそうなんですけどね、

理子とタカの始めてあったときの設定が未だにまとまりません（泣）

（5話で書くことは決まっているんですけど）

だれかいいアイディア教えてくださいお願いします！！

それでは次回もお楽しみに！！

## 報告：武偵殺しと遭遇（前書き）

理子から話を聞いた後、タカはキンジと共にアリアを救援するべく羽田に向かっていた

## 報告：武偵殺しと遭遇

途中で合流したキンジを後部に乗せて全速力でバイクを飛ばし、俺とキンジは羽田空港の第２ターミナルに着いた

空港のチェックインを武偵手帳についた徽章で通り抜け、金属探知機も通過せずに、ゲートに飛び込んだ

俺とキンジはボーディングブリッジを突っ切りに、今まさにハッチを閉じようとするＡＮＡ６００便
ボーイング７３７－３５０、ロンドン・ヒースロー行きに飛び込んだ

「ーー武偵だ！離陸を中止しろっ！！」

目を丸くしている、フライトアテンダントにキンジが武偵徽章を突きつける

「お客様！？、失礼ですが、ど、どういうことですか？」

「説明している暇はない！とにかく止めるんだ！！」

アテンダントはビビリまっくた顔でうなずき、２階に走っていった

「これで離陸を止めることが出来るはずだ」

「無理だったらプランＢだ」

「プランＢ？」

「機内で武偵殺しを迎撃する」

俺がそう言った矢先であった

ぐらりと機体が揺れた

「ばっ、バッカヤロウ・・・・！」

「ちっ！めんどくせぇことになりそうだ！！」

仕方なく俺とキンジは席に座り機体が上空に出るのを待ってアリアの席、というか個室に向かった

個室に向かう途中でふと機内の中を見てみたが、この前テレビで見たことのあるヤツだった

「空飛ぶリゾート」とか言われていて全席スィートクラスの豪華旅客機で高級ホテル並みの個室が

１２あり、それぞれ部屋にベットやシャワー室も完備された、セレブ御用達の新型機で１階はバーに

なっている

「・・・キ、キンジ、タカ！？」

とりあえず合流には成功したな

「すげぇ、いいの使ってるな、これチケット片道２０万円ぐらいだろ？」

俺がダブルベットを見ながらそう言うと、アリアは立ち上がり俺と

キンジを睨みつけてきた

「ーー断りもなく、部屋に押しかけてくるなんて失礼よっ！」

「お前も同じだろ」

キンジにそう言われ、アリアはキンジの部屋に押しかけてきたことを思い出したのか

うぐ、と怒りながらも黙る

「・・・なんでついてきたのよ？」

「除隊通告書をもらってないんでね」

「あんた、まだそのこと言うの！！」

アリアはカッとなったのか、ガバメントを握ろうとしていた

「武偵憲章2条、依頼人との契約は絶対守れ」

キンジがそう言うのでアリアと俺は

「「・・・？」」こうなってしまった

「俺はお前と約束した、強襲科に戻って最初に起きた事件を1件だけ解決する、「武偵殺し」の1件はまだ解決してないだろ」

「何よ、何も出来ない役立たずのくせに！」

がう！と、軍用犬のようにアリアは犬歯を剥いた

「帰りなさい、あんたのおかげでよーーく分かったの、あたしはやっぱり「独唱曲」！
あたしのパートナーになれるヤツなんてどこにもいないの！」

「帰るのはいいが、パラシュートが無いぞ」

「くだらないジョーク言わない！！」

キンジは俺とアリアの会話を聞きながら席に座り、窓から町を見ていた

「・・・ロンドンに着いた、あんた達二人のチケット買ってやるからそれで帰るのよ、
あんた達はもう赤の他人！話しかけないこと！！」

「除隊通告書代わり？」

「元から他人だろ」

「うるさい！喋るの禁止！！」

強風の中、ＡＮＡ６００便は東京湾上空に出た

ふくれっ面のアリアに、毒を食らわば皿までといった感じのキンジを見ながら

俺はレミントンＭ３１ショットガンをいじっていた、

レミントンＭ３１ショットガン

１２ゲージの弾丸を使うショットガンで撃つたびにフォアエンドを後退させて次弾を装填するポンプアクションという方法を使っていて、装弾数は最大５発、

今ではベネリＭ３やスパス１２などのショットガンに負けている感があるが、価格も安く、信頼性も高いので俺はこれを使っている、

西部警察やパトレイバーなどでも活躍していてそれにあこがれて買ったのでもあるけど

武偵では散弾は犯人や人質を傷つける可能性があるので、でかい弾丸が飛んでいくスラッグ弾を使用するのが規定となっている

「お客様にお詫び申し上げます、当機は台風による乱気流を迂回するのために、到着が３０分ほど遅れることが予想されます」

機内放送が流れる中、６００便は少し揺れながら飛んでいた

揺れは大したことがないのだが、ガガン！ガガーン！と雷が鳴るのが聞こえていた

アリアは雷が鳴るたびにビビッていた

「怖いのか？」

「こ、怖いわけ無いじゃない。バッカみたい。っていうか話しかけないで！」

といった矢先にガガガーーーン！

「ーーーうぁ！」

激しく鳴り響いた雷にアリアは座席からジャンプして、ベッドに潜り込んでしまう

俺とキンジはこれがおかしくて笑っていた

ガガーーン！ガガーーン！と運が悪いのか、機長がヘタなのかは分からないが雷雲の近くを飛んでいた

「〜〜〜き、キンジぃ〜〜〜、た、タカ〜〜〜」

毛布の中からアリアが席に座るキンジの袖をつかんできた

「落ち着けよアリア、テレビでも見ろ」

俺はリモコンでテレビのチャンネルを回していった

バラエティやアニメの映像が切り替わっていく

俺はふと、手を止めてしまった

「タカ、これ第二次朝鮮戦争のドラマじゃねえか？」

「ああ、そうだな・・・、けど、めちゃくちゃだなこりゃ、」
韓流ドラマのチャンネルで出てきた第二次朝鮮戦争のドラマを見て
思わずいろいろと
突っ込んでしまう
「自衛隊がＫ２ライフルなんて使ってねえぞ」
「まあ、韓国のだからしょうがないだろ」
「ほかにチャンネル無いの？」
アリアにそう言われてチャンネルを変えると
「ーーこの桜吹雪が、見覚えがないとは言わせねぇぜーー！」
これはキンジのご先祖様のチャンバラ劇、名奉行　遠山の金さん
キンジから前に聞いた話だと、彼もヒステリアモードのＤＮＡを持
っていて露出狂のケがあったらしい
「ほれ、これでも見て気を紛らわせ」
「う、うん」
話かけるなと言うアリアリールは解禁になったようである、
今のアリアはただの女子のようだ、
今の俺もキンジも、平凡な男子高校生なのだから普通のクラスメー

トとして友達として
震えを和らげることぐらいは出来る

そのときであった

パァン！、パァン！

俺たち武偵校の生徒が聞き慣れた音が鳴り響いた

銃声ーーー！！

## 報告：武偵殺しと遭遇（後書き）

はい、どうも白石です

今回はほんとに長くなりそうですので、４部構成になります

１１話と最終回見ました

この作品、アニメ１話から最終話までの内容と言うことですので、
最終章は

ブラド編になります、決して短くない残りですが最後までつきあってもらえれば
光栄です

あと、前にもいった銃を変えるか、変えないか

東京マルイのハイキャパ５，１ウェスタンアームズのコルトコマンダー、キンバーカスタムを見ながら考えています

だれか助言ください！感想もください！！

それでは次回もお楽しみに

## 報告：武偵殺しと戦闘開始（前書き）

タカたち乗るＡＮＡ６００便の中で鳴り響いた銃声、
ついに武偵殺しと遭遇したのだった！

## 報告：武偵殺しと戦闘開始

銃声が鳴り響き、Ｍ３１ショットガンを持って個室から出ると
１２の個室から銃声を聞いた乗客や、アテンダント達が不安げな顔で騒いでいた
銃声のした方を見ると、コックピットの扉が開いていた
「！！」
そこにいたのは、さっきの小柄なアテンダント
パイロットの２人は何かされたらしく全く動かず、このアテンダントがずる、ずる、と引きずり出していた
ポンプアクションのジャキ！という音を立て俺はレミントンＭ３１ショットガンをアテンダントに向ける
「武偵だ！、動くな！、武器を捨てろ！！」
俺の声にアテンダントは、にぃッ、笑いながら胸元から、ピンと音を立ててカンを投げてきた
「Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　Ｐｌｅａｓｅ（お気をつけください）でやがります」
「タカっ！」

雷の恐怖を押して出てきたアリアが、悲鳴を上げる

シュウウウウ・・・・！

これはガス缶だ、音で分かる

サリンや、ソマンなど自衛隊や強襲科でならった毒ガスの名が頭の中を駆けめぐる

「全員、部屋に戻れ！ドアを閉めろ！絶対にあけるな！！」

ドゴォン！ジャキ！ドゴォン！ジャキ！

M31ショットガンを連射してガス缶を撃ちガス缶を遠くに飛ばす

ばたん、と扉を閉める前に飛行機が揺れ、機内の照明が消え、乗客達が悲鳴を上げた

暗闇はすぐに赤い非常灯に変わった

「タカ！大丈夫！？」

「何とかな」

目はみえるし、手足の麻痺もないガスはダミーだった

「アリア、「武偵殺し」だ。やっぱり出やがった」

「やっぱり・・・？、あんた達「武偵殺し」が出るのが分かってー」

アリアは目を見開き、俺とキンジを見てくる

「キンジ、説明してやれ」

「ああ、アリア「武偵殺し」はバイクジャック、カージャックで事件を始めてーさっき分かったんだが
シージャックである武偵をしとめた、たぶん直接対決だった」

「・・・どうして」

「そのシージャックだけ、お前が知らなかったんだ、電波、傍受してないだろ」

「う、うん」

「「武偵殺し」は電波を出していない。つまり船を操作する必要が無かったヤツがそこにいたからだ」

キンジの兄さんが逃げ遅れるとは、どう考えてもおかしいはずだ

「だが、バイク、自動車、船と大きくなっていった乗り物が、一度小さくなる。俺のチャリジャックだ
次にバスジャック」

「・・・！」

アリアが何かに気づき目を大きくするのを見ながら、俺は話しかける

「分かるかアリア。これははじめからメッセージだったんだ、お前は最初からヤツの手のひらで踊っていたんだ、ヤツはかなえさんに

罪を着せ、お前に宣戦布告したそして、シージャックで武偵をしとめた同じ3件目で、お前との直接対決をこのハイジャックで」

推理の苦手なアリアが、悔しさのあまり歯を食いしばる

そこにー

ポポーンポポポポン。ポポーンとベルト着用サインがわけの分からない点灯をはじめた

「・・・和文モールス・・・」

アリアがそうつぶやくので、俺はモールスの解読を試みる

「なんて言ってるんだタカ?」

「オイデ　オイデ　イ・ウー　ハ　テンゴク　ダヨ
オイデ　オイデ　ワタシ　ハ　イッカイ　ノ　バー　ニ　イルヨ
だってさ」

「・・・誘ってやがる」

「上等よ。風穴あけてやるわ」

アリアとキンジはホルスターからガバメントとベレッタを取り出しながらそう言う

「一緒に行ってやるぞアリア、一人より数人いた方が楽だろ」

「来なくていい」

ガガーン！また雷鳴が聞こえる

「どうする」

「・・・く、来れば」

俺たちは誘導灯を頼りに、１階に降りていく

１階は豪華なバーになっている、そのバーのシャンデリアの下にさっきのアテンダントがいた

「！？」

ショットガンと拳銃を向けながら、俺たちは眉を寄せた

アテンダントは武偵校の制服を着ていた

それも、さっき台場で理子が着ていたもの

「今回もきれいに引かかってくれましたね」

ベリベリと特殊メイクを剥いだアテンダントから出てきたのは

「理子！？」

「Ｂｏｎ　ｓｏｉｒ（こんばんは）」

青いカクテルを飲み、キンジにウィンクしてきたのは理子であった

異常な状況に頭が混乱する

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にもお前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも……お前の一族は特別だよ、”オルメス”」

「ーー！」

オルメス　それがアリアの「H」家の名らしい

「おまえ、いったい何者だ？」

ショットガンを向けながら理子に聞く

「理子・峰・リュパン４世、それが理子の本当の名前」

リュパン？　前にキンジから借りた探偵科の教科書に書いてあった大怪盗、

理子はそのひ孫なのか！？

でも…家の人間は理子を『理子』とは読んでくれなかった。お母様が付けてくれた、このかっわいい名前を。呼び方が、おかしいんだよ」

「おかしいだと・・・？」

「４世。４世。４世。４世さまぁー。どいつもこいつも、使用人まで…理子をそう呼んでいたんだよ。ひっどいよねぇ。」

「そ、それがどうしたってのよ……”４世の何が悪いのよ”」

アリアは理子が嫌っている４世をわざと使う、すると
理子は目玉をひんむいて
「――悪いに決まってんだろ！！”あたしは数字か！？”あたしはただの、ＤＮＡかよ！？”あたしは理子だ！！”　”数字じゃない！！”どいつもこいつもよぉ！！」
俺たちではない誰かに、ここじゃないどこかに対してキレた理子は叫んでいた
「イ・ウーに入って、この力を得た、この力であたしは超える曾お爺さまを！もぎ取るんだよあたしをっ！」
何のことだか分からない話を、アリアは深刻な顔で聞いていた
「待ってくれ理子！何を言ってるんだ！？オルメスって何だ、イ・ウーってのも、それに「武偵殺し」はお前の仕業なのか？」
キンジがそう問いかけると理子は
「……『武偵殺し』？あぁ。あんなの。」
じろ、と理子がアリアを見る。
「それはプロローグを兼ねたお遊びよ。本命はオルメス４世――アリア。お前だ」

その理子の目にいつもの理子はいなかった、戦場で見た、人を殺すときの目だった

「１００年前、曾お爺さま同士の対決は引き分けだった。つまり、オルメス４世を倒せば、あたしは曾お爺さまを超えたことを証明できる。キンジ、タカ・・・お前達も、ちゃんと、役割を果たせよ？」

人を殺すときの目が俺とキンジに向けられる

「オルメスの一族にはパートナーが必要なんだよ。曾お爺様と戦った初代オルメスには、優秀なパートナーがいた。だから条件を合わせるためにお前ら二人をくっ付けてやったんだよ」

「俺とタカとアリアを、お前が・・・？」

キンジがそう言うと理子はまたいつもの調子に戻った

この野郎、今までバカ理子を演じていたのか

「キンジのチャリに爆弾を付けて、わっかりやすぅーい電波を出してあげたの。」

「・・・あたしが「武偵殺し」の電波を追っていることに気がついていたの・・・！！」

「そりゃ気付くよぉー。あんなに堂々と通信科を出入りしていればねぇー。でも、キンジが乗り気じゃないみたいだから、わざわざ朝鮮戦争の英雄のタカまで付けて、バスジャックに協力させてあげたんだぁ」

「バスジャックもか！？」

「キンジぃー、武偵は時計を預けちゃ駄目だよ？狂ったの渡されてバスにチコクしちゃうぞー？」

「何もかも、オメェの計画通りかよ・・・！」

「そうでもないよ、キンジとアリアがくっつききならなかったし、タカはくっついてもアリアが剥がしちゃったのは計算外だった、キンジのお兄さんの話を出すまでは」

「兄さんを、お前が・・・お前が！？」

怒りをあらわにしたキンジはベレッタを理子に向ける

「キンジ、落ち着け！冷静になるんだ！！」

「これで冷静になれるかよ！」

キンジがトリガーを引こうとしたその時

飛行機がまた揺れて

「！」

キンジのベレッタは消えて、後ろに壊れて散らばっていった

それに変わって、理子がワルサーＰ９９をキンジに向けていた

「ノン、ノン。ダメだよキンジ。”今の”お前じゃ、戦闘の役には

立たない。それにそもそもオルメスの相棒は、戦う相棒じゃないの。
パンピーの視点からヒントを与えて、オルメスの能力を引き出す。
そういう活躍をしなきゃ」

そう言った矢先に、一瞬の隙を見せた理子に対して俺はショットガンをぶっ放した

ズドォン！

理子はこれを回避し、それで出来た、隙にアリアが動いた

床を蹴ると同時に2丁のガバメントを取り出し襲いかかる

常に防弾服を着る、武偵同士の接近戦では拳銃は打撃武器なのだ

「アリア、2丁拳銃は自分だけじゃないのよ」

理子はスカートの中からもう一丁のP99を取り出した

「！！」

だが、もう止まれない、いや、止まってはいけない

バリバリバリッ！！という音をあげて、アリアと理子を至近距離から撃ち合い始めた。

「くっ・・・このっ！！」

「あはっ！あはははっ！！」

アリアと理子は至近距離から、拳銃でお互いを撃とうとせめぎ合う。

武偵法９条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

その法を守るため、アリアは理子の頭部を狙えない。

そして理子も――合わせているつもりか、アリアの頭部を狙わない。

まるで格闘技のように、アリアと理子の手が交差する。

武偵同士の近接銃撃戦は、射撃線を避け、かわし、あるいは相手の腕を自らの腕で弾いての戦いだ。

バッ！！ババッ！！

放たれる銃弾は、お互いの小柄な体を捕らえず壁に、床に、撃ち込まれていく。

俺はレミントンを構えて援護したいのだが、激しすぎて援護できない

「はっ！！」

アリアは弾切れと同時に、理子の両腕を抱えるて抱き合うような姿勢になる

格闘戦ではアリアに分があるはずだ

「キンジ！タカ！！」

ジャコン！、ジャキッ！

俺のＭ３１ショットガンのポンプアクションの音とキンジのバタフライナイフが開く音が同時に鳴り響く

「そこまでだ理子！」

「武器を捨てるんだ！！」

アリアの背後に突き出たＰ９９に注意しつつ、前進しようとした時

「双剣双銃（カドラ）――奇遇ね、アリア」

理子が、言った。

「理子とアリアは色んなところが似てる。家系、キュートな姿、それと…２つの名」

「？」

「あたしも同じ名前を持っているのよ。『双剣双銃の理子』。でもねアリア」

何だあれは・・・！？

戦場でも見たことの無い異様な光景に足が止まる

「アリアの双剣双銃は本物じゃない。お前はまだ知らない。”この

力”のことを――！！」

しゅら…しゅるるっ。

笑う理子の、ツーサイドアップの、テールの片方が――

まるで神話にあるメデューサの髪のように動いて――

シャッ！！

背後に隠していたと思われるナイフを握ってアリアに襲い掛かった。

「！！」

一撃目は、驚きながらも避けたアリアだったが――

ザシュッ！！

反対のテールに握られたもう一本のナイフが鮮血を飛び散らせた。

「うあっ！！」

アリアが――後ろに、仰け反る。

側頭部を斬られ

血が、紅く、紅く、ほどばしる。

「あは…あはは…曾お爺さま。１０８年の歳月は、こうも子孫に差を作っちゃうもんなんだね。勝負にならない。コイツ、パートナー

どころか、自分の「力」すら使えてない！！勝てる！！勝てるよ！！理子は今日、理子になれる！！あは、あはは、あはははは！！」

理子はアリアを軽々しく突き飛ばした

ボロ雑巾のように転がり、キンジの足下に転がってきた

「アリア！・・・アリア！！」

「キンジ！アリアをつれて一端後退しろ、援護する！！」

「けど、お前は！？」

「いいから行くんだ！行け！！」

ズドォン！ジャキッ！ズドォン！ジャキッ！

俺のＭ３１ショットガンが鳴り響く中、理子は高笑いしながら言い放つ

きゃはははっ！！

ねぇねぇ、狭い飛行機の中、どこへ行こうっていうのー？

おれは戦場でも感じたことの無い恐怖に襲われた

## 報告：武偵殺しと戦闘開始（後書き）

どうも、白石です

いや～長かった、アニメ４話部分

今回の話だけでも書いていて３時間も過ぎちゃいましたよ

次回からアニメ５話部分になります

次の章ではついにタカと理子の過去の出会いが出てきます、こうご期待！！

それとＫＯＨ　ＳＡＷＡＫＵＲＡ　さんの作品、緋弾のアリア～運命を射す漆黒の魔弾～と

我が作品、防人の４５口径

とのコラボ作品

「緋弾のアリア・ＳＥＣＯＮＤ×ＣＲＯＳＳ～防人の４５口径と漆黒の魔弾～」

ついに公開しました！！

タカにまさかの子持ち疑惑！？、スザク先輩に顔があがらないタカなど

決してほかでは見ることの出来ないタカが見れます、そちらもご覧

ください！！

それでは、次回もお楽しみに！！

## 朝鮮半島派遣、１週間前（前書き）

６００便の中で武偵殺しと遭遇した、タカたち
その正体は理子であった！！

そして、今回ついにタカと理子の過去が明らかになる！！

理子との壮絶な銃撃戦の末、アリアが負傷し、
アリアの後退を援護しているところから話を始めよう

## 朝鮮半島派遣、１週間前

ドゴォン！ジャキ！ドゴォン！ジャキ！

バンバン！！バンバン！！

と６００便の中で俺のレミントンと理子のワルサーが共に銃声をあげている

理子のよくわからん能力のせいで、アリアが負傷して後退しなければならないので俺が殿（しんがり）を買っているのだが、

本当のことを言うと俺は今、戦場でも味わったことの無い恐怖におそわれている

なんだよあの能力！？、化け物ってレベルじゃねぇぞ！！

朝鮮戦争での戦場で味わった恐怖で言うとＴ－７２戦車に襲撃されているような恐怖だ

そんなことを思いながら、レミントンをひたすらぶっ放す

カチッ！、レミントンＭ３１が弾切れの音をあげる、

俺はマガジンポーチから青いスラッグ弾を装填するべく取り出しているが

これをチャンスと言わんばかりに理子が俺のいる場所に撃ち込んで

ＣＱＢ（接近戦）ではショットガンの方が拳銃より有利である、防弾服を着ている武偵といえど、
至近距離でショットガンを食らえば気絶するほどの衝撃がある
それを分かっている理子は俺がショットガンを撃っているときは、遮蔽物に隠れていた
しかし、レミントンＭ３１の装填数は最大５発なのですぐに弾切れをおこす
これが理子の反撃のチャンスなのだ
ズギュン！ズギュン！と激しく９ミリ弾が飛んでくる
「ちっ！これじゃキツイ！！」
俺は一旦、リロードするのをやめてシグＰ２００を取り出して、タイミングをみて遮蔽物から飛び出した
「！！」
俺のシグＰ２２０を見て、理子の動きが一端止まる
「ゆーくん、懐かしいの使っているね」
「ああ、あのときと同じだな理子」
「あ、思い出してくれたんだ」
「ああ、すっかり忘れていたけどな」

3年前、福岡県、福岡市

俺は特殊作戦群に所属する三等陸尉（米軍などで言う少尉）で1週間後には第二次朝鮮戦争の最前線に送られて戦うことになっている

そして今は日本で過ごす最後の休暇である、

「おい鷹山！酒飲まねぇのかよ！！」

「無茶言わないでくださいよ先輩、自分未成年ですよ」

「どーせ、死ぬかもしれねぇんだ！今のうちに飲んでおけよ！！」

「警邏隊（けいらたい）がうるさいですよ」

「うるせぇ！警邏隊が怖くて酒が飲めるか！！」

なんて、泥酔しているのは俺の先輩であり上官の2等陸尉（中尉）である

俺は先輩に連れてこられて福岡市のバーに来ている

「ん、じゃあ女を抱くんだな」

「お、女を抱く！？」

「そうだ、一生、童貞で死にたくないだろ」

「そ、それはそうですけど・・・、敷居が高くないですか？」

「敷居が高いも低いもあるかぁ！！」

その時、先輩の動きが止まったと思ったら猛スピードで、近くにいたお姉さんに

「ちょっと、そこのお姉さん！お話しません？、個室で」

なんて言っていた、

「ハァ・・・」

とあきれていると、マスターからオレンジ色のカクテルが渡された

「マスター、これ頼んでないけど？」

「あちらのお客様からです」

と言われて、その方向を向くと、

金色の髪をした俺と同い年ぐらいの女子がいて笑顔でウィンクしてきた

「こんばんは、兵隊さん」

「お前さんどちら？」

「峰理子よ、あなたは？」

「鷹山勇治、陸上自衛隊の空挺レンジャーだ」
「戦前に行く前の最後の休暇かしら？」
「ああ、そうだ」
「そう、それじゃ男にしてあげようかしら？」
「勘弁してくれよ・・」
と言って、理子のくれたカクテルを飲んだその時であった
「・・・？」
俺は妙な睡魔におそわれると同時に眠っていた
「お？、鷹山、酔いつぶれちまったのかよ、情けねぇ」
「あなた、この人の知り合い？」
「知り合いというか、上司だ」
「あたしのせいよ、悪いからこの人を介抱させて」
「ああ、いいですよ！ついでに男にしてやってくださいよ！冗談ですけど！！」
「言われなくて男にしてあげますよ」

「何か言ったアンタ？」

「いえ何も」

俺が気がつくとそこは泊っているホテルだった

「何があったんだ・・・？」

思い出そうとするが思い出せない、頭がぼーっとしている

ちゃぽん、と部屋のバスルームから音がする

「！？」

頭が混乱する、この部屋には俺一人しかいないはずなのに

ガラッという音と同時にバスローブ姿の理子が出てくる

「！？」

「あ、気がついたのね」

「お前が仕込んだのか・・・」

「そんなこと言わないで少尉さん、男にしてあげるから・・・」

そういうと理子は俺をベッドに押し倒した

「ねぇ、女の”ヤリ”かた知ってる？」

俺の迷彩服のズボンに手を伸ばしながら理子がそう言う

チャキ！

「”ヤリ”方は知っていてもやらせねぇ」

俺はシグＰ２００（９ミリ拳銃）を理子の胸に突きつける

「ひどいよ、少尉さん、せっかく理子がやらせてあげるのに」

「どうせ、２４００円の男だよ俺は、やる価値も無ぇ」

「２４００円？」

「国から出る俺が戦死したときの遺族への見舞金だよ」

「もっとあると思うよ、少尉さん」

理子はリップクリームを塗りながらそう言う

「あるのかねぇ、俺に？」

バスローブ姿の理子がベッドに腰掛けながら、俺を向いて

「下の方じゃ無いんじゃ男にして良いんだね」

「どういうこと？」

「こういうこと」

そう言うと、理子は俺の唇を奪った

「！？」

「いい味してるわよ」

頭に血が上るのを感じながら、俺はまた闇の中に落ちていった

そして、翌日の朝

俺がベッドの中で目が覚めると、隣に何も身にまとっていない理子がいた

「うぉおおおおおお！？」

「なんだ、もう朝かぁ・・」

「お前、何やっていたの！？」

「ああ、”ヤル”気になった？」

「”ヤラ”無いから！！、っていうか服を着ろ！！」

「ひどいよ、せっかく”ヤラ”してあげるのに」

「いいから、服を着ろ！！」

理子はしぶしぶ服を着ていた、

こんな状況になった理由を冷静に考えれば、理子がカクテルに睡眠薬を仕込んで俺に渡す

それを飲んだ俺が酔いつぶれて先輩によってホテルに運ばれ、理子が介抱する目的でついてくる

で、昨日の状況、で一晩一緒に寝て今の状況・・・

最悪だあああああああああ！！

なんて思っていると、理子が

「じゃあ、少尉さん、理子は帰るから」

「ああ、早いとこ帰ってくれ・・・」

「じゃあ・・・」

そう言うと理子は俺の唇をもう一度奪っていった

「！？」

「いい味してるわよ、じゃあね～」

俺は立ったまま気絶していた、

俺はこの5日後、朝鮮戦争の最前線に派遣された

「こんな状況だったよな」

「そうね、ゆーくん、思い出してくれて理子うれしいよ」

「なあ頼む、理子、もうやめてくれ、俺はお前を傷つけたくない」

「っく！！」

理子は苦虫をかんだような表情をする

「アリアを傷つけさえしなければ、俺も手出しをしない、だから・・・」

「うるせぇ！！」

ズギュン！！

「ぐっ！」

９ミリ弾が俺の足を貫通する、理子は近づきながら

「さっきも、言っただろう！あたしは理子だ数字じゃない！、曾お爺さまを越える！だから・・・」

「お前も死んでもらう」

ワルサーを俺に向けながら理子は、トリガーを引いた

俺はスローモーを使い、ワルサーから飛んでくる９ミリ弾をよけ、Ｐ２２０を至近距離から

バン！バン！バン！と3発撃ち込んだ、

「ぐぁ！！」

と理子が苦しむ様子を見ながら俺は足を引きずりながら、さっきのアリアの個室に逃げ込んだ

バタンという音と同時に部屋の中に入った俺は、鍵を閉め、反対の方向を見た、

そこでは・・・

キンジとアリアがキスをしていた

「ありえんだろ・・・」

## 朝鮮半島派遣、１週間前（後書き）

どうも、白石です

はい、やってしまいました・・・理子とのベッドインシーン、しかも全裸です

何やってんだ俺は！！、ＩＳのラウラかよおい！！

それとタカ、以外と階級高いです、

ちなみに２４００円の部分は韓国軍を体験した人の本に書いてあったことを
元に書かせいただきました

タカの自衛隊時代の話はジャンヌ編でもあるので、お楽しみに

次回はアリアたちとの反撃と着陸のシーンです。

自分は夏休みに入っているので早めに更新できるように頑張ります

それでは次回もお楽しみに！！

## 緊急命令：反撃せよ！！（前書き）

タカと理子との過去が明らかになった前回、タカは理子を説得しようとするも、
理子はタカの説得を聞かず発砲、タカは足を負傷する
スローモーをつかい難を逃れて、逃げ込んだ個室から話を始めよう

## 緊急命令：反撃せよ！！

理子の説得に失敗して、足を撃たれ殺されかけて、逃げ込んだアリアの個室でアリアとキンジがキスをしているのが俺の目に飛び込んできた

何この「エンダァァァァァ！！」な状況？

アリアはキスをされたため真っ赤になって、その場にへたり込んでいた

「こ、このバカキンジ！、こ、こんな時になにすんのよ！・・・ふぁ、ファーストキスだったの　に・・・！」

「安心しろ、俺もだ」

「俺の存在、オール無視ですか」

俺がそう言うと二人とも俺も存在に気づいたらしく、アリアはさらに真っ赤になり、キンジはヒステリアモードになっているためか冷静である

「タカ、大丈夫か？」

「なんとかな、けど、足を撃たれた」

「これを使え、理子はどうした？」

「シグ３発、腹に撃ち込んでダウンさせているが、時間はあまりな

い」

「分かった、今は簡易的な治療をしておけ、この程度のケガなら心配ない」

キンジから救急スプレーを渡され、傷を消毒していたら

キンジの声が低くなったことに気づいたアリアが、チャリジャックの時に見せたヒステリアモードのキンジを思い出したらしく目を見開いていた

「キンジ・・・！あんた、また・・・」

キンジはアリアの耳元に口元を寄せ、小さく囁(ささや)いた

「武偵憲章1条、仲間を信じ、仲間を助けよ、俺はアリアとタカを信じる。だからアリアも俺とタカを信じてくれ。いいな、3人で「武偵殺し」を逮捕するぞ」

「バッドエンドのお時間ですよー。くふふっ。」

ダウンから復活した理子がどっかから調達した鍵でドアを開けて入ってきた、

ナイフを持った髪でドアを押さえつつ、両手にワルサー携えて

「もしかしたら仲間割れして、3人そろって自滅しちゃうかなぁーと思っていたけど、そうでもないから、ここで理子の登場でぇーす」

「アイドル気取りも対外にしとけ」

俺は壁にもたれながら理子にシグを向けていた、
理子は笑いながらキンジの方をみて気づいたようである、ヒステリアモードになっていることを
「あはっ！キンジ！アリアと何かしたんだ？よくできたねぇ、こんな状況で。くふふっ」
理子はヒステリアモードになる方法を知っているらしい
「で、アリアは死んじゃったの？」
髪のナイフでベッドを指しながら、理子が言う
そこは、人がいるように見せかけているだけである
「知らんな」
「さあな」
俺とキンジはそう言いながらチラリとシャワールームを見ると、理子は目ざとくその視線を追う
「さいこーだよ、愛してるよキンジ、勢い余って殺しちゃうかも」
「そのつもりで来るといい、そうじゃなけりゃお前が殺される」
理子はこれを聞くとワルサーを俺とキンジに向けてきて

「愛してるよ、キンジ、タカ。二人とも見せて、オルメスのパートナーの力」

ワルサーを撃とうとした理子に

キンジはベッドの脇に隠していた、非常用の酸素ボンベを盾にするように構えた

「！」

理子の動きが一瞬止まる、一瞬で十分である、体格で圧倒できる、キンジがバタフライナイフを開きながら理子にと飛びかかろうとした瞬間

ぐらっ！と飛行機がエアポケットに落ち込んだ、これをチャンスと言わんばかりに理子がワルサーをキンジに向けて発砲する

キンジはそれをバタフライナイフで斬った、なんでもありかよ・・・

それに感動を含めた驚きに、理子が目を見開いた瞬間に、俺はシグで右のワルサーを

バン！と撃ち落とす

キンジはアリアから借りたガバメントを理子に向けていた

「動くな！」

「アリアを撃つよ！」

体勢的にも状況的にもこちら側に銃を向けるのは間に合わないと思った理子がシャワールームに残されたワルサーを向け発砲した瞬間であった

がたんっ！天井の荷物入れに潜んでいたアリアが転げ出てきながら、白銀のガバメントで
左のワルサーを弾き落とす

「！！」

さらに空中でガバメントを放したアリアは、背中から日本刀を2本抜き

理子の左のツインテールを切断し、俺がスペツナズナイフを取り出すと同時に

バシュゥン！と飛ばして右のツインテールを切断する

「うっ！」

理子は焦ったような声を上げた

ちゃき、とアリアは刀を納めて、流れるようにガバメントを拾い上げ、

俺はキンジに肩を貸してもらいながら立ち上がり、理子にシグを向ける

「峰・理子・リュパン4世」「殺人未遂の現行犯で」「逮捕するわ

！」

俺とキンジ、アリアがシグ、ガバメントを同時に向けると

理子はにやりと笑いながら、俺たちの方を見てきた

「そっかぁ。ベッドにいると見せかけて、シャワールームにいると見せかけて――どっちもブラフ。本当はアリアのちっこさを活かして、キャビネットの中に隠していたのかぁ……すごぉい。トリプルブラフってよっぽど息が合ってないとできないことなんだけどねぇ」

「不本意ながら同居していたからな、いやでも会ってしまうんだよ」

「俺も事実上の同居だったし」

「3人とも誇りに思っていいよ、ここまで追いつめられたの理子初めて」

「追いつめるも何も、もうチェックメイトよ」

「ぶわぁーか」

憎々しげに言うと、理子は髪の毛をわさわさっと全体的に蠢かせた。その異様な光景に、3人とも対応が遅れる。

髪の中で何かやっている！？

「やめろ！何やってる！！」

キンジが理子を捕らえようと、踏み出した瞬間

ぐらり！と機体が揺れ、急降下していた！

俺とアリアは壁にぶつかったり、床に倒れた

キンジも倒れないようにするだけで精一杯だった

「ばいばいきーん」

次の瞬間、理子はウサギのごとく、部屋から飛び出していった

## 緊急命令：反撃せよ！！（後書き）

どうも、白石です

スイマセン！今回も長くなりそうで４部構成になります、ホントにスミマセン！！

次回は着陸のシーンになります、防衛省へのタカの交渉を書きますので待っててください

ついでに竹崎さんの作品「緋弾のアリア～武偵の道～」でもタカ出てますのでよろしくお願いします！８９式で狙撃してます！

それでは次回もお楽しみに、土曜日には更新します！！

## 緊急命令２：生還せよ！&交渉せよ！！（前書き）

復活したアリアとキンジとの３人で理子を迎撃したタカたち、

しかし、理子は巧妙な手口により逃げ出してしまう！！

今回の６００便の中なら話を始めよう

**緊急命令２：生還せよ！&交渉せよ！！**

巧妙な手口により部屋から逃げ出した理子

「理子ぉ！！、クソッ！イテェ！！」

俺は追いかけようとしたが、足が痛くて負うことが出来ない

「タカ、俺が理子を追う、アリアと一緒にコックピットに向かってくれ！！」

「分かったキンジ！、必ず捕まえろ！」

「分かってるさ！」

そう言うと、キンジはガバメントを片手に理子を追っていった

「アリア、肩貸してくれ」

「分かったわよ」

理子のワルサーを確保したアリアがやってきて、肩を借り立ち上がる

「イテェ・・・」

「大丈夫なの？」

「ああ、９ミリで撃たれた、防弾制服もおもったよりモロイな」

アリアから肩を貸してもらってコックピットに向かう
二人のパイロット麻酔弾を撃ち込まれ気絶してコックピットの側に倒れている、コックピットのドアは閉まっている
「ショットガンでブチ開けるか？」
「そんな事しなくていいわよ」
そう言うとアリアは機長からＩＣキーを取り出して、コックピットのドアを開けた
コックピットの中では操縦桿に変なカラクリが付いていてそれが飛行機を遠隔操作していたらしい
「これ、取れないわよ！！」
「ちょっとどけアリア」
俺はＭ３１を構えて、ズドォン！ジャキッ！、散弾では無く単発弾のスラッグ弾だから問題ない
これでカラクリが操縦桿からとれた、アリアは操縦席について操縦を始めた、俺は副操縦席につく
「操縦できんのか？」
「セスナならね、ジェット機なんて飛ばしたことない」
その時、ドウッッッッ！！と後方で爆発音がして、数秒遅れて

ドドオオオオオンッッ！！
轟音と同時に一番激しい揺れが６００便を襲った、機体を巨大なハンマーで殴ったような衝撃が
「！？」
「今の衝撃ってミサイルかよ・・・」
「ミサイル！？なんで分かるのよ！？」
「戦時中に参加した敵後方への空挺作戦で降下ポイントに向かっている際に対空ミサイルを輸送機が食らったことがあるんだよ！」
そんな事を言いながら俺はエンジンの状況を示すパネルを見る
「アリア、４つあるうちの外側の２つをやられたが、内側の二つが無事だ」
「分かったわ」
その時、キンジがコックピットの中に入ってくる
「遅い！！」
「理子はどうした？」
「パラシュートを使って逃げ出した」

「どうりで高度が低いわけだ、基本のパラシュートの降下だな」
この６００便は異様に低く飛んでいた理由はそれか、
俺は特殊作戦群に所属する前は第一空挺団だった、そこで習ったパラシュート降下を理子がやってのけたのだった、
もちろん俺は特殊作戦群で高度１万５０００メートルからの降下をやったことがるが、
ぶっちゃけ地獄である、寒いし耳は痛いし理子だったら間違いなく専用装備しても死ぬだろう
そんな事をふと思っていると、キンジが俺の足を見て気づいた
「タカ、足から血出てるぞ」
「血を拭く余裕もねぇよ」
「変われ、俺がやるから治療してろ」
俺はキンジと席を替わり、足の治療をすることにした
キンジは席を替わると、無線機を操作していた
『――３１――で応答を。繰り返す――こちら羽田コントロール。ＡＮＡ６００便、緊急通信周波数１２７．６３１で応答せよ。繰り返す、１２７．６３１だ。応答せよ――』
スピーカーから管制室からの声が聞こえる

「――こちらＡＮＡ６００便だ。当機は先ほどハイジャックされたが、今はコントロールを取り戻している。機長と、副操縦士が負傷した。あと、武偵が一人負傷している、現在は乗客の武偵３人のうち２名が操縦を代行している。俺は遠山キンジ、神崎・Ｈ・アリア、負傷しているのは鷹山勇治」

キンジの声で管制室では安堵と驚きの混ざった声が上がる

何にせよ、これで管制塔との通信が繋がっているのだから少しは安心だ

キンジはつぎに衛星電話を取り出して誰かに電話していた

「誰に電話しているのキンジ？」

そう聞いているアリアのそばで新たな声がスピーカーから流れる

「もしもし？」

「俺だよ武藤。ヘンな番号からですまない。」

「キ、キンジか！？いまどこにいる！？お前のカノジョが大変だぞ！！」

「カノジョじゃないが、アリアなら近くにいるよ、ついでにタカも」

ああ、武藤か、無難な選択だな

「ちょ・・・お前！何やってんの！！」

「か、かの、かの！？」

アリアは彼女扱いされていることに、一気に赤くなる

何か言おうとするアリアに、キンジは唇に人差し指をあてる

「・・・っ！」

アリアは完全に固まる

「タカはどうしてんだ？」

「ああ武藤、足撃たれてるが、ピンピンしてるぞ」

「大丈夫かよ、タカ！？」

「大丈夫、大丈夫」

この間にもキンジは、状況を羽田に伝えている

「……ＡＮＡ６００便、まずは安心しろ。そのＢ７３７－３５０は最新技術の結晶だ。残りのエンジンが二基でも問題なく飛べるし、どんな悪天候でもその長所は変わらない」

アリアはこの解答に少し、ホッとしている

「それよりキンジ。破壊されたのは内側の二基って言ったな？燃料計の数字を数えろ。ＥＩＣＡＳ（アイキャス）――中央から少し上についている四

角い画面で、二行四桁に並んだ丸いメーターの下にＦｅｕｌ（フュエル）と書かれた三つのメモリがある。その真ん中のＴｏｔａｌ（トータル）ってヤツの数字だ」

さすがは、車両科の優等生、その場で見ているように言いやがる

「数字は――今、５４０になった。どうも少しずつ減っているようだ。今、５３５」

キンジの応答に、武藤が舌打ちする

「くそったれ・・・盛大に漏れてるぞ」

「うそでしょ！？」

「止める方法は無いのかよ！！」

アリアが驚いているなか、俺が衛星電話に怒鳴りつけると、しばらくの間の後に

「方法は無い、分かりやすく言うとＢ７３７－３５０の機体側のエンジンは燃料系の門も兼ねていて、そこを壊されると、どこを閉じても漏出は止められない」

「あ、あとどのくらい持つの？」

「長くても、１５分が限界だ、漏出のペースが早い」

「さすがは最新技術の結晶だな」

「ただのポンコツの間違いじゃ？」

俺とキンジが毒ついて羽田コントロールにグチる

「キンジ、さっき通信科から聞いたがその飛行機はそもそも相模湾上空をうろうろ飛んでたらしい。今は浦賀水道上空だ――羽田に引き返せ。距離的にそこしかない」

「それかしないだろ」

「もとからそのつもりよ」

アリアと俺が武藤に返す

「……ＡＮＡ６００便、操縦はどうしているのだ？自動操縦は決して切らないようにしろ」

「とっくにご臨終ですよ」

俺がそう言う中、アリアが目で示した計器盤の一部ではＡｕｔｏｐｉｌｏｔ（オートパイロット）と書かれたランプが赤く点滅し、点滅と同じテンポで警告音が鳴り続けていた

「という訳で着陸の方法を教えてください」

「・・・すぐに素人ができるのもでも無いのだが・・・現在、近接する航空機との緊急連絡を準備している。同型機のキャリアが長い機長を探してー」

「時間がない、同時に全ての航空機との通信を開いて欲しい。でき

るか？」

「可能だが・・・、どうするつもりだ」

「彼らに手分けさせて、着陸の方法を一度に言わせろ、武藤も手伝ってくれ」

「馬鹿かお前は、聖徳太子じゃないんだぞ」

「武藤！いまの状態のキンジならできる、だまって協力しろ！！」

アリアは驚きながらも、黙って操縦していた

雲の下――暴風雨が吹き荒れる眼前には、黒い海の向こうに東京圏の光が見えていた。

俺たちはあそこへ、突っ込むような形で飛んでいるのだ。

キンジが１１人の言葉を聞きながら、着陸の方法を理解していた

しかし、横須賀上空に差し掛かったあたりでスピーカーから野太い声がしてきた

「ＡＮＡ６００便。こちらは防衛省、航空管理局だ。」

アリアとキンジが顔を見合わせる

自衛隊にいた俺はだいだいの予想がつく

「羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ。」

「何いってやがんだ！！」

これに反応したのは６００便にいる俺たち３人では無く武藤だった

「誰だ」

「俺ぁ武藤剛気、武偵だ！！６００便は燃料漏れを起こしてる！！飛べて、あと１０分なんだよ！！代替着陸なんてどっこにもできねぇ、羽田しかねぇんだ！！」

「武藤武偵。私に怒鳴ったところでムダだぞ。これは防衛大臣による命令なのだ」

「武藤、落ち着け、防衛省なら話は俺が付ける」

「タカ！？」

「今度は誰だ？」

「防衛省なら俺のことを知らないとは言わせませんよ、隊員番号１９３８１０１、
所属、中央即応集団・特殊作戦群、アメリカ議会名誉勲章番号３４４５番、鷹山勇治３等陸尉だ」

「鷹山勇治だと！？」

防衛省の役員たちが驚きの声を上げる、

「あ、あんた・・・、勲章持ちってのは聞いていたけど、アメリカ議会名誉勲章なんて・・・」

アリアとキンジがおどいた表情で俺の顔を見る、

「戦時中に、捕虜なったアメリカ海軍の将軍を救助してもらったもんよ」

そうアリアに言いながら俺は交渉を続ける

「アメリカ議会名誉勲章ってことは、俺はアメリカ政府にも顔があるわけで、俺を殺すと日本の国際的非難は間違いないですよ？羽田からの自衛隊撤退を要求したいんですけど」

「・・・防衛大臣に掛けあってみよう」

しばらくの間の後

「防衛大臣から羽田着陸の許可が出た、自衛隊を5分以内に撤退させる」

「了解、防衛大臣に協力を感謝しますと伝えてください、通信終了」

「了解、通信終了」

「やるじゃねぇかよ！タカァ！！」

スピーカーから武藤の喜ぶ声が聞こえる

「ほんとに驚いたわよ、自衛隊にいたアンタがここまで凄い奴だって思いもしなかったわよ」

「ああ、全くだ」

アリアとキンジは驚きとちょっと尊敬の入った顔で俺を見てくる

「アリア、キンジ、まだ任務は終わっちゃいねぇ」

「分かってるわよ」

「ああ、」

この数分後、６００便は無事に羽田に着陸し、

俺達は生還したのだった

## 緊急命令２：生還せよ！&交渉せよ！！（後書き）

はい毎度おなじみ白石です

今回でやっと飛行機の中での部分が終わりました、あ～長かった

しかし、自分で書いていながらも「タカすげぇ～」とおもってしまいました（笑）

理由がこれしか思いつかなくなったんですけど（笑）↑2度目

ついでに高度１万５０００メートルからの降下を見たいという方はネイビーシールズという映画を観てください、アメリカ海軍特殊部隊のシールズが
やってるシーンがあります

さて、次回で1巻分が終了します、この後は番外編をやる予定です

では、次回もお楽しみに！！

## 守りたい人がいる　ｂｙ：陸上自衛隊（前書き）

理子との激闘の末に生還した翌日の出来事である

## 守りたい人がいる　ｂｙ：陸上自衛隊

理子との激戦の末に生還した翌日、俺の部屋で俺とキンジはゆっくりしていた

「昨日は何とかなったな、キンジ」

「ああ、お前さんがいなけりゃ東京湾の藻屑（もくず）になっていただろうな、礼を言うよ」

「別に、俺だって死にたくないからな、朝鮮戦争での英雄っていう立場を利用しただけだよ」

そんな会話をしている中、キンジは棚の上に置いていたアメリカ議会名誉勲章に気付く

「これが、飛行機の中で言ってたアメリカ議会名誉勲章？」

「ああ」

「お前さんがこれ持ってたおかげで、助かったわけだよな・・・」

「別に、俺の一人の活躍でもらったものじゃないし・・・、死んでいった戦友たちのおかげでもあるんだよ、それは・・・、そこに写真有るだろ」

「これか？」

キンジが手にとった写真は、朝鮮戦争中に小隊全員でとった写真で

ある

「全員仲良さそうだな、」

「仲良かったけど、皆死んだよ・・・」

「・・・」

「先輩たちの中には俺を守るように死んでいったのもいる、それだけじゃない、仲良かったアメリカ軍や韓国軍の戦友も死んでいった」

俺はキンジからその写真を受け取りながら、戦時中のことを思い返していた

”アリアも大きな戦いにで戦わないといけないんだよな・・・、俺とは違って一人で・・・”

俺の表情が暗くなるのを、キンジも見ていた、そして同じことを考えているような表情をしていた

その時、玄関のチャイムが鳴ったので俺が出るとそこには、アリアがいた

「中入っていい？」

「ああ、いいぜ」

「何だ、キンジもいたのね」

「居て悪いか、」

「別に、アンタの所行く手間が省けたわ」

「で、何のようだ？」

「今日はお別れを言いに来たのよ」

「お別れ？」

「あたし、今日ロンドンに帰るわ。色んなことがあったし、帰って一度態勢を立て直すことにしたの。パートナーも見つからなかった。これで実感したわ。私は独唱歌、誰も私にはついてこれない」

アリアがロンドンに帰るという事は、風のうわさで聞いていた

「俺はついてこれてるけど？、不満か？」

「ついてこれても、死んじゃったら元も子も無いわよ、キンジは最初から嫌がっていたし、あたしだって貴族よ、キンジの意見を尊重するわ」

いつもと違い元気がない、アリアの表情。

その雰囲気に俺とキンジは顔を伏せるしかなかった

わかってるよ

２４時間３６５日お祭り野郎だけど、俺と同じ辛い現実を背負ったやつなんだ。

重すぎる十字架だよな、アリアには。

一人で戦って、傷付いて・・・

これから来る『イ・ウー』の連中の相手をしなくちゃいけない。

それは辛過ぎるだろ、朝鮮戦争よりも何倍も

それに――――

アリアのお袋さんも助けていない。

いや、お袋さんを助ける前に、アリアが死んでしまうのは確実だ。

わかってるんだ！！

こんな少女が、惨めすぎる。

普段は可愛いのに見栄張って自分自身を出すことはない

乱暴者なりに可愛いところはある。

自分で助けてなんて絶対に言わない。

こんな少女一人守れなくて、何が朝鮮戦争での英雄だ！！、何がアメリカ議会名誉勲章だ！！

死んでいった戦友たちに合わせる顔があるか！？、無いに決まってんだろ！！

「だから、さよならを――」

「――待ってくれ。アリア！！」

アリアの言おうとしてた事を俺は遮る、

キンジとアリアは「え？」とした表情で俺を見る

「俺はお前のパートナーをやってやるよ、お前みたいな奴を一人で戦わしたら天国にいる戦友たちに叱られるからな」

アリアとキンジはキョトンした表情で俺を見るが、キンジは軽く、フゥと息をもらすと

「――――ったくよぉ！、タカがそんなこと言ったら俺が悪者扱いされるじゃないか、俺もアリアのパートナーになってやるぜ」

キンジも俺の部屋に来た時から何か考えていたようだ、その結論は俺と似たようなものだったようだ

アリアは少し赤くなりながらも、嬉しそうな表情をして

「――今ごろ遅いわよっ！！」

そう叫んだ後、ダッシュで近付いてきて俺に抱き着いた。

その時に見た俺の胸の中で笑うアリアには、いつもの凶暴な姿は一切無く、どこにでもいる普通の女の子のようでホントに可愛かった。

キンジはこの様子を苦笑いしながら見ていた

俺も苦笑いするしかなった、この日であった

## 守りたい人がいる　ｂｙ：陸上自衛隊（後書き）

どうも、白石です

はい！今回の話で原作１巻終了です、バンザーイ！！

しかし、記念すべき今回の話、なんか分かりづらいような、けどもう書いちまった以上「後は野となれ山となれ」じゃーい！！

次回からはしばらく番外編です、タカ、アリア、キンジの他にレキや不知火も巻き込んで特殊部隊らしいことさせようと思っています

ジャンヌファンの皆さん、しばらく気長に待ってください、夏休み中には

魔剣編書き始めますので！！

それでは、次回もお楽しみに！！

**命令：地対空ミサイル強奪の報告あり、直ちに確認せよ（前書き）**

武偵殺しとの戦いを終えたタカ達が気楽にやっているころ

正体不明の航空機墜落事故が発生する

**命令：地対空ミサイル強奪の報告あり、直ちに確認せよ**

キィイイイイイイイイン！、ドゴオオオオオオオオ！！

東京湾の沖合に一機の航空機が墜落した、それを俺やキンジ、アリアが知るはずがなかった

その頃俺は俺の部屋に来ていたキンジと俺が会話しているのを見ながら、もう一人の訪問者であるアリアはテレビを見ていた

「なあ、キンジ今さっきスゲェ音しなかったか？」

「ああ、爆音みたいなものが聞こえたな」

「何があったんだろうな？」

「俺が知るかよ」

「あんた達、少しは静かにしなさいよちっとも聞こえないじゃない」

アリアがそう言った矢先であった突然テレビの画面が切り替わった

「番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお送りします、つい先程、全日空の６７５便が東京湾沖合に墜落した模様で東京消防庁、海上保安庁、警視庁、武偵局、海上自衛隊による救助活動が行われているようです、現在生存者、死亡者の数はわかっておりません、繰り返します・・・」

テレビ画面ではアナウンサーがひたすら同じ事を繰り返して言うの

を俺たちは見ながら

「墜落事故か、エライ事になってるな・・・」

「イ・ウーの連中の仕業かしら・・・？」

「イ・ウーの仕業とは限らんだろ、アリア」

「キンジ、なんで言い切れるのよ」

「ただの機械系統の故障が原因かもしれないだろ」

「それは、そうもかもしれないけど・・・アタシは絶対イ・ウーの連中の仕業だと思うわ！！」

「お前さあ、少しは考えを複数持つようにしろよなぁ・・・」

アリアとキンジのいつも口ゲンカもこの時の俺には一切耳に入ってこなかった

”航空機が墜落？、武藤のから聞いた話だとこのタイプの飛行機はめったに故障しないはずだが・・・”

俺は前に武藤から飛行機に関して1時間近く話しを聞かされたことがあるので、少なからず飛行機に関しての知識があるわけである

「・・・・」

「どうした、タカ？」

「いや、ちょっと考えていただけだ」

「この墜落事故の事か？」

「ああ、一応」

ギャーギャー騒ぐ、アリアの頭を抑えているキンジに話しかけられ、こんな会話を交わしたその翌日であった

「鷹山！すぐに映像鑑賞室に来い！！」

シューティングレンジでいつもの射撃訓練をしていた蘭豹に呼び出されて、俺は映像鑑賞室に向かうが

「アリア、何でお前まで付いて来るの？」

「どうも、イ・ウーの匂いがするのよ」

「お袋さんの刑期を短くするためか？」

「それ以外の何に理由があるのよ！！」

そんなこと言いながら俺とアリアは映像鑑賞室に向かった、映像鑑賞室といっても映画やＤＶＤを見るための部屋では無い、大抵ここでは防犯カメラの映像やプロジェクターを見るための部屋だ

「なんだ神崎も来たのか、まあいいお前も一仕事することになるかもしれんからな」

「アリアはともかく何で呼び出しんたんですか？」

「お前たち昨日の東京湾沖合への航空機が墜落事故は知ってるな」

「「ハイ！！」」

「この事故がただの墜落事故では無いことが明らかになったわけだ」

蘭豹がそう言いながら、プロジェクターを起動させ、一枚の写真を映しだした

「この写真は、昨日墜落した飛行機の翼を引き上げた際の写真だ、ここを見ろ」

蘭豹が指をさしたの部分は俺が戦場にいたときにたまに見た撃墜されたミグ戦闘機などで見た破壊されたあとであった

「これでイ・ウーの連中の仕業っていうのは確定したわね」

アリアが若干これぞチャンスといったような表情になっていた

「つまり、先生これは墜落ではなく、撃墜されたということですね」

「そうだ、鷹山、神崎、次にこれを見ろ」

つぎにスクリーンに映し出させたのは、羽田空港の監視カメラの映像であった

その映像では墜落した飛行機が飛びだった数十秒後に謎の光が飛行機をめがけて一直線に飛んでいく様子が写っていた

「鷹山、これは歩兵用地対空ミサイルで間違いないな」

「はい！間違いありません！！」

「ちょ！、地対空ミサイルって簡単に手に入るものじゃ無いでしょ！？」

「朝鮮戦争のドッタンバッタンで行方不明になっているスティンガーミサイルとかがあるんだよ」

「自衛隊も米軍も手抜き警備ね」

「襲撃されて壊滅した輸送部隊とかから盗んだものだよ大半は！」

そんな会話をしていたら、俺とアリアは二人揃って蘭豹に頭に一発モンゴリアンチョップ食らわされた

「私語は慎め！殺すぞ！！」

「「スイマセン・・・」」

俺はともかく、アリアまでシュンとなる、そうなるのを見ながら

蘭豹は席に座り、改まってこう言い放った

「お前たちには、今からこの航空機撃墜事件の犯人逮捕の任務についてもらう」

「はい？」

「待ってました！」

俺が疑問形なのに対してアリアは待ってましたと嬉しそうな表情をしていた

「先生！こういうものは自分達の仕事なんですかね？」

「警察の奴らは国が決めた物事で簡単に動けないんだよ、そこで何でも屋の武偵がこの仕事をやることになったんだよ」

「先生、犯人の情報などありますか」

アリアがそう問いかけると

「実は情報科の奴らが、この航空機撃墜事件の犯人たちの電話での会話と思えしきものをキャッチしている」

そう言うと蘭豹は俺とアリアの前にテープレコーダーを置き、犯人たちの会話を再生した

『この前は凄かったな』

『ああ、スティンガーミサイルさえあればイ・ウーの仕事も楽だな』

『だが、同じ場所でスティンガー撃てば警察や武偵の連中がすぐにやってくるぞ』

『だから場所を変えるんだよ！こんどは倉庫島でスティンガーを受け取ったら地点２０２でまた同じようにやるぞ』

倉庫島っていうのは学園島と似たようなもので人工浮島に大量の倉庫があり、ここで貨物船などからの荷降ろし&都内への搬送が行われるが、武器・麻薬の密輸や不正入国などの犯罪の温床でもある

『いつやるんだ？』

『今度の木曜日の夜１０時だ』

『分かった倉庫島の２３番で会おう』

「木曜日って今日が水曜日だから明日じゃないですか！！」

「そうだ、だから急いで部隊を編成しろ！いいな！単位はたっぷりくれてやる！！」

「「ハイ！！」」

その後、俺とアリアは部隊編成の為に時間を費やすことになった

## 命令：地対空ミサイル強奪の報告あり、直ちに確認せよ（後書き）

どうも、白石です

今回からしばらくの番外編です、次回は倉庫で銃撃戦になります

タカやアリア、キンジの他にも不知火やレキなども動員して緊張感ある任務になりそうです

今回からしばらくのタカの装備はＭＰ５ＳＤ６やサイレンサー付きのＦＮハイパワーになりますので

それでは、次回もお楽しみに！！

## 小隊編成と戦友との再会（前書き）

スティンガーミサイルによる、航空機撃墜事件が発生し、タカとアリアが
小隊編成に時間を割いていた時の話である

今回はタカの第二次朝鮮戦争中の話になります

※今回からシェリーカさんの作品の「緋弾のアリア　バレットダンサーズ」の主人公の　矢崎影明【やざきかげあき】と　服部つかさが出てきますので予習として
「緋弾のアリア　バレットダンサーズ」を読んでおくことを推奨します

## 小隊編成と戦友との再会

蘭豹から小隊を編成するように言われたが、蘭豹からの要求は最低でも必ず7人はいることであった

確かに、スティンガーミサイルを持っている時点で、相手が楽に片付く相手では無い事は確実だ

そんなことを思いながら、俺はメンバー探しを兼ねて装備科に先ほど大至急で頼んだ改造ＦＮハイパワーを取りに向かっていった

「平賀ー！ハイパワーをサイレンサー取り付け可能に出来たか？」

「はーいなのだ！」

そう言うと、サイレンサーのついたＦＮハイパワー拳銃をもって平賀源内の子孫である、平賀文が俺に向かって走ってくる

「ご要望通り、ＦＮハイパワーのバレルをサイレンサー対応モデルに変えたなのだ」

平賀からサイレンサーのついたハイパワーを受け取り俺は一言

「試していいか？」

「どうぞなのだ～」

俺は装備科の近くにあるシューティングレンジでサイレンサーのついたハイパワーを構えて

パシュ！パシュ！パシュ！と撃っていく

「上出来だ、平賀」

「どうも、どうも、なのだ」

撃ちぬかれたターゲットを見ながら俺は平賀に話しかけながら財布の中から束になった万札をポンッと渡す

「毎度～なのだ！」

FNハイパワーを腰のホルスターに入れて、またメンバー探しをしようとしたその時であった

「タカ！7人集まったわよ！！」

アリアが走りながらやって来る

「お、集まったのか」

「まあ、あたしの知ってる同じもう一人の特殊部隊出身の奴とそいつのパートナーよ」

「あ、俺以外にも特殊部隊出身がいるのか？名前は？」

「矢崎影明よ」

「矢崎影明・・・？、！！、あいつ生きていたのかよ！？」

「何？第二次朝鮮戦争で一緒に作戦したことでもあるの？」

「ああ！どこにいる！！」

「作戦会議室よ」

アリアがそう言うと、俺とアリアは作戦会議室に向かっていった

「鷹山！？」

「影明！お前生きていたのかよ！！」

作戦会議室に入るなり、俺と影明は手をパンッと合わせて笑顔で笑っていた

アリアをのぞいてこの部屋にいるキンジに不知火などは「？」となっている

「タカ、お前こいつといわゆる”戦友”？」

「そうだ、キンジ」

「へー、いっしょに戦ったんだ、鷹山くんと矢崎くん」

不知火がそう言ってくるなか、レキの側にいる女子に気がついた

「あの～影明と鷹山さんが戦友ってどういうことなんですか？」

「影明、こいつ誰？」

「ああ、俺のパートナーの服部つかさだ」

「なるほど、鷹山勇治だ、よろしく頼む」

「どうも、鷹山さん、つかさと読んでください」

「ああ、俺は鷹山でもいいし、タカでもいいよ」

「で、影明と鷹山さんが戦友ってどういうことなんですか？」

「俺も聞きたい」

つかさとキンジに聞かれたので俺と影明は椅子に腰掛けながら昔話を始めた

「こいつとの出会いは韓国軍のトングスリ基地でね・・・」

第二次朝鮮戦争中

俺は連合軍最前線拠点の一つであるトングスリ基地にいた

トングスリ基地は韓国軍、アメリカ軍、自衛隊の最終補給基地の一つであり北朝鮮軍の前線との距離は

約１０キロあるか無いかの目の前であった

特殊作戦群は北朝鮮への侵攻作戦の為にここで待機するように命じられていたのであった

「グッドモーニングコリア！！」

朝っぱらから基地内で流れている爆音に匹敵するような戦意高揚の為に流されているラジオからのＤＪの声で俺は目が覚める

「ああ、もう朝ね・・・」

俺はベッド替わりにしていた９０式戦車や１０式戦車の砲弾入れの上で起き上がる

「起きたか鷹山」

「おはようございます、沖田副隊長」

俺は近くにいた副隊長に挨拶しながら、寝ている間にずれたヘルメットをかぶり直し米軍から支給されたＭ４カービンを肩にかけて、ＵＳＰ拳銃のマガジンを確認する

「おい、もう飯だぞ鷹山、沖田」

「分かってるよ、鳩村」

「おはようございます、鳩村先輩」

俺と副隊長に話しかけてきたのは鳩村二等陸尉、小隊の通信兵である

俺と鳩村二等陸尉と沖田副隊長は朝飯にするため、炊事班のテントに向かう

今日の朝飯はご飯と米軍から支給された乾燥タマゴで作った玉子焼きとポーク缶に
缶詰のたくあんである

昨日も同じメニューだったが戦場では文句が言えない、飯が食えるだけありがたいのだ

飯を食った後は訓練である

北朝鮮軍の掘った進行用トンネルでの戦闘に備えての訓練である、
いわゆるトンネルラットと言われる訓練で訓練のために掘られたトンネルの中を
ライト＆サイレンサー付きのＵＳＰで進み出てくるターゲットを倒す訓練である

ちなみに何でサイレンサーをつけるのかというと、真っ暗なトンネルの中で銃を撃つと銃の発砲光で
一瞬だが失明状態になるのでそれを防ぐためである

バンッ！パシュ！バンッ！パシュ！といつものように訓練をしてトンネルから出てきたところであった

「鷹山！司令部の方にいって大門隊長とＴＦ１４１のメンバーを連れてこい！！」

「ＴＦ１４１って例の多国籍特殊部隊のことでしたっけ？」

「ああ、そうだ、今度俺達との共同作戦を行うことになっている、だからその前の視察だそうだ」

「なるほど、どこの司令部ですか？」

「第２司令部だ、早いとこ行って来い」

副隊長にそう言われて俺は、高機動車に乗り込み司令部に向けて走らせた

途中で韓国軍のトラックや米軍のストライカー装甲車、自衛隊の１０式戦車とすれ違いながら俺は司令部に到着した

「鷹山勇治３等陸尉ただいま到着しました！」

「ご苦労だ、鷹山」

「ほう、お前さんの部下の一人か若いな・・・」

「ジョーカーと同じぐらいだな」

司令部に出頭して隊長のいるテントに顔を出したらそこにいたのは、隊長とモヒカンヘッドの軍人と
隊口元を骸骨のバラクラバで覆いサングラスを掛けた隊員と、俺と同い年ぐらいの兵士だった

「こちらはＴＦ１４１の隊長の、ソープ・マクダヴィッュ大尉だ」

「ソープだよろしく頼む」

「鷹山勇治３等陸尉です、こちらこそよろしくお願いします」

俺はソープ大尉と握手を交わす

「ほんとに若いな、ジョーカーとかわりないぞ、ジョーカーこっちに来い」

そう言ってやってきた、ジョーカーと言う奴を見てみると、日本人であった

「お前、日本人なのか？」

「ああ、そうだ本名は矢崎影明だ」

「一体どうしてＴＦ１４１に？」

「ああ、それは・・・」

「そんなことはいいから、お前さんたちの陣地に連れていってくれ」

「誰ですか？」

「ゴースト中尉だ、よろしく！」

「どうも、鷹山勇治３等陸尉です」

そんな会話を交わした後、隊長とＴＦ１４１のメンバーを乗せて特殊作戦群の陣地に向かっていた時であった

ヒューーン！ズドオオオオオン！！

激しい爆音と同時に俺たちの乗っていた高機動車がひっくり返って

いた

俺は隊長とソープ大尉によって運転席から引きずり出された

「ありがとうございます、大尉」

「礼はいい、今は敵を迎撃するぞ！！」

「「「了解！！！」」」

大門隊長を除く、メンバーがソープ大尉の命令に答えた

前線の方を見ると、北朝鮮軍の歩兵部隊がアリのようにうじゃうじゃと突撃してきた

俺たちは近くの塹壕に入ると同時に北朝鮮軍に向けてひたすらＭ４カービンやミニミ軽機関銃を撃ちまくって迎撃する

ダダダダダダダ！！ズドオオオオオ！！

”ｍｏｖｅ！ｍｏｖｅ！ｍｏｖｅ！”

銃声や日本語や韓国語、英語などの命令が飛び交う中

銃のバレルが暑くなりそれを冷やす余裕が無いないなか特殊作戦群の陣地目指して塹壕内を走っていた

その時であった

先導していた俺の上から北朝鮮兵が殴りかかってきたのであった！

”将軍様の為に！！”

朝鮮語でそう言いながら、俺の腹にＡＫ－４７のストックが飛んで来る、俺はこれで殴れて地面に背中から倒れ込む

ＡＫ－４７を構えた北朝鮮兵が俺を撃とうとしたその時であった

ズダーン！と銃声が後ろから聞こえて目の前の北朝鮮兵が倒れこんだ

「借りが出来たな鷹山！」

「影明か、礼を言うよ！！」

Ｎ４を構えた矢崎の手を借りて立ち上がる

「そんな事やって暇があるんだったら走れ！！」

ゴースト中尉にそう言われて俺と矢崎は特殊作戦群陣地に向け砲弾、降りしきる中走っていた

ちなみこの時、打ち込まれた砲弾の数は１分間に１００発以上だったと言われる、中国軍の支援をうけている今の北朝鮮軍だから出来ることである

そんな事を気にしていられる状況ではない中、何とかして俺たちは特殊作戦群の陣地に到着した

「隊長！ご無事でしたか！！」

「それより状況はどうなっている沖田！！」

「北朝鮮軍との距離は約５０メートルもありません！！」
「なんだと！？」
「航空支援はどうなっている！？」
「あと１０分後にＦ－１５やＡ－１０対地攻撃機が到着します」
「それまで持ちこたえろ！！」
「鷹山！Ｍ２ブローニングに付け！撃ちまくれ！！」
「了解！！」
「ジョーカーお前も行け！！」
「はいっ！！」
隊長とソープ大尉にそう言われ俺と影明はＭ２ブローニングの銃座に付き、
ドドドドドドドドドドドド！！とひたすら撃ちまくる
５０口径のブローニングＭ２に撃たれた北朝鮮兵が次々と肉片と化していく
「弾が切れた影明、リロードを頼む」
「分かった！！」

Ｎ４を撃っていた影明がブローニングの弾倉を交換しようとした矢先であった

「影明、ＲＰＧだ！！」

そう言った矢先にドゴオオオオオオオオオオン！とブローニングＭ２ごと俺たちのいる場所が吹っ飛ぶ

俺と影明は３メートルほどふっ飛ばせれた

「影明大丈夫か！？」

「くそったれ・・・、肩が・・・」

「しっかりしろ、先輩やゴースト中尉たちと合流するぞ！！」

俺は影明をおぶってＵＳＰで塹壕内に入ってきた北朝鮮兵を撃ちながら先輩たちと合流した

「先輩！ゴースト中尉！！」

「鷹山！大丈夫か！？」

「俺は大丈夫ですか、ジョーカーが肩をやられました！！」

「衛生兵！急いできてくれ！！」

衛生兵が影明の肩を治療している中、俺たちはひたすら銃を北朝鮮兵に向けて撃っていた

「ゴースト中尉！弾をください！！」

「大事に使えよ！！」

俺はゴースト中尉からマガジンを受け取り撃ちまくる

その時、鳩村二等陸尉の無線機から連絡が入った

『こちら第３連合空軍航空隊、爆撃を開始する、近いぞ！！、頭を下げろ！！』

ヒューンというと音に気づき上を見上げると、Ｆ－１５にＡ－１０対地攻撃機が来ていた

「全員伏せろ！！」

副隊長の叫び声と同時に塹壕内にいる全員が地面に伏せた

そして数秒後

ズドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！

爆音と同時に地面が大きく揺れ、北朝鮮兵の悲鳴が聞こえ、砂煙や砂が俺たちに降りかかってきた

『こちら航空隊、爆撃終了、良い一日を』

俺たちが顔を上げると、目の前にいた大量の北朝鮮兵がいなくなっていた、激しい爆撃のあまり

死体すら残っていないのである

「後続の北朝鮮軍の撤退を確認、戦闘終了、繰り返す、戦闘終了」

「「「ウオオオオオオオオ！！！」」」

歓喜の声が上がる、

「やったなぁ！お前たち！！」

ゴースト中尉に俺は抱きしめられる、俺は若干引いてしまう

その後、ゴースト中尉と影明のところに行った

「ジョーカー、大丈夫か？」

「大丈夫です、軽いけがです」

「借りは返したぜ、ジョーカー」

「影明でいいよ、鷹山」

その時、別の場所で指揮を取っていた隊長とソープ大尉がやってきた

「お前たちよくやったぞ」

「今後の共同作戦でも期待するぞ、特殊作戦群の諸君」

俺たちは敬礼した

「・・・まあ、こんかかんだで色々あってね」
「随分、派手なことしていたのねアンタ達」
「いい話じゃない、神崎さん」
「まあ、そうね不知火」
「けど、これが感想の再会とは言えない状況だな」
「ああ、スティンガーミサイルを何とかしないとな・・・」
「神崎、鷹山、小隊編成は終わったか？」
蘭豹が作戦会議室に入ってくる
「「はい！！」」
「では、作戦会議を始めるぞ！！」

## 小隊編成と戦友との再会（後書き）

どうも、白石です

今回はちょいと予定を変更してシェリーカさんの作品の主人公、矢崎影明くんと
タカとの朝鮮戦争従軍記になりました

キャラを借りた以上、少なからず主人公との絡みがいるかなと思って書いた今回の話です

次回からは、倉庫島でのドンパチを始めますので、ご期待ください！！

それでは次回もお楽しみに！！

## 命令：作戦を開始せよ！！（前書き）

スティンガーミサイルによる航空機撃墜事件において
次に予定されている、スティンガーミサイルによる攻撃を防ぐため
にタカとアリアはキンジを始め、不知火、レキの他に
タカの第二次朝鮮戦争での戦友、矢崎影明とそのパートナーの服部
つかさを含めた
小隊編成をする、
そして今回作戦が開始された！！

**命令：作戦を開始せよ！！**

スティンガーミサイルを確保するべく俺たちはC装備で出動していた

「よし、作戦前の最後の確認だ、いいな！」

倉庫島に向かうヘリの中で俺はアリアやキンジ達に対して、作戦会議室で決めた作戦内容の確認をしていた、ちなみ、俺が一番こういうものでは経験者ということもあり、蘭豹によって俺がこの作戦の指揮官を任されたのである

「敵の数は約１５人程度、まずはじめに俺とアリア、影明がエアボーンで降りて倉庫島内の発電施設を破壊して電源を落とす、電源が落ちたらキンジ達はヘリからラベリング降下しろ」

「分かった」

キンジからの返事を聞きながら、俺は確認を続ける

「ヘリからラベリングした後は速やかに２３番倉庫に向かい銃撃を加えて逃亡を阻止しろ！俺たちも合流して一気に制圧する！！相手は防弾チョッキを付けている防弾チョッキに撃ちこんで気絶か悶絶させろ！」

「了解！！」

「レキは２４番倉庫から狙撃支援と敵の増援が来ないかの監視だ、もし増援が来るようであれば速やかに２４番倉庫から離れて俺たちと合流しろ、いいな！」

「・・・はい」

レキが一言そう言って、俺は最後の一言を言う

「よし、最後に一言言う、全員生きて帰るぞ！いいな！！」

「「「了解！！」」」

その数分後、

「降下地点だアリア、影明」

「分かってるわよ」

「あいよ」

俺とアリア、影明はパラシュートをつけて、倉庫島の発電施設近くに降下した

夜間降下の経験がある俺と影明はともかく、アリアも何とか降下した

「よし、発電施設を破壊するぞ！！」

俺はヘッケラー&コッホ社製の傑作短機関銃のＭＰ５シリーズの一つ、サイレンサー付きのＭＰ５ＳＤ６を手に取る、このＭＰ５ＳＤ６は特殊作戦群にいた頃から何度も朝鮮戦争の戦場で８９式、Ｍ４カービンと共に使った銃なので使い慣れている

「アリア、バックアップを頼む」

「分かったわ！」

「影明、先導してくれ」

「了解！」

アリアはガバメントを二丁拳銃で構え、影明はＭ４カービンクローンの一つであるＮ４ＣＱＢモデルを構えて前進を開始した

前進を開始して９０メートルほど前進した時、影明が停止の合図を出した

「どうした影明？」

「前方に敵２名だ」

「よし、静かにさせるぞ！」

「あたしはどっちの方を片付けるの？」

「アンタはここで待機」

「なんで！？」

「大きい声出すな！！」

「お前もでかいよ」

なんて言いながら、何とかバレずに済んだ

「よし俺が左のＧ３Ａ３を持ったやつを仕留める、影明は右のＡＫ－４７を持ったやつだ、俺から仕掛ける」

「了解」

俺と影明がこう会話しているの見ながらアリアはふくれっ面でガバメントを構えて後方を見張っていた

「暇だな」

「ああ、まったくだ」

「よう！大将！！」

「ん？」

次の瞬間、Ｇ３Ａ３を持ったイ・ウーの戦闘員の顔に俺のグーパンチが飛んできた

「グアッ！」

これに気付いた、右にいる戦闘員が俺にＡＫ－４７を向けようとしたその時、影明の蹴りが顔面に一発飛んでくる

「グオッ！」

これで二人を戦闘不能にして手足を縛って確保しようとしたその時、俺の目の前にＭ１６Ａ１をもった戦闘員が来て俺と目が合う

これはさすがにヤバイ！と思った矢先にアリアが横から顔面に回し蹴りを一発お見舞いした

「タカも気が抜けてるわよ！！」

「後でももまんおごってやるよ」

そう会話しながら、アリアが戦闘員を手足を縛って拘束した後、俺たちは発電施設についた後、金切りばさみでフェンスに穴を開け中に突入した

「影明、小型特殊爆薬をくれ」

「ほい」

この爆薬は人質救出作戦などでドアを破壊して突入するための爆薬で爆音が小さくなっているが
破壊力は十分なほどある

俺は影明から爆薬を受け取り、発電機の近くに投げる

そして少し離れたところに避難して、爆破させる

ドシュン！！と小さな爆発音と同時に発電機が破壊され、倉庫島の電気が一勢に消える

「よし、キンジ、降下開始だ！」

『了解！行くぞ！！』

無線機でキンジたちの降下開始を要請した後、ヘリのローターの音でキンジたちが降下したのを確認しながら俺たちはキンジたちと合流するために前進した

「鷹山！アリア！隠れろ！！」

また影明が何か発見したらしく俺たちは倉庫の影に隠れる

俺たちの存在に気づかないイ・ウーの戦闘員４人が通過していく

「後ろから強襲するぞ、３，２，１で行くぞ」

「分かったわ」

「了解」

「３．２．１！」

後ろから俺たちは一勢に銃撃を加える

タタタタタタタッ！

バギュン！バギュン！

ズダダダダダ！！

突然の後ろからの強襲に対応できなかったイ・ウーの戦闘員は次々に悶絶しながら倒れていく

倒れた戦闘員４人を確保していたときであった

ズダダダダダダ！！と２３番倉庫の方から激しい銃撃の音が聞こえたので

俺たちは急いでキンジたちと合流する

キンジたちと合流するために２３番倉庫に来たときにはかなりの銃撃戦になっていた

俺たちは激しい銃撃をかいくぐりながら、フォークリフトを盾にしてＨＫ－４１６を撃っているつかさに話しかけた

「つかさ！状況はどうなっている！？」

「はっきり言っていいのじゃないわよ！、敵の半分はここの中にいるわ！！」

そう言っている矢先にも銃撃がフォークリフトにガンガン当たっている

「レキは！？」

「２４番倉庫から狙撃しているわ！！」

つかさにそう言われて２４番倉庫からドラグノフを撃っているレキに無線通信をする

「レキ！敵の指揮官は見えるか！？」

『ＸＭ－１７７をもった戦闘員が一人後方で指揮を取っています、

今はキンジさん達の戦闘を支援しています』

「狙撃できるか！？」

『隠れているようですが、跳弾させて倒します』

「分かった！俺が合図したら指揮官を狙撃しろ！！」

『分かりました』

レキとの通信を終えた後、俺はキンジと不知火に無線連絡を取る

「キンジ！不知火！聞こえるか！？、聞こえたら返事しろ！！」

『・・・・』

「クソッタレ！聞いちゃいねぇ！、つかさ！！キンジと不知火はどこにいる！？」

「前のトレーラーのところにいるわ！」

「よし！アリア、影明、つかさ、聞け！！今から作戦を伝える、俺とアリア、影明が倉庫の後方に回りこむ、レキが敵の指揮官を狙撃したら俺たちが後方から突撃する！お前たちも突撃しろ！！」

「「「了解！！」」」

「分かったなら、次だ！キンジたちにも同じ事を説明しに行くから援護しろ！！」

「アイツらの無線機はどうしたのよ！！」

「戦闘に夢中になっていて気がつかねぇんだよ！！」

そう言っている矢先にも大量の銃撃が俺たちに向かって飛んでくる

「３．２．１で俺が行くから援護しろ！！」

「分かった！！」

「行くぞ！、３．２．１！！」

俺はフォークリフトから飛び出した、すぐ後ろからつかさやアリア達が銃撃を倉庫内に向けて加える

それでも、大量の銃弾が俺をめがけて飛んでくる、俺はＭＰ５を腰撃ちで撃ちながらキンジたちのいるところを目指して走る、ＭＰ５が弾切れした後にＦＮハイパワーを取り出してこれも撃ちまくりながらキンジたちと合流する

「キンジ！不知火！！」

「どうしたタカ！？」

「作戦を伝える！、俺とアリア、影明が回りこんだ後、レキが指揮官を狙撃する！その後俺たちが後方から突入する！、お前たち二人もつかさと一緒に突撃しろ！！」

「分かった！」

「分かったよ、鷹山くん！！」

「よし、アリアたちと合流するから援護しろ！！」

そして、俺は援護受けながら銃撃の中をくぐり抜けてアリアたちと合流した後、
倉庫の後方に回りこんだ

「よし！レキ位置につたぞ！狙撃しろ！！」

『了解』

レキはいつもの事を言い出した

『――――私は1発の銃弾』

『銃弾は人の心を持たない、故に、なにも考えない――――』

『――――ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

パァン！カァン！とドラグノフを銃声がなったの続いてコンテナにドラグノフの銃弾があたり跳ね返る
音がなりそして、敵の指揮官が地面に倒れる

「突入だ！閃光手榴弾を投げ込め！！」

俺が閃光手榴弾を後ろのドアから投げ込むのに続くようにアリアと影明も投げ入れる

ドン！ドン！ドン！

３発の爆音が聞こえた後、俺たちはドアを蹴り開けて一勢に後ろから銃撃を加える

タタタタタタタタタタタタ！！

バキュン！バギュン！バギュン！バギュン！

ズダダダダダ！！

俺のＭＰ５、アリアのガバメント、影明のＮ４が一勢に火を噴くと同時に前の方に入るキンジ、不知火、つかさが正面から突撃してくる、レキはこの突撃を後方からの狙撃支援でドラグノフを発砲する

倉庫内で一番激しい銃撃が繰り広げられる

一人また一人と、イ・ウーの戦闘員が倒れていき、

最後の一人が手を上げて

「降伏する！撃たないでくれ！！」

「武器を捨てろ！！」

戦闘員がＭＡＣ１０を捨てたのを確認して確保する

「全員、安全か確認しろ！！」

「こちらは問題ない」

「こっちも問題ないわよ」

「問題なし」

全員から安全が確保されたことを聞いたあと、残りのメンバーが逮捕した戦闘員を拘束している間

俺とアリアはスティンガーミサイルの捜索を始めた

「ここです」

「アリア、開けてみろ！」

ＦＮハイパワーを戦闘員の頭に突きつけながら俺はアリアに開けさせる、武偵なので意味が無いような気がするが威圧程度にはなる

「間違いないわよ、スティンガーミサイルよ」

「本部につないでくれ、スティンガーミサイルを確保したと」

「了解、タカ」

これで任務終了と思った矢先であった

『鷹山さん、マズイことになりました』

「何があったレキ？」

『増援です』

「何！？どのくらいだ！？」

『１３人ですが、ＲＰＧ７などを所有してます』

「クソッタレ！アリア！本部に応援を要請しろ！！」

「分かった！」

「全員戦闘態勢、迎撃するぞ！！」

## 命令：作戦を開始せよ！！（後書き）

どうも、白石です

はい番外編ですが、スティンガーミサイルを確保したのはいいんですが、増援が
来ちゃいました！タカたちは一体どうなってしまうのでしょうか！？

ていうか・・・、ＦＰＳでよくあるシチュエーションですよね、ある地点を確保、
敵の反撃、それを迎撃、ＣＯＤやメダルオブオナーでよくありますよね

何にせよ、次回で番外編は終了！次回もお楽しみに！！

**命令：死守せよ！！（前書き）**

激戦の末にスティンガーミサイルを確保した、タカとアリア達であったが

まさかのイ・ウーの増援の為に再び激戦を余儀なくされる

## 命令：死守せよ！！

レキからの報告で俺はレキの言っていた方向を見てみると、確かにさっき制圧したイ・ウーの戦闘員より重武装な戦闘員たちがこっちに向かってくるのが見えた

「レキ！お前の方から敵の装備などは見えるか？」

『敵の装備などは、ＡＫ－７４やＭ１６Ａ１の他に先程も言いましたが、ＲＰＧ７などです』

「ボディアーマーは付けているか？」

『全員付けているのを確認しました』

「よし分かった！場所を変えて狙撃しろ！、もしヤバイことになったら連絡しろ援護する！！」

『了解しました』

「全員、迎撃するぞ！キンジ、つかさ、影明は敵の装備を全てかき集めろ！！、俺とアリアと不知火は逮捕したヤツらをコンテナにぶち込んでおく！！」

「「「了解！！」」」

キンジ達が俺の言った通り敵から武器を集めて一箇所にまとめる、何せさっきの戦闘で予想以上に弾丸を消費したので敵さんの装備を使わないと弾丸不足で全滅するのは確実だ

俺たちは逮捕した犯人たちを、急いでコンテナにぶち込んで外から鍵を掛けておく、これで逃亡は不可能だし戦闘に巻きこまれて死亡する可能性が減るからである、

なお自殺防止のためにさっき確保した犯人の口にはタオルで口を塞ぎ、靴や上着を脱がしておく

これは朝鮮戦争時代に確保した捕虜が自殺しないためにやった方法である

犯人をコンテナにぶち込んだ後、俺たちはキンジたちと合流した

「キンジ、つかさ、影明！敵の装備で同じ銃があるならマガジンを全部使え！」

「言われなくてもそうするわよ！」

つかさが敵のＭ１６Ａ１からマガジンを取って、自分のマガジンポーチの中に入れていたキンジや景明も同じようにしていた

その時、ボシュウ！ヒューン！ズドオオオオオ！！

俺達のいる近くの壁に物凄い爆音と同時に衝撃が飛んで来る

「アイツらＲＰＧまで持ってきているのかよ！！」

キンジが驚きながら敵のベレッタからマガジンを抜き取り自分のベレッタに装填している

「とんでもないことになったわよ！！」

アリアがそう言った矢先には俺達のいる倉庫中に増援の戦闘員達が一勢に銃撃をはじめてきた

ズガガガガガガガガ！！銃声と同時に倉庫の中にあるありとあらゆる物が飛び跳ねる

俺たちもこれに反撃する

タタタタタタタタタッ！、ズダァン！ズダァン！、ズドドドドドドドド！！

アリアのガバメントや不知火のｍｋ２３、キンジのベレッタ、俺のＭＰ５などがひたすら銃声を上げて吠える

しかし、さっきの戦闘員たちとは違い随分訓練がなされているようで俺たちが撃てばしっかりと隠れて

反撃してくる、弾をばら蒔くような戦い方をしていた戦闘員達とは全く別物だ

「これじゃ埒があかないわよ！！」

アリアがそう言った時、俺の無線機に連絡が入ってきた

「はい！鷹山です！！」

『鷹山！状況はどうなっている！！』

俺は無線機に話しかけながら、ＦＮハイパワーを撃ちまくる

「最悪の状況です！弾丸も不足気味です！大至急、強襲科の増援を！！」

『分かった！すぐに送る！それまで最低でも３０分持ちこたえろ！！』

「了解しました！！」

「３０分！？自殺行為だろ！！」

「文句抜かすな！キンジ！今は目の前の敵を制圧することだけ考えろ！！」

「くそ！気楽にいいやがって！！」

「タカに文句言ったところでどうにもならないわよキンジ！」

アリアにそう言われてキンジもリロードしたベレッタを撃つ

その時、無線機に連絡が入ってきた

『レキです、敵に発見されました、援護を頼みます』

レキからの連絡を受け、俺は２４番倉庫の方を見た、そこには銃撃で穴だらけになった壁に隠れているレキの姿があった

俺は急いでマガジンを確認するが、ＭＰ５のマガジンは既に撃ち尽くしており、ＦＮハイパワーのマガジンも残り２つであった、

俺はＭＰ５をおいて敵からかき集めた武器の中から、スコーピオンサブマシンガンとＭＡＣ１０を持って

つかさと影明に叫ぶ、

「レキの援護に向かう！つかさ、影明、援護しろ！！」

「分かった！」

「了解しました！」

「アリアたちは真正面の敵を引きつけろ！」

「分かったわ！」

「了解した！タカ！！」

「了解！鷹山くん！！」

「行くぞ！！」

俺はレキを援護するために遮蔽物から飛び出した、すぐ後ろから影明のＮ４、つかさのＨＫ－４１６が火を吹いて敵を威圧する、俺は銃弾飛び交う中、走ってレキの入る場所に向かう

「レキ！状況は！？」

「ＡＫ－４７を持った３人組がいます」

「わかった援護するから、俺が合図したら走れ！、つかさ！影明！

レキがそっちに向かう援護だ！！」

『『了解！！』』

俺は影明たちにそう言いながら、ＭＡＣとスコーピオンのセレクターをフルオートにする

「よし、いいなレキ！」

レキがコクリと頷く

「３，２，１、走れ！！」

そう言うと、レキはドラグノフを抱えて２３番倉庫を目指して走りだした

スダダダダダダダダダダ！！、ズバババババババババババ！！

俺は右手に持ったＭＡＣ１０と左手に持ったスコーピオンを撃ちながらレキのあとに続く

つかさと影明も俺たちが来るのを援護するためにうちまくる、つかさはＨＫ－４１６が切れすると

シグ社製のガバメントタイプのＧＳＲをズダァン！ズダァン！と二丁拳銃で撃ちまくる

俺は途中で弾切れしたスコーピオンとＭＡＣを投げ捨て、ＦＮハイパワーと敵から奪ったＭ８４で二丁拳銃して

レキのあとに付いていった

銃弾降りしきる中、なんとかレキの援護に成功した

「レキ！２階部分にいって狙撃支援してくれ！！」

「了解」

そう言うと、レキは階段を上がり倉庫の２階に走っていた

「俺たちはキンジたちと合流する！！」

「「了解！！」」

俺たちはマガジンをリロードして正面の戦闘員と戦闘しているキンジたちと合流した

「不知火！状況は！？」

「神崎さんが、２名倒した！！」

不知火がそう言ったので、遮蔽物からのぞいでみると、至近距離でボディアーマーにガバメントを食らった戦闘員が悶絶していた

「アリア、よくやった！！」

「褒めるのわ後にして頂戴！！」

俺は弾切れしたＭＰ５の替りにＧ３Ａ３を手に取って撃ちまくる

しばらく、アリア、キンジ、不知火、つかさ、影明たちと弾幕を張

っていたときであった

カラン！カラン！ボシュウウウウ！

「煙幕弾だ！やつら突撃してくるぞ！！」

キンジがそういうので、俺は敵から奪った熱源装置をつけてＧ３を撃ちながら叫ぶ

「お前たちは後退して、うしろの遮蔽物から煙幕の中から出てきたやつを撃って拘束しろ！」

「タカはどうするのよ！」

「俺がお前たちの後退を援護する！」

「バカ！死にたいの！？」

「いいから行け！！」

「行くぞアリア！」

影明がアリアを引っ張って後退させる

俺は暗視装置で煙幕の中を突っ込んでくる戦闘員のボディアーマーに７．６２ＮＡＴＯ弾を撃ちこんで気絶させる

俺に気づかない、戦闘員はそのまま通りすぎてキンジたちによって撃たれて悶絶する

これを繰り返して、５人の戦闘員を悶絶させたその時であった
俺が同じように相手を定めたさきにＲＰＧ７を持った奴が俺を撃ってきたのであった
俺は全力で走った、その後ろでズガアアアアアアアアン！！とＲＰＧ弾頭が炸裂する
「ウワァ！！」
俺は爆風でふっ飛ばせれた
「マズイ！レキ！タカを援護しろ！！」
『了解』
パァン！
キンジがレキに伝えて、ＲＰＧ７を持った奴を狙撃していたことなど知らず俺はＭ８４を撃ちまくりながら
這いつくばってアリアたちと合流しようとしていた、
その時、遮蔽物から影明とアリアが出てきて、俺の装備を掴みながら引きずってくれた
「鷹山！死ぬんじゃねえぞ！！」
「このバカ！あんたが一番死にかけてるじゃないの！！」

「悪りぃ」

俺はアリアと影明に引きずられて遮蔽物に隠れる

「不知火！治療してやれ！！」

「どこをやられたの鷹山くん！」

「左肩だ」

不知火が俺の方を手当している中、影明たちはひたすら撃ちまくっていた

その時、無線機から連絡が入ってきた

『お前たち！もう現場近くに来ているが、上空からではお前たちがどこにいるか確認できない！発煙筒を上げて教えてくれ！すぐに降下する！！』

蘭豹の声がここまで頼もしく聞こえたのははじめてであった

「了解！直ちに緑の発煙筒とあげます！！」

俺は無線機から聞いたことを実行するために、不知火に話しかけた

「不知火、発煙筒をくれ！」

「無理だよ、鷹山くん！死んでしまうよ！！」

「どうせ、誰がやっても同じ結果になるかもしれないだろ！俺がや

る！戦時中に何度もやったよ！」
俺と不知火の会話を聞いた、影明とアリアが話しかけてきた
「不知火、俺が援護する！発煙筒を渡してやれ！」
「あたしも援護するわ！」
不知火はしぶしぶ俺に発煙筒を渡す
それを見たキンジとつかさが
「死ぬんじゃねえぞタカ！」
「鷹山さん、無事に帰ってきてくださいね！」
「分かってるよ、不知火はキンジたちと一緒に援護してくれ」
「了解」
「3，2，1で行くぞ！」
キンジたちがマガジンをリロードして、戦闘員に狙いを定める
「3，2，1、行くぞ！」
俺が発煙筒とFNハイパワーを持って遮蔽物から飛び出すと同時に
アリアと影明も銃を撃ちまくりながら
後を付いて来る

スガガガガガガガガ！！とＡＫ－４７やＭ１６が一勢に俺たち３人を狙ってくるなか

俺は走りながら、発煙筒を点火させた、

ボシュウウウウ！！と緑色の光を放ちながら、煙が上がる

バン！バン！、スダダダダダダ！！とアリアと影明が援護する中、俺は階段を上がり

倉庫の屋上から発煙筒を振る

『お前たちの場所を確認した！すぐに降下する！！』

無線機からそう連絡が入ると同時に、ヘリがやってきて蘭豹と強襲科の生徒たちが降下してきて

一気に犯人たちを制圧していった

「これで終わったか・・・」

俺は発煙筒を投げ捨てて、座り込んだ

その後、アリアと影明の肩を借りて、キンジたちと合流した

「無事だったか！タカ！」

「ああ、何とかね・・・」

キンジやつかさ、不知火が俺の顔を見て安堵の表情を見せていた

そこへ蘭豹がやって来た、

「お前たちよくやったな、褒めてやるぞ」

「どうも・・・」

逮捕した戦闘員を警察に引き渡す作業を応援の強襲科がやっている中、俺達は蘭豹からのお褒めのお言葉を聞いていた

「押収した武器は、どうした？」

「ああ、あそこととこれです」

俺は使っているうちに愛着の湧いたＭ８４を蘭豹に渡そうとした

その時、影明が俺の手をつかんだ、

「愛着湧いちゃってんだろ、このＭ８４に」

「まぁね」

「よく分かるわね、さすが戦友と言ったところかしら」

アリアがそういう中、蘭豹はこう言った

「愛着の湧いたなら、もらっていけ、普段は許さんが今回ばかりは多めに見てやる」

「あ、ありがとうございます」

敵の押収品は基本、引き渡すのが条件である

「じゃあ、任務終了の合図をかけろ鷹山」

蘭豹にそう言われて、俺はキンジたちに話しかける

「１１時５４分、戦闘終了を宣言する！！」

こうして、このスティンガーミサイル奪回作戦は幕を閉じた

## 命令：死守せよ！！（後書き）

はい、どうも、白石です

今回で番外編＆コラボ編は終了となります、次回からは魔剣編になります

ジャンヌファンの皆様おまたせしました！、ジャンヌとタカの過去の対決など

今回で番外編よりも盛り上がるようにしたいと思います

しかし、今回はＣＯＤＭＷ２ネタ入れているのわかりましたか？

発煙筒の部分、あれＭＷ２のホワイトハウスの最後の部分です

あと、ウェスタアームズのＭ８４を撃って気に入ってしまったので、Ｍ８４も装備に

追加してしまいましたｗｗｗ

では、次回から魔剣編、お楽しみに！！

## 巫女は意外と戦闘力があるので警戒するように（前書き）

スティンガーミサイルの確保作戦を終えた、数日後のキンジの部屋から

今回の物語を始めよう

## 巫女は意外と戦闘力があるので警戒するように

スティンガーミサイルの確保作戦で激戦を終えた数日後、俺たちはキンジの部屋にいた

そこで、アリアとキンジがいつもの口喧嘩をしているのを、いつものように見ていた、

これは今までの日常と全く変わらない、しかし、その日常が一瞬にしてブチ壊れたのであった

キンジのケータイが着信を上げたので、キンジが内容を確認すると同時に震えだした

これは多分あれか・・・

「ア、アリア、に、に、にに、ににに逃げろッ！」

「な、何よ。急に震えだして。キ、キモイわよキンジ・・・」

「アリア、ホントに逃げたほうがいいよ、首が飛んでいくことになるから」

俺は冷静に８９式、Ｐ－１４、Ｍ３６の弾を確認する

アリアは俺とキンジが体験した恐怖を知らないから、「？」となっていた

その時、マンションの廊下から

どどどどどどど・・・・！！

と足音が聞こえた、数秒後には

しゃきん！！と、金属音と同時にドアがキレイに切り開けられた

そこにいたのは、巫女装束に額金などの戦装束姿の白雪であった

「ヤッパリ――――いた！！神崎！Ｈ！アリア！！」

「待て！、落ち着け白雪！」

キンジの静止も聞かずに、白雪は日本刀を携えてアリアに切りかかった

白雪はキンジと知り合った時からの知り合いだが、このようにバーサーカーになることがあり

その時、大抵、女子が攻撃を受けるのである、去年もしばしば、中等部の後輩がキンジに話しかけるのを見て切りかかってた白雪を取り押さえたことが、１５回ほど

俺も冷静に白雪を抑えながら話しかける

「白雪！一回冷静になろう！いきなり斬りかかっちゃ、ビビって話もできねぇ！！」

「タカちゃん離して！、こいつを殺して私も死にますぅーー！！」

「だから、殺しちゃ駄目ですよ！！、あと死なないのー！！」

アリアもこの状況にビビりまくってガバメントを抜くのを忘れて、
キンジに話しかけていた

「キンジ！何とかしなさいよ！！何なのよこの状況！？」

「俺が聞きてぇよ！！」

その時、白雪の手の甲が俺の鼻にバチーン！！とぶつかり、俺が一
瞬ひるんだ隙に白雪は
アリアに突撃していった

「こいつを殺して私も死ぬぅー！！」

「だから、なんでアタシなのっ！人違いよ！！」

そんなアリアの言うことなど耳に入るはずもない状態の白雪はアリ
アに対しておもいっきり上段構えで
日本刀を振り落とした

「天誅――――――ッ！！」

「みゃっ！！」

猫のような声を上げて、アリアが真剣白刃取りで白雪の日本刀を受
け止める

キンジは目の前で起きた白刃取りに驚いているが、俺はそんなこと
よりも足のホルスターからＭ３６を
取り出してＭ３６のハンマーを起こして上を向けて

パァン！と一発、威嚇射撃を行うがアリアたちはこの銃声など耳に入ること無く

「このバカ女！」

と叫びながら格闘技を決めようとするが、

「バーリ・トゥードね――――！？」

と一瞬で白雪に流派を見ぬかれ、白雪にバックドロップを決められた

「いなくなれ！この泥棒猫！！キンちゃんの前から消えろっ！！」

そうしてアリアは投げられて、居間のソファーをがれきにした

パァン！パァン！パァン！と俺のＭ３６がダブルアクションで威嚇射撃をする側でキンジが

「落ち着けふたりともうぉっ！？」

制止させようとしたその時、パァン！ばすんばすん！と俺のＭ３６以外に銃声が２発

ガレキの下から出てきたアリアが撃ちながら登場、アリアが撃った弾を白雪は刀ではじき飛ばす

「キレた！も～～～怒った！風穴あけてやる！！」

俺がＭ３６をスリングアウトして弾を捨てて、スピードローダーを

使ってリロードしている間にも
ド派手に撃っては、はじき飛ばし、日本刀でつばぜり合いになったりしていた
「ふたりともいい加減落ち着けェ！！」
俺はＭ３６をホルスターに戻して替りにＰ－１４を取り出して、上に向けて
ダァン！ダァン！ダァン！ダァン！ダァン！とファイブタップで撃つ
「キンジ！タカ！アタシを援護しなさい！パートナーでしょ！！」
「キンちゃん！タカちゃん！この女を後ろから刺して！、撃って！見なかったことにするから！！」
「平和的な解決方法はないのか！？」
俺がそう叫ぶ中、キンジは
「勝手にしろ・・・」
とベランダに避難していった
「キンジ！」
「キンちゃーん！」
「キンジぃぃ！！」

俺はキンジがいないため一人でこの状況を鎮圧しないといけなくなる

「「タカ！（ちゃん！）（アンタ）はどっちの味方なの（よ）！！」
」

「だからどっちでもねぇ！！」

俺がそう叫ぶ中、アリアと白雪はまた始めた、俺はこれを鎮圧する
べくＰ－１４を撃ちまくる

ちなみにアリアみたいなベテランでも無く、俺みたいに軍隊経験も
ない白雪がバカに強いのは超能力を
使っているかららしい、一見すると「頭大丈夫か？」と聞かれそう
だが各国で密かに研究されている

あのアメリカ軍ですら極秘で研究・開発しているらしい（？戦時中
に中のよい米海兵隊員から聞いた）

武偵校で超能力捜査研究科がそれにあたる

〜〜４５分後〜〜

「「「ゼハー、ゼハー、ゼハー、」」」

俺とアリア、白雪は３人揃って息を整えていた、床に日本刀をさし
てなんとか立ってる白雪、

アリアは尻餅を付いて両膝を立てて、上体を腕でささえている

俺はホールドオープンしたＰ－１４を持って床に仰向けになっている
そこへ、
「・・・決着はついたのか。一見すると引き分けのようだが」
とキンジが和平交渉を開始した、力尽きている俺はこれで終わると
思って特に気にもせずに重力に身を任せていたら
「で、でも・・・キンちゃん、それ・・・」
？、珍しく従順さが取り柄の白雪が口答えとは珍しいと思って起き
上がり
白雪が指さした所を見る
そこにはキンジのスボンのポケットの中にあるケータイのストラッ
プとして付いている、
この前のＵＦＯキャッチャーで取ってきた、正体不明のＵＭＡ（未
確認動物）のレオポンのストラップが
露出していた
「これがどうした白雪？」
俺が白雪にそう問いかけると白雪は、
つつつ・・・と指を動かして、起きてきたアリアのポケットに移した
そこにも、キンジと同じレオポン君が「やあ」と顔と手を出していた

それを見た白雪は、目にみるみると涙を溜めて次の瞬間には

「ペアルックしてるうううーーーーーーーー！！うわあああああああああ！！」

叫びながら、ぶわあああああ！と泣き叫び始めた

「ぺあるっく？」

アリアはこの言葉を知らないようで、眉を寄せていた

「ぺ、ペアルックは好きな人同士ですることなの！私、私何度も夢見ていたのに！」

「だーかーらー！アタシとキンジはそういうのじゃない！！こんな奴とは１ピコグラムもそういう関係じゃない！！」

和平交渉が目の前で破綻した、朝鮮戦争の時は結構あっさり言ったのに（といっても北朝鮮全土は瓦礫になって支援していた中国も上海をアメリカ軍が瓦礫にしたからだけど）

ていうか・・・、ピコグラムって何だよ？、イギリスの単位の一つ？

俺がそう思っている中、キンジは白雪の両肩をつかんで目を覗き込んだ

「お前は、俺の言うことを信用出来ないのか」

白雪はキンジがそうシリアスに物事を言ってくるのに弱い、白雪は

泣きながら

「そ、そんなんじゃないよ。信じてる。信じてますっ・・・」

再三の否定により、ようやく白雪の態度は軟化する

そして、ひんっ、ひんっ、としゃくりあげつつ俺たちを見回して

「じゃあ、キンちゃんとアリアはそういうことしてないのね？」

「そういうことって何だよ？」

俺がそう一言聞くと白雪は

「キ、キス、とか・・・」

キス、キスねぇ・・・

「・・・」

「・・・」

「あーーー・・・」

キンジは石化して、アリアは絶句した口をわぐ、わぐと開閉させている。見学人だった俺は解答に困ってしまう

それを見て白雪は、動向をすーっ、とかっぴらきながら

「シタ→・・・ノネ←・・・」

そう白雪がつぶやきながら、ふふ、ふふふ、うふふふと虚ろな笑い声を上げながら

ガチャン！と巫女装束からＭ６０分隊支援軽機関銃を取り出した

「し、白雪！それはヤメろ！ヤメるんだ！！米軍から供給されたのを朝鮮戦争で撃って俺はそいつ（Ｍ６０）の威力を知っているから！！」

俺が朝鮮戦争従軍していた時に米軍から供給されたＭ６０で北朝鮮軍のトーチカを撃ったらトーチカが崩れた事がある、そんなＭ６０をぶっぱなされたら俺たち３人、たちまち天国行きである

俺がそれを知っていて必死に白雪を止めるべく、あたふたしていたら

アリアが突然ご起立なさって

「た、確かに、そういうことは、したけど！でも！」

そしてアリアが寄せても上がらない胸をおもいっきり張って、衝撃の一言

「大丈夫だったのよ！　子　供　は　で　き　て　な　か　っ　た　か　ら！！」

アリアのセリフに続いて

・・・チーン・・・

お葬式の音が聞こえて

ひゅう。

真っ白になった白雪から、魂が抜けていった

「バカかお前は！！」

「だ、だってキスしたら子供が出来るって、小さい頃、お父様が――」

「出来るかアホ！！」

「じゃあ、どうすれば出来るのよ！？、教えなさいよ！？」

「保健の教科書でも見ろ！、アホー！！」

ホームズ家の皆様、いくら恥ずかしくても娘の性教育ぐらいしっかりしてください！！

俺とアリアがそう口喧嘩している間にキンジは白雪を運んでいった

それからしばらくしたあと、白雪は煙のように消えていった

## 巫女は意外と戦闘力があるので警戒するように（後書き）

どうも、白石です

ついに始まりました魔剣編、今日はしょっぱなの白雪ｖｓアリアの部分です

今回の魔剣編では綾鷹さんの作品の「～武偵の道～」とつながっていますので

「～武偵の道～」のキャラクターも出てきますのでよろしくお願いします

あと、ついでにタカが参加した第二次朝鮮戦争では自衛隊は米軍から大量の武器
供給を受けている設定ですので、供給された武器の一つでＭ６０を撃っている設定です

では、次回もお楽しみに！！

**作戦内容：教務科に潜入開始せよ！！（前書き）**

白雪の襲撃を食らったタカ達一行は、何とかして白雪を落ち着かせた、

その翌日の２年Ａ組教室から話を始めよう

**作戦内容：教務科に潜入開始せよ！！**

白雪の襲撃を何とかして迎撃？した翌日の2年A組

「今朝のHR（ホームルーム）は来週にせまったアドシアードについてです」

担任の高天原ゆとり先生のからアドシアードについての説明を俺たちは受けていた

アドシアードとは、年に一度に行われる武偵高の国際競技会である、簡単に言うとオリンピックの武偵版である

しかし、オリンピックが平和的イベントなのに大してアドシアードは強襲科や狙撃科による全然平和じゃないキナ臭い競技ばかり行わるどーでもいいけど、第二次朝鮮戦争でたまに行った3国対抗（アメリカ、日本、韓国）運動会では

60人サッカーや綱引きで戦車を引いたりなどアホやっていた

といってもこれも訓練の一環で戦場でのたまの息抜きである

ちなみ、俺は去年、CQB（クロース・クォーター・バトル）競技で5位を取った、

「なあ、キンジお前、アドシアードの競技出るか？」

「何を言ってるんだ武藤、Eランク武偵の俺が出るわけ無いだろ」

「だろうなキンジ、タカはどうするんだ？」

「去年、出場したから、今年は出場しない」

「そうか、じゃあ三人で受付しようぜ！不知火が競技に出場することになちゃってさ！！」

「神崎さんが拳銃射撃競技を辞退しちゃったから、替りに出ることになった」

不知火の報告を聞きながら、俺は武藤にこう告げた

「悪い武藤、俺は後輩との見回りをやることになってる」

「後輩って、人間嫌いでEランク武偵の竹崎って奴か？」

「ああ、そうだけど」

「お前、よく後輩の人間嫌いEランク武偵の兄貴分やれるなぁ、俺だったら絶対にしないけど」

「そういうな武藤、竹崎はEランク武偵なりによくやっているよ、攻めるのは良くないぜ」

ちなみ、竹崎とはじめて会った時、俺はなぜか引かれるものがあったので話しかけようとしたら逃げ出しそうになっていたな、竹崎の奴

ふと、後輩で弟分の竹崎の事を思いながら俺はアリアに話しかける

「アリア、アドシアード、お前はどうするんだ？」

「・・・」

「アリア？」

アリアが話しかけても応答しないのでアリアの方を見ると本を読んでいた、その本のタイトルは・・・

『女医が教える　正しい赤ちゃんの作り方』

「アリア！お前は朝っぱらから何てもの読んでいるんだ、オイ！！」

俺のツッコミなど耳に入っていないアリアは

「こういう事だったのね・・・」

と言いながらゆっくり立ち上がり、俺の方を向いて

「このド変態――――――！！」

と頭に一発、手に持った本で殴ってきたのであった

「オラァ！車よこせって言ってるんじゃ馬鹿野郎！！」

バァン！！と立てこもっている銀行強盗が警察官を殺害して奪ったＭ６０ニューナンブ拳銃を一発撃つ

Ｃ装備姿の俺は裏口のドアの隙間から特殊カメラを入れて中の状況を確認して無線機で本部に連絡を入れる

「犯人は中央カウンターに一人、人質とは少なからず距離があります、突入と閃光弾使用の許可を」

『了解、閃光弾の使用を許可する、静かに内部に突入して犯人を制圧せよ』

「了解、直ちに実行する」

本部からの許可をもらった俺は、裏口のドアから右手にＰ－１４を持って左手に閃光手榴弾を持って
匍匐前進で静かに銀行内部に入る

途中で人質の３人と目が合うが、俺は静かにするように人差し指を立ててジェスチャーで伝える

人質は俺の合図に従って静かにする

「オラァ！人質を殺されてもイイのかぁ！！」

と犯人が叫んだ時、俺は左手に持った閃光手榴弾のピンを引き抜き犯人の入る場所近くに投げ込む

カラン、ドゴォン！！

閃光手榴弾が炸裂して俺は一気にダイニングテーブルを乗り越えて、犯人を制圧するため駆けつける

犯人は閃光手榴弾で目をやられながらも、ニューナンブを撃ってくる

パァン！パァン！と2発撃ってくるが、目を一時的に潰されているので俺を狙っていない

俺はＰ－１４を犯人の足に向けて一発、バン！と発砲する

「ぐあっ！！」

犯人が床に倒れこむと同時に、俺は犯人に駆け寄りニューナンブを確保すると同時に犯人を確保する

「銀行強盗の現行犯で逮捕する！！」

ガチャ！と犯人を締め上げながら手錠をかける

「分かったなお前たち！これがＳランク武偵による立てこもり犯の鎮圧だ！！」

蘭豹が強襲科の後輩たちでアドシアードに出る生徒に話しかけていた

つまり、俺がやっていた銀行強盗の制圧はアドシアードにでる後輩たちへの模範として行っていたものである

「ご苦労だった鷹山、佐藤、休んでいいぞ、よし後は全員自由にやれ！！」

蘭豹はそう言うと、だるいからとの理由で職員室に向かっていった

俺は犯人役の佐藤と話ながらＣ装備を外した

「探偵科は今日何やったんだ？」

「今日は探偵科じゃなくてアリアの練習にずっと付き添っていたんだよ、お前こそ何やったんだ？」

「ん？今日はアドシアードにでる後輩たちへの指導で立てこもり犯の制圧の模範をやっていた」

キンジと愚痴りながら帰るため歩いていたとき、目の前にアリアがやって来ていきなり

バシーン！と一発キンジの頭を木刀で殴ってきたのである

「アリア、一体何やってるんだ？」

痛がるキンジの代わりに俺がアリアに聞く、

「こいつは、2重人格なの戦闘時のストレスで強いモードになるからそのための調教よ」

「ふ～ん」

俺はそんなアリアのセリフを聞きながら、キンジの方を見ていた

キンジのヒステリアモードは二重人格みたいな心因性では無く、神経性の遺伝形質である

だから、二重人格とは全くの別物である、まあ、あえて言わないでおくことにしよう

ちなみ、俺のスローモーはキンジのヒステリアモードと逆で心因性

になる銃撃戦などでスローモーを
使う状況になったとき、

「スローモーを使うぞ」という意思で集中力を高めることにより、
脳からアドレナリンが出て
目の神経の働きを強化することによって相手の動きを低速で見ることが出来るのである

しかし、どうしてスローモーを使うとバカに体力が減るのかはわかっていない

まあ、この能力は1秒で12万発の銃弾が飛んできた第二次朝鮮戦争から帰還できた理由でもあり
そもそも、第二次朝鮮戦争で北朝鮮兵の一個小隊に銃撃された際に偶然発見した能力だし

アメリカ議会名誉勲章をもらった戦闘でも使ったものだ

そんなことを思いながら、キンジが頭を水で濡らしたタオルで冷やすのを後ろから見ていた

「明日もやってあげるから」

「なんで勝手に決めるんだよ！！」

「だってアンタはアタシのパートナーの一人なんだし、調教するのはアタシの役目よ」

そう言うアリアとキンジ達と帰ろうとした矢先であった

学校の呼び出しチャイムがなり、その内容に俺たちは足を止めた

『2年B組　超能力捜査研究科　星伽白雪、直ちに職員室に来るように』

「珍しいな、キンジ、白雪が呼び出し食らうなんて」

「ああ」

白雪は武偵校の中では完全無欠な存在で呼び出しされることなんて想像することはできない

俺とキンジで珍しいこともあるもんだとおもって顔を合わせていたらアリアがニヤリとした表情になって、俺たちに今まで一番危険な事を言い出した

「タカ!、キンジ!、教務科に潜入するわよ!!」

「「はぁあああああ!?」」

俺とキンジは二人揃って叫んだ

教務科は強襲科、地下倉庫についで武偵校では危険な場所である

何で危険かって?蘭豹とか見れば分かるだろ・・・

とりあえず、俺達はダクトの中から教務科に潜入していったのであった

## 作戦内容：教務科に潜入開始せよ！！（後書き）

どうも、白石です

今回はスローモーについてちょいと詳しい説明を書きました、

後、竹崎って誰？お方のために説明しますと綾鷹さんの作品「～武偵の道～」の

主人公で、タカの弟分になっております

次回は教務科に潜入したタカ達一行から話を始めます、タカの自衛隊時代の経歴などについて書きますので

あと、アドシアードにでる後輩たちへの模範はＳＩＴ（特殊捜査班）の公開訓練の映像をもとにしています

では、次回もお楽しみに！！

Ｐ．Ｓ　今回のタカの模範で出てきた佐藤君、多分・・・、２度と出ないかも

## 任務：ボディガード任務　対象：白雪（前書き）

前回、アリアが教務科に潜入するといい、ダクトの中に入る前の数分前から

今回の物語を始めよう

## 任務：ボディガード任務　対象：白雪

教務科が何故、危険なのかを前回、蘭豹を見れば分かるだろの一言で片付けたので、

今回は詳しく説明しよう、

武偵校の教師っていうのは、前職が各国の軍の特殊部隊、傭兵部隊及び外人部隊、マフィアに暴力団、
ウワサではあるが、殺し屋やヒットマンなど聞かぬが仏の経歴の人がほとんどだ、

まあ、元特殊部隊なのは俺もだが

一応、探偵科や通信科などにはマトモな経歴の教師もいるが、宝くじの1等に当たるかのように、
めったにいない

そんなところに、俺たちは今、潜入しようととしているのだ

教務科の廊下でキンジがアリアを肩車して天井のダクトを開けて、
アリア、キンジ、俺の順で
ダクトの中に入っていく

ダクトの中をアリアは既に匍匐前進していた

シャカシャカシャカ

と進んでいくアリアに対してキンジは

ゴソゴソゴソ
と遅いので俺はキンジに
「キンジ、先行かせてもらうぞ」
「タカ、やっぱお前、自衛隊出身だから早いな」
「まぁな、前は匍匐前進ばっかりやらされていたからな」
そう言いつつ、俺はキンジを追い越して先を進んでいたアリアと合流した
「よお、アリア」
「タカ!?、予想より早いわね、いくら自衛隊出身でも早すぎよ」
「空挺レンジャーだったときはこれでも平均だぞ」
「あっそ」
「で、なんでお前が白雪にここまで固執するんだ?」
「キンジから聞いてないの?」
「何をだ?」
「この件を調査して白雪の弱みを握るのよ!!」

「前回の襲撃以外何も無いような気がするけど？」

「いっぱいあるわよ！！、アタシが一人だとドアの前で気配がしたり、物陰から見られたり様な感じがしたり、電話が断線したり――――」

・・・おいおい・・・

「一般校区でも渡り廊下から水をかけられたり、どこからともなく吹き矢が飛んできたり、落とし穴に落とされたり」

・・・ドヒャー・・・

「『泥棒猫！！』って書かれた手紙がロッカーに送られたり、猫のイラスト付きで」

なんか急に可愛くなったぞオイ

「――――とにかく！あたしはあの白雪に嫌がらせを受けているのよ！」

「なるほどね・・・」

「それだけならまだマシよ！」

「まだ、あるの？」

「この間はロッカーにワイヤートラップが仕掛けられていたのよ！！」

「おいおい、それって朝鮮戦争中でも実際に北朝鮮軍がやってたことだぞ」

実際、これでお亡くなりになった人がいる自衛隊や韓国軍、米軍は対策として首に強化プラスチックのネックガードを支給して対応していた

とりあえず、こんなことを言いながら目的の白雪を発見したのであった

白雪は呼び出ししていた尋問科教師の綴先生の個室にいた

綴は足を組んで白雪に向かっていた、白雪は少しうつむいていた

「星伽ぃー、最近おまえ、急ぅーに成績が下がっているよなー・・・」

器用にタバコの煙をわっか形に吐いた綴は、室内でも真っ黒なスーツを羽織っている。

腰には皮製のホルスターに入っている真っ黒なグロック１８が丸見えだ。

綴りはタバコらしきものを灰皿に押し付けた、ちなみにキンジ曰く絶対タバコじゃないということ

「あふぁ…まぁ、勉強はどぉーでもいいんだけどさぁ。」

教師がそう言うな、だから武偵校はアホなんだよ

「なーに……えーっと…あれ…あ、変化。変化は、気になるんだよね。」

無気力を体全体で表している綴だが、尋問においては日本一である、たとえ心臓に毛でも生えた奴でも吐かすことが絶対にできるのである

綴はおかっぱ頭の髪を揺らして、かぶりを振った

「単刀直入に訊くけどさぁ。星伽ひょっとしてあいつにコンタクトされた？」

「魔剣（デュランダル）ですか。」

俺はアリアが眉を動かすのを見ながら、第二次朝鮮戦争中のある偵察任務での戦闘を思い出した

魔剣（デュランダル）・・・俺は朝鮮戦争中にこいつと会ったのか？

「それはありません。と言いますか……もし仮にデュランダルが実在しても、私なんかじゃなくてもっと大物の超偵を狙うでしょうし……」

「星伽ぃー。もっと自分に自信を持ちなよぉ。あんたはうち（武偵高）の秘蔵っ子なんだぞー？」

「そ、そんな」

「星伽ぃ、何度もいったけど、いい加減ボディーガードつけろって

ば。諜報科は魔剣があんたを狙ってる可能性が高いってレポート出してるし超能力捜査研究科って似たような予言出してたろ。それにもうすぐアドシアードから、部外者がわんさかここに来る。その間だけでも有能な武偵をボディーガードにつけな。これは命令だぞぉ。」

「……でも、魔剣なんてそもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞぉ。大事なことだから先生二回言いました。3回目は怖いぞぉ。」

「は、はい。分かりました。」

白雪がそういった矢先にアリアは通気口のカバーをグーパンチで開けた

そして、――――ひゅらっ!、とダクトから室内に飛び降りたアリアはこう言い放った

「「そのボディーガードあたしがやるわ!!」

俺はアリアがそう言うので第一空挺団及び特殊作戦群で習った閉所からの飛び降り方で飛び降りた

ここまでは良かったのだが、次の瞬間、キンジが俺とアリアの上から落ちてきた

「うおっ!?」

「むきゅ!?」

「ぬわっ！？」

一瞬潰されるが、ポンッ、とアリアと二人ではね除ける

しかし、その次の瞬間、襟首をつかまれて持ちあげられたと、だんっ。だんっ。だだんっ。と投げつけられたのであった、なんとバカ力だ、綴

「なんだぁ、この間のハイジャックのトリオじゃん」

タバコを一気吸いして、コキ、コキと首を鳴らした綴の表情は薄ら笑いを浮かべていた

「神崎・H・アリア…ガバメントの二丁拳銃に、小太刀の二刀流。二つ名は双剣双銃（カドラ）のアリア。欧州で大活躍したSランク武偵。でもあんたの手柄書類上では全部ロンドン武偵局が自分らの手柄にしちゃったみたいだね。協調性が無いからだマヌケェ。」

「あたしはまぬけじゃない。それに貴族は自分の手柄を自慢しない。それがたとえ相手が自分の手柄だと吹聴しても、否定しないものなのっ！」

「へー。損なご身分だねぇ。アタシ平民でよかったぁー。そういえば欠点。あんた、およ……」

「わぁーーーーー」

アリアは顔を真っ赤にさせながら大声でジャミングした。

「そそ、それは弱点じゃない。う、うきわが有れば泳げるもん。」
なるほど、アリア泳げないんだな。確かに想像出来ないことも無い、
「で、こっちは鷹山勇治・・・元陸上自衛隊の特殊部隊の特殊作戦群隊員で特殊作戦群に入る前は自衛隊の精鋭部隊の第一空挺団にいて、第二次朝鮮戦争では捕虜になったアメリカ海軍の将軍の救助作戦に
参加して、一人で北朝鮮軍の歩兵１２人、装甲車1台を血祭りにあげてアメリカ議会名誉勲章をもらった奴だ平和な今なら大量殺人犯だねぇ～」
「そう言わないでくださいよ俺だってまさか戦争に行くことになるとは思っていなかったんですから」
「まあ、そんな経歴のおかげでアリアと同じSランク武偵、武装は色々あるけど基本は８９式小銃と多弾数ガバメントのｐ－１４・４５」
「まあ、基本これが使い慣れていますからね」
「あと、刃物では８９式銃剣と朝鮮戦争中に北朝鮮兵からぶんどったスペツナズナイフ、死体からか？」
「ちゃんと生きてる捕虜の北朝鮮兵からですよ、死体じゃないですよ」
「で、こちらは遠山キンジくん」
このあとキンジが俺たちと同じく、綴の手によってひどい事になっ

たのはお察し下さい

「でぇー？どーゆこと『ボディガードをやる』ってのは」

「言った通りよ。白雪のボディガードを２４時間、無償で引き受けるわ！」

さっきの態度はどこに行ったのやら、まあ多分おふくろさん絡みなんだろうけど、

まあ、俺も魔剣に関して引っかかるものがあるわけだし、やった方がいいかもな

「……星伽ぃ。良かったなＳランク武偵二人が護衛してくれるらしいよぉ。無料で。」

「い…いやです。タカちゃんは良くてもアリアがいつも一緒だなんて汚らわしい！」

予想通りのリアクションを見せる白雪に対してアリアはキンジにガバメントを突きつけて

「……アタシにボディーガードさせないとこいつを撃つわよ。」

「止めろ、アホ！」

ゲシッ！俺の空手チョップがアリアの頭に炸裂する

俺が制止させたが、白雪はパニック状態になっている

「ふぅーん・・・なるほどぉー。そういう人間関係ねぇー。で、どーすんの星伽？」

「わ、わかりました！けど！！」

「けど？」

次の瞬間、両腕をピン！と真下に伸ばし、涙目を閉じて、白雪はこう叫んだ

「じ、条件があります。キン、キンちゃんも私の護衛をして！２４時間体制で！わ、私も、私もキンちゃんと一緒に暮らすぅー！！」

ひゅう。ドタッ！！

という音に部屋にいる全員が音のした方向を見るとキンジが真っ白になって倒れていた

## 任務：ボディガード任務　対象：白雪（後書き）

どうも、白石です

今回はボディガード任務を受理する所を書きました、自分だったらこの任務、一応
存在しない相手でも「念には念を入れる」をモットーにしてやりますねｗｗｗ

今回はちょっとタカの自衛隊での経歴とアメリカ議会名誉勲章をもらった時の戦闘の様子をちょっと書きました、詳しく説明すると

訓練学校を卒業して第一空挺団に配属、１年間を空挺団で過ごした後、特殊作戦群に転属、第二次朝鮮戦争に従軍して終戦と同時に除隊して武偵になったという設定です

あと、活動報告でも書きましたがタカに戦兄妹を作るか作らないかを考えていますので感想及び、メール、活動報告に意見お送りしてください

次回はアニメ６話最後の部分になります、それでは次回もお楽しみに！！

## 状況報告：ボディガード任務遂行中（前書き）

前回のあらすじ

白雪の弱みを握るために潜入した教務科でタカ達は、

魔剣が白雪を狙っているという情報をゲットした、

これにアリアは白雪のボディガードを買ってでたが、白雪はこれを拒否

しかし、タカとアリアの他にもキンジをつけるという条件でボディガード任務が

始まったのである

## 状況報告：ボディガード任務遂行中

「で、どうしてこうなった？」

先日の乱闘でメチャクチャになったキンジの部屋でキンジは親父座りで、
ほぼ土下座状態の白雪と向き合っていた

「これからお世話になります。星伽白雪です、ふつつか者ですがよろしくお願いします」

俺はこの様子を見ながら、女子寮の白雪の部屋からタンスを背負って持ってきていた

ドスッと廊下に白雪のタンスをおいて、額の汗を拭いていると白雪に話しかけられた

「あ・・・、ごめんねタカちゃん、私のタンスなのに運ばせちゃって、重かったでしょ」

「別に、自衛隊時代は８０キロのフル装備の他に２０キロのパラシュートやらバズーカ砲とか背負って走り回っていたし、慣れたもんだよ」

「やっぱり、タカちゃんも男の子だね、キンちゃんとは違って軍人さんらしいというか・・・」

「俺は元々軍人だったんだよ」

「そ、そうだよね・・・、ごめんね変な事言っちゃって」

「別に変じゃないけど」

「タカ！白雪と話ししてないで、要塞化を手伝いなさいよ」

脚立に乗って赤外線探知機を天井に付けているアリアが俺と白雪の会話を断ち切った

「じゃあ、わたし掃除を始めるね」

そういう白雪はアリアの方を見ながら笑顔で

「粗大ゴミも処分しないとね・・・」

と言い放った、怖いぞお前

俺はアリアが購買部で購入した赤外線探知機と電動ドリルを片手に玄関の方に赤外線探知機を設置した

赤外線探知機を設置している間、いつものアリアとキンジの口喧嘩が耳に入ってきた

「お前は、魔剣が実在すると思うのか」

「魔剣はあたしのママに罪を着せた一人よ、奴を捕まえればママの刑期が６５３年に縮むは」

「でも、魔剣は都市伝説みたいなものだろ」

「都市伝説じゃないわ！実在するの！！」

この時から俺の耳にはいつも口喧嘩が入っていなかった

その代わりに、教務科でも思いだした第二次朝鮮戦争中のある小さな戦闘をまた思い出していた

ギュイ～ン！という電動ドリルの音に混じりながら、俺は思っていた

俺は魔剣と戦っているのか？第二次朝鮮戦争の戦場で？

その時、ふと俺が持ってきたタンスがすこし開いていたので閉めるべく三脚から降りて

タンスの方にいくと、その時、開いていた隙間からキンジにとってとんでもない危険物を発見した

タンスの中には『ふつう』、『勝負』と書かれた白木で区分けされた布が入っていた

『ふつう』は白、『勝負』は黒、白雪の奴見かけによらず・・・なんて言えばいいんだろうな

とりあえず俺は、メモ帳に『キンジへ、危険物あり絶対に触れるな』と書いて張っておいた

しかし、開けるな、見るなと言われるとその逆をしたくなる人間の本性で、しばらくした後

廊下からガラッ、バタンという音がしたのであった、南無三

白雪のおかげで先日の乱闘後は無かったのように綺麗になっていた
その日の昼食、食卓の上には白雪の作った中華がならんでいた
「た、食べて食べて。キンちゃんとタカちゃんのために作ったから」
白雪は俺とキンジが食べない限り、手をつけないつもりらしいので
お先にキンジは酢豚、俺は餃子を失礼した
さすがは白雪である、文句なしの味であった
卵焼きを作ろうとして、とんでもない化物を召喚したアリアとは大違いである
「お・・・おいしいですか？」
「おいしいよ」
「うまいよ」
と答えると、白雪は幸せいっぱいといった感じになっていた
あと、何を妄想しているのか『・・・うれしい、あなた・・・』と小さい声でつぶやいていた
まあ、平和を維持するために突っ込まないでおこう
その隣でアリアは腕を組みながら、こめかみをヒク、ヒクと動かしていた

「で？あたしの昼食は無いのかしら？」

「アリアはこれ」

絶対零度の声になった白雪は、どん、と丼をアリアの前においた

割られていない割り箸を突き立てたやつを

「なんでよ！」

「文句があるなら、ボディガードを解任します」

「くっ！」

アリアは犬歯を食いしばりながら、がしゅがしゅとご飯をかっこむのであった

この様子を見ながら、俺とキンジは「「ハァ～」」とため息をつきながら昼食にした

こんな感じではじまった白雪のボディガード任務

朝は一緒に投稿して、授業中はアリアと俺が担当して、昼休みにのみ合流、放課後はキンジの担当という形であった

その日の強襲科の授業、

ズダァン！ズダァン！ズダァン！とアリアはターゲットに２０１１発の４５口径弾を打ち込んでいた

俺は後輩の竹崎が麻薬取引の現場を押さえるというので、その援護の狙撃兵として参加することになり

竹崎から現場の説明を受けていた、

その時に竹崎の親友でアリアの戦姉妹の間宮あかりに話しかけられた

「鷹山先輩、アリア先輩どうしちゃったのですか？」

「まあ、いろいろあってストレス溜まっているのよ」

「自分も、原因の一つですかね？」

「大丈夫だ竹崎、なんかあれば俺がアリアを潰すから」

実はこのアリアのストレスは白雪だけではなく、後輩の竹崎もあった、

まあ詳しいことは、「～武偵の道～」を読んでくれ

で、その日の夜、麻薬取締の現場の埠頭で俺は８９式小銃のハイポッドを展開して

狙撃体制を取っていた、

作戦としては、武偵校で最強と言われる朱雀先輩とＥランクだが実際のはＳランクの能力を持つ竹崎が

突入して犯人たちを制圧するので、俺の任務はその犯人の中にいる狙撃兵を狙撃することである

その時、無線機から竹崎の声が聞こえた

『あぁ、鷹山先輩。準備は大丈夫っすか？』

「あぁ、大丈夫だ。いつでもいけるぜ。」

『スミマセンね～、いきなりこんな事頼んで』

「ははは、まさかアサルトライフルで狙撃を頼まれるなんてな…まぁ、距離的には少しキツいが、なんとかするさ。」

まあ、自衛隊の訓練学校でも６４式小銃での狙撃訓練はしたし、第一空挺団、特殊作戦群でも８９式やＭ４カービンでの狙撃は訓練したし、第二次朝鮮戦争でもヘリからやったこともあるから慣れたものである

『鷹山先輩、俺が合図してから十秒後にお願いします。』

「おう！」

『…スタート！』

俺は１０秒数えながら、ダットサイトで敵の狙撃兵を狙う

「「行くぜ！」」

と二人同時に飛び出した後、俺の８９式がターン！と銃声を上げた

それからすぐにダダダダダダダダダダダ！！！！、ガガガガガガガガガガガ！！！

と銃声が聞こえて、ヤクザは全員、伸びていた

俺は８９式を肩にかけて、朱雀先輩と竹崎の手伝いにまわることにした

「ただいまー」

「あ、おかえりなさいタカちゃん、大丈夫だった？」

「ああ、狙撃するだけだったからな」

白雪が俺の８９式小銃を取ってリビングに置きながら今日の任務について話しかけてきたので

任務の状況を話しながら俺はソファーに腰掛けた

「ああ、タカ帰ってきたのか」

「ああキンジ、今帰ってきた」

「風呂、先に入れよ」

「じゃ、言葉に甘えさせてもらうぜ」

俺は風呂にはいることにした、脱衣場で服を脱ぎ、ランニングをと

った俺の体が鏡に映る
朝鮮戦争でついた生々しい傷跡のついた体の中で俺は左からの傷跡を見ていた
この傷跡が、朝鮮戦争中のあの時に、そして今・・・
俺は白雪のボディガード任務と第二次朝鮮戦争でのあの戦闘が重なるように頭の中をよぎるのを感じながら俺は風呂に入っていた
俺が風呂から出た後、キンジが入ることになった
俺は８９式とｐ－１４・４５を整備していた、ちなみ俺のＰ－１４はグリップは忍者の使う忍刀（しのびがたな）が二本クロスしていて間に手裏剣（しゅりけん）が書かれたグリップである
この前、スティンガーミサイル確保作戦の際にＦＮハイパワーを改造を平賀に頼んだ時、ついでにサービスとして平賀のやつがくれたものである
なんで忍者にちなんだ忍刀に手裏剣なのかというと、特殊作戦群は隠密作戦が多かったのでアメリカ軍や韓国軍から忍者部隊と言われていたので、それにちなんでこんなグリップになったのである
俺が整備しているテーブルの向こう側に座る白雪は、占いをしていた
特に気にもせずにＰ－１４を整備していたら、白雪の顔が突然青ざめた表情になり
その直後にかかってきた携帯に出たら、すぐに物凄いスピードで風

呂場に向かっていた

「オイ白雪！？」

俺も風呂場に行くと、上半身裸のキンジと土下座している白雪がいた

「どうしたキンジ？」

「いや、白雪がケータイで俺が助けを読んでいるから来たらしいけど、俺の今の状況をみて、何かいろいろ言い出して、今こんな状態」

「なあ、白雪」

俺は土下座している白雪に話しかけえる

「普通、風呂場で何かあってもケータイで助けを呼ぶことないだろ、叫べば聞こえるんだし、なぁ、」

「ああ、普通そうだろ、間違い電話だろきっと」

といって上半身裸のキンジが白雪を起こそうと近づいたのが悪かったのか、白雪は突然

「おあいこ！」

と言って巫女装束を脱ぎだしたので

俺とキンジは大慌てで白雪を抑えていた

「白雪！脱いだところでなんにもならないから！！」

「脱ぐ脱ぐ脱ぐぅー！脱がないとアタシが悪い人になっちゃうー！」

「悪い人にならないから！！」

それでも、白雪はドタバタと脱ごうとするので、俺は後ろから羽交い絞めにして、キンジが襟やら袴やらを必死に押さえる

「キンちゃん離して！」

「おとなしくしろ！」

「ただい・・・ま・・・・・」

がさっ

アリアが史上最悪のタイミングで帰ってきた

「こ・・・・こんのぉぉぉ・・・」

ライオンが唸るような声を上げたアリアは次の瞬間、

「バカ共があぁあっぁぁぁぁぁ！！」

スガン！スガン！とアリアのガバメントと二丁拳銃で火を吹いた

「うおっ！？」

キンジは逃げて、ベランダから東京湾に落下

俺は白雪を抱えてバックにおもいっきり倒れて頭を強打

「アリア！負け惜しみはやめて！！」

「負け惜しみ！？」

「アレは合意の上でだったのよ！！」

「ごごごご、合意の上であってもォーーーーーっ！！ダメなものはダメーーーーー！！」

「だからお前ら落ち着け！！」パァン！↑Ｍ３６の銃声

東京湾に落下したキンジは俺達のこの会話と銃声を東京湾に浮かびながら聞いていたらしい

## 状況報告：ボディガード任務遂行中（後書き）

どうも、白石です

いや～、やっとアニメ６話分終わりました、

今回の話では綾鷹さんの「～武偵の道～」で麻薬取締の任務に当たるタカの様子も書きました、詳しいことは「～武偵の道～」を読んでください

タカのＰ－１４についての追加設定も書きました、なんか物凄いグリップだな

自分で書いていて思ったけど、風魔大喜びしそうだなこれ・・・ｗｗ

あと、活動報告でも書きましたがタカに戦兄妹を作ることに決定しました！！

今、現段階でのタカの戦兄妹の設定については活動報告を見てください！！

次回の章ではタカとジャンヌの第二次朝鮮戦争でのデスマッチを書こうと思います

あと、出来ればタカの戦兄妹もちょいと出したいと思います

では、次回もお楽しみに！！

## 作戦変更：二手に分かれて行動せよ（前書き）

なんだかんだで、はじまった白雪のボディガード任務、

今回の話は東京湾に落下したキンジが、

風邪を引いて寝込んでいるとことから始めよう

## 作戦変更：二手に分かれて行動せよ

「げほっ！、げほっ！」

昨日、東京湾に落下したキンジは風呂上りに冷たい東京湾の海水というダブルパンチを食らって見事に風邪を引いていた

それを心配そうにみつめる白雪

「白雪！学校行くぞ！！」

「でも、タカちゃん、キンちゃんが・・・」

「大丈夫だ白雪、学校行って来い」

「キンちゃん・・・、できるだけ早く帰ってくるから」

「ああ、分かった」

「ごめんね、この前間違って、キンちゃんが風邪の時に飲む、特濃葛根湯を割っちゃったから・・・」

「いいから、早く学校行って来い」

「は、はい、わかりました、キンちゃん様・・・」

キンジが風邪を引いたのは東京湾に落下して結構すぐの出来事であった

それで、昨日の夜、奇妙な夢を見たような気がする

いや、昨日の夜に喉が乾いたので水を飲もうかと台所に向かっていたら、押入れの方から

カツーン！カツーン！と釘を打つ音が聞こえたから、ｐ－１４・４５を片手にそっと押入れのドアを少し開けてから中を除くと

そこで、白雪がどこで調達したのか知らないけど、藁人形（わらにんぎょう）にアリアの顔写真貼って

五寸釘（ごすんくぎ）を打っていた夢である

「アリアなんて死ねばいいのに・・・」

そんなこと言っていたような気がするけど、多分、夢（ゆめ）だから・・・、

うん、夢だよね・・・、うん、夢だ、現実では無いよね、たぶん・・・

で、そんな夢をみた翌日のことであった

俺はアリアにガバメントを突きつけられて、車両科から車借りてアメ横までアリアを助手席に乗せて

走らせていた

「アリア、アメ横まで来たのはいいけど、何の用で来てるんだ」

「タカ、そこの薬局で止めて」

「あいよ、」

俺はアリアに言われるままにアメ横の薬局の駐車場に車を止めた

そして、アリアにここで待っていろと言われて待つこと約１５分

アリアが紙袋を手に戻ってきた

「それ、キンジへの風邪薬か？」

「そ、そうよ！、あ、アタシが風邪薬買って悪い！？」

「別に、しっかし珍しいな、お前がキンジに悪いなんて思うとは」

「そ、そりゃ、今回のあいつの風邪は、アタシが原因なんだから・・・」

「典型的なツンデレだなお前、」

「う、うるさい！！」

そういう会話をしながら、俺は車を寮まで走らせていた、その後、

アリアがパッとキンジの部屋に

風邪薬をおいていった後、俺とアリアは学校に戻った

その日の放課後、白雪はキンジの代理で護衛する俺をおいて猛スピードで帰っていったのである

「う～ん？」

その日の翌日、俺は疑問に手にした資料を見ながら、ふと疑問に思っていた

「俺、一体、いつの間に戦兄妹の戦兄の許可出したんだろ・・・？」

今日の昼食時間で担任のゆとり先生に話しかけらた後、突然、見に覚えのないわけでは無い、戦兄妹の話をかけられて、戦兄妹としての許可を出したということを後輩の戦妹に伝えというので、

ビックリしながらも、つい「ハイ！」と言ってしまったからには仕方が無いと思うが、それでも疑問に思いながら、後輩の戦妹の資料を見ていた

「武器は、デトニクス４５とニューナンブ３インチか、珍しい組み合わせだな・・・」

その時、歩いていた道の隣の建物の上から

「バカ！バカ！、このノーベルど馬鹿賞ー！！」ズギュン！ズギュン！

と聞こえたので、またのいつものケンカやっているのかと思って特に気にもせず、声と銃声のした上の方を見上げた瞬間であった

「うおっ！？」

スドォォォン！！

目の前に建物の屋上の鉄製のフェンスが落ちてきた、目の前1メートルほど前に

「アリア！テメェ！俺を殺す気か！！」

建物の上にいるアリアに叫んだら

「アンタが偶然そこにいただけじゃない」

すでに屋上から降りてきたアリアが上を向いていた俺に話しかけてきた

アリアの表情は不機嫌そのものであった

「ったく！で、キンジのやつといつものケンカか？」

「いつものじゃないわよ、キンジのやつ、アタシがあれだけいっても魔剣の存在を認めないのよ！！」

「そりゃ、都市伝説を無理に信じろと言われたところで、あっさり信じられるものじゃないだろ」

「それは、そうだけど・・・タカは魔剣の存在を信じるの、信じないの？」

「何とも言えねぇなぁ・・・」

俺はまた朝鮮戦争に従軍中のあの出来事を思い出していた

その俺の様子をみたアリアが何かに感づいたように話しかけてきた

「タカ、アンタはアタシと同じくらい、いや、それ以上に魔剣との関係があるわね・・・」

「・・・昔話でもしようか？」

「後でいいわよ、それよりタカ、作戦を伝えるは、白雪のボディガードから外れて」

「何でだよ？」

「魔剣は相手が複数の場合、必ず距離をおいて、うまく敵の戦力を調べて、一人ずつ、一対一で片付けようとする、これは魔剣の戦術パターンよ」

「なるほど、つまり白雪との距離を取ることで魔剣に対して有利になれる訳か」

「そういうこと、タカ、やっぱりキンジより、物分りいいわね！！」

俺がアリアの意見に納得すると、アリアはさっきの機嫌はどこに行ったのか、少なからず上機嫌である

そんな上機嫌なアリアが俺の手にした、俺の戦兄妹の戦妹の資料にふと気付いた

「タカ、それあんたの戦兄妹の戦妹の資料？」

「ああ、これなんだが、いつの間に俺に戦妹ができていてな、不思議に思っているんだが」

「そりゃそうよ、だってアタシがあんたの戦兄妹を作ったんだから」
「お前が黒幕かよ！！、何で勝手に作ってんだよ人の戦兄妹！！」
「だってこの子、生徒会よ白雪に自然と近づけるじゃない」
「白雪が生徒会会長だからって生徒会の子を勝手に戦兄妹にするな！」
「アンタ、戦兄妹とか自由に受け付けていたでしょ？」
「そりゃ、そうだけどさ！！」
「それにこの子、アンタと昔から少なからず関係があるわよ」
「ん？」
俺は資料に書いてある、名前と顔写真を見て、第二次朝鮮戦争でのある人質救助作戦を思い出した
「あ！あの子か！！」
詳しい話は後日しよう
「それにしても珍しいタイプね、オートとリボルバーの二丁拳銃なんてアタシはじめて聞いた」
「俺もだよ」

そんなことを思いながら、歴史に葬り去られた小さな戦闘を思っていた

で、その日の夜、アリアは俺の部屋にやってきていた、

アリアが言っていた作戦を実行するために

アリアは俺の屁のリビングにおいてある、ディスプレイをじっと見つめていた、

アリアがキンジの部屋につけていた赤外線探知機は無線カメラ付きなので、離れていても監視できるようになってるらしい、

魔剣に気づかれないかとアリアに一回聞いたら、またライオンの如く吠えてきたので、もう聞かない

俺は風呂に入りながら、今回の任務のこと、戦兄妹のことなどを思っていた

風呂から上がると、アリアが話しかけてきた

「で、タカさっき言っていた”昔話”をしてくれる？」

「いいけど」

俺は上半身裸でバスルームからでる

「ちょ、ちょっと何で上半身裸なのよ」

「この傷を見ろ」

「え？」

アリアは若干うろたえながらも、俺がさした左肩の傷跡を見た

「これって・・・」

アリアが見た俺の左からの傷跡は明らかに他の傷跡とは違ったものである

その傷は砲弾や銃弾でついた傷跡では無い、明らかに刃物で刺された後であった、しかもその傷の周りには凍傷の跡もあった

「魔剣にやられた跡だよ・・・」

「あんた、やっぱり魔剣と・・・」

「ああ、俺は第二次朝鮮戦争で魔剣と戦ってるんだよ」

「話してくれる？、アンタと魔剣との戦いを」

アリアがそういうので俺は、その時の様子を話し始めた

「この傷がついたとき、俺は地点５６４への上陸作戦に参加していた」

俺の頭の中には当時の様子がはっきりと蘇っていた、

そして魔剣との激しい戦いも・・・

## 作戦変更：二手に分かれて行動せよ（後書き）

どうも、白石です

何か、不完全燃焼で終わってしました今回の話、なんか、すっきりしないなー

とりあえず、今の作者ではこれが限界です、サーセンｗｗｗ

あと、白雪のヤンデレ爆発しすぎだろ今回ｗｗｗ

藁人形って書いた本人だけど、物騒すぎるわｗｗｗ

あと、タカの戦兄妹もちょいと出ました、詳しい設定は活動報告に書いていますのでよろしくお願いします

では、次回もお楽しみに！！

## 回想：地点５６４上陸作戦（前書き）

魔剣の戦術パターンから白雪のボディガードからしばらく離れる作戦に出た

アリアとタカの二人、アリアはタカの表情からタカが第二次朝鮮戦争に従軍中、

魔剣との関わりがあることを突き止める、

そして、今回ついに！タカと魔剣（ジャンヌ）との過去が明らかになる！！

※今回はタカの第二次朝鮮戦争の話になります

## 回想：地点５６４上陸作戦

第二次朝鮮戦争中の６月１３日の午前０時、自分が所属する特殊作戦群・第１中隊・第３小隊は

地点５６４への上陸作戦を実行していた、この作戦の目的は上陸地点５６４から２キロほど行った所にあるテングス橋を確保するための作戦である

この地区にあるテングス橋はこの地区で唯一の橋で戦車部隊などを通すために非常に重要な橋である

この橋を破壊されたりしたら、連合軍の戦車部隊などは約３ヶ月の足止めを食らうことになり

今後の第二次朝鮮戦争での勝敗を決定することになる

すでに特殊作戦群が派遣される数日前には、アメリカ海軍の特殊部隊ネイビーシールズ、

アメリカ海兵隊のＭＥＵ、アメリカ陸軍の１０１空挺師団、韓国軍の猛虎部隊こと首都防衛師団、

自衛隊からは第６戦車大隊、第一空挺団が出動していた

たった一つの橋のためにこれだけの精鋭部隊を投入しても確保しなければならない場所なのである

で、俺の所属している特殊作戦群に与えられた任務はテングス橋近くの村を確保して、後続部隊の

アメリカ海兵隊ＭＥＵの到着を待てという任務である
一見すると意味があるのかと思う任務だが、すでに先行して弾丸や
戦車の燃料などを消費しているので
村を確保して補給場所にすることによって今後のテングス橋占領が
容易になるのである

ブロオオオオオオ！！というモーターボートのエンジン音が静かな
夜の静寂を切り裂きながら
俺たちはひたすら前進する

それから、３００メートルほど行った先で隊長が俺たちに話し始めた

「よし、全員聞け！、今からこの岸から上陸する、全員装備を確認
しろ！」

「「「了解！！」」」

俺たちは隊長に命令されると同時に、装備を確認して岸につくと同
時に素早くモーターボートから飛び降りて小隊全員が集合した

「よし！今から徒歩で前進を開始する、俺達のいる場所から目標の
村までは約３キロほどだ」

隊長が防水カバーに包まれた地図を広げながら、指をさしてしめす

そして、隊長の命令により小隊１２人を４人ずつ分けることになっ
た、俺は機関銃及び対戦車班として
前進する時は最後に小隊の最後を進むことになっていた

そして、説明を終えた隊長が最後にこう言った

「何が来るかは分からない、俺が警告したら全員伏せるんだ、戦車や戦闘機も来るかもしれない、今は静かだが危険はすぐ近くにあるということを忘れるな！」

「「「了解！！！」」」

「よし！前進開始！」

俺たちは村に向けて前進を開始した

前進している間もひたすら周りに気を配りながら、休む暇もなく８０キロのフル装備で森の中をひたすら前進する

そして、午前４時頃に目標の村についた、村を確保するべく小隊は戦闘態勢をとっていつでも攻撃できるようにしていた

まだ、暗さが残る空の下、村への坂道に隠れながら隊長が最後のブリーディングをしていた

俺は今から死ぬかもしれないという恐怖に心臓が高鳴っていた

それを見た鳩村二等陸尉が話しかけてきた

「どうした鷹山？怖いのか？」

「まぁ、怖くないって言ったら嘘になりますね・・・」

「安心しろ、俺だって怖いよ」

「生きて帰れますかね？」

「大丈夫だろ、まあ最低死んでも棺桶の中で勲章首にかけて日本には帰れるだろ、原型を留めてりゃ」

「ミンチ肉はなりたくないですね、最低でも」

「俺も同じだ」

「鳩村！鷹山！ムダ話をしないで装備の最終確認をしろ、今から3分後に攻撃を開始するぞ」

「「了解！！」」

俺と鳩村二等陸尉は、M4カービンやUSP、手榴弾などを確認する

それからすぐ、分隊支援機関銃手の玄田3等陸尉のもつミニミ軽機関銃が火を噴く同時に俺たちは

一気に村の中に突入した

ダダダダダダダダダダダダダ！！

バァン！バァン！ズドォン！

銃声が鳴り響き、北朝鮮兵が次から次へと撃たれていく

この戦闘は約2時間で終了して、村を確保した

村を確保したときには、もう夜が開けて空は明るくなっていた

俺は破壊された民家のブロック塀に腰掛けながら、水筒に入っている水を飲んでいた

その時、米軍から供給された狙撃用Ｍ１４をもった小隊の狙撃手の松田３等陸尉に話しかけられた

「よお、鷹山！」

「あ、松田先輩、お疲れ様です」

「鷹山！派手にやったな狙撃ポイントから北朝鮮兵が吹っ飛んでいくのが見えたぜ」

「まあ、カールグフタス撃ちこめば、あんな感じで飛んでいきますよ」

この会話の内容というのはさっきの戦闘で３階建てのビルの上に据付た機関銃座を俺がカールグフタス
対戦車無反動砲で撃ったという内容だ

そんな感じな会話を松田先輩としていたら大門隊長がやって来た

「鷹山、すまないが偵察に向かってくれ」

「へ、偵察？一体なんで？」

「さっきの戦闘で配送した北朝鮮兵がどこにいったのか調べてくれ、疲れていると思うが今後の防衛のために重要な任務だ」

「はぁー、了解しました」

「何かあったら連絡しろ、すぐに救援に向かう」

「了解」

俺は隊長に命令されて偵察任務に向かった

俺は村から少し離れた森の中を偵察していた、地面についた足跡を見た限りでは村から撤退した北朝鮮兵達は西に敗走したようである、それにかなりの量の血が地面に流れていた

俺は隊長に伝えるべく無線機に話しかけた

「隊長、北朝鮮兵は西に敗走した模様」

『了解、他に報告はあるか』

「敗走した北朝鮮兵は重傷を負ったのもいるみたいです」

その時、俺はある物に気がついた

気に寄りかかるように死んでいる北朝鮮兵の死体であった、俺はそれ見てふとあることに気がついた

「隊長、北朝鮮兵の変死体を発見しました」

『変死体？どういうことだ鷹山？』

「首の大動脈をやられて死んでいますが、その傷跡が凍傷みたいに

なってます」

『ふむ、妙だな』

その時、無線機越しに小隊の隊員の一人である金子曹長に会話が飛び込んできた

『隊長、それはもしかしたら魔剣の仕業かもしれませんよ』

『何を言ってるんだ金子？』

『魔剣に殺されるとその跡は凍傷になるって聞いたことがありますよ』

『バカ言え、魔剣は武偵や警察が相手だろ、一体何のためにこんな戦場に来ているんだ』

そんな、隊長と金子曹長の会話が無線機から聞こえる中、俺は殺気を後ろから感じて後ろ振り向くと

なにか飛んで来るのが見えて、とっさに地面に伏せた

ガスッ！とさっきの北朝鮮兵の死体の眉間に銃剣が突き刺さる

俺はＭ４カービンをフルオートで銃剣の飛んできた方向に向けてぶっ放す

ダダダダダダダ！！

『鷹山！一体何があった！？』

無線機越しに聞こえた銃声に気付いた隊長たちが連絡を取ってくる

「北朝鮮軍のコマンド部隊を思えしものと交戦に入った！至急応援を頼む！」

『分かった！鳩村と玄田、平尾を向かわせる！それまで持ちこたえろ！！』

「了解！！」

俺はＭ４カービンのマガジンをリロードしながら連絡を終える

リロード中に銃剣が飛んで来る中、ローリングしながらマガジンを変える

ダダダダダダダダダダダダ！！

Ｍ４カービンを撃ち切ると同時に手榴弾の安全ピンを抜いて銃剣の飛んできた方に投げつける

ドゴォォォン！！

手榴弾が炸裂し、土煙が上がる

俺はＭ４カービンを腰撃ちの体制で構えておく

しばらく、しても反撃がないので死んだのかと思った矢先であった

土煙の中から猛スピードで奴は正体を表した

中世ヨーロッパの岸のような格好の白いの髪の美しいヨーロッパ系の美女であった、その美女は猛スピードで突っ込んできて左手にものすごくでかい大剣を持ち、右手に銃剣を持ち、

その銃剣を俺の左肩におもいっきり突き刺した！！

「ぐあああ！！！」

とてつもない激痛が体に走る、俺の手からＭ４カービンが地面に落ちる

俺は右手でホルスターからＵＳＰを抜き、奴の腹にバン！バン！バン！と撃ちこんでいく

「ぐっ！」

いくら防弾仕様の鎧を着ているとは言え、至近距離でも９ミリ弾の直撃による衝撃で奴の表情が歪む

ズシュウ！と左肩から銃剣が抜かれた、血が迷彩服越しに流れていくのが分かる

また、その傷跡が冷たいのか熱いのか知らないが妙な激痛を感じるさされた左肩を見ると凍傷になっていた

「金子先輩から聞いた魔剣かアイツは！？」

俺は右手でＵＳＰを撃ちまくりながら、そんなことを叫んでいた

奴は俺の撃ったＵＳＰを交わしながら手に持った大剣で切りかかってきた

俺はスローモーを使って奴の動きを見ながらＵＳＰを撃つ

「そこだっ！」

奴はそう叫びながら、大剣を振りかざした、

スローモーを使っている俺にはそれが見えたのでとっさに奴に飛びかかり、首元をつかんでおもいっきり体全体を使って奴を押し倒した

その後、戦っていた場所が坂になっていたので俺と奴はいっしょに坂を転がっていった

ドンッ！と俺と奴は近くにあった木にぶつかって止まった

俺は素早くＵＳＰをやつの顔面に向けたが、奴は俺の足を蹴り飛ばして立ち上がり銃剣を手にした

俺と奴は距離を取りながらＵＳＰを向けながら俺は奴に韓国語で話しかけた

「”お前は一体何者なんだ？”」

「お前は日本兵だろ、日本語で話せ名前は」

「ほぉ日本語が話せるのか、鷹山勇治だ、そういうお前の名前は」

「ジャンヌ・ダルクだ」
「ほぉ、１００年戦争でイギリスを勝利に導いた女神の子孫かこいつは驚きだ」
「そうだ、我が祖先は１００年戦争での女神ジャンヌ・ダルク一世だ」
「で、なんでそんなエライ祖先の子孫がこんな戦場に何の用だ？」
「ふん、タダのトレーニングだ」
「はっ！イギリスを救った女神様の子孫がただの人殺しか、地に落ちたもんだぜ！！」
「ふんっ！なんとでも言え、お前ももう二度とものが言えなくなる！！」
そういったジャンヌは俺を殺そうと銃剣を構えた、俺はＵＳＰのトリガーに力を入れようとしたその時
であった
「鷹山！生きてるな！！」
「鷹山！無事か！？」
「大丈夫か鷹山！？」
さっきの無線で応援に来た先輩たちがＭ４カービン、ミニミ軽機関銃、８９式小銃を一気にジャンヌに向ける

「増援か、私の戦闘パターンに合わないな・・・」
「何だ逃げるのか？」
「ふんっ、鷹山勇治といったな」
「ああ、そうだ」
「その名を覚えておこう！！」
つぎの瞬間、ジャンヌは閃光手榴弾を俺たちに投げつけた
バァン！という音と同時に閃光と爆音が鳴り響く
俺たちが前を見たときには、もうそこにジャンヌの姿は無かった
「鷹山大丈夫か？」
「肩をやられました先輩」
「なんだこの傷跡？凍傷になってるぞ？」
「やっぱり奴は魔剣だったのか」
「さあ、ジャンヌ・ダルクとか言ってましたよアイツ」
「ジャンヌ・ダルクだぁ？飛んだ中二病だぜ」
「鳩村先輩、これ報告しますか？」

「まあ、一応するけど揉み消されるだろうな」

「でしょうね、こんなちっちゃい出来ごとなんかに気にする上層部じゃないですからね」

俺が言った通り、この戦闘は歴史の闇に葬り去られた

しかし、俺はこの出来事を忘れることはできないだろう

## 回想：地点５６４上陸作戦（後書き）

どうも、白石です

はい！はい！はいーー！！、ついに出ましたよジャンヌ〜〜〜！！

ジャンヌファンの皆様、大歓喜でしょうね今回の話

今回の戦闘シーンは映画「宣戦布告」で空挺レンジャーと北朝鮮軍のコマンド部隊の女性兵士との戦いを参考にして描きました

次回は多分夏休み最後の更新になると思います、キンジと白雪が花火大会に行ってる頃、アリアとタカも決戦前の一休み、そんな内容になると思います

では、次回もお楽しみに！！

## 決戦前の休暇（前書き）

前回、第二次朝鮮戦争にタカと魔剣（デュランダル）との過去を話し終え

通信カメラの映像を見ているところから話を始めよう

## 決戦前の休暇

「あんた、やっぱり魔剣との関わりがあったのね」

「ああ、」

「何で今まで言わなかったのよ？」

「確証が無かったからな、ジャンヌの奴が魔剣ということの」

「銃剣を刺して、その刺された跡が凍傷になるような相手が魔剣じゃなければ一体なんなのよ？」

「まあ、それもそうだがな」

俺とアリアはさっき話した俺の第二次朝鮮戦争中の魔剣との戦いのことを振り返りながら、キンジの部屋にある赤外線探知機についている衛星カメラから送られてくる映像を見ながら話をしていた

その時、キンジの部屋の電気が全部消えてキンジと白雪が寝室に向かうのを見て俺も寝ることにした

翌日の朝　7時頃

ピンポーンと玄関のチャイムが鳴ったので、まだ寝ぼけながら玄関のドアを開けた

「どちらさん？」

こんな不抜けた声ながらも腰にはベレッタＭ８４が入っていていつでも撃てるようになっていた
まあ、ドアを開けた瞬間に魔剣がいてグサッ！と刺されることもありえないわけでないからだ

そんな事を思いながらドアを開けると目の前には青い髪で黄色いリボンのポニーテールの少女がいた

「お、おはようございます、鷹山先輩！」

そんでもって多少上がっているのは、この前アリアが勝手に作った俺の戦兄妹の風連希（ふうれんのぞみ）だ、強襲科のＤランク武偵

先程も言ったが青髪のポニーテールが特徴で、武偵高内の美少女コンテストで5位を取ったかなりの美少女、この前、彼女が俺の戦兄妹になったことを武藤が聞いてコルトパイソンを頭に突きつけられたお前はモテたければ性格とかいろんなものを改良しろ、それが無理なら銃でも変えろ（Ｓ＆ｗＭ２９とか）多少はモテるようになるんじゃないの？

まあ、そんなアリアに引けを取らない美女なのだが、上の挨拶でも分かるように（分かるか？）
内気な性格でかなりの美貌の持ち主ながら目立つことはあまり無い、ちょっと可哀想な子でもある

で俺の戦兄妹を志願したのは彼女自身で、俺も第二次朝鮮戦争で人質救助作戦で彼女と合っているから
昔からの知り合いと言えるだろう、彼女との出会いは今度話すとしよう

武器はデトニクス社製の元祖コンパクトガバメントのデトニクス４５口径、それと長年、日本の警察の
警察官の主力拳銃であったニューナンブＭ６０の３インチモデル
これをアリアのように二丁同時に撃つわけだ、俺みたいに８９式からのＰ－１４、Ｐ－１４からのＭ３６、Ｍ８４ではなく
オートとリボルバーの２丁拳銃をいう武偵高の中でもかなり変わったスタイルであるが、戦兄妹になったので腕をこの前見てみたがさっきも言ったがオートとリボルバー２丁拳銃ながらなかなかの腕を見せていた
で、戦兄妹になったので今日は俺の部屋に泊まりに来たわけである
戦兄妹などは部屋の鍵の共用から始まるのである
「お、来たのか希、まあ上がれ」
「お、おじゃましま～す」
その時、寝室からアリアが出てきた
「え、アリア先輩・・・？」
「そうよ、何か顔にでも付いているの？」
「鷹山先輩・・・」
「ん？」

「アリア先輩と付き合ってるんですか？」

これを聞いて真っ先に反応したのは当然ながらアリアであった

顔を一瞬で赤くしたと思った矢先にはガバメントを二丁拳銃でズダァン！ズダァン！

「キャアアアア！？」

俺は希をつかんで一気に床に伏せる

アリアはこの間にも物凄いスピードでガバメントを2丁拳銃で撃ち同時にホールドオープンした

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

アリアはホールドオープンしたガバメントを二丁持ちながら息をゼーゼーしていた

「希ぃ、」

「は・・・はひ・・・」

「タカとアタシは任務で仕方なく同居しているのよ！、決して！恋仲とかそんなんじゃないからね！！」

「は、はぃぃぃ・・・」

「落ち着け！」

バシッ！と涙目になっている希の前でアリアの頭に空手チョップを一発入れる

まあ、さらにこんな感じでアリア、希との同居生活が始まったわけである

3人同居生活が始まったその3日後

「「あーーー」」

俺とアリアはハイライトの消えた目で（俗に言うレイプ目）ディスプレイを見ていた

「だ、大丈夫ですか先輩・・・？」

希がコーヒーを2つ持ってきながら、心配そうに話しかけてきた

実際に希にここら3日間、俺とアリアの監視任務の間、家事とかやってもらっていた

あと、俺とアリアが何でレイプ目になっているのかというと、

ディスプレイをじっと見つめ続けるというのは意外と精神力を消耗するので3日もするとレイプ目になってしまうのである

「先輩たちも、一回息抜きしたらどうですか？」

「そう言うけど希、あんたはそこまでアタシ達の任務とは関係無い

から気楽言えるけどアタシ達は休む暇もなくレイプ目になってでも任務をしないといけないのよ！！」

アリアがそう軽くキレた状態で希の持ってきたコーヒーを飲んでいた

「でも、白雪先輩、今日、キンジ先輩と花火大会に行くっていってましたよ」

「「え、花火大会？」」

「ええ、キンジ先輩が白雪先輩を息抜きさせるために誘ってそれに行くみたいですよ」

「あのバカ！魔剣がいたらどうするのよ！！」

「でも、魔剣は都市伝説みたいなものですよ？」

「都市伝説じゃないの実在するの！！」

アリアが希に食ってかかりに行きそうだったのでまた頭にチョップを決めたらアリアは頭を抑えて静かになった

「まあ、魔剣のやつも休日ぐらいは平和にしたいだろ」

「戦場にいたくせに？」

「戦場は２４時間年中無休で戦うものなの！！」

「鷹山先輩、アリア先輩、会話が噛み合ってないような気がします」

「「え、マジで？」」

「とりあえず、すこし寝てから今日は午後から出かけましょうよ！！」

「だから、アンタ！いつ魔剣が来るかわかっ・・・」

「アリア、このボディガード任務、レキも参加していたよな？」

「そ、そうだけど！」

「ちょっと電話かけてくるわ」

俺は携帯を持ち、その場を離れてレキに電話した

プルルル・・・、ガチャ

『はい、レキです』

「ああ、レキ、鷹山だけど」

『何のようでしょうか鷹山さん？』

「魔剣の奴はいつごろ現れると思うか？、予想でいい」

『・・・予想ですが、連休中には出ないでしょう』

「わかった、参考にさせてもらう」

『何かあるんですか？』

「いや、アリアをちょっと息抜きさせようかとおもってさ」

『だったら鷹山さんも息抜きした方がいいです』

「ん、なんで？」

『これも予測ですが魔剣の他の敵と戦うことになるでしょう、ですから休んだほうがいいです』

「・・・分かった、その間悪いが白雪の監視を頼む」

『わかりました』

俺はレキとの会話を切った、レキが魔剣以外とも戦うことになるって言っていたしな

レキが言うのだから、たぶんそうなるんじゃないのか・・・

俺は携帯を閉じてアリアと希のいる場所に戻った

「アリア、一休みするか」

「え？、アンタまで言い出すの？」

「レキもだ」

「レキも言ってるの？」

「レキはこの任務にお前が付けてたんだろ、信用してるんだろ」

「そ、それはそうだけど・・・」

「それに今の俺達の状態では魔剣に束になっても勝てない、だから休憩しておくことが大事だ、休むのも兵士の勤めだ」

「分かったわよ」

「じゃあ、午後にでも出かけましょうよ！」

「ああ、少し寝てからな」

俺とアリアはそう言うと寝室のベッドに寝っ転がって3分も立たないうちに夢の中に戦線離脱していた

そして、数時間後、俺とアリアは久々に外に出ることになった

「準備できたかアリア、希？」

「出来たわできたけど、アンタまたそのカッコ？」

「別にいいだろ」

俺はいつもの自衛隊で支給されたOD（オリーブドラブ）の作業ズボンにラフなTシャツといった格好に女子二人が突っ込んでくる、ちなみ、この二人ものすごく可愛い私服着ている

「ワンパターンな服装は飽きられますよ、他の服はあるんですか？」

そう希が呆れながら、ロッカーを開けて絶句したアリアも同じように

「「・・・」」

「そんなに変？」

「先輩酷いですよ、これは！！」

「タカ・・・、あんたどんなセンスしてのよ・・・」

そう言われても、おしゃれとかそういうものは良く分からない

ロッカーの中には自衛隊で支給された制服や迷彩服（２型迷彩服）の他にＯＤの作業着（正式名称：６５式作業服）にラフなＴシャツ類が５枚程度

「どんなセンスしているんですか！？」

「いや、自衛隊時代が長かったからおしゃれとかそういうもの良く分からないから、テキトーに・・・」

「テキトー過ぎますよ！！」

「テキトーにも程があるわよ！！」

「分かった！分かった！」

「「わかってない！！」」

「アリア先輩！今日、鷹山先輩の服買いましょう！！」

「そうね！アタシのドレイなんだから少しはアタシに合う格好をしないと！！」

そんな感じで、今日は外出するなり俺の服を選んだり、メシ食ったり、ゲーセン行ったりなど
楽しく過ごしていった

そして、外出から戻ってきたら希は幸せ疲れなのか、風呂入って、歯を研いてすぐに寝てしまった

俺は希のデトニクスとニューナンブをガンロッカーに置いた後、アリアに話しかけた

「今日は楽しかったな」

「そ、そうね！」

「何にをテンパってるんだ？」

「べ、別に！！」

気がついたらタカとのデート状態だったことにテンパってるんだろうなと思いながら

俺はアリアにこう言った

「で、魔剣との戦いは近いんだろうな？」

「たぶんね・・・」

「勝てると思うか？」
「思うじゃなくて、勝たないといけないのよ！分かってるの！？」
「分かってるって」
「ホントに？」
「ホントだ、少しは信用しろ」
「ま、まぁ、アンタがいたほうが心強いのは確かなんだし信用するわ！」
「そりゃ、どうも」
「あ、アタシ先に寝るわ！」
「もう俺も寝るわ」
「お、襲わないでよ！！」
「襲うほどの価値もないよ」
「なんですってぇー！！」
「うるせぇ、寝るぞ」
そんな会話をしながらベッドに付いた俺とアリアは眠りに落ちていった

## 決戦前の休暇（後書き）

どうも、白石です

はい、今回が夏休み最後の更新になります、明日から学校です（泣）

今回は決戦前の一休み、キンジが白雪を花火大会に釣れだしている間の出来事だと思ってください

次回から、本格手にジャンヌとの戦闘が始まります

後輩の竹崎の救助作戦で破壊された８９式の代わりにアリアがタカに渡した

新しい相棒のＭ４カービンとシルバーのデルタエリートが火を吹きます！

乞うご期待下さい！！

あと、ラルドさんからのタカの派遣要請により、『緋弾のアリア～黒と紫の邂逅～』にもタカが派遣されたのでよろしくお願いします！！

しばらく間が開くとおもいますが、気長にお待ちください

では、次回もお楽しみに！！

**緊急指令：魔剣、行動を開始！直ちに合流後迎撃せよ！！**

ゴールデンウィークも終わり、ついにアドシアードが始まった

体力が減って衰弱し重くなった体で俺はＭ４カービンを肩にかけて、とりあえず係の仕事である見回りをしていた

本来なら、後輩で弟分の竹崎がいる筈だが、先日、ランパンというイ・ウーの対抗組織とやらに誘拐されて重症をおったのである

そして、誘拐された竹崎の救助作戦で俺は竹崎の幼なじみの綾先輩、キンジの戦兄妹で竹崎の中学校時代からの友人風魔陽菜

アリアの戦姉妹の間宮あかり、竹崎の恩人兼師匠兼パートナー（自称）の荒井玄司と

間宮の友達の火野ライカ＆佐々木志乃を動員しての壮絶な救助作戦をしたのである

その救助作戦で俺は８９式を太公望に破壊された、

この事を聞いたアリアがスローモーで消費した体力を回復するためのレッドブルを飲みながら帰ってきた俺の前にドカッとライフルケースを置いた

そのライフルケースの中にこのＭ４カービンが入っていたのである

Ｍ４カービンはクレーンストック、Ｍ２０３グレネードランチャー、ダットサイト、レーザーサイトを搭載した豪華仕様である

これを俺に渡したアリアは

「べ、べつにアンタのためじゃないんだからね！！、に、任務で武器がないのわまずいと思ってのことよ！」

といつものツンデレぷりっを発揮していた

で、今日は腰のホルスターに入っている拳銃はいつものＰ－１４・４５ではなく３５７マグナム並の威力を誇る１０ミリオート弾を使用する、デルタエリートが入っている、それにＭ４のマガジンポーチの一つにＭ８４を突っ込んでいる

いつもの装備では勝てるわけがないからである

まあ、そんな状態でとりあえず係の仕事の見回りをしていたら美女に話しかけられた

「あ！鷹山君！！」

「あ、京乃宮先輩」

「この前は竹崎の救助作戦はお疲れ様、頼りになったわよ、さすが祐太の『お兄ちゃん』ね」

「やめてくださいよ、先輩の方こそ活躍していたじゃないですか」

とまぁ、こんな感じでこの前の竹崎救助作戦の事を綾先輩と思い返していた時であった

ブー、ブー、ブー　と俺の携帯がなった

「先輩、ちょっとすいません」

『あ、先輩！』

「どうした希？」

電話の声は俺の戦妹（いもうと）の希であった

『会長、いや、白雪先輩がメールを見て生徒会のテントから離れました』

「メールを見て白雪が持ち場から離れた？」

『トイレに行くと言っていましたが、どうも怪しいので尾行します』

「わかった、すぐ行く、どこに向かっている？」

『女子更衣室の方です』

「ＯＫ、気づかれないように尾行しろ、俺も合流する」

そう言って俺は携帯を切った

「なにかあったの鷹山君？」

「いえ、こっちの方の問題です、ちょっと失礼します」
そう言って俺は綾先輩と分かれ希のいる女子更衣室に向かった
その時、先輩の方
「なんか怪しいわね」
「なにが怪しいですか先輩？」
「あ、新井君！さっきの鷹山君の様子見た」
「ええ、ちょっと何か覚悟したというか、『時は来た！！』みたいな状態でしたね」
「やっぱりタダ事じゃないわね、荒井君着いてきて！！」
「あ、先輩待ってくださーい！！」
俺は綾先輩が後輩の荒井を連れて尾行していることを知るはずがなかった
俺は女子更衣室の近くの壁に隠れていた希と合流した
「希、白雪は？」
「更衣室の中です」
「よし分かった、ここから先は俺が対応する、お前は持ち場にもどれ」

「え？」

「お前には魔剣は危険だ、俺が相手する」

「で、でも今日の先輩、何か疲れているようですけど」

「大丈夫だ、魔剣とは第二次朝鮮戦争で一度戦っている奴の戦術パターンはある程度知っている。
それにアリアとも合流するから問題ない」

「先輩・・・」

その時、白雪が更衣室から出てきた

「よし！言った通りにするんだぞ！！」

そう言って俺は希を置いて白雪の後を追う

（先輩、大丈夫かな・・・、敵は魔剣だけじゃないような気がするんだけど・・・けど、相手は魔剣だしDランクの私じゃ戦えないよね、けどやっぱり・・・）

希がそう思っている矢先にタカの後を追ってきた綾と荒井が希を見つけ話しかけた

「あなた、鷹山君の戦兄妹の風連希ちゃんね」

「あ、はい、どちら様でしょうか？」

「私は京乃宮綾、３年の強襲科よ」
「俺は１年の荒井玄司だ」
「どうも、１年の強襲科の風連希です」
「で、鷹山君は？」
「白雪先輩の後を追っています」
「何で白雪先輩の後を追っているんだ？」
「実は、白雪先輩を魔剣が狙っているということで鷹山先輩とアリア先輩でボディガードしていたんです」
「つまり、魔剣が行動を開始したからさっきの状態ね」
「鷹山先輩は魔剣と対決しに行ったということ！？」
綾はさっきのタカの行動を思い返しながら、やっぱりなにかあったという表情を顔に表す
荒井は今の状況に驚いている
「鷹山君はどこに行ったの？」
「さっき白雪先輩の後を尾行し始めたばかりですし、まだそんな遠くには」
「分かったわ、荒井君着いてきて！！」

「了解！先輩！！」

「・・・」

希は綾達と付いて行くべきか、タカの行ったとおりにするか悩んでいた

Dランクの自分が魔剣との戦闘に投入されたらタカ達の足手まといにもなりかねない、

しかし、タカの今の状態は素人目から分かるほど衰弱していた

そんな、希を見て綾は手を伸ばし

「一緒に着いてきて」

「え、でも・・・」

「鷹山君の事が心配なんでしょ？」

「はい」

「鷹山君はあなたを危険な目に合わせないためにもついてこないように行ったんでしょうけど、その選択は私は間違いだと思うわ、だから正しい選択を教えないとね」

「はい！！」

そう言って希は綾、荒井と共にタカの後を追い始めた

そのことに気づかないタカは走りながら携帯でアリアに連絡を取っていた

「アリア、魔剣が行動を開始した」

『わかってるわよ、白雪は？』

「今、後を追っている」

『どこにいるの？』

「地下倉庫方面に向かっている、白雪なら絶対立ち寄らない場所だ」

『地下倉庫・・・、まずいわね』

「ああ、早いとこ合流しよう」

そうアリアと会話をしながら、白雪の後を尾行していた、

白雪が地下倉庫の中に入っていくのを確認して俺も後をついていこうとしたその時！！

シュッ！と物凄いスピードで銃剣が飛んできたのである

俺はＭ４カービンのコッキングハンドルを素早くガチャッ！と引いて弾を薬室に送り

銃剣が飛んできた方向に向けて

ダダダダダダダダッ！！と連射する

しかし、魔剣には当たらず、魔剣は次の銃剣を投げてきた

ガキィン！と地面に銃剣が当たる音がする、俺はＭ４カービンをひたすら飛んできた方向に向けて撃ちまくる

ガチャッ！とマガジンが切れ、俺は素早くホルスターからデルタエリートを引き抜き発砲する

ズドォン！ズドォン！ズドォン！と３５７マグナム並の反動が腕を襲う

しかし、スローモーで体力の減っている俺では満足に命中させることはできず

デルタエリートがホールドオープンすると同時に銃剣が俺の眉間をめがけて飛んできた

「！！」

俺が死を覚悟したとき、ズドォン！と俺のデルタエリートよりも大きいマグナムの銃声が鳴り響き続いて銃剣が別の方向に飛んでいった

ズダダダダダダダダダ！！と２つ同時に５，５６ミリＮＡＴＯ弾が炸裂する音が聞こえた

その銃声に俺は後ろを振り向くと、Ｍ１６Ａ１と両脇に挟んだ京乃宮先輩と荒井がいた

「先輩！荒井！！」

「鷹山君大丈夫！？」

「大丈夫です！」

その時、銃剣がまた飛んできた

俺たちは遮蔽部に隠れて攻撃のタイミングを計らっていたが、こんどは銃撃が加えられ俺たちは
攻撃できずにいた、その時であった

また後ろから２つの銃声が聞こえてきた

ズダァン！ズダァン！パァン！パァン！

この２つの違う銃声でわかる、このスタイルの２丁拳銃は一人しかいない

「先輩！！」

希が右手に持ったデトニクス、左手のニューナンブＭ６０を連射しながら俺の戦兄妹の希が俺のいる遮蔽物に飛んできた

「バカ！持ち場にもどれって行っただろうが！！」

「そんなこと、言ったって先輩さっきやられかけていたじゃないですか」

「まあいい」

俺と希は弾倉を交換しながら攻撃のタイミングを見計らった

俺は声を上げて先輩と荒井に伝えた

「今から2秒後に撃ち始めるので後に続いて撃ち始めてください！！」

「分かったわ！！」

「了解！」

「準備いいな希！！」

「OKです！！」

「よし！1・・・2・・・！！」

ダダダダダダダダッ！ズドォン！、ズドォン！、ズバババババババ！！、ズダァン！バギュン！

と4人の銃が一勢に銃声を上げる

これには魔剣もたまらず一時後退した

俺達は一旦集まった

「先輩一体何で？」

「鷹山君のさっきの携帯の様子を見てなにかあったというおもって

後を着いてきたら、希ちゃんがいて
すべてを教えてもらったのよ」

「そうだったんですか・・・」

「無茶しちゃだめよ、鷹山君、裕太から聞いたけどあなたの能力は体力を使う、だからあなたの今の状態は良くないのよ、無茶したら死んでしまうわよ、あなたが死んだら裕太はきっと悲しむは」

「す、すいません・・・」

「あと、希ちゃんにも感謝しないと、あなたの危機を教えてくれたんだから」

俺は希を見て

「希、助かった礼を言う」

「いえ、当然のことです」

希は少し顔を赤らめながら、返事をしてくる、それを見た先輩は言った

「白雪ちゃんは？」

「地下倉庫の中に入りました、もう既に魔剣は中に行っているかと思います、早くしないと白雪が危ない！！」

「全員急いでいくわよ！！」

俺たちは地下倉庫の中に入った、地下倉庫は弾薬庫である、そこら辺の軍基地の弾薬庫より弾薬が入っている

銃は使えないので俺たちは格闘専用の刃物や武器を取り出した、

俺はスペツナズナイフ、京乃宮先輩はダガーナイフ、荒井はバタフライナイフ、希は特殊警棒を手に持って地下倉庫の中の捜索を始めた

そして、白雪を発見した、俺たちは耳を済ます

「どうして、私をほしがるのデュランダル。　大した能力もない私を」

怯えきった白雪の声が聞こえてくる

相手はやっぱり魔剣、いやジャンヌか、第二次朝鮮戦争以来だぜと思いながら俺は

時代がかった、男喋りの女の声を聞いた

第二次朝鮮戦争で聞いたあの声と同じである

「裏をかこうとするものがいる。　表が裏の裏であることを知らずにな。　和議を結として偽り陰でそなえるものがいる。　だが、闘争ではさらにその裏をかくものが勝る。　我が偉大なる始祖は陰の裏―すなわち光を纏い。　陰を謀ったものだ」

「何の話？」

「敵は影でステルスを練磨し始めた。　我々はその裏でより強力な

ステルスを磨く。　その大粒の原石―それも欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは自然なことよ。不思議がることではないのだ白雪」

「欠陥品の武偵？　なんのこと？」

白雪の声に怒りが交じる、それをジャンヌは嘲らう声になった

「ホームズは少々手こずりそうで、あの日本兵は少なからず衰弱しているだろう」

「日本兵・・・？、まさか！タカちゃんを！！」

「そして遠山　キンジはお前たちをばらばらにすることに一役買ってくれた」

「キンちゃんは・・・キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現にこうしてお前を守れなかったではないか」

「それは・・・それは違う！　キンちゃんはあなたなんかに負けない！迷惑を掛けたくなかったから私が呼ばなかっただけ」

フン！とジャンヌは言った

「迷惑をかけたくないか？　だがな白雪、お前も私の策に一役買ったのだぞ？」

「私が・・・？」

「電話を覚えているだろう？」

『すぐ来てくれ白雪！　バスルームにいる』

「―っ！」

白雪が息を飲む、俺も同じように息を飲んだ、それほど似ていたからだ

「ホームズは無数の監視カメラを仕掛けていたがお前たちの部屋を監視していたのは私の方だ。　お前はリビングの窓際にいて遠山の入っていたバスルームの灯が消え・・・そのときアリアが帰ってきた。私はそう言う好機を見逃さない性でな」

へぇ、随分やるじゃ無いかと俺は思いながらも心臓が高鳴るを感じていた

「キンちゃんのふりして私を動かして私たちを仲間割れさせたの？」

「後は転がる石のようにだ。　数日とかからず神崎アリアはお前たちの下から離れた。日本兵いや鷹山勇治も一緒にな」

忍び寄っていたのか、俺とキンジ、アリア、そして――――――ターゲットの白雪に

まず防衛の要の俺とアリアを遠ざけ、キンジに隙が出来るのを待って、白雪を連れ去る

「私に続け白雪、遠山に幻滅しろ、お前が身も心も捧げるべき人物は別にいる」

次のジャンヌのセリフに俺はもう一つあることに気付いた

「私がイ・ウーに連れていってやる」

俺達のいる場所の反対側で何かの反応があった、それはアリアであった

アリアも俺たちの存在に気付いた、俺とアリアはアイコンタクトでタイミングを見計らう

「しかし、今回は誤算が一つあった。お前の性格を読み違えていた。約束は守るタイプだと思っていたのだが」

「『遠山キンジ、鷹山勇治には手を出さないで欲しい』だが、お前はその裏で二人を読んでいる」

俺の存在に気付いていたのか、そしてキンジもと思った矢先

「白雪逃げろ！！」

とキンジが叫びながら魔剣に飛びかかっていったが、すぐに魔剣の罠にはまってしまった、俺は

「アリア！！」

「分かってるわよ！！」

「全員俺に続け！！」

アリアがとび出すと同時に、希たちといっしょに飛び出した！！
俺とアリア、そして希たちの存在に気付いたジャンヌは銃剣を投げてくるが
俺とアリアはスペツナズナイフと日本刀ではじき飛ばす
バシュッ！と俺はスペツナズナイフの刃先を飛ばしキンジがかかっている罠を破壊して
すばやく、８９式銃剣に持ち替えた
「バカキンジにしては随分役にたったじゃない」
「朝鮮戦争以来だな魔剣、いやジャンヌ！！」
「ホームズと日本兵いや鷹山勇治か」
「ジャンヌ！未成年者略取未遂の容疑で」
「逮捕するわ！！」
立ち上がりバタフライナイフを持つキンジ、日本刀を持つアリア、８９式銃剣を持つ俺、特殊警棒の希、
京乃宮先輩はダガーナイフ、荒井はバタフライナイフを持ち全員でジャンヌの前に立ちはだかった
そして、ついにジャンヌとの戦いが始まったのである！！

**緊急指令：魔剣、行動を開始！直ちに合流後迎撃せよ！！（後書き）**

どうも、白石です。

アニメ7話部分終わりました！まあ、微妙な終わり方してますけど

とりあえず、かなり原作と変わっているので作者の能力ではこれが限界です（サーセン）

来週からテスト期間前なので更新が出来ません、お許しください！！

次回の内容はついに始まったジャンヌとの対決！！

ジャンヌはイ・ウーから渡された試作品の戦闘用ロボットを投入してくる

希と綾、荒井はタカとアリア達にジャンヌを追わせるため、この戦闘用ロボットを

相手する！！

次回は、綾さんのＭ１６Ａ１、荒井のオートマグとデザートイーグル、そして、

希のデトニクスとニューナンブを撃ちまくる回になりますので希の初戦闘を

ご期待ください

では、次回もお楽しみに！！

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：前編（前書き）

ついに、タカ達の前に姿を表した魔剣（デュランダル）ことジャンヌ

タカは戦兄妹の希、弟分の後輩、竹崎の救助作戦で共に戦った荒井

玄司、綾先輩と

共に駆けつけたのであった！！

今回は、倉庫内で魔剣たちと対立しているところから話を始めよう

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：前編

「ジャンヌ！未成年者略取未遂の容疑で」

「逮捕するわ！！」

俺とアリアの声が地下倉庫に鳴り響く

ジャンヌは姿は見えないが、俺たちに向かって銃剣を投げてくる

ガキィン！ぎぎんっ！とアリアと俺は日本刀と８９式銃剣ですべてはじき飛ばした

「何本でも投げくれば？こんなのバッティングセンターみたいな物よ」

アリアが日本刀をバットのように構えると――――――

がちゃん・・・と、どこかの扉が閉まるような音がした

「逃げたな」

俺は８９式銃剣を銃剣入れに戻した後、地面に刺さったスペツナズナイフの刃先を柄に戻しながら言う

「まぁ、少しは役にたったわね。バカキンジも」

「な、なんだよそれ？」

「勇を使え蛮を使え。　賢を使え愚を使えっていうでしょ？　バカキンジモードのバカキンジにもそれなりに使い道はあるのよ」

「っていうか、タカ、お前いつの間に増援したんだよ」

「俺が頼んだのじゃなくて、あっちの方から着いてきたの」

俺は綾先輩たちの方向を指さしながらそう言う

「どうも、遠山先輩、荒井玄司です」

などと、荒井と綾先輩は軽く挨拶をした後、綾先輩がアリアに聞いてきた

「アリアちゃん、魔剣はこの後どうすると思うの？」

「ああいう策士は計画に歪みが生じると全てを無にしようとする傾向があります　だとしたら改めて戻ってきて白雪を殺そうとする可能性もある。　まずは、白雪を開放しないと」

そうアリアが言ったときであった、くぐもった音と同時に

排水口から海水が逆流して、1分も立たないうちに足元は水浸しになった

俺たちは急いで白雪を探した、そして白雪は倉庫の壁に鎖で縛られていた

「白雪！大丈夫か！？」

俺が真っ先に駆け寄り、白雪の口を塞いでいた布を取る

「タカちゃん、キンちゃん大丈夫！？　ケガとかしなかった？」

「ああ、大丈夫だ」

そう言いながら、白雪を縛っている鎖をガチャガチャと何とかして破壊しようとする

「白雪、魔剣は？」

「あっちの方向に行ったわ」

「荒井、希、追撃しろ！！」

「了解！！」

「分かりました！」

「綾先輩、二人を頼みます！！」

「任せといて、鷹山君達は白雪ちゃんを救助して！！」

「了解です！！」

綾先輩、荒井、希の3人がジャンヌを追撃している間におれたちは白雪を拘束している鎖を何とか破壊しようとしていた

俺が悪戦苦闘しながら鎖を破壊している中、白雪はキンジに話しかけていた

「キンちゃんごめんなさい・・・私ここに・・・この服で誰にも内緒でこないと学園島を爆破してキンちゃんを殺すって・・・」

「いつからいわれてたんだ？」

「昨日キンちゃんが線香花火を買いに行ってくれている間に脅迫メールが来て・・・私キンちゃんが傷つけられるのが怖くて・・・従うしかなくて・・・ふぇ・・・ぇ」

「今となっちゃどーでもいいことだ」

俺は悪戦苦闘しながら白雪に言う

白雪は俺の言葉で涙を止めた、そしてアリアを見ながら

「アリアもごめんね・・・私アリアにあんなひどいことばかりしてたのに・・・助けに来てくれたんだね」

白雪に言われたアリアは「えっ」と少し赤くなる

「あ、あたしは依頼を受けたからあんたを守ってただけ。　あたしの目的はデュランダルを捕まえることなの。　だから感謝なんてしなくていい」

いつも通りのツンデレである

「ごめんね、タカちゃんもこの前、ものすごく激しい戦いをしたばかりだっていうのに」

「別に、戦時中はこんなのが毎日だったからな」
そう冷静に言うが、実際はかなりヤバイ状況になっていた
もう既に水は腰より上に来ているし、鎖はびくともしない、その時
キンジが俺とアリアにこう言った
「タカ、アリア、ここから俺がやる、お前たちは魔剣を追撃しろ」
「バカ言うなよ、泳げないアリアならともかく俺は大丈夫だ！！」
「浮き輪があれば泳げるもん！！」
「戦場じゃそう都合よく物資があるわけじゃないんだよ！！」
「け、けどキンジとアンタを見捨てることなんて・・・」
「タカ、お前もアリアと向かってくれ」
「何でだよ！？」
「お前たち二人が戦闘に関してはプロだ、早いこと魔剣を倒して鍵を持って戻ってきてくれ」
「分かった、行くぞアリア」
「分かったわよ・・・」
そう言うと、アリアと俺は魔剣を追撃するべく走りだした

俺は走りながらキンジにこう言った

「キンジ、白雪を確実に救助しろよ！できなかったら軍法会議無しで銃殺だ！！」

「分かってる！！」

俺とアリアははしごを登ってスーパーコンピューター室に出る

ここには危険物は無い、銃が使える

俺は背中にかけていたＭ４カービンを手に取り、コッキングハンドルをジャキリ！と引く

世界最強の軍隊のアメリカ軍で使われる最新のアサルトカービン銃だけあって海水程度では故障しない

アリアも同じようにジャキッ！とガバメントをスライドさせて銃を使えるようにしていた

俺とアリアは周囲を警戒しながら、ジャンヌを捜索する

しばらく進んだところで後ろ姿でもかなり目立つ希を見つけた

「希、魔剣は？」

「先輩！まだ発見できませんが綾先輩はかなり近いと言っています」

「綾先輩は？」

「先行しています」
「誘導してくれ」
「了解！」
ニューナンブとデトニクスを構える希が先導する中、俺とアリアは銃をあっちこっちに向けながら
綾先輩たちと合流した
「綾先輩！」
「鷹山君とアリアちゃんか、白雪ちゃんは？」
「キンジが救助しています」
「置いて来ちゃったの！？」
「大丈夫ですよ、キンジの奴なら出来ます、じゃなければ竹崎が憧れませんよ」
「そうよね、出来なければ裕太が憧れる人じゃないわね」
そう綾先輩と会話しながら俺たちはジャンヌを追撃しようとした矢先であった
「クズが大勢来たか」
地下倉庫で聞いた、ジャンヌの声がまた聞こえた

俺たちは銃を一勢に構える

「私の戦闘パターンに合わないな、まさか使うことは無いと思っていたのだが使うハメになるとはな」

そう言うと、俺達の前に機械音がする中、変なモノが現れた

そいつは、戦闘用ロボットであった

右手にドラムマガジンのトンプソンサブマシンガン、左手にＭ１６のコンパクトモデルのパトリオットピストル（ドラムマガジン付き）を持ち、肩に火炎放射器みたいなものが付いていた

そして、その戦闘ロボットは俺たちにトンプソンとパトリオットピストルを向けて

ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

と一斉に銃撃を加えてきた

俺たちは一勢にスーパーコンピューターに隠れる

バギュン！バギュン！バギュン！とスーパーコンピューターにあたって破損したコンピューターから火花が上がる

「先輩なんですかアレ！？」

希が遮蔽物に隠れながら俺に聞いてくる

「予想だけど、ありゃ冷戦時代にアメリカ軍で極秘開発されていた戦闘ロボットのＥＤ２８７だな」

「何で知ってるのよ！？」

一緒に隠れていたアリアが聞いてくる

「戦時中にアメリカ軍の持っていたアメリカ陸軍発行の雑誌の中に書いてあったんだよ！！」

俺はそう言うと、対岸のスーパーコンピューターに隠れていた綾先輩に話しかける

「綾先輩！これじゃ埒ががあきませんよ！！」

「そうね、今の状況だと埒があかないわね！」

綾先輩はＭ１６Ａ１のマガジンを変えながら答える、その時荒井が

「こんなもの楽勝だぜ！！」

とか言って飛び出した瞬間であった

ズダドドドドドドド！！

とトンプソンを食らっていた

「ぐあああああ！！」

「あー！このバカ！！」

俺はトンプソンとパトリオットピストルから飛んでくる銃弾を交わしながら

荒井の首根っこを掴んで近くスーパーコンピューターに隠れる

「このバカ！トンプソンは無駄に連射していても制御しやすいんだよ！！」

「何で知ってるですか？」

「自衛隊時代に撃ったことあるんだよ！」

実際に訓練学校で使ったことがある、というか第二次朝鮮戦争でも９０式戦車とかの中に入っていたし

「大丈夫か？」

「大丈夫です！もう一度攻撃します！！」

「待て！」

俺の静止も聞かずにまた飛び出したで有無を言わずに

ゴオオオオオオオオオ！！

「ギャアアアアアアアア！！」

「このバカ野郎ーーーー！！」

火炎放射器で焼かれてものすごい勢いで俺の所に戻ってきたのである

「ウオアチチチチチ！！」

「少しは学習しろ！！」

炎上している荒井を消火しているとスプリンクラーが作動して水が降ってきた

それでも炎上している荒井を消火していたら綾先輩がやって来て荒井を消火しながら俺に話しかけてきた

「鷹山君、いまの荒井くんの突撃で大体のアイツの戦闘能力が分かったわ！！」

「本当ですか！？」

「ええ、本当よ、アリアちゃん！希ちゃん！こっちに来て！！」

銃弾飛び交う中、ガバメントとデトニクスを撃ちながらアリアと希がこっちにやって来た

「作戦を説明するわ！」

コンピューターに隠れながら、綾先輩が俺たちに作戦の説明を始めた

「今から2つに班を分けるわよ、鷹山君とアリアちゃんは魔剣を追撃、私と希ちゃん、荒井君はアイツの相手をするわよ！！」

「「「「了解！！」」」」

「鷹山君のＭ４カービンに付いているＭ２０３でアイツを撃って、ひるんだ隙にアリアちゃんと二人で強行突破して！！私たちは鷹山君とアリアちゃんの援護とアイツを始末するわよ！！」

綾先輩がそう言うと俺たちは、戦闘態勢についた

「鷹山君！今よ！！」

綾先輩がそう言うと同時に俺のＭ４カービンに付いているＭ２０３から

ポンッ！という軽い音同時にグレネード弾が発射された

「行くぞアリア！！」

「分かってるわよ！！」

俺とアリアはＥＤ２８７にグレネード弾が着弾する前にスーパーコンピューターから飛び出して走りだした

ドガアアアアアン！！

とグレネード弾が着弾すると同時に俺たちはＥＤ２８７の両脇を通り抜けていった

俺たちが通り抜けると同時に綾先輩達が一勢に後ろから銃撃を加えて援護する中、俺たちはジャンヌを

追撃するべく走っていった

その一方でタカとアリアを援護した希たちは、ＥＤ２８７との戦闘に入っていた

スダァン！バギュン！、ズドォン！ズドォン！、ババババババババ！！

とデトニクス、ニューナンブ、オートマグ、Ｍ１６Ａ１が火を噴くバギュン！バギュン！バギュン！とＥＤ２８７に当たるがこの程度の命中ではびくともしないようである

「クソ！なんて頑丈なんだよ！！」

荒井がデザートイーグルを撃ちながら、そう叫ぶ

その時、荒井のいる場所が突然吹っ飛んだのである

「グワァァァァァ！！」

と叫びながら荒井は吹っ飛んで気絶していた

その様子を見て綾と希はＥＤ２８７を見る、

「随分と重武装なのね！！」

「リニアカノンですよねアレ・・・・」

ＥＤ２８７の左肩には小型のリニアカノンが出てきたいた

「アレじゃ荒井くんも気絶するわね・・・」

「そうですね、先輩」

「アライくんを助けるわよ！援護して！！」

「了解！！」

希はそう言うと、ニューナンブをホルスターに戻して腰のホルスターから2丁目のデトニクスを取り出した

「行くわよ！！」

綾がコンピューターから飛び出した後、希はデトニクスを乱射しまくる

バギュン！バギュン！バギュン！バギュン！

希の援護射撃を受けながら綾は荒井の首根っこをつかんで引きずっていたときであった

ＥＤ２８７はリニアカノンを二人に向け、そして

バシュウウウウン！！ドガアアアアアン！！

「キャアアアアアアアアアアアアア！！」

「綾先輩！！」

そう言うと希は弾切れしたデトニクスをホルスターに戻して、ニュ

ーナンブを手に飛び出したのである

「希ちゃん来ちゃダメ！！」

綾がそう叫ぶが希の耳に入らない

ウィインと音と同時にＥＤ２８７は希にリニアカノンを向けるが希は隠れること無く真正面に立ち

ニューナンブを両手持ちして、ハンマーをガチャリ！と下げる

そして、バギュン！と一発発砲した

ニューナンブから発射された３８スペシャル弾はリニアカノンをめがけて飛んでいく

しかし、弾はずれて命中しない・・・はずであった

「”ロードチェンジ！！”」

希がそう思ったとき、弾丸は進路を変えてリニアカノンの中に飛び込んでいった、そして

ドガアアアアアン！！と爆音を上げてＥＤ２８７のリニアカノンが爆発したのであった

ガシャン！と倒れるＥＤ２８７を見て

希は綾たちのもとに駆け寄る

「大丈夫ですか先輩！！」

「私は大丈夫よ」

「俺も大丈夫だ」

荒井と綾先輩はゆっくりを起き上がる

「希ちゃんが倒したのアレ？」

「そうみたいですね」

「お前一体何やったんだよ」

「私の能力はロードチェンジといって弾丸の進路を変えてことができるんです、それでリニアカノンを爆発させて倒しました」

「裕太にも引けを取らないわね、希ちゃん」

綾がそういったとき、またウィーン！という音を立ててＥＤ２８７が再起動した

「第２ラウンドみたいだな」

荒井がそう言いながらオートマグを構える

「やるしか無いわよ！」

希達は第２ラウンドを始めるのであった

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：前編（後書き）

どうも、白石です。

なんかグダグダですけど、希の初戦闘を書きました

次回はもう少しマシに書けるように努力したいです

では、次回は希の初戦闘後編です！！

次回もお楽しみに！！

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：後編（前書き）

前回、魔剣が送り込んだイ・ウーの新兵器『ＥＤ２８７』
それは冷戦時代にアメリカ軍で極秘開発されていた戦闘用ロボット
であった
希、荒井、綾の３人はタカとアリアにジャンヌを追撃させ、
ＥＤ２８７の相手をすることにした、そして希の能力のロードチェ
ンジで
リニアカノンを破壊し、ダウンしたＥＤ２８７が再起動した所から
今回の話を始めよう

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：後編

ウィーン！という音と同時に床に倒れていたＥＤ２８７がゆっくりと立ち上がる

希達は一勢に持っている自分達の銃ををＥＤ２８７に向ける

ＥＤ２８７も希に破壊されたリニアカノンから火花を上げながら、トンプソンとパトリオットピストルを希たちに向ける

「来るわよ！！」

綾がそう叫んだ瞬間であった、ＥＤ２８７の持つトンプソンとパトリオットピストルが同時に火を吹いた

ガガガガガガガガガガガガガッ！！

トンプソンやパトリオットピストルの銃弾が一勢に飛んでくる

希達はすばやくスーパーコンピューターに隠れ、スーパーコンピューターを遮蔽物にして

スーパーコンピューター越しにデトニクスやオートマグ、Ｍ１６Ａ１を撃ちまくる

しかし、先程の戦闘でかなりの弾丸を消費しており、先の戦闘に比べて希達の銃撃は少なくなっている

「希！お前後どのくらい弾持っている！？」

「デトニクスのマガジンが後２つで、ニューナンブがあと３つ、そういう荒井くんは？」

「オートマグで２つ、デザートイーグルで１つだ！！」

「綾先輩！これじゃ弾丸不足で全滅しますよ！！」

希が今のかなりヤバイ状況を綾に伝える、この報告に綾は

「確かにね・・・」

その声は冷静ながらも危機感が感じ取れるものである

「希ちゃんも荒井くんも一度集まって、作戦を立てるわよ！！」

「「了解！！」」

そう言うと希と荒井は銃弾飛び交う中、綾のもとに駆けつける

そして、ＥＤ２８７が撃ってくる銃弾が隠れているスーパーコンピュターに当たる

「とりあえず今の状況を一言で言うと、”かなりヤバイ状況”ってことよ！！」

「言わなくても分かりますよ！」

荒井がそう言う中、希はあることを綾に指摘した

「綾先輩！メインカメラを破壊するのはどうでしょうか？」
「私も最初にそう思ったわ、けど外から見た限りではメインカメラみたいなもが見当たらないわよ！」
「一応ボツになったとは言え軍用兵器ですからね、内蔵式だろ」
「確かに荒井くんの言う通りカメラは内蔵式ね」
「とりあえずカメラを破壊さえすればこっちに勝ち目があるわけですよね？」
「そういうことになるわね」
「綾先輩！火炎放射器の燃料タンクは外付けですし、それを爆殺させればメインカメラも破壊できるんじゃないですか！？」
「・・・それに賭けてみるしか無いわね」
「やりましょう！綾先輩！！」
「わかったわ！」
それから綾は少し考えた後、荒井と希に顔を向けた
「作戦を説明するわ！」
「「ハイ！！」」

「今からアイツの火炎放射器の燃料タンクを破壊するわよ！、私がＭ１６とＵＳＰで撃ちまくるから荒井君と
希ちゃんは回りこんでデザートイーグルやデトニクスで燃料タンクを撃って！！」

「「了解！！」」

「でも気をつけてね、相当な爆発があるはずよ！距離を取ってね！！」

「わかりました！！」

「ＯＫ！！」

「よし、じゃあ全員マガジンをリロードして、リロードが終わり次第作戦を始めるわよ！！」

綾がそう言うと3人は持っている自分達の銃のマガジンを交換した

希はデトニクスのマガジンを交換した後、

ベルトにつけていた専用ケースからスピードローダーを取り出し

そして、ニューナンブをスリングアウトさせエジェクター・ロッドを押して撃ち切った弾を捨て

スピードローダーで素早くリロードする

「綾先輩ＯＫです！！」

「こっちもＯＫだ！！」

希がリロードし終えると同時に荒井もリロードを終え、綾に伝えた

「よし！じゃあ１．２．３で始めるわよ！！」

綾がそう言うと荒井と希は息を飲み体制を整える

「１・・・２・・・３！！」

綾が３と言うと同時にＭ１６Ａ１を両脇に挟んだ綾が隠れていたスーパーコンピューターから飛び出した

それと同時に両脇に挟んだＭ１６Ａ１が二丁同時に火を吹いた

ガガガガガガガガガガガガガガ！！

Ｍ１６の銃声が炸裂すると同時に希と荒井も一勢に飛び出し走りだす

綾の銃撃に対応していたＥＤ２８７は希と荒井の存在に気付くこと無く綾に向けてトンプソンとパトリオットピストルを乱射する

綾は両脇に挟んだＭ１６Ａ１が弾切れを起こすと同時にすばやく遮蔽物に隠れて

ホルスターからＵＳＰを二丁取り出して、タイミングを見てまた遮蔽物から飛び出して銃撃を加える

ガウンッ！ガウンッ！と二丁のＵＳＰが火を噴く中

荒井と希はＥＤ２８７の背後に回りこんでいく、そして・・・

「荒井君、アレ見て」

背後に回りこんだ希が指をさす、その方向にはＥＤ２８７の火炎放射器の燃料タンクが

「ああ、アレを破壊するぞ」

そう言うと荒井はデザートイーグルとオートマグを二丁拳銃で構える

希も同じようにデトニクスを二丁拳銃で構える

「１，２，３で行くよ」

「ｏｋ！！」

「行くよ、１・・・２・・・３！！」

次の瞬間、二人の持つ銃が同時に火を吹いた

ズダァン！！、ダァン！！、バゴォン！！

と４５口径、９ミリパラベラム、５０口径弾の音が地下倉庫に鳴り響く

後ろからの銃撃に気付いたＥＤ２８７が後ろを振り向こうとしたときであった

ズガァン！と荒井の撃ったデザートイーグルの４４マグナム

ズダァン！と希の撃ったデトニクスの４５ＡＣＰが同時に燃料タンクに着弾し

次の瞬間、ドガアアアアアアン！！

という爆発音と同時に燃料タンクが吹き飛び、装甲が剥がれ落ち内蔵されていたメインカメラが露出した

「希！メインカメラを撃て！！」

荒井がそう叫んだ瞬間！！

ＥＤ２８７が後ろを向き突然、希と荒井のいる方向にむけて走りだした

「危ない！！」

綾がそう叫んだ瞬間にはＥＤ２８７が荒井の顔面にめがけて鋼鉄の拳を振りかざした！！

「ぐあああああああ！！」

顔面を思いっきり殴られた荒井は５メートルぐらい吹っ飛ぶ

「荒井君！！」

吹っ飛んだ荒井を見ながら希がそう叫んだ瞬間であった

「希ちゃん！逃げて！！」

綾がそう叫び、希は再び前を向いた先には鋼鉄の腕を振りかざしたＥＤ２８７の姿があった

そして次の瞬間にはその鋼鉄の腕を振り落とした！！

綾は希の死を覚悟した、しかし、ガキィン！という音に希の方を見る

そこには特殊警棒でＥＤ２８７の腕を受け止めた希の姿が

「綾先輩！撃ってください！！」

希の呼びかけにすばやく綾はＵＳＰを発砲して援護する

ガキィン！ガキィン！と装甲に銃弾が当たる音がする中、ＵＳＰから発射された１発の銃弾が

バギィ！と装甲の剥がれ落ちた場所から露出していたコンピューターを撃ちぬく！！

ＥＤ２８７はギギィ！！という音と同時に希に振りかざしていた腕を上げた

希はその習慣に特殊警棒で思いっきり内蔵されていたカメラにめがけて特殊警棒で殴りつける

ガシャーン！という音と同時にメインカメラのガラスが割れる

希はすばやくホルスターからニューナンブとデトニクスを引き抜き

メインカメラに向けた次の瞬間には
バキューン！ズダァーン！と２つの銃声が鳴り響く
デトニクスとニューナンブの銃口からは煙が上がっている
ＥＤ２８７はさっきの希の銃撃でメインコンピューターを破壊されたらしく
バチッ！バチッ！と音を立てかと思えば、
バゴォ！という小さな爆発音と同時に床に倒れた
希はすばやく倒れてくるＥＤ２８７を避けて荒井のもとに駈け出した
「大丈夫、荒井君！？」
「ああ、大丈夫だ、けどさっきのは効いたぜ」
荒井がＥＤ２８７に殴られた際に出た鼻血を指で触りながら立ち上がろうとしたとき
ウィーン！！
という音と同時に倒したはずのＥＤ２８７が再起動したのであった
そして二人にトンプソンとパトリオットピストルを向けていた
二人は突然のことに銃を抜くことが出来ずに蜂の巣になるかと思った瞬間

バギューン！と銃声が鳴り響き、ＥＤ２８７がボン！！という音を立て完全に破壊された

二人は銃声のした方を見ると、そこには銃口から煙が上がっているＵＳＰを持った綾の姿が

「ふたりとも大丈夫！？」

「大丈夫です、綾先輩の方こそ？」

「私は大丈夫よ」

「はー、やっと逝ったか・・・」

「休む暇はないわよ二人共、急いで鷹山君たちの応援に行くわよ！！」

「「了解！！」」

３人は休む事無く、タカ達の応援に向かうのであった

## 戦闘兵器ＥＤ２８７：後編（後書き）

どうも、白石です。

あ～、やっと終わった長かった～、書き止め機能があればいいのにこのサイト

で、今回は希の戦い方や銃の使い方を書いてみました

あと、劇中で特殊警棒でメインカメラのガラスを割るシーンやＥＤ２８７の腕を
受け止めるシーンがありますけど

希の使っている特殊警棒ですけど、一応設定としては複合素材で鋼鉄の他に防弾ガラスに使われるポリカーボネイトや防弾チョッキに使われるケブラー繊維などが内部に入っている設定です

そのため、女子が持つにしてはかなり重いですけどかなり頑丈です

あと現実でも特殊警棒は鋼鉄製でその威力はコンクリートブロックを砕くほどなので実際に不可能ではないと思って書きました

まあ、ある意味、人を殺してはならない武偵にとっては最適な銃剣や日本刀より最適な格闘兵器だと個人的に思います

次回からいよいよタカ達ＶＳジャンヌとの対決です！！

第二次朝鮮戦争以来のタカとジャンヌの戦いにご期待ください！！

では、次回もお楽しみに！！

## ジャンヌ追撃！！　前編（前書き）

ＥＤ２８７と希たちが戦闘している間、タカとアリアはジャンヌを追撃していた

今回はタカとアリアが追撃している場面から物語を始めよう

## ジャンヌ追撃！！　前編

ジャンヌが投入してきた、冷戦時代にアメリカ軍で開発された戦闘用ロボットの

ＥＤ２８７を相手している間、俺とアリアは綾先輩に言われた通り、ジャンヌを追撃していた

俺とアリアはＭ４カービンとガバメントを構え右へ左へと向けながらながら足音を殺して静かにジャンヌを捜索していた

「アリア、ジャンヌは？」

「こっちにはいないわね、タカの方は？」

「こっちにもいないようだ・・・」

「アイツ、口だけは立派なくせに逃げることしか頭にないのかしら」

アリアがジャンヌを皮肉る様な言い方をしたときであった

コンッ、と金属音が近くで鳴ったのでふと金属音がした方向を見る

そこには安全ピンが抜かれ、爆発寸前の手榴弾が転がっていた

「アリア！手榴弾だ！！」

俺がアリアにそう叫んだ次の瞬間には、手榴弾が炸裂した

俺とアリアは爆発前に間一髪、コンピュータに隠れて何を逃れたと思った次の瞬間には

手榴弾が３個、飛んできて俺とアリアを分断したのである

ジャンヌが投げ込んできた手榴弾が次々と炸裂する中、俺はＭ４カービンを手に何とかしてアリアと合流しようと考えていた

アリアが前にも言った通り、魔剣ことジャンヌは集団を相手にすることは無く、一対一で敵を排除するのが戦術パターンだ、

これは俺が地点５６４上陸作戦で偵察中にジャンヌと戦った時も俺とジャンヌの一対一であった

つまり、一対一では俺もアリアもジャンヌに殺されるのは時間の問題である

そんなことを思いながら、Ｍ４カービンを持って走っていたときであった

「鷹山勇治！！、覚悟！！」

俺が後ろを振り向くとそこにいた、ジャンヌがそう叫びながら

俺の後ろから切りかかってきたのである！！

俺は素早くＭ４カービンのトリガーを引く

ガガガガガガガガガガッ！！とＭ４カービンから５・５６ミリＮＡＴＯ弾が発射される

しかし、ジャンヌはそれが飛んでくる中、引くこと無く逆に突っ込んできたのである！！

俺がそれに気付いた次の瞬間にはジャンヌの持つ大剣（聖剣デュランダル）が

俺の左腕を斬りつけたのである

「ぐあああ！！」

激痛が走る中、俺は転倒する

ジャンヌは大剣を振り上げ、俺の首を切り落とさんとしていた

俺は素早くデルタエリートをホルスターから引き抜き、ジャンヌに向けて乱射する

バゴォン！バゴォン！と１０ｍｍオート弾の銃声が鳴り響き

ジャンヌは一旦俺から離れる、俺は素早くバックアップガンのベレッタＭ８４をホルスター代わりのマガジンポーチから引き抜き

デルタエリートとの二丁拳銃でジャンヌに向けて撃ちまくる

バァン！バァン！ズドォン！ズドォン！と１０ｍｍオート弾と３８０ＡＣＰがジャンヌめがけて飛んでいく

ジャンヌはジャンプしながら大剣でデルタエリートとＭ８４の銃弾を切り落としながら後退する

俺は弾切れでホルードオープンしたデルタエリートの代わりに
さっき、ジャンヌに斬りつけられ血の出る左腕で痛みを感じながら
もＭ８４を撃ちまくりながらジャンヌを追撃する
しかし、ジャンヌが後退しながらニヤリと笑った
俺はこの顔を見て、ふとアリアが前に行っていたことを思い出した
『この間はロッカーにワイヤートラップが仕掛けられていたのよ！
！』
俺が前を向いた瞬間には、予想していた通りワイヤートラップが俺
の目の前、１メートルほど先にあった
俺はジャンヌに向けていたＭ８４をワイヤートラップに向けて
バァン！と一発撃ってワイヤーを切断する、しかし、それを同時に
ガチン！とＭ８４がホールドオープンする
「しまった！！」
と俺が叫んだ瞬間には俺はジャンヌの罠にハマっていた
ジャンヌは俺の右足をめがけて銃剣を投げつけてきた、刃物にも耐
えられる防弾制服が紙切れの様に
スパッ！と切断され血が流れると同時に俺は転倒した

転倒した次の瞬間にはキンジがハマったように俺の周りを氷が覆っていた

「クソッ！！」

ニヤリと笑うジャンヌが目の前に立っている中、俺は必死に氷を剥がそうと悪戦苦闘していた

「戦場を生き延びた悪運もここまでだな鷹山・・・」

ジャンヌが大剣を構えながら張り付いている俺に話しかけてくる

「チクショウ！！」

「あの世でゆっくりするんだな・・・」

ジャンヌは俺を殺すため、上段構えで大剣を振り上げる

次の瞬間には大剣が振り下ろされ俺の首が切断され死ぬのか・・・

と覚悟した瞬間であった

「タカちゃん！！」

「先輩！！」

二人の女子の声が聞こえ、それに次ぐように

ズダァン！ズダァン！パァン！パァン！

と45ACPと38スペシャル弾の銃声が炸裂した

「白雪!!、希!!」

「チッ!邪魔が入ったか!!」

ジャンヌがそう言う方向を見るとデトニクスとニューナンブを撃ちながらポニーテールをたなびかせ
俺の戦兄妹の希がやって来た

それと同時に白雪が走りながら日本刀(イロカネアヤメ)を抜き、大きくジャンプし

「タカちゃんに手を出すなあああああああっ!!」

ジャンヌに対して斬りかかりに行ったのである

ガキィン!とジャンヌの大剣と白雪の日本刀がつばぜり合いになる

ジャンヌが一旦距離を取り、白雪を攻撃しようとした瞬間には希が

二丁目のシルバーフレームに黒のスライドのデトニクスを取り出し

素早く白雪を援護する

「チッ!」

ジャンヌはそういうと閃光手榴弾を俺達に投げつけ後退した

「大丈夫タカちゃん!?」

「一応ね。完全にでは無いけど・・・」

白雪が氷を割ってくれ何とか床の張り付きから解放された

「白雪、さっきの氷ってやっぱり・・・」

「超能力よタカちゃん、それにＧ８ぐらいの強力な物よ」

白雪からそう言われヤッパリと思う

「先輩、血が出てますよ・・・」

「希、救急キットあるよな」

「は、はい！」

「ちょっと治療してくれ」

「わ、わかりました！！」

「綾先輩達は？」

「ここに来る途中、この前のランパンとの戦いでついた傷がまた痛み出したみたいで途中で脱落しました」

「そうか・・・」

「終わったらすぐに迎えに来てといってましたよ」

「１５分で終わらしてやるさ・・・」

希の治療を受けながら、俺は白雪に話しかけた

「白雪！キンジは？」

「ここに来る途中ではぐれちゃった・・・」

白雪は涙目になりながら、白雪はここまでの系譜を語った

キンジは白雪が逃げろといったのを無視して白雪を救助した、そして水没する弾薬庫から脱出する際に

キンジとはぐれ、破壊されたＥＤ２８７を見ながら脱落した綾先輩と荒井に会い、希と合流して

俺のもとに来たのであった

「お前はよくやったよ、それにキンジは簡単に死ぬ程ヤワじゃない」

俺は白雪を励ましながら、希の治療を終えた

「よし！キンジ達と合流して魔剣を叩くぞ、いいな！！」

「分かったわ！」

「了解！！」

俺は白雪と希を率いて、またキンジとアリア、そしてジャンヌの捜索を再開した

Ｍ４カービンを構えながら、進んでいると俺の目の前にとんでもな

い光景が飛び込んできた

「白雪先輩が二人！？」

スーパーコンピューターに隠れながら俺たちは目の前の光景に驚いていた

目の前にはもう一人の白雪がいてアリアを人質に取っていた

「ありゃ、ジャンヌがお前に変装してるんだよな・・・」

「ええ、魔剣は変装の能力も持ってるみたいね・・・」

「白雪、武偵憲章第１条は知ってるよな？」

「武偵憲章第１条、仲間を信じ仲間を助けよ」

「そうだ、アリアを助ける」

「分かったわ、タカちゃん」

「白雪、ワイヤーか何か相手の動きを拘束できるのはあるか？」

「ええ、あるわ」

「よし！じゃあ俺が足を上げて合図するから、ジャンヌの動きを拘束してくれ、俺がＭ４でジャンヌを狙撃する」

「私はどうすればいいんです？」

「お前は待機だ、ここは俺と白雪がやる」

「・・・わかりました、必ずアリア先輩を助けて下さいね」

希は今の状況を素早く理解し、俺と白雪に託した

「当然だ」

俺は希にそう言うと、白雪と一緒にスーパーコンピューターの上に登る

Ｍ４のマガジンを３０連マガジンからブローン射撃（伏せ撃ち）のし易い、２０連マガジンに替え

セレクターをフルオートからセミオートに変更し、

ダットサイトでアリアを人質に取るジャンヌに狙いを定める

そして、呼吸を整え、タイミングを図り左足を上げた

次の瞬間には白雪が

じゃりっ！と分銅付きの鎖を伸ばしアリアの首元に突きつけられた刀を取り上げた！！

そして、俺は正確にジャンヌを狙ってＭ４カービンで狙撃する

タァーン！タァーン！と２発のＭ４カービンの銃声が鳴り響き、ジャンヌがひるんだ隙にアリアは逃げ出した

それを確認した俺と白雪はこう言った

「デュランダル！私の仲間を傷つけないで！！」

「ここまでにしろ！ジャンヌ！！」

俺と白雪の叫び声が地下倉庫になり響いた

## ジャンヌ追撃！！　前編（後書き）

どうも、白石です。ちょっと長くなりましたけど「防人の４５口径」更新しました～！！

はい、今回の話の中で言えることは基本Ｍ８４はＭ３６と同じくバックアップガンですね、Ｐ－１４やデルタエリートとは違いガンガン使うことよりも弾切れの際のその場しのぎのための銃ですね

あと、今回は他の二次創作とは違い、キンジ達サイドとは違い、白雪サイドにタカを付けました

あと、綾先輩と荒井は荒木新ニさんの要望により脱落させました

次回でついにジャンヌとの戦いは決着が付きます！！

今回よりもド派手にタカ、アリア、キンジ、白雪、希を暴れさせたいと思います！！

では、次回もお楽しみに！！

## ジャンヌ追撃！！　後編　（前書き）

前回のあらすじ、

ジャンヌを追撃していたタカとアリアはジャンヌの攻撃により

離れ離れになってしまった、アリアと合流するべく行動していたタカの前に

ジャンヌが現れ、激しいデスマッチを繰り広げる

あわや絶命といった寸前に白雪と希の援護により難を逃れる

そして、アリアを人質に取っていたジャンヌを攻撃した場面から

今回の話を始めよう

## ジャンヌ追撃！！　後編

「デュランダル！私の仲間を傷つけないで！！」

「ここまでにしろ！ジャンヌ！！」

地下倉庫に俺と白雪の声が鳴り響く、この声に反応して希も右手にデトニクス、左手にニューナンブを構えながら俺たちのもとにやってくる

「はあああああああっ！！」

白雪が叫びつつ、白雪に変装しているジャンヌに斬りかかる

ジャンヌはそれに対応して防刃巫女服を翻し、刀を白小袖で掴みとろうとする

それを解放されたアリアがカンガルーキックを叩きこんで妨害する

ジャンヌはバランスを崩し後退せざるを得ない

そこを逃さんとばかりに俺のＭ４カービンと希のデトニクスが火を噴きジャンヌに銃弾の雨を降らす

ガガガガガガガガガガッ！！

バキューン！、バギューン！

ジャンヌは更に後退した

俺と白雪、希はアリア、キンジ達と合流する

「キンジ！アリア！無事か！？」

「スイマセン！遅くなりました！！」

俺と希がそう言いながら白雪は

「キンちゃん、アリア、遅くなってごめんね」

「上出来だよ、さすが白雪だ」

このキンジのセリフに白雪は少し顔を赤らめて笑みを浮かべていた

俺はＭ４カービンのダットサイトでジャンヌを捉えながら、Ｍ２０３グレネードランチャーにグレネード弾を装填していた

「どう？これで５対１よ、アンタが不利よ！！」

「戦時中に俺と殴り合ったときと同じようにさっさと諦めて投降するんだな！！」

「武器を捨てて両手を頭につけなさい！！」

俺とアリア、希がそう言って、ジャンヌに降伏するように言う

ガチャリ！と希がニューナンブのハンマーを起こす音が鳴る中

ジャンヌはさっき俺を罠にはめたようにニヤリと笑い

俺達に向かって何かを投げつけた

シュウウウウウ・・・・！と白煙が上がっていく

「発煙弾か！」

キンジはそう言った矢先に、俺は希に対して命令する

「希、撃て！！」

「はい！！」

ズギュン！ズギュン！とニューナンブが火を噴き

俺はＭ４カービンに付いているＭ２０３グレネードランチャーを撃つ

ポンッ！という軽い発射音に似合わず、

ドガァァン！というグレネード弾の炸裂音が鳴り響いた

俺と希が銃撃を加えるさなか、発煙弾の白煙に反応しスプリンクラーから水が降ってきた

ガキィ！とＭ４カービンが弾切れを起こすと同時に俺と希は銃撃をやめた

俺と希の銃撃が止むと同時にジャンヌが

「ふふふ・・・、ここまでが前座の余興だ」

そうジャンヌは言うなか、白煙は消え去り、さっきまでジャンヌが来ていた巫女服が落ちていた

俺は弾切れしたM４カービンを左手で持ち、

右手でデルタエリートをホルスターから引き抜き、片手で構え周囲を警戒する

希もニューナンブをホルスターに戻し、腰の方のホルスターからシルバーフレームに黒のスライドのデトニクスを抜き、両手持ちして周囲を警戒していた

「御託(ごたく)はいいから早く出てきなさい！！」

アリアがそう叫ぶがジャンヌは姿を見せず、スプリンクラーから水が降ってくる音だけが鳴る

これに業をを煮やしたアリアが日本刀を引きぬくが・・・

「うっ！！」

ガチャン！と日本刀がふたつ地面に落ち、アリアは手をしびれさせていた

「アリア、手を貸して」

白雪がこのアリアの様子を見て治療に入る

さっきの様子から見てアリアは凍傷を負っているようである

「ちょっとしみるよ・・・」

この白雪の治療には痛みが伴う、さっきの俺がジャンヌに足を斬られた際にも凍傷になっていた

それをアリアと同じように白雪が治療してくれたが、かなりの激痛であった

俺はデルタエリートのマガジンをかみながら声を抑えて治療を終えた

「・・・あっ・・・・・！んくっ・・・・・・！」

アリアはジャンヌにバレないように声を殺しながら治療を受けていた

白雪の手から明るい光が見える、さっき俺も同じことをやってもらったはいえ、不思議な光景である

キンジも希も食い入る様にこの光景を見ていた

数十秒の間であったが、治療を終えたようである

「もう大丈夫、アリア」

「あ、ありがとう白雪・・・」

「でも、この氷は強い氷、私の力で癒しても元に戻るのにしばらくかかる」

そう言うと、白雪は俺達の方に向いて

「だから、アリアをキンちゃん、タカちゃん、希が守ってあげて」
そして、白雪は一回、呼吸してこう言い放った
「敵は私一人で倒す」
「バカ言うなよ・・・」
「無茶ですよ会長・・・」
俺と希が、そう白雪に言うと白雪はニッコリと笑いながら
「大丈夫、私を信じて」
俺と希はこれに対して
「分かった」
「分かりました、会長」
そう答えた、矢先であった
「随分、感動的だな・・・」
ジャンヌの声が鳴り響くと同時に地下倉庫の中が凍り始めたのであった
俺はM4カービンのマガジンを替え、希はニューナンブをスリングアウトさせ、

撃った38スペシャル弾を捨て、スピードローダーで再装填する、
キンジはベレッタを構えた
俺たちが銃を構えると同時に、白雪は俺たちが銃を向ける方向にいるジャンヌに話しかけた
「ジャンヌ・・・もう、やめよう。　私は誰も傷つけたくないの。
それがあなたであっても」
「フン！笑わせるな、原石でしかないお前にイ・ウーで研磨された私を傷つけることなどできん」
そうジャンヌが言うと更に地下倉庫の中が凍り付いていく、俺たちはこの光景に驚きながらも、
すぐに前を向く
そして、第二次朝鮮戦争で俺と戦った時、さっき戦った時と同じヨーロッパの騎士の格好をしたジャンヌが姿を表した
俺たちは戦闘態勢を取る、ガチャリ！とまた希のニューナンブのハンマーを落とす音が聞こえる
「お前は星伽を裏切れない、それがどういうことを意味するかわかってるからな」
「ジャンヌ、策師策に溺れたね」
白雪の声が強まる。

「それは今までの私、でも、今の私は星伽のどんな掟だって破らせるたったひとつの存在のそばにいる」

「何？」

ジャンヌが明らかにさっきまでの声の様子とは違う声を上げた

「キンちゃん、タカちゃん、希、アリア・・・、ここから私を見ないで」

「・・・白雪？」

「何を言い出すんだお前は？」

「会長？」

これから私は星伽に禁じられている技を使う。　でも、それを見たらきっと皆、私のこと怖くなる。　きっとありえないっておもう。
　嫌いに・・・なっちゃう」

俺はその白雪の言葉に俺はこう言い放つ

「安心しろ白雪、もうとっくに戦時中にありえない光景は見慣れた、人間が一瞬にしてトマトケチャップやらミンチ肉なる瞬間に比べりゃ、お前のはまだ可愛いくて仕方ないもんだ」

「会長は、どんなことしても会長ですよ」

「白雪、安心しろ。　俺がお前を嫌いになることはありえない」

俺たち3人がそう言うと白雪は安心したようである、
そして微笑んだ顔を向けながらリボンを振りほどいた
「ジャンヌ、あなたをもう逃すことはできなくなった」
「？」
「星伽の巫女がその身に秘める。禁制鬼道を見るからだよ。私たちもあなたたちと同じようにしその力と名前をずっと継いできた。アリアは１５０年。　あなたは６００年。　そして、私たちは２００年ものの永い時を・・・」
白雪が持っている日本刀に力を入れた時、日本刀の炎が上がりそれが刀全体に広がっていく
「炎・・・」
今、明らかにジャンヌが後退した、ジャンヌは炎が怖いのだ、祖先を殺したときと同じように
「白雪という名前は真の名前を隠す付せの名。　私の諱、本当の名前は緋巫女！！」
そう言うと、白雪は地面を蹴り一気にジャンヌに斬りかかる
ジャンヌは後ろに隠していた大剣で白雪の攻撃を受け止めると火花ではなく
ダイヤモンドダストが上がる

「今のは星伽候天流の初弾、火焔毘、次は緋火虞槌―その剣を切ります」

白雪は炎の剣を頭上に掲げる。

「それでおしまい。　このイロカネアヤメに切れないものはないもの」

「それはこちらのセリフだ！　聖剣デュランダルに切れないモノはない」

そのジャンヌのセリフ道理、白雪とジャンヌが戦っている周りのものは全て真っ二つに斬られていた

だが、斬れていないものが2つある、それは白雪のイロカネアヤメとジャンヌの聖剣デュランダルで会った

「これが超偵の戦いなのね」

「ああ・・・」

「す、凄い・・・」

希が驚愕の声を上がる中、俺はアリアに話しかけた

「アリア、お前の銃は？」

「この有様よ・・・」

アリアが指をさす方向を見てみると、ガバメントが床に張り付いていた

「はがしても使えない。あたしの銃は寒冷地仕様じゃないの。完全分解して整備しないと多分生き返らないわ」

「ベレッタＭ８４使うか？」

「いいわ、刀で奴を倒す」

これを聞いた希がアリアに話しかける

「アリア先輩、マガジンはまだあります？」

「あるけど、どうするのよ？」

「私のデトニクスは普通のガバメントのマガジンも使えます」

そう希が言うと、アリアは納得したように残りのマガジンを希に渡す

アリアからマガジンを受け取った希は弾の少なくなったマガジンをガシャン！と地面に落として

アリアからもらったノーマルのガバメントのマガジンを装填する

もう一つのデトニクスも同じようマガジンを装填する

希がそれを終えたのを見て、キンジがアリアに話しかける

「もう大丈夫かアリア？」

「ええ、白雪に加勢するわよこの戦い長くは続かない」
「ああ、ステルスで大きく精神力を消費する」
「つまりいずれかはガス欠を起こす」
俺がそう言うと、希は
「つまり、それが攻撃のチャンスですね」
「そういうことよ、希」
そう言うとアリアはキンジの方を向き、キンジに問いかけた
「キンジ、アタシを信じられる？」
「ああ、一生俺はアリアを信じ続ける」
まさかの反応にアリアが驚きながらもアリアは嬉しそうであった
「タカ、希、お前たちも信じるよな」
「ああ、当然だ」
「あたりまえじゃないですか」
「アリアも俺達を信じてくれるよな？」
「え、ええ！！」

俺のこの問にアリアは恥ずかしいながらも答えた

「よし、じゃあアリア頼んだぞ！！」

「うん！」

そう言うとアリアは日本刀を持つ、そして俺たちは銃を構えた

俺のＭ４カービン、希のデトニクス、キンジのベレッタが今か今かとその時を待っていた

ガキィン！ガキィン！と白雪とジャンヌの剣がつばぜり合いに鳴る

「白雪！」

「待てキンジ！！」

飛び出そうとしたキンジを抑える

「落ち着きなさい！キンジ、白雪はあと一回だけ力を残している」

「ああ、それも核爆弾並みにでかいのをな！！」

「今、白雪はそれを圧縮しているは！！」

そんな会話をしていた時、つばぜり合いになっていた白雪とジャンヌでジャンヌの方が声を上げた

「見せてやる！『オルレアンの氷花』――――銀氷となって散れ―

――――！！」

ジャンヌの持つデュランダルが白銀の光を包んだ次の瞬間

「行くわ！！」

アリアが弾丸のように駈け出した

「ただの武偵ごときが！！」

怒りに身をまかせるようにジャンヌがデュランダルをアリアに向ける

アリアはそれよりも早く、さっきの巫女服でジャンヌの攻撃を防ぐ

青い光の奔流が天井を一気に凍らせていく

俺たちはアリアに続いていく

ガガガガガガガガガガッ！！と俺のＭ４カービンに続いて、

バギュン！バギュン！と希の持つ二丁のデトニクスが火を吹いた

そして、３点バーストにしたキンジのベレッタがガガガッン！と火を吹いた

俺と希はジャンヌは横を通り過ぎ、キンジはベレッタをアリアに投げ渡し

ガキィン！とジャンヌの振りかざしたデュランダルを白刃取りしたのである

「武器を捨てなさい！！」

「降伏しろ！！」

アリアがキンジのベレッタを受け取り、俺はホルスターからデルタエリートを抜き、希はニューナンブを抜きジャンヌに突きつけた

「もう、おとなしくしたほうがいい、これで一件落着だ」

「まだだ、武偵法9条、武偵は人を殺せない、だが私は違う！！」

そうジャンヌが言うと、デュランダルが凍り始めた

俺たちが驚いた瞬間であった、

バギューン！と一発銃声が鳴り響いた

「ぐあっ！」

ジャンヌが痛がった瞬間であった

カッ！カカカッ――――！

という下駄を鳴らす音についで白雪が叫びながら駈けてきた

「緋緋星伽神――――！！」

白雪が刀を振り下ろした時、ジャンヌの持つデュランダルが真っ二つになったのである

そして白雪の刀から上がった炎は巨大な焼夷弾の様に触れていない天井の氷まで一気に溶かした

「私の・・・、聖剣デュランダル・・・」

ジャンヌは驚き、ただ立ちすくむことしかできない

「そこまでだ！！」

俺がジャンヌにデルタエリートを突きつけると同時に

「魔剣！逮捕よ！！」

アリアがジャンヌに手錠を掛けたのである

ふと、希の方を見てみると、持っているニューナンブの銃口から煙が上がっていた

さっきの銃声は希のニューナンブによるものであった

「ナイスフォローだ、希」

「い、いえ・・・、つい条件反射で撃っちゃいました」

「条件反射でもナイスよ、希」

俺とアリアがジャンヌを拘束しながら、希の行為を褒めていた時

白雪が床に座り込んだ

「大丈夫か、白雪？」

「キンちゃん、怖くなかった・・・？」

「怖いもんか。とっても綺麗で、強い炎だったよ、この前の打ち上げ花火より、ずっとな」

「キンちゃん・・・・、う・・・・うあ・・・・」

泣き出した白雪をキンジが抱きしめるのを見ながら、この事件が終わったのを確信したのであった

## ジャンヌ追撃！！　後編　（後書き）

どうも、白石です。

あ～、やっとジャンヌとの戦闘を書き終えたぞ、バンザーイ！！長かった～！！

次回で魔剣編は完結！！何気に一番長かったような気がするなぁ～、魔剣編

あと、希がデトニクスにアリアのガバメントのマガジンを装填する場面が

ありますけど、これは東京マルイ製のガスブローバックガンを見て思いつきました

今回は希の活躍らしい活躍といえば最後のジャンヌをニューナンブで撃って痛がらせる程度ですかね？

希、目当ての人スイマセンでした！！

番外編ではこれでもかと活躍させますので！！お許しください！！

では、次回もお楽しみに！！

**作戦会議　内容：麻薬密売現場の取り押さえ（前書き）**

アドシードが終わり、通常の武偵としての日常が戻ってきたタカ達

しかし、この時点でタカは自分を待ち受ける試練があるとは

思いもしなかった・・・

## 作戦会議　内容：麻薬密売現場の取り押さえ

俺に戦兄妹ができたり、後輩で弟分の竹崎が誘拐されて、

救助のために太公望と戦ったり。竹崎が一度死んで生き返ったり。

魔剣ことジャンヌと第二次朝鮮戦争以来に戦ったりと

何かとありすぎたアドシードが終わり、俺はいつもの様に強襲科の射撃訓練をこなしていた

バンッ！バンッ！と５０メートル先のターゲットをＰ－１４、Ｍ３６チーフ、ベレッタＭ８４で撃ち抜いていく

誤差１ｃｍ以内、特殊部隊なら基本のスコアだ

俺は撃ちぬかれたターゲットを見ていたその時、

「ああ、タカ。射撃訓練していたのか？」

「ミキ、そういうお前も射撃訓練だろ」

話しかけてきたのは、俺の彼女（嫁）の蓼（たで）光稀（みき）である

え？いつの前に彼女作ったんだよ？このリア充が？だから何？

まあ、ミキとの出会いは希と同じく第二次朝鮮戦争中の作戦であった

ソウル中心街高層ビル同時爆破テロが発生し、自分の所属する特殊

作戦群も出動し北朝鮮軍との戦闘を繰り広げた

ミキはこの時、人質として北朝鮮軍に捕まっていた

俺が負傷して救急ヘリで後方へ搬送される際に彼女と一緒になって、彼女を必死に励ましていた

この時に愛のキューピッドが俺とミキを結びつけたのである

彼女の武器はイングラムことＭＡＣ１０サブマシンガン、これにサンプレッサーとマガジンリップで束ねた

３０連マガジンを２つ

ハンドガンはグリップにレーザーサイトが内蔵されているＭ９２Ｆが二丁、

バックアップに刑事ドラマでお馴染みのコルトローマン２インチ

あとは、ショットガンやらグレネードランチャーなど物騒な品まで持っている

ついでに、警視庁の特殊部隊、ＳＡＴの副長をやっている

まあ、俺との仲は他人が見ていてムカつく程に良いよ。文句あるのか？

で、ミキはホルスターからＭ９２Ｆを取り出し、二丁拳銃で構える。グリップに内蔵されたレーザーサイトの赤いレーザーがターゲットを捉え、９ミリパラベラム弾が撃ち抜いていく

「レーザーサイトねぇ・・・、俺も付けようかな？」

「そうしたら、使いやすいよ」

「まあ、レイル付けてまで使いたくはないね」

「現役の特殊作戦群の隊員らしくないね」

「別にいいだろ」

あれ？お前退役したんじゃないのか？と思っている人もいるから説明するけど、実はアドシードの後防衛省からの要請により特殊作戦群の予備自衛官として復職したんだよ

「まあ、アタシの夫なんだし妻として夫の自由は取らないとね」

「イイ、嫁さんを持ったよ、俺は。」

「嫁って言うなよ恥ずかしいだろ／／／」

「なんだよ、二人きりになればベッタベッタに接してくるだろ？」

「そうだな？」

周りにピンクオーラでも流れてハートでも浮かんでいそうな強襲科の空気とは全く違う空気が俺とミキの周りに流れていた

「けっ！リア充が！！」

彼女なしの強襲科の男子が俺とミキとの甘い空間を見てなんか言ってるけど気にしない、気にしない

まあ、こんな感じで甘〜い空気の中、射撃訓練をしていたら

「アンタ達、付き合うのはいいけどせめて学校の中では控えなさいよ」

少し恥ずかしそうにアリアがももまん食いながらやって来た

「なんだよアリア、夫婦の時間に？」

ボンッ！と赤くなりながらももまんを食べるアリアが俺達にこう告げた

「願がアンタ達を呼んでいるわよ？」

「ん？何かあるのか？」

「作戦会議するみたいよ」

「なるほど」

「ちっ！願の奴、さっかくの夫婦の時間を邪魔しやがって！！」

「気にするなミキ、さっさと終わらして再開しようぜ」

「そうね」

アリアが更に赤くなったが気にしない

「はぁ・・・、で柚梨佳(ゆうこ)はどこにいるの？」

「ああ、桂さんは１年生に早撃ちの講義していたぞ」

「タカ、呼んできてくれる？」

「アリア！人の夫でパシルな！！」

「まだ結婚してないでしょ！！」

「うるさい！将来必ずするの！！。それにタカが良ければＫＯ★ＺＵ★ＫＵ★ＲＩだって今からでも始めてやるんだから！！」

「かざあああああああああああああああああ！！」ボンッ！

あまりにストレートすぎるミキの発言に風穴言う前にアリアが深刻なエラーに陥っちゃったよ

「まあミキ、すぐに戻ってくるから安心しろ」

俺はミキに顔を近づけながら微笑む、

「分かった・・・、早く戻ってきて・・・」

「１０秒で戻ってくるよ」

その後、ミキはアリアと一緒に作戦会議室に向かっていった

『う～ん、パイソンは使いやすいんだけどね・・・いろいろ邪魔な

出っ張りがあったりするし。私みたいな早撃ちをしたいなら古いリボルバーにしたほうがいいと思うよ？』

『あざっす！！』

強襲科の廊下を歩いていると、防弾ガラスの向こう側に柚梨佳の姿が見えた。

相変わらず小さいな～。横にいる後輩がでかく見える・・・って、早？！今、銃火が見えなかったぞ？！柚梨佳が撃ったのか？！

『せ、先輩、今、撃ったんすか・・・？！』

『ん？撃ったよぉ、銃声聞こえたでしょ？』

後輩、唖然。パイソンが手からこぼれ落ち――――柚梨佳が神の如き速度で拾い上げた。落ちる前に。

『ちゃんと銃は握る！！いいね？』

『は、はい！！了解ですオセロット少佐！！』

『ふぇ？おじいちゃん？どこ？』

まさかとは思うが・・・まあいいや。

「お～い、桂さ～ん」

『あ、タカ君っ。どうしたの？』

「ちょっと来てもらいたいんだが、いいか？」

『うん、いいよ。ちょっと待ってて♪』

そういうと柚梨佳は手早く荷物をまとめて、防弾ガラスに向き直った。

『う～ん、まあお金に余裕はあるし、いいよね♪タカ君、離れててね～』

そして、柚梨佳は荷物を片手に持ったまま・・・。

パパパパパパパパパパパパパパパパパパパン！！バリィィィィィィン！！

防弾ガラスに銃弾を十八発撃ち込み、割った。つか砕いた。

「さ、いこいこ♪」

「あ、ああ・・・」

「どうしたの？」

「いや、ちょっとアレ防弾ガラスだよな・・・？」

「私の前では防弾なんて意味ないよ♪」

可愛い顔してなんという戦闘力してんだよ・・・

その頃、ミキとアリア・・・（ミキｓｉｄｅ）

「アンタさ、タカのことどう思ってるのよ」

アリアがそう聞いてきた。ふ、私にタカの事を聞くのか？

「ははは、愚かだなアリア。私はタカの妻だ。タカのことは愛しているというレベルではない！！」

「うきゅっ？！」

アリアがももまんを詰まらせた。

「そもそも愛とはこの世の中で唯一無限に、そして不滅に存在するものだ。よく巷では恋愛と言われるが、アレは真なる愛ではない。アレはただのごっこ遊びであり、真の愛とは二人がどのような環境にあろうと消えることはない。いや、むしろ増大するものだ」

「きゅっきゅうもきゅ！！」

アリアがもっとももまんを詰まらせた。顔が若干紫色になっている。だが、そんなことは関係ない。

「だから・・・タカぁ・・・」

だって私は今―――勇治分が底をついているんだ！！

「へ、ヘンタイ！！」

アリアが涙目でガバメントを引き抜いたが気にしない。

「なんでですかぁ？！」

「いや、希ちゃん今まで喘ぎ声上げてたし。ね、遼さん」

「ほうはへ、ほへはほうひゅうふんはよひふひゃん（そうだね、俺はもう十分だよ美優ちゃん）」

目の前にＲ１８の光景が広がっているが気にしない。美優は願の戦妹で、遼は願の唯一無二の親友だ。しかしそんなことより・・・タカぁ・・・。

「の、希？！」

「へへへ、希たんの貞操はこのミュミーユが頂くぜぇ！！」

「・・・！！（ブシャァァァァ）」

遼の鼻血が廊下を赤く染めたが気にしない。

「光稀！！アンタも助けなさいよ！！希が週３でおねしょする程、下がユルユルなのはアンタも知ってるでしょ！！聖水撒き散らされたら大変なことになるわよ！！」

「・・・タカぁ・・・ぐすっ」

（タカｓｉｄｅ）

「はっ？！」

「ん？どうしたのタカ君」

「今、光稀が俺の声を求めている気がする！！」

「へ？」

「・・・ミキィィィィ！！愛してるぞぉぉぉぉぉぉ！！」

「仲いいね～、ミキちゃんとタカ君」

「タカぁぁぁ・・・♪」

やっぱり私たちはつながっているのだな！！

「タカぁぁぁぁぁ！！大好きだぁぁぁぁぁ！！」

「ひぅ！！あ、あぁ！！」ジョオオオオオ・・・（←失禁中）

「希！！しっかりしなさい！！」（うわ、漏らした・・・）

「神崎先輩、まだ甘いですねぇ。もう希たんは私に虜なんですよ？」

「眼福じゃぁぁぁぁぁ！！」

遼はどうやら希特有の白磁の肌や見てはいけないところを垣間見たようだ

俺は肩にかけていたＭ４カービンを手に取り遼と美優に向けて

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！

「「ぎゃあああああああああああああああ！！」」

「覚えておけ！ミキと希に手を出した場合は・・・、”殺す”！！」

第二次朝鮮戦争での人を殺す時の顔して遼を美優を見ら見つける

「「ハ、ハイ！！スイマセンでした！！」」

「じゃ希、保健室行くか。」

「せんぱ～い！うぇぇぇぇ・・・」

「安心しろ希、もう大丈夫だ」

二人がそう言うと、俺は下半身をアンモニア水で濡らした希を姫さま抱っこして

保健室まで運んでいった

ついでに言うと、希は第二次朝鮮戦争時のショックでかなりユルい

後始末が美優にさせることにした、遼にさせたらエロい・・・じゃ

なくて、
ヤバイことになりそうだから
所変わって作戦会議室
「しかし、遅いな美優と遼（変態）」
「ええ。意識低いわねあの変態たち（獣たち）は」
散々な言い様である。そもそも美優と遼は変態確定なのだろうか。
まあ、当然かあんな事して変態と思えなければその人は脳外科に行くことをすすめるというか、行け
「当然だろう」
「心を読むなよ願！！」
萩原願（はぎわらげん）。強襲科の同級生で、二つ名はシンプルな『無敵』、『無双』、『悪魔』、『戦神』等々。しかしコイツには裏の顔がある。コイツ、実は俺の古巣である陸自を牛耳っているのだ。階級は大佐に相当する一等陸佐（大佐）。最先任なのは当たり前。
「牛耳ってなどいないぞ、ただ秘密特殊作戦コマンド司令官の地位を利用して陸自の戦闘力を徐々にチート化しているだけだ」
「それを牛耳ってると言ってるのよ彼は。ま、彼は正規部隊だからこういう『裏のこと』は・・・わからないでしょうね♪」
「へいへい、俺は表の正規部隊（特殊作戦群）の3等陸尉（少尉）

ですよ。けどなぜ心が読めるし」

願だからでしょ、と笑って呟いたのは伊椎翠（いしいりょく）。この女性もまた強襲科である。しかし・・・強襲科の武偵娘（ブッキー）とは異なり、コイツのスタイル以下女がうらやむような部分を全て備えている。そして激しくクーデレ。願に対しては８０％デレてます。・・・光稀もクーデレ？いや、俺に対してはデレデレですよ？

「あら、うれしいこと言ってくれるわね。ご褒美に・・・」

「いやいや携帯で光稀に電話しようとしないで！！」

この人、実は願の副官である。階級はやはり一等陸佐（大佐）だ。

３等陸尉の俺とは天と地の差がある

「ご、ごめんなさい、遅れて・・・」

「パンツ変えたか？」

「は、はい！」

「すみませんです～」

「ハハハ、この俺様が来てやったぞ！！ひれ伏すがいい！！」

保健室でパンツを変えてきた希と変態二人（美優＆遼）が到着。

「はぁ・・・なんなのよこのヘンタイたちは・・・！！」

アリアは非常に怒っている様子。そして・・・・！！

「タカぁ！！！！」（↑トイレ行ってた）

「光稀ぃ！！！！！」

「会いたかった、会いたかったぞ、光稀！！俺たちを邪魔する奴らはもういない！！」

「はいはい、じゃあみんな揃ったから会議を始めるわね――――」

「待ってぇぇぇぇぇぇ！！」

あ、柚梨佳。確かトイレに行って・・・・。

「ごめん、ナンパされてて――――」

「柚梨佳。そのバカはどこだ。死んでいても墓から掘り起こして銃殺した後に絞殺してくる」

願が殺気を振りまく。いや、怖い。

「それはいいとして、願始めるわよ！」

翠が俺達に束にした作戦計画書を渡した、その作戦計画書の表紙には「麻薬密売取り押さえ作戦」と書かれていた

「なんだ、願？麻薬密売を取り押さえるだけにこれだけの戦力が必要なのか？」

「かえって少ないくらいだ、もう少し欲しい程だ」
そう言うと願は、スクリーンに画面と映しだした
「今回、俺たちが押さえるのは香港マフィアから発展した国際麻薬密売組織の『ブラックイーグル』だ」
スクリーンに映し出された『ブラックイーグル』のマークをバックに願は説明を続ける
「このブラックイーグルは、香港を拠点として、ニューヨーク、パリ、ベルリンなどでも麻薬密売を働いている」
俺はおおよその予測を付けて願にこういった
「つまり、ブラックイーグルの連中が日本に乗り込んできたってわけ？」
「そういうことだタカ」
「イ・ウーとの関連はあるの？」
アリアがそう願に問いかける
「少なからずあるだろうな」
願はアリアの質問にそう返すと、改まってこう言い放った
「奴らの日本支部までは分からないが、奴らによる密売があること

だけは暴力団の中に貼り込んでもらってる武偵から連絡があった」
「つまり、その密売を取り押さえてブラックイーグルのメンバーからアジトを自供させるんですね」
希は作戦の目的を先に理解したようである
「そうだ希。奴らの密売は明日の午後１０時に地点ＲＸ－１９で行われるそうだ、だから事前に貼り込んで密売が確認できた時に一勢に突入して取り押さえる」
「「「了解！！」」」
「今回の任務では車の中で貼り込んでくれ、カーチェスも予想されるからスポーツカーを全員使用しろ」
「無理だな」
「武藤！？」
作戦会議室のドアを開けて乱入してきた武藤が衝撃の一言
「車両科の車両の中で今、走れるスポーツカーは無いぞ」
「どういう事！？」
翠が武藤に問いかけると、武藤はため息を一つしてこう言い放った
「お前ら強襲科が使って壊して帰ってくるからだろ！！」

「「「ああ～～・・・」」」
願や翠も含めた強襲科メンバーが思い当たるフシがある
「特にタカとアリア！！」
「なんだよ？」
「な、何？」
「お前らこの前ぶっ壊したマスタングアレ高かったんだぞ！！」
「まじで・・・」
「ええ～」
実はこの前、アリアと任務した際にマスタングを借りて任務したのだが
犯人の持つ手榴弾で一瞬で鉄くずになってしまったのである
「とりあえず今、車両科に動くスポーツカーは無いよ！！」
そう言うと武藤は作戦会議室のドアを閉めて出ていった
「参ったな・・・」
「予想外ね・・・」
さすがにこの事態には願も翠も予想出来なかったようである

「どうするんですか？スポーツカーがいいんですよね？」

「どうにもならんだろ・・・」

美優と遼までが落胆するなか、俺は一つ頼りになりそうな人を思い出した

「綾先輩に頼るか・・・」

それを聞いた願が俺の方を見た

「そうだ！竹崎の奴も読んでくれ」

「はぁ！？」

実際に思い当たるフシがある、願と竹崎が戦い、竹崎が願に2度目の敗北を味わせたのである

無敵の願をEランクの竹崎が倒したという事は強襲科だけでは無く武偵校に衝撃を与えた

しかし、弟分の竹崎を危険な目に合わせたくないと俺は反論したが、階級に勝てず渋々、綾先輩に話しかけた

「綾先輩」

「ああ、鷹山君どうしたの？って何をしてるの！？」

土下座する俺に綾先輩は驚いている

「スイマセン！俺が無力なために竹崎を危険な目に！！」

「な、何を言い出すの！？」

「実は・・・」

俺は綾先輩にここまでの過程を話した、綾先輩は難しい顔をして

「萩原願・・・」

「危険な目には俺も合わせたくないので、一緒に説得しましょうよ」

「そう・・・（大丈夫ですよ先輩）裕太！？」

そう言ってやってきたのは俺の後輩で弟分の竹崎裕太（たけざきゆうた）である。

「先輩の知り合いなんですし、完全に悪い人じゃないですよね」

「すまん！竹崎許してくれ！！」

「大丈夫ですよ、先輩が僕のために命を駈けてくれたんです、今度は先輩に恩返しをしないと」

女にしか見えない竹崎が笑顔でそう言う

「じゃあ、私達も参加するわ」

「そのほうがいいでしょうね」

この時、綾先輩達も作戦に参加することが決定したのである

この後、願たちは綾先輩の家から車を選んだ

翌日

「じゃあ、総員出動！！」

無線機から願の声がする中、俺たちは取引現場に向けて出動したのである

## 作戦会議　内容：麻薬密売現場の取り押さえ（後書き）

どうも、白石です。

スイマセン！カーチェスは次回になります！！

タカが作者よりリア充なのはちょっとムカつきますｗｗｗ

っていうか希におもらしキャラの札はマズイような・・・

今回の話では一部、ラルドさんの礼を使わせてもらいました。

ラルドさんありがとうございます！！

次回は、カーチェスになります！！水曜日あたりに更新したいです！！

では、次回もお楽しみに！！

## 追跡！真夜中の爆走！！（前書き）

前回のあらすじ

香港マフィアから発展した国際麻薬密売組織の『ブラックイーグル』の日本上陸を阻止するべく、

タカは願率いる、特別部隊の一人として麻薬密売の取り押さえに出動した

## 追跡！真夜中の爆走！！

地点ＲＸ－１９、時間午後１０時、今日ブラックイーグルによる暴力団への麻薬密売が行われる地点だ

俺たちは車の中で待機＆特定の場所で監視している。

作戦内容としては美優が近くの建物からブラックイーグルと暴力団の動きを監視する

俺たちは少し離れた場所で車上待機、ブラックイーグルと暴力団の麻薬密売が確認できたら一勢に全員が突入して取り押さえるという作戦である

万が一の逃亡に備えて、ＲＸ－１９から離れた場所で車両科がタイヤをパンクさせる強制車両停止装置と車で路上封鎖している

俺は綾先輩の実家から借りた、日産スカイラインＧＴ－Ｒ３４型の中でアリア、希と一緒に待機中

願が決めたことなのだが、ミキが「何で私じゃないんだよ！？」とブー垂らしていたので

こう言ってやった

「ミキ、仕事に私情は厳禁だぞ、まぁ、俺だって腸煮えくり返ってけど無理やり抑えこんでだ」

「タカァ・・・」

「任務が終わったら、嫌と言うまで付き合ってやるよ」
「タカァァ？」
「ミキィィ？」
「死ねばいいのに・・・」
と遼が言っていたような気がするけど気にしない
ついでに他のメンバーの乗っている車両を説明すると、
願と翠、桂さんは日産・フェアレディZ、
ミキと遼はホンダ・NSX、
竹崎・荒井・綾先輩はマツダ・RX－7のFD3S型に登場して各員待機中である
『美優、なにか動きはあるか？』
『特に今の時点では無いです、先輩』
無線機から願と美優のやり取りが聞こえる、俺は無線機を手に取り竹崎たちの乗るRX－7に連絡をとる
「竹崎、聞こえるか？」
『鷹山先輩、聞こえます』

「綾先輩に変わってくれ」
『了解、今綾さんに代わります』
『どうしたの鷹山君？』
「先輩、俺のレミントンＭ３１の使い方大丈夫ですか？」
『ああ、大丈夫よ。ちょっと見ただけですぐ分かったわよ』
「なら問題ないです」
このやり取りで分かるように、今、綾先輩に俺のレミントンを貸している
何故かと言うと、綾先輩の実家から借りた車の中にはベネリＭ３やＭ１６などが普通に入っているのだが
何故かＲＸ－７にはショットガンが入ってないので、俺のレミントンを貸しているのである
そんな、綾先輩とのやり取りを終えた直後であった
『先輩、ブラックイーグルと暴力団の車列を確認しました！！ワゴン車３台、乗用車２台です』
Ｍ２４Ａ３を構えて監視していた美優が俺たち全員に緊急で連絡をとる
『よし！突入するぞ！！』

『待て、遼！完全に確認がとれてからだ！！』

突入しようとした遼を願が引き止める

『何人だ？』

『こちらから確認取れた限りでは２０人はいます』

『密売の様子は確認できるか？』

『今、確認取れました』

『よし！全員突入！！』

願がそう叫ぶと同時に、俺はスカイラインの屋根の上に武偵車両を示す、青のパトランプを置いて点灯させサイレンを鳴らしつつ取引現場に突入する

願や遼、竹崎たちの車両も同じように一斉に取引現場に突入

「な、なんだ！？」

「クソッ！武偵だ！！」

暴力団員の慌てふためく声がする中、俺たちは銃を片手に車両から降りる

「武偵だ！直ちに武器を捨てて投降しろ！！」

ＸＤ－９を構える願が暴力団員とブラックイーグルの戦闘員に対して降伏を促す

俺とアリア、そして希はスカイラインのドアを立てにしてＰ－１４、ガバメント、デトニクスとニューナンブを構える

暴力団員達は、一斉に包囲され銃を向けられて、一瞬ジロ付くが暴力団員の幹部と思えし物がこの状況をぶち壊した

「構わねぇ！！皆殺しだ！！」

そう言うと同時に、暴力団員達は一勢にトカレフやＭ９２Ｆ、グロック１７などを抜き俺達に向けて発砲してきた

「応戦しろ！！」

願はそう叫びながらＸＤ－９を発砲する、それと同時に暴力団員の持っているＭＰ５Ｋがはじき飛ばされる

その間に飛んでくる願めがけて飛んでくる弾丸を全て左手に持った刀で”切り落として”いた

パパパパパパパパパパパパパパパパパン！！と桂さんと竹崎のＳＡＡの早撃ちによりあっという間に暴力団員５人が地面に崩れ落ちていた

っていうか、今、”暴力団員が崩れ落ちてから銃声が聞こえたぞ！、音速を超えてるのかよ！？”

バキュン！バキュン！と俺はＰ－１４を乱射する
俺がスカイラインのドアに身を隠した次の瞬間、ビシッ！という音と同時にスカイラインのドアのガラスに銃弾が食い込んでいた
「アブねぇ！！」
「これじゃ拉致があかないわよ願！！」
「何やってるんだよアリア！！この程度特に大した事じゃないだろ！！」
アリアと願がギャーギャー言っている時、俺は希に対して
「希、トランクからショットガンを取ってくる！！、援護しろ！！」
「了解！！」
希はそう言うとデトニクスを二丁拳銃で乱射する
バギュン！バギュン！と希の二丁デトニクスが吠える中
俺は銃弾の間を掻い潜り、トランクからベネリＭ３ショットガンを取り出して
ドゴォン！ドゴォン！とオート射撃で発砲する。
「武偵がショットガンっていいのかよ！？」ってツッコミが来るから説明するけど

このベネリM３に装填されている銃弾はバードショット弾などの散弾ではなく、
スラッグショット（一粒弾）で単発ででかい銃弾が飛んでいく弾なので
鉄球が散らばることが無いのでライフル銃の扱いになる
まあ、そんな弾丸が装填されているベネリを撃ちまくって、暴力団員を一人、また一人と地面に落としていく
綾先輩、竹崎、荒井たちも凄まじい銃撃を暴力団員達に加えていく
「クソッ！回りこんで殺せ！！」
そう幹部が言って団員が２人回りこもとした矢先であった
バゴォーン！バゴォーン！と狙撃銃の銃声が鳴り響き、暴力団員２人が地面に崩れ落ちる
「ナイスだ美優」
『これ、基本ですよ？』
俺が褒めるのに対して変態ながらも腕は確かな美優にとっては特に大したことでは無いらしい
こんなカオスなメンバーでは２０人なんぞあっという間に倒されてしまうのがオチである

「ク、クソッ！逃げるぞ！！」

暴力団幹部が車に命からがら乗り込み、逃亡しようとした次の瞬間！！

ドゴォン！！と俺のレミントンＭ３１で綾先輩にタイヤを撃たれ幹部の乗る車は横転して

ズザアアア！！と火花を上げて滑っていく

「流石です、綾さん」

「ありがとう裕太」

「”くそっ！俺たちも逃げるぞ！！”」

中国で話している男性が二人が車に乗り込み、暴力団の車と衝突して現場から逃亡した

「タカ！アイツらがブラックイーグルだ！！、追跡しろ！！、残りは俺たちが相手する！！」

「分かった！、アリア！、希！！」

俺はスカイラインに希とアリアを乗せて、猛スピードで追跡を開始する

「強制車両停止装置の用意はできてる！？」

『準備ＯＫだ！追い込んでくれ！！』

サイレンを鳴り響かせ、俺たちは逃亡したブラックイーグルの戦闘員が乗る車を車両科の設置した強制車両停止装置のある方向に追い込んでいく

「”くそっ！しつこい奴らだ！！”」

「”これでも喰らえ！！”」

そう中国語でブラックイーグルの戦闘員が話していることなど知らない俺たちは、Ｐ－１４、ガバメント、デトニクスのマガジンを交換していた

「とりあえず、これで任務終了ね」

「思ったより楽でしたね」

「ミキの奴、今頃待ちくたびれているだろうな、ってヤバッ！！」

ブラックイーグル戦闘員の乗る車から”ヤバイもの”が見えた

俺はハンドルを全開で切って反対側の道路に移動する、

キキキィッ！！というドリフト音と同時にアリアと希も右から左へと振り回される

ボシュン！！ドガァァン！！とさっきまでいた所が吹っ飛んでいた

「グ、グレネードランチャー！？」

「ああ、そうだ」

「ぶ、物騒すぎます！！」

「まぁ、敵さんも捕まりたくないんだろうな！！」

俺はそう言うと、窓から右手と顔を出してＰ－１４を犯人の車に向けてバァン！バァン！と発砲する

「タカは運転に集中して！！アタシと希で応戦するわ！！」

「頼むよ！！」

「希行くわよ！！」

「はい！！」

そう言うと、アリアは窓から身を乗り出し、希は天窓をあけて銃を撃ちまくる

バギュン！バギュン！と銃声が鳴り響かせながら、俺たちは犯人の車をバリケードに追い込んでいく

しばらく走っていると車両科のバリケードが見え緊急車両停止装置が道路に置かれているのが見えた

これで奴らも終わりかと思った矢先であった

ガッシャーン！！ドゴォーン！！

ブラックイーグルの車は何と道路封鎖していた車両科の車両に突っ込んで無理やりバリケードを突破したのである、突っ込まれた車両科の車は道のど真ん中に吹っ飛んで大爆発した

俺はハンドルを右に思っきり切って炎上する車を避ける

キキキィッ！！

「ミャ！！」

「うわぁ！！」

またドリフト音と同時にアリアと希がスカイラインの中で左から右へと移動する

「タカ！あんた一体どういう操縦してるのよ！！」

「普段はもっと安全運転だよ！！、希！願にこっち向かってくるように頼んで！！」

「了解！！」

アリアと軽く口喧嘩しながら、俺はＰ－１４を犯人の車に向けて撃ちまくる

バキュン！バギュン！と次々に銃弾を打ち込みつつ一般車両を避けていく

右へ左へと揺れ動くスカイラインの中で俺とアリアは応戦、希は応

援要請をする

「願先輩！！聞こえますか！！」

『どうした希！？』

「犯人がバリケードを突破しました！！応援を頼みます！！」

『分かった！！すぐに向かう！！』

「早く来いよ！！」

希から無線機を取り上げ、願に対して釘を差しておく

通信を終えた希はまた天窓をあけてデトニクスを乱射する

バキュン！バキュン！と４５口径弾の銃声が鳴り響く

「アリア、ハンドルを頼む！！」

俺はアリアにハンドルを頼んで、Ｐ－１４のマガジンを交換する。

そしてすぐにバキュン！バキュン！と発砲する

こんな感じで俺、アリア、希の３人で銃を撃ちながらブラックイーグル戦闘の車を追跡の真っ只中

無線機にミキの声が飛び込んできた

『タカ！！今どこ！？』

「ミキ！いま地点ＲＸ－２８だ！！どこにいる！！」

『すぐ後ろのＲＸ－２７だ！十字路のＲＸ－３１に追い込んで！！そこで合流するわよ！！』

「わかった！」

『無事を祈るわよ！あと愛してる！！』

「俺も愛してるよ！！」

「ここでもバカップルしないの！！」

アリアに叱られながらも、俺はスカイラインを爆走させ追い込んでいく、そして地点ＲＸ－３１に追い込むと同時に

キキキィッ！！と竹崎の運転するＲＸ－７がほぼ９０度に曲がりながら合流する

その時、天窓から荒井がズドォン！ズドォン！とデザートイーグルを撃ちこむ

「ナイスだ荒井！！」

『どうも！！』

俺は無線で荒井を褒めていると竹崎が間を割ってきた

『鷹山先輩！！先のＲＸ－３５に回ってください！！そこの追い込

みます！！』

「分かった！そこでアイツらを始末する！！」

「タカ！遼とミキよ！！」

俺が竹崎に返信している間に遼とミキの乗るＮＳＸも合流した

『タカ！生きてる！？』

「生きてる！生きてる！ミキ！！、竹崎と一緒にＲＸ－３５に追い込んでくれ！！そこでアイツらを始末する！！」

『分かった！遼！！』

『分かってる！！』

「愛してるミキ！」

「アタシもよタカ！！」

「だからバカップルやめい！！」

アリアに叱られながら俺はスカイラインを一旦、追跡から外してＲＸ－３５に回りこむ

「右！」

アリアがナビゲートする中、ゴミ箱などをはじき飛ばしながら猛スピードで飛ばしながら

ＲＸ－３５に到着した

キキキィィッ！！とドリフトしながらスカイラインを停止させる

俺は無線機で遼に連絡をとる

アリアと希は銃のマガジンを替えて、犯人の車を待ち受けている

「遼！ＲＸ－３５だに到着した！！いまどこだ！？」

『あと、ＲＸ－３４だ、３分後にＲＸ－３５だ！！確実に仕留めろよ！！』

「分かってる！！」

俺はそう言うと遼との通信を終えてベネリＭ３を構えた

そして、３分後にＮＳＸとＲＸ－７に追跡されながらブラックイーグルの車がやって来た

「・・・撃てぇ！！」

俺の命令と同時にアリアのガバメント、希のデトニクスとニューナンブ、俺の持つベネリが一勢に銃火を吹いた

バキュン！ズダァン！バゴォン！

と銃弾がブラックイーグルの戦闘員の乗る車のフロントガラスを叩き割る

そして、近くの工事現場のドラム缶に激突して激しく火花を散らしながら横転した

ズガアアアアアアアアアアアアアア！！

という音を立て15メートルは滑っていくのが見えた、俺たちは銃を構えながら中にいるブラックイーグルの戦闘員を確保する

「願、ブラックイーグルの戦闘員を逮捕した」

「よくやったタカ！！」

俺がそう願と通信を終えてふと後ろを振り返ると、ミキが飛びついてきた

「タカぁ！！会いたかったああ！！」

「ミキィ！！俺もだ！！」

「相変わらずバカップルするな！！」

アリアのツッコミなど耳に入らず、俺はミキを抱きしめていた

「まあ、鷹山君たちのおかげで逮捕できたからいいんじゃない」

「そういう問題ですか、綾先輩？」

アリアの呆れる声が聞こえたけど気にしない

この後、ブラックイーグルの戦闘員と暴力団員達は綴の尋問のため

に武偵校の拘留所に送られていった

## 追跡！真夜中の爆走！！（後書き）

どうも、白石です。

はい、なんか微妙なカーチェイス回でしたｗｗｗｗ

っていうか、相変わらずタカとミキの二人バカップルｗｗｗ

なんか今回のカーチェイスを書くにあたって色々な刑事ドラマやポリスアクション映画を見たんですけど

人を殺すことができない武偵では何か、横転して逮捕みたいな展開になってしまいます

もっとド派手にやりたかったです（海やら崖からダイブとか）

次回は、ブラックイーグルのアジトに殴りこみ、これがタカ最大の危機を招きます。

次回もお楽しみに！！

## 拠点壊滅と斬られし報復の導火線（前書き）

前回、願達と共に壮絶なカーチェイスの末に暴力団員と

国際麻薬密売組織「ブラックイーグル」の戦闘員を逮捕したタカ達

カーチェイスの疲れも完全に癒えないタカ達に次の指令が下る！！

## 拠点壊滅と斬られし報復の導火線

ブラックイーグルとのカーチェイスを終えた数日後、俺は車両科の武藤にこの前買った、
とある”ブツ”の整備を頼んでいた

「武藤、俺の”マスタング”はどうだ？」

「タカか、いい買い物したぜ、お前」

「俺からすれば、どこからどう見ても”事故車”にしか見えないけどな。このマスタング・・・」

「そう言うなって、今時、”１９７３年製のマスタング・マッハ１”が手に入るなんて俺からすれば神からのプレゼントにしか思えないぜ」

「乗り物オタクは事故車でも関係なしか」

このやり取りで分かる人もいるかも知れないけど、俺、車買ったのよ

１９７３年製、フォード・マスタング・マッハ１　色は黒

アメ車の代表とも言えるフォード社のマスタングシリーズの二代目でマスタングシリーズの中でも有数の人気を誇るタイプである

アメ車好き&マスタング好きなら、必ず「おっ！！」となる名車だ

そんな名車を持ってるのに、何でテンション低いかって？

俺自身、マスタングは好きだよ。けど、このマスタング、事故車ぽいっんだよね・・・

そもそも、ふと立ち寄った中古車販売店で偶然見つけたこの車、

一瞬見た時、俺は一瞬「買おうかな～」と思ったんだけど値段を見てビックリ

普通、マスタングの中古車は平均３００万円前後なんだけど、

このマスタング１５０万円なのよね・・・、平均的な感覚を持っているならおかしいと思うよね・・・

それに左側がボロボロだし・・・、ドア閉めるたびに”バッコン！！”という鈍い音がするのよね・・・

これ事故車だよな・・・、多分・・・

この日は買わずに一回寮に帰って”妻の”ミキに話してみたら、

「別にいいんじゃないの事故車でも、白雪に頼めば一発で悪霊も除霊するでしょ」

「まあね、ミキ？」

「タカ？」

こう言うと、俺とミキは顔を近づけて

「「ンッ！…ンッ……？」」

と唇をあわせて、舌を舐めあっていた（用は”ディープキス”）

悪いかコンニャロー！！、”夫婦”なら当然だろ！！、文句あるか！？

とまあ、こんな感じで夫婦での結論が出たけど、やっぱり心配な所があるので、

専門家の武藤に聞いた所、

「買え！！そのマスタング！！」

と言われて終わった、相談する人間違えたよ、コンチクショー！！

という感じで購入した怪しいマスタングを武藤に頼んで整備&武偵車への改良してもらっている

この時代のアメ車はマスタングに限らす燃費が悪い、満タンで2～3キロといった所だ

それじゃ、今の時代に合わないし、特殊作戦群隊員として最低でも３００万、多ければ５００万の給料が保証されている自分でもかなり厳しい、ミキとの結婚費用も貯まらないから

武藤に頼んで燃費の向上も頼んでいる、まぁガソリン代だけでも浮かせないとな

そんな感じな会話を武藤としていると、希がやって来た

「先輩！！先輩！！」

「どうした希？」

「願先輩が呼んでますよ、作戦会議をするって言ってます」

「作戦会議？どういうことだ？」

「この前逮捕した『ブラックイーグル』の拠点の１つが明らかになったって言ってました」

「本部ではないんだ」

俺と希はそんな会話をしながら、作戦会議室に向かって歩いていった

作戦会議室には、俺と希の他に、願、翠、桂さん、遼&美優の変態コンビ、アリア、竹崎、綾先輩、荒井と妻のミキがいた

「で願、奴らの拠点の１つが見つかったてどういうことだ？」

俺は作戦会議室に入り、説明のために前に立っている願に問いかけた

「今から説明してやるよ」

そう言うと願は、この前と同じようにスクリーンにプロジェクターから画面を映しだした

「この前、逮捕したブラックイーグルの戦闘員を取り調べた所、拠点の１つを二人のうち一人が吐いた」

そう冷静に願は言うと、プロジェクターを操作し画面を切り替える
「奴らの拠点の１つは、この地点ＲＸ－４２にある廃工場になったセメント工場だ」
願がそう言うと同時にブラックイーグルの拠点となっている廃セメント工場の衛星写真が映し出される
「連中は、ここを密売するために密輸した麻薬を貯蔵している」
ガチャッ！！という音ど同時にまた画面が切り替える
「敵の数は、吐いた奴によると全員で３５人との事だ」
「３５人！？、多すぎないか？」
遼が驚いた声で願に質問する、この遼の質問に願に変わって翠が答える
「奴らは国際麻薬密売組織よ、私と願が調べた限りでは世界各地にいる戦闘員は６００人はいると言われているわ、ここにいる３５人なんて氷山の一角よ」
「翠の言うとおりだ、氷山の一角にしか過ぎない、けど・・・」
そう言うと願は一回息をつくと、また口を開けた
「このセメント工場にブラックイーグルの日本における活動を指揮する幹部の一人がいることを、逮捕した連中が吐いた」

「よく吐いたわね、荒々しい方法でも使ったの綴が役に立たないから」

アリアが願に呆れの混じった声で投げ掛ける

「いや、殴る蹴るはしていない、ただ威圧感出して翠が調べているのを側で威圧感出して見ていただけだぞ」

「アンタたちがすれば十分に殴る蹴ると同じじゃない、前に希が願に慕っているを見て翠が凄い剣幕で威圧感出して希が号泣&失禁していたじゃない」

「あ、あの時はごめんね希・・・」

「だ、大丈夫ですよ翠先輩。オネショは悪化しましたけど・・・」

「本当にごめんね希!!」

希に対して翠が全力で頭を下げる、希は「いいです、いいです、大丈夫です」特に気にしてないようだ?

「けど、そこの”夫婦”に比べればまだマシじゃないか」

「「へ?」」

遼がそう言うと同時に俺とミキが反応するのと同時に一勢に作戦会議室にいるメンバー全員が俺とミキの方を見る

「この前、この夫婦どうしても吐かない犯人の口に思っきり弾1発、

装弾したチーフとローマン突っ込んで
強制的に吐かせていたぜｗｗｗｗ」

「「うっせえええええ！！」」

ズギューン！！バギューン！！と俺のＰ－１４とミキのベレッタＭ９２が同時に火を噴く

「ぎゃふっ！！」

防弾制服にモロ直撃して遼が上の奇声を上げてひっくり返る

「まぁ、遼は別にいいとして・・・」

「いいのかよ！！」

「「復活早！！」」

願のボケに遼が即復活して俺とミキが突っ込むという見事な漫才コントっぷり

「とりあえず、この拠点となっているセメント工場を制圧とそこにいる幹部を逮捕すれば、ブラックイーグルの日本における活動は相当困難になる」

またガチャ！という音と同時にスクリーンが切り替える、画面に映し出されたのはセメント工場の設計図である

「今から、説明を開始する」

そう言うと願は俺達に作戦を伝え始めた

同日、午後９時　地点ＲＸ－４２　セメント工場　地下下水道

今、Ｃ装備姿の俺は、願・翠・遼の４人でセメント工場に向けて

レミントンＭ３１（Ｍ４カービンは背中に背負っている）、８９式小銃、Ｇ３ライフル、ＡＫ１０２を

構えながら地下下水道を進撃している

「お前ら、目標ポイントまで後５００メートルだ」

「「「了解」」」

「しかし、タカはアメリカ議会名誉勲章をもらった時を思い出すでしょ」

「ああ、第二次朝鮮戦争中のバートン海軍中将救助作戦を思い出すぜ」

「しっかし、臭っせえなぁ」

「文句言うな、戦場の死体の腐敗した匂いに比べれば、まだマシ」

「ホント、この程度、私達からすれば可愛いも同然よ」

下水道の匂いに文句を言う遼に対して、俺と翠はこう言って遼を咎める（とが）

「おい、お前ら文句言うな。ポイントに付いたぞ準備に入るぞ」

「「「了解」」」

ガコッという音がしてマンホールをずらして地上に出た俺たちは隠れながら地下室に潜入していった

地下室に潜入した俺たちは、組み立て式の足場を素早く組み立てポイントに持っていく

ここで今回の作戦を説明しよう

今回の作戦は、まず俺と願達による工作部隊が地下下水道を伝ってセメント工場の地下からセメント工場に潜入する

つぎに地下室に潜入して一番戦力の厚い、セメント工場の玄関付近にある地下室の床を爆破して俺たちが突入する

その後、綾先輩、ミキ、アリア達を筆頭とする突撃部隊が一勢に突入し俺達と合流

その後はいつもの様に、部屋を1つずつ制圧していく

まぁ、バートン海軍中将救助作戦の時も似たような作戦だし。そこまで緊張はしていなかった

希はおもいっきり緊張していたな、

冗談のつもりで、「オムツしてるか？」と聞いたら、真面目な顔で「オムツしてます」と言っていた

（ちなみに、この前希の家に行って際にお母さんから聞いたけど、寝る際いつもオムツ吐かせているらしい、希がこれを聞いてニューナンブとデトニクス乱射しようとしていけど俺が制止した）

流石に、失禁するほどの銃撃戦は無いと思うけどな・・・

「いや、希が小便漏らすほどの銃撃戦になるぜ」

「だから、何故心を読む？」

「願だからでしょ」

「前もこんなやり取り無かった？」

「お前ら爆弾扱っているのによくそんな気楽な会話できるな」

遼が呆れながら言う、遼の言う通り。

今、俺たちは突入するための穴を開けるために敵さんの足元にＣ４爆弾を設置しているのである

油粘土のような手触りのＣ４爆弾を円形に設置していく

「設置ＯＫだ、アリア突入準備しておけ。タイミングがあったら合図しろ」

『了解、願』

「全員、隠れろ」
そう願が言うと俺たちは近くの壁に身を潜めてアリアからの合図を待った
俺はこの間にレミントンＭ３１を背中に回し、Ｍ４カービンを手に取り
ガチャ！！とコッキングハンドルを引いてチャンバーに弾を送り、セレクターをフルオートに入れる
「・・・今よ！！」
カチャッ！！
というリモコンのスイッチが押される音の後
ドガァァァァン！！という爆音と同時に
ガラガラという音を立てて天井（アリア達、敵さんから見れば床）が崩れ落ちた
「な、何だ！？」「て、敵襲！！、敵襲！！」「全員銃をとれ！！」
爆破で開いた穴から敵さんが慌てふためく声がする中
「突撃！！」

願がそう叫んだ次の瞬間には、俺たちは足場を登り十字体型を組んで玄関前の敵を一気に強襲する

ズガガガガガガガガガガガガ！！！

俺のＭ４カービン、願の８９式、翠のＧ３、遼のＡＫ１０２が一斉に火を噴く

「ぐあっ！！」「うわぁ！！」「ぐはっ！！」

次から次へとブラックイーグルの戦闘員が地面に崩れ落ちていく

「クリア！、翠！お前の方は！！」

「こっちもクリア！！、タカの方は？」

「制圧完了！！、遼確認できるか？」

「全滅確認、問題ない」

約１分足らずで玄関前の敵を制圧完了した俺たちは足場から上へと這い出る

「アリア、制圧完了だ！突入しろ！！」

『了解、願、みんな行くわよ！！』

『『『了解！！！』』』

無線機越しに希、ミキ、桂さん、竹崎、綾先輩、荒井の声が聞こえ

た次の瞬間には

ガッシャーン！！と車両科に配備されている警察用装甲車が門を破壊して突入してきた

そして、素早くC装備姿のアリア達が降りてきて俺達と合流した

「願、来たわよ！！」

「よし、全員突入準備いいな！？」

アリア達が頷くを見て、願は次の命令を出した

「今から内部に突入敵を制圧する！！」

「「「了解！！！」」」

ズガガガガガガガガ！！！

とコンクリート工場内は銃声と怒号に包まれていた

俺は希とミキを連れて戦闘していた所、無線機で桂さんに呼び出されたので、

希とミキと一緒にM４カービンで現れる敵を撃ちながら向かっていた

「タカ君！ここのドアをショットガンで破壊して！！鍵がかかっているの！！」

「分かった桂さん！少し離れて！！」

俺はＭ４カービンから再び背中に掛けたレミントンＭ３１を手に取り、ガチャン！！とポンプを押す

ポンプを押した後、俺は後ろにいる桂さん、希、ミキの３人に合図をする

「行くぞ！！」

「準備ＯＫだよ、タカ君！！」

「いいぞタカ！！」

「はい先輩！！」

彼女たちの返事を聞いて俺は、レミントンＭ３１でドアの金具を破壊する

ドゴォン！！ジャキ！！ドゴォン！！ジャキ！！

という１２ゲージスラッグ弾が炸裂する音が鳴り響き、ドアの金具が破壊される

俺は破壊したドアを蹴飛ばして中に突入する、桂さん、ミキ、希も後に続く

隠れていた敵が反撃しようと物陰から飛び出た瞬間には

パパパパパパパパパパパパパパパパパパパパン！！

と桂さんのＳＡＡが３００発の銃弾を敵に浴びせるのに、ついでミキのＭＡＣと希の二丁デトニクスが

ズガガガがガガガがガガガ！！　ズダァン！！ズダァン！！

と火を噴き、この部屋の制圧は１０秒で終了した。俺はふと部屋の中にあった木箱に目が止まった

「ミキ、警戒態勢。桂さんはあっちの方を頼む、希ついてこい」

「分かったタカ」

「了解、タカ君」

「はい、先輩」

ミキが破壊したドアの前でＭＡＣを構えながら警戒する中

俺は木箱をショットガンの台尻で殴り破壊する、破壊された木箱の中には、ぎっしりとヘロインの入ったビニール袋が詰まっていた

「うわぁ・・・」

「この量だと、麻薬中毒者が一生吸うのに困らない量だな・・・」

希だけでは無く、俺も目の前の光景に驚く

「タカ君、こっちは乾燥大麻がぎっしり詰まっているよ」

「スゲェな・・・」

俺は武偵になって初めて見たこの光景に驚きながら、願に連絡を取った

「願、こっちで麻薬を確保したかなりの量だ」

『そうか、タカ。ところで気になる所があるんだが？』

「何だ？」

『ブラックイーグルの幹部がまだ見つからない』

「どういうことだ？」

『さっきいると思われる部屋を俺と翠、遼で突入したんだがいない、お前たちの方にいるかも知れない』

「わかった捜索を開始する」

『竹崎達をそっちに向かわす、合流して捜索しろ』

「了解、通信終了」

俺は無線連絡を終え、竹崎達と合流して幹部の捜索を開始した

『鷹山君、こっちにはいないわ』

『先輩、こっちにもいません』

『鷹山先輩、確認できません』

「分かった、各自捜索を続行せよ」

竹崎、綾先輩、荒井の報告を聞いて俺は返信する

その時、目の前にふと使われなくなった物置を発見した

「各員、幹部が潜んでいると思われる場所を発見した。集合しろ」

『了解、タカ』

『了解しました先輩』

ミキと希の返信についで桂さん、竹崎、綾先輩、荒井の返信が続く

ミキ達の到着を待つため俺が物置の壁に寄りかかった次の瞬間！！

ガッシャーン！！と物置のドアを破壊し、身長１８０ｃｍぐらいの

大男の幹部が姿を表した

俺がＭ４を構えようとする前に、幹部の蹴りが俺の腹に炸裂する

「ぐはっ！！」

腹におもいっきり食らった俺は３メートルぐらい吹っ飛び床に倒れる

俺は素早く、Ｐ－１４を抜き幹部に向けたがその前に首を閉められた

「ぐっ・・・、ぐぇ・・・」

息ができないまま、俺は持ち上げられる

「死ね！！武偵野郎！！」

俺は幹部がそう叫ぶ姿を見ながら、Ｍ８４をホルスターから引き抜き幹部の防弾チョッキに向けて

バァン！！バァン！！バァン！！バァン！！と４発撃ち込んだ

「ぐっ！！」

幹部が痛がった瞬間に俺はおもいっきり幹部の顔面を蹴飛ばし

首絞めから抜け出し、床に投げられた

しかし、俺がＭ８４を向ける前に幹部はデザートイーグルを俺に向けた

「やっぱり、最初からこうするべきだったな」

幹部が俺に向けてデザートイーグルの引き金を引こうとした次の瞬間

ズギューン！！というデトニクスの銃声が鳴り響き幹部の手からデザートイーグルが飛んでいった

それについで、ズガガガガガガガガガガガ！！というＳＡＡ×２、ＭＡＣの銃声についで

ズドォーン！！と別のデザートイーグルの銃声が鳴り響いたと思った次の瞬間には

幹部の顔にパンチがめり込んでいるのが見えた。

「ぐあああ・・・」といい幹部が床に崩れ落ちた後には

「タカァァァァァァァ！！」

「タカ君！大丈夫！？」

「先輩！大丈夫ですか！？」

猛ダッシュで駆けつけてきたミキたちの後についで桂さん、希たちがやって来た

「何とかな」

「よかった無事だったんですね」

竹崎の安心する声がする中、荒井が幹部を拘束していた

「今の綾先輩がやったんですか？」

「まぁね、ランパンとの戦いよりは簡単だったわよ♪」

幹部の顔にパンチをめり込ませていたのは綾先輩であった。綾先輩の二つ名は「格闘神」だからな

俺はミキからもらった冷却パックで幹部に蹴られた腹を冷やしながら

無線連絡をした

「翠、幹部を確保した、願に伝えてくれ」

『よくやったわね、タカ。願に伝えとくわ』

「どこに集合するんだ？」

『玄関前に集合しろ』

翠から無線機を取り上げた願がそう言って通信を終える

「よし全員、玄関前に集合だ」

そう言うと俺たちは幹部を連れて玄関前に向かっていった

ブラックイーグル　日本支部　本部

「指令、拠点の一つが武偵に取り押さえられました」

「弟は？」

「連絡がありません、逮捕されたものかと」

「すぐに弟を確保した武偵を拘束するんだ」

「了解しました。」

こんな会話がされているなんて俺は知るはずがない、

ましてや、これから俺に起きる最大の危機なんて知る由もなかった

## 拠点壊滅と斬られし報復の導火線（後書き）

どうも、白石です。

今回は、随分長々しい話しになりました。

前回、感想で「ムカつく」「死ねリア充！！」という感想が多かったので

今回はタカとミキのディープキス程度に抑えました、十分リア充か・・・

次回は、ついにタカが拘束されます！！

かなりグロテスクな表現もありますので苦手な人は注意してください

では、次回もお楽しみに！！

## 報復の炎に燃える時・・・（前書き）

前回、ブラックイーグルの拠点を壊滅させ、幹部の一人を逮捕したタカ達

これがきっかけとなり、タカに魔の手が迫っていることなどタカが知るはずも

無かった・・・

※今回はかなりグロテスクな部分があります。ご注意ください

**報復の炎に燃える時・・・**

国際麻薬密売組織”ブラックイーグル”の拠点を壊滅させ、幹部の一人を逮捕した俺達だが、

この後の動きはさっぱりと無かった、

それもそのはず、尋問を担当する綴が風邪をこじらせて2週間程度の入院になったらしく尋問を仕様にもできない状況なのである。

まぁ、この間は内閣情報調査室主任特殊情報調査官の遼が指揮する部隊の特殊調査部隊の部下が、ブラックイーグルの内部に潜入して調査に入るとのことで、

俺たちは動きがあるまでいつも通りの武偵校の生活を楽しんでいた

ズダダダダダダダダ！！

俺はいつも通りに射撃訓練室でＭ４カービンを乱射していた

ガチッ！！と３０連マガジンが弾切れして、マガジンを交換すると同時に後ろから声を賭けられた

「タカ！！」

「ん？アリアか、どうした？」

「欄豹が読んでるわよ」

「欄豹が？あいつが俺に一体何のようだよ？」

「アタシが知るわけ無いでしょ、とりあえず行ってきなさい、第２倉庫の中に入るってよ」

「ヘイヘイ」

俺はそう言ってＭ４カービンを肩にかけて第２倉庫に行こうとした矢先であった

「タカ、欄豹がＭ４はおいてくるようにって」

「何でだよ？」

「さぁ？」

俺は疑問に思いながらも、アリアにＭ４カービンを渡す

そして、俺は第２倉庫に向かって歩き出したのであった

この後、俺の見に起きる悪夢も知らずに・・・

あの後、タカと別れたアタシはガバメントを二丁拳銃して射撃訓練をしていた

ズギューン！！ズギューン！！

と今日も変わることのない、射撃訓練をしていたその時、アタシは

話しかけられた

「アリア先輩」

「ああ、希。どうしたの？。」

「先輩どこに行ったんですか？」

「タカなら欄豹先生に呼ばれて第2倉庫に行ったわよ」

そう言って射撃に戻ろうとした時だった

「え？欄豹先生なら二日酔いで今日は休んでいますよ」

「え？でもさっきアタシは確かに欄豹にタカを第2倉庫に呼び出すように言って言われたわよ」

「ええっ！？」

次の瞬間、アリアは「はっ！！」としたような表情になり駈け出していった

「アリア先輩どこに行くんですか！？」

「急いで希！！タカが危ないわよ！！」

「ど、どういう事なんです！？」

希もアリアの後を着いて行くように駈け出していく

「アタシのバカ！！何でこんなことに気が付かないの！？」
「だから、どういう事なんです！？」
「ブラックイーグルの連中はタカを殺害するつもりよ！！」
「ええっ！？」
「急いで！！」
そう言うとアリアは更にスピードを上げて第2倉庫に向かっていく、
希もその後を必死に着いて行くのであった
（タカ、無事でいなさいよ！！無事じゃなければ風穴よ！！）
（先輩・・・）
二人は走りながらこのようなことを考えていたのであった

俺は欄豹が呼んでいるという第2倉庫にやって来た
「欄豹先生ー！来ましたよー！！」
倉庫のドアが開いているので、そこに向かって呼びかけるが何の反応も無い
「？、来ましたよー！！」

もう一度、呼びかけるが反応が無いので俺は怪しく思い、ホルスターからＰ－１４を取り出して

ガチャリ！とハンマーを起こした後、少しスライドをずらしてチャンバー内に弾が入っているか確認するプレスチェックを行い倉庫内に入っていく

「欄豹先生ー！！いないんですかー！！」

Ｐ－１４を構えながら倉庫内を捜索しようとしたその時であった

ガチャッ！！というサブマシンガンのコッキングレバーを引く音が聞こえ、後ろを振り向くと

そこには、サブマシンガンと拳銃を持った男が５人いた

「ヤバッ！！」

俺がそう叫んだ瞬間には５人の男たちが一勢に持っている銃が火を吹いたのである

ズガガガガガガガガガ！！ズギューン！！ズギューン！！

俺は近くにあったドラム缶の山に見を隠し、半目で敵の装備を確認する

（銃は、チャーターアームズ・ブルドッグが２つ、イントラテック・ＡＢ－１０が２，マイクロｕｚｉが１か、敵さん”ブラックイーグル”の下っ端だな・・・、マイクロｕｚｉを持ってる奴が指揮官だ

ろうな・・）

俺は5人の男たちが持っている銃を見てそう判断する、何故そのような判断に至ったかというと

”チャーターアームズ・ブルドッグ”はS&W社の誇る傑作リボルバーのS&M36の口径拡大版コピーとも言えるリボルバーで500円ぐらいで購入できる犯罪者御用達のリボルバーだ、

実際、コンビニ強盗程度の犯罪者はこの銃を使っていることが殆どだ

”イントラテック・AB－10”はイントラテック社製のクローズド・ボルト式の大型拳銃である。

安価でフルオートに改造することが簡単である為、チャーターアームズ・ブルドッグと並んで犯罪者御用達の銃である。

アメリカ合衆国コロラド州ジェファーソン郡コロンバインにあるジェファーソン郡立コロンバイン高等学校で1999年4月20日（火）に発生した事件で死者15名、負傷者24名を出した

アメリカの数ある銃乱射事件でも凶悪な”コロンバイン高校銃乱射事件”では犯人が使用しており、

”悪名しか無い”サブマシンガンだ

その2つに比べるとマイクロuziは比較的マトモな銃だろう、マイクロuziはイスラエル製の名サブマシンガンのuziおばりエーションの一つである、

ｕｚｉはイントラテックとは違ってイスラエル軍の正式装備だったこともあり、第２次中東戦争ではイスラエルの勝利に大きな貢献をした名誉の一面もあり、一方的に犯罪者御用達の銃とは言えない存在だ

ミキの使うイングラムの犯罪者御用達の銃と言われる割には、ＭＰ５が勢いをますまで全米のＳＷＡＴに配備されており、ベトナム戦争ではアメリカ海軍の特殊部隊のネイビーシールズがガバメント代わりにサイドアームとして使用していた

とまあ、こんな感じで判断した俺は素早く反撃の体制を取ることにした

「行け！！追い詰めるんだ！！」

ブラックイーグルの下っ端達はブルドッグやイントラテック、マイクロｕｚｉを撃ちながら
俺に対して迫ってくる

俺は銃弾を交わしながら、下っ端達の目を欺いて倉庫に積まれた木箱の影に隠れて下っ端の一人が接近してくるのを待った

「クソッ！！どこに隠れやがった！！」

そう叫びながら下っ端の一人が接近してくるのを確認した俺は、そっと木箱の影に隠れながら下っ端が通り過ぎるを待つ

そして、下っ端が木箱の影に隠れた俺の存在に気付くこと無く通り過ぎた瞬間に俺は後ろから殴りかかる

バギィ！！と下っ端の頬を全力でぶん殴って下っ端が後ろに飛んで行く前に服の首元を掴んで前に寄せて
ボゴォ！！と腹に一発殴りこんで気絶させる
下っ端をガックリさせると、俺はこの下っ端が持っていたイントラテックとその予備マガジンを奪う
流石にＰ－１４一丁では相手が悪いのは確実だ
「おい！野田！！どうした！？」
この下っ端の仲間が異変に気付いたらしく接近してくるのを確認した俺はイントラテックのコッキングハンドルやマガジンキャッチなどを素早く確認する
「野田！！やられたのか！？」
「そうだよ」
下っ端が気絶させた下っ端（野田）に放った言葉に返答しながら俺はイントラテックを下っ端に向けて
ズガガガガガガガガガ！！と至近距離で発射する
「ぐあああ！！」
防弾チョッキ越しに大型トラックに跳ねられるような衝撃に襲われた戦闘員は気絶した
俺は気絶したことを確認してイントラテックのマガジンを素早く交

換する

「内藤！！山田と野田がやられた！！」

「クソッ！！全員一斉攻撃だ！！」

そう言うと、残りの３人が一勢にブルドッグとイントラテック、マイクロｕｚｉを撃ちながら俺に接近してくる

俺は先を行っていたイントラテックを持った奴にＰ－１４をズギューン！！と撃ちこんで気絶させる

それと同時に、隠れていた木箱から飛び出して下っ端の落とした二丁目のイントラテックを拾うと同時に

ブルドッグを持った奴に対して二丁拳銃ならぬ二丁サブマシンガンで攻撃する

””ズガガガガガガガガガ！！””

と二丁のイントラテックが火を噴く当時に「うぎゃあああ！！」と

ブルドッグを持った奴が気絶する、

「ウ、ウワアアアアアアアアアアアアア！！」

ズガガガガガガガガガガガガガ！！

俺の攻撃に恐怖した下っ端の指揮官（内藤）が叫びながらマイクロｕｚｉを乱射ながら俺に突っ込んでくる

俺は弾切れしたイントラテックを捨て銃弾が飛んでくる中、素早くＰ－１４をホルスターから引き抜き

バギューン！！と発砲する

「ぐはっ！！」

ズガガガガガガガ！！

至近距離で４５ＡＣＰを食らった指揮官はマイクロｕｚｉのトリガーを引きながら地面に崩れ落ちた。

俺は気絶した指揮官を拘束するためにＰ－１４を構えながらマイクロｕｚｉとそのマガジンを指揮官から奪い

手足を縛って拘束する

他の下っ端達も同じようするために、気絶している所に向かおうとしたその時であった

「！！」カチャッ！！

俺は人の気配を感じて振り向きざまにＰ－１４を向けた

そのＰ－１４を向けた先には武偵中学校の制服を着た女子が一人いた

「何だ、武偵校の生徒か・・・」

俺がそう言うと、その女子はニヤリと笑って

「違いますよ先輩、私は・・・」

そう言うと、その女子は俺に対してジュースの空き缶を投げつけた、次の瞬間！！

バァン！！という爆音を同時に目を閃光が襲う

「うおっ！？」

俺がそう叫んだ瞬間に、俺の腹に”グサリ！！”と何かが刺さるような感覚がした

「ぐあああ！！」

そう叫びながら、確認するとその女子が俺の腹に刃渡り３０ｃｍはあろうナイフを突き刺していたのであった

「”ブラックイーグルの幹部なんですよ”」

そう女子が言うと同時に、ズブゥ！！とナイフが俺の腹から抜かれる

俺は激痛と血が流れるのを感じながらＰ－１４をその女子幹部に向けて乱射する

バァン！！バァン！！バァン！！と３発の銃弾が彼女を目掛けて飛んでいく

しかし、彼女は笑いながらそれをかわして俺にこう言い放つ

「あははは！！何々～～！？まだ戦うつもりなの～～！？」

「ぐっ！！」

俺は刺された腹を抑えながらＰ－１４を撃ちまくって逃げようとする

「きゃはははははは！！逃げたってムダムダァ～！！、もう君の周りにはアタシの仲間がいるんだから～～！！」

俺は彼女がそう言うのを木箱に隠れて聞きながら、マイクロｕｚｉの安全装置を外して戦闘態勢を取る

それと同時に携帯を取り出して、願達に連絡をとる

プルルルル・・・という呼び出しの音が俺の緊張感と危機感を高めさせた

ガチャッ！！

『どうしたタカ？』

「願！マズイことになったすぐに・・・」

応援を要請しようとした矢先であった

バギィィ！！

俺が隠れていた木箱が”俺のいる場所から２ｃｍ離れたところから縦から真っ二つ”にされた

「うおおお！？」

俺は携帯を落としながらも必死に逃げる、さっきまで隠れていて縦から真っ二つされた木箱の真ん中から

ワンピースの白ひげが使うようなメチャクチャデカい薙刀を持った大男が現れた

『タカ！？、おいどうした！？』

バキィ！！

「ふん！」

その大男は俺の携帯を踏みつぶすと同時に鼻で笑った

俺は第２次朝鮮戦争、ＡＮＡ６００便ボーイング７３７－３５０で理子と戦った時以上の恐怖を感じていた

俺はその大男に向けてＰ－１４を乱射しながら逃げることしか出来なかった

バァン！！バァン！！バァン！！バァン！！とＰ－１４が火を噴きながら俺は倉庫内を走り回る

「ハァ・・・、ハァ・・・」

刺された腹の激痛と恐怖に襲われながらも、必死に逃げていたときであった

ズガガガガガ！！と前からサブマシンガンの銃撃を加えられたので

ある

「な、何だよ！？」

防弾制服から血が地面に滴り落ちるのを感じながら、俺は立ち止まるしか無かった

そうすると、目の前に女性と男性が現れた

「ったく！リーダーが言うからこんな武偵一人を捕まえるためだけに休日返上で仕事しないといけないんだよ！！」

「・・・・」

「な、何だよブラックイーグルの指揮官の命令で俺を殺せっていうのか！？」

俺は目の前の二人に話しかけて、この攻撃の目的を聞く

「いやぁ・・・、お前を捕まえてこいだとさ」

男はそう言うとバカでかいリボルバーを俺に向けて、女は古臭いサブマシンガンを俺に向ける

女の持つサブマシンガンは第二次世界大戦で使用されたＭ３Ａ１サブマシンガンで

男の持つリボルバーは・・・

「Ｍ５００ってマジかよ・・・」

俺がそう言った次の瞬間には！！

バッゴーオン！！、ズガガガガガガガガガ！！

「グアアア

「きゃはははははは！！君本当に諦めが悪いんだね～～！！」

「・・・・」

中学生ぐらいに見える女子幹部と、とんでもなくデカイ薙刀を構えた大男が俺の手を踏みにじって来た

「はぁ・・・、はぁ・・・」

俺は大量出血とさっきの５００マグナムの６連発＆４５ＡＣＰの機銃掃射による攻撃で意識が薄れてきた

「おい！紀代！！さっさと眠らせてやれ！！」

「・・・分かってるわよ」

女はそう言うと、注射器を取り出して俺の首元に注射器を刺したのである

「はぁ・・・、はぁ・・・はぁ・・・、はぁ・・・」

俺の意識は急速に薄れていき、ついには失ってしまった

意識を失う少し前に俺はこんなことを思った

（希・・・、ミキ・・・、すまねぇ・・・）

「リーダー、例の武偵を確保しました」

『よくやった、生きてるだろうな』

「ええ、俺の方針に合いませんけど生け捕りにしましたよ」

『よろしい、ではすぐに彼を連れて本部に戻って来い』

「了解!!、全員戻るぞ」

Ｍ５００を持った男が連絡を終えると同時に残りの幹部にこう言った

「おい!!全員帰るぞ!!」

そう言うと幹部たちはタカを連れて撤退を始めた、それと同時に目を覚ました下っ端達も歩き出した

「おい!お前ら止まれ!!」

そう言うと、Ｍ５００を持った幹部が下っ端達を止めさせた

「横に並べ」

「な、何でですか?」

「いいから!!並べって言ってるんだろ!!」

「ハ、ハイ！！」

理由もわからないまま、下っ端達５人は横に並んだ

「紀代」

ズガガガガガガガガガガ！！

幹部が仲間の幹部の名前を言った瞬間には、下っ端達は地面に崩れ落ちていた

「な・・・、なんで・・・」

「うるせぇ、”役立たずは死ぬのがブラックイーグルの掟”なんだよ」

息も絶え絶えで血まみれになった下っ端達にむけて男はＭ５００を向けてバッゴーォン！！と撃ちこむ

それが５発続いた後、幹部たちはタカを連れて撤退したのである

５分後

「「はぁ・・・、はぁ・・・」」

全力でダッシュしてきたアリアと希が第２倉庫にやって来て倉庫内

を見た瞬間であった

「うっ！！」

「キャアアアアアアアアアアアア！！」

ベテランのアリアですら目を逸らしてしまうほどの惨状が彼女たちの目の前に広がっていた

そこには大量の血液と内蔵をバラまいた下っ端５人が会ったのである

「セ、先輩は！？」

「タカァ！！無事なの！！」

「せんぱぁ～い！！」

アリアと希が倉庫内を捜索していたときであった

二人の目の前に悪夢のような光景が広がっていた

「！！」

「う、嘘でしょ・・・」

そこのにはゴミバケツいっぱいの血を撒いたかのように血溜まりが広がっており、

その中にバラバラになったタカのＰ－１４が散らばっていたのである

「いやぁ・・・、いやぁ・・・」

希の目に見る見ると涙がたまっていき、次の瞬間には

「イヤアアア

## 報復の炎に燃える時・・・（後書き）

どうも、白石です。タカがついに誘拐されました！！、

さぁこの後、希とミキ&願達はどうやってタカを救助するのでしょうか！！

今回の章ではコラボキャラ達とブラックイーグル幹部たちとの激しい戦闘も書く予定ですよで乞うご期待を！！

次回も、かなりグロテスクな部分があります。ご注意ください

では、次回もお楽しみに！！

**証拠隠滅と目的、そして一筋の光が差し込む時・・・（前書き）**

前回、国際麻薬密売組織”ブラックイーグル”の報復攻撃により

ブラックイーグルの捕虜となったタカ、ブラックイーグルがタカを拘束した理由とは！？ブラックイーグルのリーダーは一体誰なのか！？

そして、尊敬すべき、愛すべき人を奪われた時、希とミキは・・・

※彩蓮先輩、初登場です。あと今回はかなり長いです

**証拠隠滅と目的、そして一筋の光が差し込む時・・・**

タカがブラックイーグルに誘拐されてまる3日、ＳＡＴの指揮官でもあるミキは部下を引き連れて突入作戦に参加していた

『ミキ副長！こちら第2班、突入準備完了です！！』

「了解、第2班。命令するまで待機せよ」

『了解！！』

郊外にある廃ビルの前にミキの指揮する、警視庁・警備部・対テロ特殊部隊の”ＳＡＴ”が待機している

（タカ・・・、待っていて・・・今助けるからな・・・）

ミキがこのように思っているところからわかるように、ミキの所属するＳＡＴに命じられた今回の任務は

《ブラックイーグルの拠点となっている廃ビルに突入し、タカを救助、並びにブラックイーグルメンバーを逮捕せよ》

というものであった。

前にあったブラックイーグルの拠点を壊滅させた際に壊滅した部分からドサクサに紛れて遼の所属する

”内閣情報調査室”の隊員がブラックイーグルに内部に潜入して得た情報を元にこの廃ビルに突入することになったのである

「ふぅ・・・」

ミキは一回、深く深呼吸して自分を落ち着かせる。そして・・・

「突入！！」

バギィ！！

ミキが突入命令を出すと同時にＳＡＴ隊員の一人がハンマーでドアを破壊する

その後に、ＭＡＣ１０を持ったミキを先導にして次から次へとＳＡＴ隊員たちが一勢に突入していく

ズガガガガガッ！！

ミキの持つＭＡＣがドアに向けて乱射されるに次いで

バキィ！！

とミキが荒々しくドアを蹴り破り中に部屋の中に突入していく

ミキは部屋の中を捜索しながら、部下たちに状況の報告を求める

「各員、状況を報告せよ」

『こちらは特にありません』

『こちらも特にありません』

『こちら狙撃班、目立った動きはありません』

ＳＡＴ隊員達からの報告を聞きながらミキが部屋を捜索していたときであった

「あれは・・・？」

ミキが部屋の中においてあった１つの大きな木箱を確認して、そっと蓋を開けると・・・

「爆発物だ！！各員ビルから退避しろ！！」

木箱の中にはどこで調達したかは知らないが、強力すぎる１０００ポンド爆弾に時限装置が付けられていたのであった

その時限装置が指す残り時間はわずか５０秒であった

バリィン！！

ミキはすぐに部屋の中にあった窓を叩き割り、窓から脱出する

それに次ぐようにビル内にいたＳＡＴ隊員達が猛ダッシュでビルから脱出する

「全員伏せろ！！」

ミキが叫び、ＳＡＴ隊員たちが地面に伏せると同時に

ズドオオオ

！！！

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラ！！

爆音が鳴り響くと同時に地震にも似た地響きが起き、廃ビルが崩壊した

「「「「・・・」」」」

ミキ、ＳＡＴ隊員達が顔を上げると、さっきまで存在していた廃ビルが一瞬の内に瓦礫の山を化していた

他のＳＡＴ隊員達が呆然と瓦礫と化した廃ビルを見る中、ミキはゆっくり立ち上がりフラフラと瓦礫の山に歩み寄っていった

「そんな・・・」

ゴトン！とプロテクター付きのヘルメットを地面に落としながら数歩、歩いた所で

ぺたんと地面に崩れ落ちたミキの目からは涙が溜まっていった

「タカァ・・・タカァ・・・」

ミキは涙を抑えることができなくなり遂に・・・

「うわあああああああああああああああん！！タカァ・・・タカァ・・・！！」

部下の前で泣き叫ぶことしか出来なかった

その頃、武偵校では、作戦会議室の中で願、翠、桂、遼、希、アリア、キンジが集まってタカの居場所について話し合っていたところであった。そこへ電話がかかってきたので翠が出ていた

「願、ＳＡＴから連絡が入ったわ」

「なんだって翠？」

「ブラックイーグルの拠点の廃ビルに突入するが、ブラックイーグルが証拠隠滅のために爆破され手がかりが１つ残らず消されたって・・・」

「ちっ、最悪の状況だな・・・」

「ああ、本当だ」

願の舌打ちに続くように遼が口を開く

「すでにブラックイーグルに潜入した部下数人と連絡がとれなくなっている」

「すでにもうその部下の人達はもう・・・」

「殺された可能性が高いな・・・」

桂の問に遼がそう答えることしかできない状況であった

「ブラックイーグルの連中はかなりの上手ね・・・」

「ああ、そうだなアリア・・・」

キンジはふと隣の席に座っている希を見る

「・・・」

希は黙り込んだままうんともすんとも言わない状態であった

「しかし、ブラックイーグルの連中はいったい何が目的なんだ・・・」

キンジがそうつぶやくと、アリアがそれに答える

「そりゃあ、この前逮捕した幹部の開放じゃないの？」

「いや、そんな程度じゃないと思うわよ・・・」

「どういう事よ、翠？」

「もう既にタカが拉致されてまる3日経つのよ、それでもブラックイーグルからの要望が来ないのよ」

「確かにね・・・」

「もしかして、第1の目的がタカ君と引き換えに幹部を釈放するのが目的で無いんじゃないの？」

桂がそう言うと、遼がそれに続くようにこう続く

「となると、まずブラックイーグルの威厳を示すために”タカを殺す”ってことになるのか・・・」

「！！」

”タカを殺す”という遼の言葉に反応して希がビクッ！！とする

「遼！！」

アリアの叱責に遼は「すまん・・・」というしか無かった

「でも、足取りが全部消えたからそれを確かめる方法も無いんだよね、願君・・・」

「ああ、桂の言うとおりだ。ブラックイーグルに関するものは全て爆破され証拠を消されている」

実際に、タカが誘拐されて以降、ブラックイーグル内部に潜入した内閣情報調査室の隊員がもたらした情報を元に機動隊、海上保安庁などがその場所に突入したが全て爆破されている

三日前には拠点に突入した機動隊５０人が爆破に巻き込まれ５０人全員が殉職している

同じく、東京湾沖合に停泊していたブラックイーグルの元思われる不審船に海上保安庁特殊部隊の”ＳＳＴ”が調査のために乗り込んだ所を爆破されＳＳＴ隊員１６人が負傷している

今回のＳＡＴの突入で死傷者が出なかったのがまさに”奇跡”と言わざるしか無かった

その時、作戦会議室のドアがガチャリと開き、一人の３年生の女子が作戦会議室の中に入ってきた

「彩蓮先輩、何のようですか？」

「ああ、キンジ君もいたんだ」

キンジが話しかけた先輩は、探偵科の３年生の”彩蓮未来（さいれんみく）”

東京武偵校が誇る、潜入捜査のプロである。

その潜入捜査の腕前は警視庁からも依頼されるほどのもので、

警視庁指定暴力団”銀星会（ぎんせいかい）”への潜入捜査では銀星会壊滅のきっかけともなる

情報を獲得し銀星会を壊滅させた人物の一人でもある

そんな彼女の愛用する銃は、Ｓ＆Ｗ社のマグナムリボルバーの”Ｍ２８の４インチ”

通称：ハイウェイパトロール、３５７マグナムを使用する大型リボルバーである

ハイウェイパトロール（交通警察）の名とは裏腹に非常に重いため

警察での採用例は非常に少ないが

ちょっとやそっとのことでは破損することが無いので彼女が頼りにしているのである

バックアップの銃は、Ｍ２８と同じＳ＆Ｗ社のオートマチック拳銃の”Ｍ４５０６”である
４５口径のダブルアクションオートマチック拳銃である。
リボルバーのＭ２８は火力に優れるがリロードに時間がかかるため、弾切れした際に素早くバックサイドホルスターから抜いて使用する為である

「遼君いる？」

「ああ、はい」

遼のもとに彩蓮が歩いて行く、

「内閣情報調査室の隊員たちが潜入した潜入ルートを教えてくれない？」

「え？彩蓮先輩、ブラックイーグルに潜入するんですか？」

「ええ、そうよ」

「先生たちから頼まれたんですか？」

「違うわよ、翠ちゃん。私が志願したの」

「彩蓮先輩が？」

「ええ、タカ君には何かとお世話名になっているからね。今回は私がタカ君を助ける番よ」

「先輩がそう言ってくれると心強いですよ」

「じゃあ遼君、早速教えてもらおうかしら？」

「分かりました、じゃあこっちに来てください」

そう言うと、遼はカバンからブラックイーグルに関する資料を取り出し彩蓮に対して説明をしていた

強力な助っ人の登場にアリアとキンジはちょっと嬉しそうな表情をしていたが、

願、翠、桂、そして希の顔色は悪い物だった

その時、また作戦会議室のドアが開いた。そこにいたのは・・・

「ミキちゃん・・・」

放心状態のミキであった、幼馴染の翠だけではなく願達も数日前までのタカとバカップルを

やっていたミキとは明らかに違う弱々しい様子のミキに黙りこむしか無かった

ミキは希の方を向くと、見る見ると目に涙を溜めていった

「のぞみぃ・・・ごめんね・・・タカを助けられなかったよ・・・」

震えた涙声でミキは希に話しかけた

「ミキ・・・先輩・・・」

希も同じように涙声になりながら、ミキの言葉を聞くしか無かった

「うっ・・・、うっ・・・うぇぇぇぇぇん！！」

リミッターが外れたかのようにミキの目から涙が溢れ出した

「な、なかないでくださいよ・・・・、うっ、うぇぇ・・・」

ミキを慰めようとした希の目から涙が溢れ出していた

「ミキちゃんは悪くないよ」

「大丈夫だよ希ちゃん♪光稀ちゃんを残してタカ君が死んじゃうわけないから♪」

泣き出したミキと希を翠と桂が慰める

この様子を見て、願、遼、彩蓮、アリア、キンジは話し合っていた

「ミキと希休ませたほうがいいよな・・・」

「二人共参ってるわね・・・」

「ああ、無理も無いだろ」

「休ませたほうがいいだろ願」

「ああ、俺もキンジと同じ意見だ」

「アタシも遼、キンジと同じ意見よ。あの二人には休暇が必要よ」
「尊敬する人と愛する人を失って参らない人のほうがおかしいわよね」
願達はそう結論を出すと、希とミキに対してこう告げた
「希、ミキ、今日はうちに帰ったほうがいい」
「え？何でですか願先輩！？、私は大丈夫です」
「アタシもよ願！！」
「二人共、気持ちはわかるけど倒れてしまったら元も子もないわよ」
「ゆっくり休んでタカ君を迎えるのがあなた達の仕事でもあるのよ」
願、アリア、彩蓮にそう言われ希とミキは顔を合わせて、仕方ないという表情をした
「分かりました願先輩・・・」
「何かあったら連絡頂戴ね翠ちゃん・・・」
「大丈夫だ希」
「分かってるわよミキちゃん」
願と翠がそういうのを聞いて希とミキは重い足取りで家路に付いた

のである。

タカｓｉｄｅ
俺が目を覚ました時、俺は自分の状況が一瞬なんだか分からなかった
体の表面を何かが流れているのを感じる。
それに首から上はハッキリとしているのに首から下は動かすことができない
（俺の体は一体どうなっちまったんだ・・・？）
俺はそんなことを思いながら、不自然に動く首を動かして周りの状況を確認する
俺が今いる場所はコンクリートでできた部屋で窓はなく明かりとなる物は電灯が１つ
俺の真正面には鋼鉄製のドアがある。近くに水道があり消防用のホースが繋げられていた
（俺を拷問するための道具の１つか・・・）
ゾッとする様な寒気を感じた時、俺は足が宙に浮いていることに気がついた

首から下の感覚が無かったから分からなかったが今の俺は両手を縛られて、天井からぶら下げられている

だんだんと意識がはっきりしてきたから分かったけど俺の体は今、多数の刃物による切り傷が付けられているということ

痛みを感じない理由は、麻酔でも使って感覚を麻痺させているからだろう

麻酔が切れると相当な激痛が俺を襲うはずだ・・・

そう思うと恐怖心が募っていく、頭の中から血の気がサーッ！！と引いていくのが分かる

怖い、第2次朝鮮戦争で極限状態には慣れているはずなのに恐怖を感じていた、

いや、感じざるを得なかった・・・

その時、ガチャリ！という音と同時に成人男性が3人、成人女性が1人、女子が1人
部屋の中に入ってきた

「お目覚めかね、鷹山君？」

「・・・テメェは！！」

俺は俺に話しかけてきたリーダー的存在のブラックイーグルの幹部を見て
一人の国際指名手配犯を思い出した

「佐藤・・・、佐藤幸治じゃねぇかよ・・・」

「ほう、私を知っているのか。関心だ」

「そりゃあ、武偵の世界じゃアンタはとてつもなく有名人だからな！！」

俺は佐藤にそう叫ぶ

佐藤幸治、壊滅した暴力団”銀星会”の元幹部、

アメリカ・ニューヨークで惨殺事件を起こしてニューヨーク市警察に逮捕されたが日本への護送の途中で

当時の部下によって佐藤を誤送していたＮＹＰＤ（ニューヨーク市警察）の刑事を殺害して逃亡し

日本の警視庁、アメリカのＮＹＰＤの共同捜査で行方を追っていた指名手配犯だ

所属していた暴力団の”銀星会”が壊滅してからはまた海外に逃亡したのでは無いか？と言われインターポール（国際刑事警察機構）から目を付けられていた人物である

もちろん、インターポールだけでは無く、国際武偵局からも国際指名手配犯されている人物である

（まさか、ブラックイーグルに入っていたとはな・・・）

「で？佐藤さんよぉ、俺を捕まえてどうするんだ？」

「特に何もしないよ、今の時点ではな・・・」

「この前、俺が指揮する部隊の逮捕した幹部の開放が目的か？」

「それは2の目的だあるな・・・、君が逮捕した幹部は私の弟だからな・・・」

「兄弟揃って悪かよ・・・」

「まあ、いずれ”君は死ぬ”ことは”確実”だよ。君を殺してブラックイーグルの威厳を示すところから始めよう」

佐藤はそう告げるとニヤリと笑って来た

俺はまた恐怖を感じていた・・・

「しばらく君が世話になる、私の部下を紹介しよう鷹山君」

そう言うと、佐藤は部屋の中に入ってきた幹部たちの紹介を俺に始めた

「彼の名は闇裂総真（やみさきそうま）、私の右腕でもあり、君にＭ５００をぶち込んだ人だ」

「ああ、５００マグナム食らって意識朦朧だったから分からなかったけどこんなチャラ男とはな！！」

「何だと！？この糞ガキが！！」

バキィ！！と俺の顔に闇裂の拳が飛んでくる、俺はこの時に口の中を切ったようで血の味を感じた

ペッ！！と口の中に流れた血を闇裂に吐きかける

「テメェ！！ぶっころしてやる！！」

「落ち着くんだ、闇裂」

そういって俺に刃物を向けた闇裂を第２倉庫で薙刀を振り回していた大男が押さえる

「鷹山君、彼は威島　巌砕だ」

「ああ、悪としてのカリスマ性がパンパ無いな・・・」

俺は威島の威圧感に心臓を潰されそうになりながらもそう強がることしか出来なかった

「彼は薙刀を振り回すだけではないぞ」

佐藤はまたニヤリと不敵な笑みを浮かべてこう言い放つ

「威島はＭ６１バルカン砲を生身で持って乱射する様な男だ、君のお友達が助けに来た所で全滅するだろうな、ハハハッッ！！」

佐藤の笑い声が絶望感を煽る

（Ｍ６１バルカン砲を生身でぶっ放す！？、コイツは新手のターミネーターかよ・・・）

俺はそう思いながら、威島を見る。

威島は俺と一度目を合わせるが、すぐに「ふんっ！！」と言って目を逸した

（しかし、コイツはかなりの強敵だな・・・願でも苦戦するのが目に見えるな・・・）

「ねぇねぇ、リーダー。アタシは自分で自己紹介がしたいんだけど～～？」

「ふん！勝手にしろ！！」

佐藤がそう言うと、俺にナイフを刺した女子がぶら下げられている俺のもとにやってきた

「どう？このナイフ赤くて綺麗でしょ～」

「ああ、”俺の血”で真っ赤に染まってるな・・・名前は？」

彼女はさっき俺を刺しまだ俺の血が付いているナイフをケースに戻すとこう言った

「アタシの名は”月影（つきかげ）詩（うた）”、それにしてもあんたバカね～～」

月影はそう言うと笑いながら俺にこう告げた

「まさか”殺した武偵の女子制服”を来ただけであっさり騙されるなんてｗｗｗ」

「殺しただと！？」

「そうよ、この前一人の女子武偵高生が誘拐された事件は知ってるでしょ？」

「ああ・・・・」

「彼女はアタシたちのことを追っていたのよね、だから誘拐して殺したの・・・・」

そう言うと月影は近くの鉄製の箱を開けて中身をひっくり返した

「うっ！！」

俺は思わず目を逸らしてしまった

出てきた中身は、全裸の女子高生の死体だった。腐敗が始まっていてハエが飛び交っていた

それに殺された女子高生のスリットからは白い白濁液が流れていた

「おえっ！！」

俺が思わず戻してしまったのを見て月影は更に言葉を続けた

「彼女はねぇ、闇裂にバージンを奪わして殺しちゃったの・・・・」

彼女は笑いながら俺に顔を近づけて言い放つ

「『やめて！！やめて！！お願い！！せめて殺してからにして！！』とか言いながら闇裂に侵されるまでは傑作だったわよ～～」

「このキ〇ガイ共が・・・」

「ふん！何とでも言いなさい！！アンタの童貞を卒業させる女を紹介してやるわ！！紀代！！」

月影がそう言うと出てきたのは２０代後半の女性だった

「彼女は”清弘紀代（きよひろきよ）”よ、普段は無口だけどアンタが来てからは嬉しそうにしてるわよ」

「何でだよ？」

「彼女、”バイセクシャル（両性愛者）”なのよだから男でも女でも構わず”食べちゃう”のよ」

月影がそう紹介する中、彼女はガムみたいなのもを口していた

「何食ってるんだ？」

「”いつもの”スピードボールや」

清弘は関西口調でそういった。スピードボールとはコカインとヘロインを混ぜ合わせた麻薬である。

つまり彼女は・・・

「ジャンキー（麻薬中毒者）か・・・」

「そうやでウチは・・・」

清弘はそう言うと、ケースから刃長：１５５ミリの漁師マキリを取り出した

そして俺の方を振り向くと、漁師マキリを俺の胸に当てて一気に胸の上で滑らせた

「！！」

漁師マキリが通った後が裂け、血が流れだした。けど痛くは無い。しかしとてつもない恐怖で顔がゆがむ

「はぁ・・・、はぁ・・・」

「いいの～、その表情、ウチの大好物やで～」

清弘はそう言うと、俺のズボンに手を伸ばした

「な、何をするんだ！？」

「ん～？、ちょっとくわえようかと思っただけやで？」

「よ、よせ触んな！！」

俺は必死に叫んで清弘から貞操を守る

「清弘、お楽しみは後だ」

佐藤が清弘の行為を止めさせる

「以上が私の部下達だ」

「ろくでなしばっかりだな」

「何とでも言え」

そう言うと佐藤は俺の腹に一発殴りこんでくる

「ぐあっ！！・・・・」ガクッ！！

俺はこの一撃で気絶してしまった

「ふん！口だけ達者なカカシだな所詮は。コイツを牢獄にぶち込め威島！！」

「了解しましたリーダー」

そう言うと威島は気絶したタカを肩に乗せて牢獄歩いてった

「　美沙姫　（みさき）を呼べ！！」

佐藤がそう叫んだ数分後には髪は淡いハーブ色で勝ち気な目つきにライトレモンの瞳の少女が走ってやってきた

「なんでしょうか？」

「例の捕虜の見張りをお前やるんだ！！」

「了解しました！！」

彼女の名は”蓮野　美沙姫　（はすの　みさき）”。

彼女をタカの見張りにした所がブラックイーグル壊滅のきっかけになるとは、誰も思いもしなかった

また、タカ生還の理由になることも誰一人としてはこの時知るはずもなかった・・・

## 証拠隠滅と目的、そして一筋の光が差し込む時・・・（後書き）

どうも、白石です。いや～、今回はかなり長くなりましたよ～！！

皆様からもらった”ブラックイーグル幹部”をどうやって生かして書くのか悪戦苦闘しながら書いた割には随分、メチャクチャな話なような気も・・・

いや、言い訳するわけじゃないんですけど。今週の水曜日に体育祭があり応援団長やら色々やって疲れているからこんな出来になったのか・・・

まぁ、最初考えていた展開ではこの後にミキがオ◯ニーしていたり、希がベッドで泣きじゃくるみたいな展開も用意していたのですが、１万字以上超えそうだったのでやめときましたｗｗｗ

次回、あたりにやるかもしれないですけど・・・・

ああ、あと皆様に少し残念なお知らせがあります。

実はあと少しで期末テストなのでしばらく更新ができなくなります。

楽しみにしている皆様にはご迷惑をおかけしますが、何ぞと理解してください

次回は、希の新しい愛銃と希無頼でも書こうかなと思っています

では、次回もお楽しみに！！

**希、決意と単独作戦　そして新しい相棒・・・（前書き）**

ブラックイーグルにタカが拘束されて３日目の夜、

願達に休むように言われた希は悲しみにくれる中、ある決意をする

そして、希の手には新しい”相棒”が握られていた

※今回は希が主人公的存在です！！

## 希、決意と単独作戦　そして新しい相棒・・・

午後１１時半　風連家

タカがブラックイーグルに拘束されて３日目の夜、願達に休むように言われた希は

久々に自宅に帰ってきていた

ガサガサ！というオムツを履かせる音が希の部屋の中でなる

父を目の前で殺されたショックで失禁症と夜尿症が再発してしまった希には必須なのである

「・・・」

「希、大丈夫？」

「うん・・・、お母さん大丈夫だよ・・・」

母の問いかけに希はそう答えるもののその声には活気が無かった、

希の母にも戦兄（あに）で

希の命の恩人であるタカが拘束された情報は耳に入っていた

「はい、終わったわよ希」

「ありがとうお母さん・・・」

「鷹山さんのことなら大丈夫よ希、あの人は運が強いんだから。それに願先輩やアリア先輩といったベテランの先輩たちも入るのよ、きっと大丈夫よ」

「・・・」

希の母はそう励ますが、希の表情は暗いままであった、

「俊介も美奈子も鷹山さんの捜索に参加することになったと言ってたわよ」

「お兄さんとお姉ちゃんも・・・？」

「ええ、」

希の兄の俊介（しゅんすけ）、警視庁・機動捜査隊のエースで希がタカに次いで尊敬する人である

同じく希の姉の美奈子（みなこ）、麻薬取締局の麻薬取締官でリボルバーに関しては麻薬取締局においてトップの存在である。こちらも希がタカに次いで尊敬する人である

しかし、尊敬する人と同時に自分が追いつけることのできない存在として希が鬱憤を感じる一面もある

「だから大丈夫よ、まずはゆっくり休みなさい。鷹山さんが帰ってきても希が倒れちゃ本末転倒よ」

「分かってるよお母さん・・・、おやすみ」

「おやすみ、希」

そう言うと、母は部屋の電気を消して去っていった

「・・・寝よう」

暗くなった部屋で希はそうすることしか出来なかった、

現在、武偵局、警視庁、麻薬取締局においてタカの捜索は行われているのだがブラックイーグルに関する情報、証拠は全て見つからず捜索は難航している

（もし、このまま見つからなかったら先輩は・・・）

希がそう思った瞬間には、タカの惨殺死体が頭に浮かんできた

「うっ・・・、うぇぇぇ・・・」

そう考えただけで涙が浮かんできた、数秒後には

「うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

とベットの中で泣きじゃくることしか出来なかった

「先輩・・・！！、先輩・・・・！！うあああああああああ！！」

希の泣き声が夜の静寂を切り裂いていたが１０分後にはこの３日間で疲れていのかすっかり寝ていた

…

……

……

「いたぞぉぉ！！絶対に逃すなぁ！！」

「クソッ！！」

一人の男がサーチライトに照らされながらＵＺＩやＭＰ４０、ステン短機関銃を持った男たちから逃げていた

ズガガガガガガガガガガガ！！と鳴り響くサブマシンガンの銃声

「グアアアアアアアアッ！！」

そう悲鳴を上げて一人の男が地面に崩れ落ちた、その男は”タカ”であった

「ハァ・・・ハァ・・・ウッ！！」

ゴバァァ！！

口から吐血し、全身血まみれで息も絶え絶えのタカに

サブマシンガンを持った男たちが寄ってきたその男たちの中から

一人の指揮官と思えし男が手にオートマグ４４を持って歩み寄ってくる

息も絶え絶えのタカの額にオートマグ４４を突きつけてハンマーを
ガチャリ！と起こす、そして・・・
ズギューン！！

「イヤアアア

希はそう言うと、かけていたタオルケットを取り払うと、希の目に飛び込んできたのは自分の垂れ流した聖水でぐっしょりと濡れた自分のパジャマと世界地図のできたベッドシーツであった

タカが惨殺される悪夢を見た反動からかオムツの吸収量をはるかに超え溢れ出していた

「ひっ・・・、ひっく・・・」

世界地図の上に希の涙が滴り落ちる

「こんな自分が・・・、落ちこぼれの自分が・・・、先輩を助けるなんて・・・、できないよ・・・」

希は自分の治らない体質を見て、自分が無能であると思うしか無かった。

タカやミキ、アリア、願達、兄姉を超える事のできない自分が憎かった。

「うっ、うっうううう・・・、うえええええええええええええ

ええええん!!」

ダン!!ダン!!

と世界地図のできたベッドシーツを泣きながら叩くことしか出来なかった

「希、大丈夫!?」

さっきの悲鳴と泣き声を聞いて希の母が慌ただしく希の部屋に入ってくる

「ひっく・・・、お母さん・・・、うっ、うっうううう・・・」

「希、大丈夫よ。お母さんが後片付けしてあげるからお風呂に入って来なさい」

「うっ、うっうううう・・・」

希は泣きながら頷き、風呂場へと向かっていく

汚れたパジャマと下着を洗濯機に入れ、希はシャワーを浴びていた

シャアアアアアア！！

希はシャワーを浴びながら考えていた、さっきは感情任せに自分が落ちこぼれであると思っていた

確かに、落ちこぼれかもしれない

だが、落ちこぼれだからといってタカを助けだす為にできることはあるはずである

「落ちこぼれには、落ちこぼれのやり方があるはずよ！！」

そう言いうと希はまず何をすべきか考えることから始める

「まず、先輩のいる場所を探さないと駄目だけど、でも情報が無い

んだよね・・・」

希は風呂から出ると、部屋に戻り情報を得るために自分が何をするべきか考えれることにした

バサバサッ！！とタカやミキ、願、アリアなどから渡された様々な資料、

兄の俊介のくれた指定暴力団の一覧表、姉の美奈子がくれた麻薬取引に関する資料

希はこれらすべてに目を通し考え、一つの結論を出す

「やっぱり、ブラックイーグルの幹部を逮捕して吐かせるしか無いか・・・」

そう言うと、希は姉の美奈子がくれた麻薬取引に関する資料の中から一つの資料を取り出した

「お姉ちゃんがくれた”麻薬取引の行われている場所の一覧”を見た限りでは・・・、”旧ニコニコ商店街”が怪しいなぁ・・・」

旧ニコニコ商店街、その在り来りな名前とは裏腹に治安が東京都内でも有数悪く、アメリカ・ニューヨーク郊外の黒人スラム街が同じくらい治安が悪い場所で、暴力団の麻薬密売の温床ともなっている商店街である

そう言うと、希は兄の俊介のくれた指定暴力団の一覧表にも目を通す、

「旧ニコニコ商店街の近くには、指定暴力団として”戸川組”の事務所があるんだ・・・、戸川組って銀星会に次いで関東でも有数の大きさの暴力団ってお兄ちゃんも言ってたし、ここで麻薬密売が行われるはずね」

そう推測した希は、希はタカから貰った麻薬取引の記録の一覧表を手に取り、

タカの言っていたことを思い出す

『戸川組の特徴として、麻薬取引を月の第３火曜日か第４日曜日に行なっている事が多い』

「先輩の言っていた通り、大規模な麻薬取引は月の第３火曜日か第４日曜日だ・・・」

希は記録表を見ながら、カレンダーを確認する

「今日は第３月曜日かぁ・・・、麻薬取引が行われるかも」

そう言うと、希は一回息を吸い、ふぅと息を吐く

（よし！！、いつまでも先輩たちに頼ってばかりじゃ駄目だ！！、今回の任務は一人でやる！！）

そう決意した希は、ガンロッカーから銃を取り出した

しかし、その銃はいつものデトニクスとニューナンブでは無い、

それらより遥かに大きい”デザートイーグル４４マグナム　風連希

専用カスタム”で会った

この前、願からプレゼントされた銃である。

市販されている弾丸では非常に威力の大きい４４マグナムを使用するデザートイーグルに

反動を抑制するためにコンペイセイターを搭載、リカバリーを考慮してラバーグリップを装着し

群青色を背景に猫が二匹寝ている絵をメダリオンとしてグリップに装着し、

スライドをネイビーブルーに塗装した。希専用のデザートイーグルである

希はガンロッカーからこのデザートイーグルと４４マグナム弾を取り出すと、

マガジンにカチャカチャ！！と４４マグナム弾を装填していく

同じようにして、デトニクス、ニューナンブのマガジン、スピードローダーにも弾丸を装填していく

そして、銃の準備を終えた希はデザートイーグルをバックサイドホルスターに入れ、武偵校の防弾制服に着替えて家を出た

「よし、行こう！！」

たった一人の戦争を始めるために、希は一人愛車のホンダ・ビート

を走らせた

その頃、東京武偵校の2年A組ではタカ救助ために話し合いをしているグループがあった、その顔ぶれは

願、翠、遼、桂、アリア、キンジと言ったいつもの顔ぶれだが、今日は新しい顔が入っていた

矢崎景明（やざきかげあき）、多国籍特殊部隊TF141の隊員であり、タカの友人で、第二次朝鮮戦争の戦友の一人である。

武偵校一の過激派と呼ばれ、暴徒鎮圧の為に軽機関銃を担いでくるような人間である

前にタカと一緒にスティンガーミサイル奪回作戦をしたのが記憶に新しいだろう

「景明、タカの救助作戦参加してくれるわよね？」

「ああ、戦友の危機にそっぽを向くことはしたくないからな」

「景明くんが参加してくれるなら心強いよ」

「そりゃどうも、柚梨佳」

「気楽に言うけど、今のところタカの捜索では難航しているぞ」

「ああ、願、聞いたよ。証拠が全部消されたってな」

「それにしても、ミキちゃん参ってるね・・・」

「無理も無いわよ”つかさ”、だってあんなにラブラブだったのに突然、奪われちゃったんだから」

翠が返した相手は”服部つかさ”　景明のパートナーでタカ、ミキ、希とも面識がある彼女

武偵校一の過激派と呼ばれる景明のパートナーと言われるだけあり、銀行強盗の鎮圧のためにグレネードランチャー撃ちこむような人物である

この二人を加えたメンバーは窓際で外の景色を見ているミキを見ていた

タカを奪われてすっかり魂が抜けきったミキは、目に涙を浮かべながら

「何で神様はタカを奪うの・・・？、何で・・・？」

一言ポツリ、そう言うと顔に手を当てて声を殺して泣き出していた

「ミキちゃん・・・」

翠、アリア、つかさがミキを励ますためによっていく

「翠ちゃん・・・、アリア・・・、つかさ・・・・、うっ、うぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

翠の胸に顔をうずめながらミキはリミッターを外したように泣き出

した

「大丈夫よ、ミキちゃん。タカは簡単に死ぬようなタマじゃないのは第二次朝鮮戦争の頃から知ってるから」

「しっかりしなさいミキ！！、そう泣いた所でタカは帰ってこないわよ！！、アンタがしっかりしてタカを迎え入れてあげないと！！」

「ミキちゃん、分かるよその気持ち・・・、自分の大切な人に会えないってことがどんなに辛いことかって・・・」

女子3人がミキを励ましている時、キンジが一つある事に気付いた

「そう言えば、今日、風連の奴を見たか願？」

「ああ、そう言えば見てないな。遼、お前は希を見たか？」

「いや、俺も希を見てないぞ」

「嫌な予感がするな・・・」

「どういう事だ願？」

「希の奴、危険なことに首を突っ込んでいそうだ・・・」

その時、教室のドアが乱暴に開き、竹崎が飛び込んできた

「遠山先輩！！大変です！！」

「ん？どうした竹崎？」

「希の奴、たった一人でブラックイーグルの幹部と戦うつもりですよ！！」

「ど、どういことだよ竹崎！？」

「それは私が代わりに説明せて頂きます」

「「「「「うぉぉぉぉぉ！？」」」」」

「「「「「おー！！」」」」」

突然、竹崎の横に現れた１８歳ぐらいの女性が２ｍを軽く越す巨大な『黒く禍々しい翼』をゆっくりと羽ばたかせて降り立った

目の前に光景に、キンジやアリア、ミキだけでは無くＴＦ１４１の隊員でもある景昭ですら驚いている

それに比べると、願、翠、遼、桂は恐ろしく肝が座っているためか

「おー！！」の一言で終了した

「だ、ダダダ誰よこいつぅぅ！？」

アリアが超取り乱した声で竹崎の横の女性に話しかけた

「名を申し遅れました、私の名は『アリサ・ルウィーズ』、竹崎裕太こと義藍炎魅宏に全てを委ね、絶対服従を誓う者です」

「「「「「？？？」」」」」

キンジたちが頭にはてなマークを3つ浮かべている側で、願がアリサに話しかけた

「で、アリア。希が危ないってどういう事だ？」

冷静な声ながらも、その声には緊張感が感じれるものだった

アリサは少し息を吸うと口を開いて話しだした

「ベルゼブブから風連希が危険な賭けに出たということを聞き、詳しくベルゼブブに話してもらった所、風連希は鷹山勇治の情報を得るためにたった一人で、ブラックイーグルの麻薬取引の現場に乗り込んだそうです」

「なんてこったい！！」

遼がそう叫ぶなか、アリサは話を続ける

「更に、ベルゼブブによると今回の麻薬取引はブラックイーグルの幹部も参加するようで、その幹部はかなりの戦闘力を持っているようで風連希だけでは確実に敗北します」

このことを聞き、ミキだけでは無く、願達も一気に青ざめていた

「それだけか？」

「いえ、更にその幹部は両性愛者のようで、早くしないと風連希が犯される可能性があります」

その言葉を聞いたミキは猛ダッシュでＭＡＣ１０を手に取り、走り

出していた

「あ、ちょっとミキ！！」

アリアの言葉も耳に入ること無く、ミキは走りだしていく

「おい！翠、遼、柚梨佳、俺達も行くぞ！！アリア、竹崎案内しろ！！」

「わかりました」

「はい！願先輩！！」

「分かった！！」

「ＯＫ！！」

「分かった願くん！！」

「待て、願！！」

「なんだ景明！？」

「俺も行く！！」

「景明！だったら、私も行く！！」

「ありがたいけど、今回は駄目だ。人数が多すぎると作戦に支障が出る」

景明にそう言われつかさは黙りこむ

「安心しろ、この程度の救助任務なんて第二次朝鮮戦争に願・翠とやった核ミサイル確保作戦に比べれば朝飯前だ」

「わかったよ、景明。無事にのぞみちゃん連れて帰ってきてね」

「ああ！！」

そう言うと、願、翠、桂、遼、景明、竹崎&アリサは走っていった

その頃、先を行くミキは・・・

（希・・・、絶対に無茶しないでね・・・、すぐに行くから！）

願、翠、桂、遼、景明、竹崎、そしてミキは希の元へと急行するのであった

## 希、決意と単独作戦　そして新しい相棒・・・（後書き）

どうも、白石です。

活動報告で予定した日より1週間も早く更新できちゃいましたｗｗｗ

いや～、期末テストの合間に考えていた内容をまとめたらあっさり完成しちゃいましたｗｗｗ

で、今回の話では希の新しい愛銃が”デザートイーグルカスタムモデル”であること、

シェリーカさんの作品で前に一度コラボした『緋弾のアリア　バレットダンサーズ』の主人公とヒロインの”景明”と”つかさ”が再び登場したり

荒木新ニさんの作品『～武偵の道～』に出てくる”アリサ”が出てきたりと

かなりぎっしり詰まった内容になったと思います

次回は、いよいよ”希無双”開始！！

それとかなりエロいレズ展開も考えています、レバニラ炒めとひじきの煮物を食べといたほうがいいかもしれませんよ（↑そこまでじゃないか・・・）

それでは、次回もお楽しみに！！

**希、たった一人の”戦争”、そして、恐怖と救援・・・（前書き）**

前回、タカに関する情報を得るために『ブラックイーグルの幹部を逮捕』する作戦を決行した希。

その作戦の内容は、東京都内でも有数の暴力団”戸川組”とブラックイーグルの麻薬売買を襲撃するという内容であった

尊敬し、自分の命を危機にさらしても救ってくれたタカの為に

希の新たなる相棒”デザートイーグル　希カスタム”が吠える！！、

しかし、それと同時に希にも魔の手が静かに確実に迫ってきていた・・・

注：今回は”防人の４５口径”始まって最長の長さです、後、後半かなりエロいです、Ｒ－１８指定されていたらごめんなさい！！

**希、たった一人の”戦争”、そして、恐怖と救援・・・**

”旧ニコニコ商店街”、その在り来りな名前とは裏腹に道路にはホームレスが溢れ、

しまった店のフェンスには下劣な落書きが書かれ、窓という窓は全て割られており、”世紀末状態”とも言える環境を

明らかに場違いな赤の小型スポーツカーの”ホンダ・ビート”が走っていた

ブロオオオ・・・というエンジン音を立てるその車の主は”希”であった

「あ、あれだ!!」

希は周りを見ながら車を走らせていたが、遠くに”ある光景”を見つけると

少し離れた場所に車を止めて、双眼鏡でその”光景”の様子を監視していた

「先輩から聞いていたけど凄いなぁ・・・」

その光景は更に場違いなものであった

商店街の中央広場に指定暴力団”戸川組”の真っ黒のメルセデス・ベンツSクラスが

、４台止まっており、その回りにはスーツを来た２０人の男性が銃を持って立っていた。

その男たちの持つ銃はトカレフ、マカロフといった定番の密輸拳銃を始め

グロック１７、コルトガバメント、ベレッタＭ９２といった上の２つの東側諸国の拳銃に比べると明らかに高性能な西側諸国の拳銃だけでは無く、

ＡＫ－４７、イサカＭ３７、Ｍ１６Ａ１、ＵＺＩと言ったアサルトライフルやショットガン、短機関銃を持っていた

（勝てるかなぁ・・・）

一瞬、恐怖を感じるが希の決心が変わることはなかった

（先輩はもっとひどい目に会ってるんだ！、それに比べたら何とも無いよ！！）

希は自分の意志を再確認すると、バックサイドホルスターからデザートイーグルを取り出し

ガッチャン！！とスライドを引く、そして「ふぅ」と小さく息を吸うと

（よし！！行くぞ！！）

と心で思い作戦を開始したのであった、”たった一人の戦争”を・・・

～～～希が作戦を始めて１５分後～～～

ブロオオオオオオオオオ・・・、中央広場に鳴り響く別の自動車のエンジン音

戸川組のベンツの間をくぐり抜けて、一台のワゴン車が入ってきた

ガチャッ！！という音を立てて２人の男と１人の女が降りた

『ほぉ、あんたらが今回の取引相手の戸川組の代表か・・・』

『そうだ、戸川組代表の兵藤だ。お前さんの名は？』

『ブラックイーグル幹部の清弘紀代（きよひろきよ）や』

『じゃあ紀代さんよぉ、早速ブツを見せてくれないか？』

『どうぞ、どうぞ！！、良い物いっぱい有りまっせ！！』

その女は関西弁で戸川組の代表者と話をしているのを、希は取引現場近くの廃店舗の中から特殊マイクで聞いていた

「やっぱり来た・・・、ブラックイーグル幹部！！」

希は憎きその相手を双眼鏡で確かめる、外見は２０代後半の女性、

部下と思えし男性3人がトランクの中から段ボール箱を取り出していた

『どうです兵藤さん？』

『ほっほぉ！大麻にコカイン、あへん、ＭＤＭＡとなんでもありますな』

『試してみてはどうですか？』

『じゃあ、さっそくお言葉に甘えて・・・』

希は特殊マイクを外すとデザートイーグルを積まれたコカインの袋に向ける、そして・・・

兵藤が積まれていたコカインの袋に手を出した次の瞬間！！

ズゴォーン！！というマグナムが鳴り響く音と同時に兵藤の持つコカインの袋がはじけ飛んだ！！

「て、敵だ！！」

紀代や兵藤だけでは無くブラックイーグルの戦闘員、戸川組団員たちが一勢に銃を構えて警戒する

「ど、どこにいるんだ！？」

兵藤達が慌てふためく中、希は・・・

「武偵よ！！全員武器を捨てて投降しなさい！！」

隠れていた場所から出てデザートイーグルを構えて警告する

「構わねぇ！！全員、奴を撃ち殺せ！！」

兵藤がそう叫んだ次の瞬間には戸川組団員たちが一勢に持っている銃を希にめがけて乱射してきた！！

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

戦場での銃撃戦を想像させるような銃声が商店街中に鳴り響く

希は素早く近くの店舗の壁に身を隠し一斉に自分めがけて飛んでくる銃弾をしのぐ

「ひいいいいいいいいい！！」

自分でこうなるとわかっていても恐怖で顔が歪む

しかし、恐怖を抑え隠れていた壁から飛び出すと同時に地面に伏せてデザートイーグルを発砲する

ズゴォーン！！ズゴォーン！！と圧倒的破壊力のある４４マグナムがデザートイーグルから

発射され命中した戸川組団員は

「ぐあっ！！」「うがっ！！」と地面に崩れ落ちていく

「何やってるんだ！？相手は一人のガキだぞ！？」

二丁拳銃でトカレフを撃つ兵藤の怒鳴り声が兵藤の持つトカレフの銃声に混じって鳴り響く

「兄貴！！相手はかなりのプロだ！！Ｓランク武偵だ！！」

「それがどうした！？、周りを包囲しろ！！」

「分かった！！行くぞ！！」

希はこの会話を聞くと素早くデザートイーグルのマガジンを交換し自分を包囲するべく回ってきた暴力団員に向けてズゴォーン！！ズゴォーン！！と発砲する

マグナムの反動で彼女の特徴のポニーテールが大きく揺れる

「ぐぉ！！」「ぎゃああ！！」

また一人、一人と暴力団員が地面に崩れ落ちていく。

希は二人の暴力団員をダウンさせた後、立ち上がると同時に走りだし近くの止まっていた戸川組のベンツの後ろに飛び込んだ

ズダダダダダダダダ！！！

とブラックイーグル戦闘員、暴力団員達が望みの隠れているベンツに向けて一勢に銃撃する

バギョーン！！バギョーン！！と金属に銃弾が当たる音を背中で感じながら、

（このベンツはもう少しで爆発する・・・、次の遮蔽物を探さないと！！）

希はそう思い、周りを見渡しあるものを発見した

（あの植え込みを越えた、あのドラム缶に隠れよう！！）

希が発見したのは近くの工事現場に置かれていた大量のドラム缶の山であった

（1，2，3で行こう・・・）

望みの隠れているベンツはもうすでに爆発寸前であった

「1・・・、2・・・・、3・・・・！！」

希がそう言って飛び出した次の瞬間！！

ズドオオオオオオオン！！という爆発音を立ててベンツが爆発した

「あっちだぁぁ！！」

ブラックイーグル幹部の紀代が叫ぶと、ブラックイーグル戦闘員達が持つＭＰ５Ｋが一勢に希を目掛けて発射された

ズギュン！！ズギュン！！ズギュン！！と希の足元にＭＰ５から発射された弾丸が着弾しアスファルトを削り飛ばしていた

ズドォーン！！ズドォーン！！、希は走りながらデザートイーグル

を乱射する

ガキィ！！という音を立てデザートイーグルの弾が切れると希は素早くホルスターからデトニクスを引き抜くとハンマーを起こして素早く反撃する

希はデトニクスを撃ちながらドラム缶の山の裏に飛び込む

そこで素早くマガジンを交換した希はドラム缶からローリングしながら飛び出し、射撃する

「ぐあっ！！」「ぐぉ！！」とまた暴力団員が崩れ落ち、彼らの持っていたＡＫ－４７が地面に転がっていく

（コレで残りの敵戦力は１７人だ・・・）

希は残る敵の数を確認しつつもある緊張感に包まれていた

「デザートイーグルのマガジンが残り２つ、デトニクスが３つ、ニューナンブは４つか・・・」

予想以上の銃撃戦で希の持ってきた銃のマガジンが残り少なくなってきていた

「このままじゃ、弾切れでやられちゃう・・、何とかしないと・・・あ、」

希は隠れていたドラム缶から半身で様子を確認し、近くにあるものを発見する

「ＡＫ－４７・・・、よし！」

希はさっき倒した暴力団員のＡＫ－４７が近くに落ちていることを確認すると、

デザートイーグルをホルスターに戻し、代わりにデトニクスとニューナンブを引き抜いていつもの戦闘スタイルを取り、相手の様子を確認する

そして、一瞬銃撃が収まった瞬間に、希はドラム缶から飛び出し、ズギューン！！バギューン！！と希独特のオートとリボルバーの二丁拳銃で応戦しながらＡＫ－４７の落ちている場所に走っていく、

それと同時に暴力団員３人が持っているグロックやＭ１６Ａ１、トカレフを撃ちながら希に向かって走ってくる

それよりも先にズザー！！と地面に飛び伏せると同時にＡＫ－４７を手に取り、

ズガガガガガガガガガ！！と暴力団員達に向けて射撃する

「ぎゃっ！！」「ぐえっ！！」「うがっ！！」

防弾チョッキに希の放ったＡＫ－４７の７．６２ｍｍ弾を食らった３人はドサドサッ！！と倒れていく

（確か、ＡＫ－４７のマガジンキャッチはここだったはず・・・）

希は前にタカに教えてもらったＡＫ－４７の使い方を思い出していた

『いいか希、ＡＫ－４７は敵さんから奪えるアサルトライフルの中では一番、数が多い』

「確かに敵から奪いやすいですね・・・」

目の前の敵（ブラックイーグル）に捕まっているタカを助けるべく、希はタカに教えてもらった知識をフル活用する

まず、もう一つのＡＫ－４７からマガジンを抜き取り、カラになった希のＡＫ－４７のマガジンと素早く交換する

マガジン交換を終えると同時に、気絶している暴力団員から残りのＡＫ－４７のマガジン全部を抜き取り、制服の上着とズカートの間に挟み込む

タカから習った敵から奪った武器のマガジンを素早く携帯するための方法だ

そして、希は素早くＡＫ－４７のセレクターを切り替えて単発にし、ＡＫ－４７を敵に向け

ダン！！ダン！！ダン！！と単発で射撃する

「ぐおっ！！」とかなり離れた距離にいる暴力団員に命中しダウンさせた

「よし！！」

希はそう言うと、素早く場所を移動しつつ、セレクターをフルオートに変更して

ズガガガガガガッ！！とローリングすると同時に一勢にぶっ放す

「「「「グアアアアアアアアアアアアアア！！」」」」

一気に４人をダウンさせた希は、ＡＫ－４７のマガジンを交換しようとしたときであった

「このガキがぁぁぁぁ！！」ブロオオオオオオオオオオオオ！！

そう戸川組団員が叫びながら、ベンツで希を轢き殺そうとしていた

「！！」

希は素早くデザートイーグルを引き抜くとベンツに向けてズドォーン！！と発砲するドカァーン！！爆発音を立ててベンツのボンネットが吹き飛ぶ

「うわあああああああああああ！！」

「うおっ！？」「うわぁ！！」ドカッ！！

ベンツを運転していた戸川組団員は驚きのあまりにハンドル操作を誤り、ＭＰ５ｋを射撃していたブラックイーグルの戦闘員２人を跳ね飛ばし、先に爆発したベンツにガシャーン！！と突っ込んだ

運転していた戸川組団員がベンツから降りて少し離れた所でベンツはドカーーン！！と轟音を立てて爆発した、運転していた戸川組団員は無事ながらも爆風に巻きこまれて気絶していた

希はその様子を確認していると、目の前にＵＺＩを持った二人の戸川組団員がやって来て希に向けてＵＺＩを乱射してきた

希はとっさに伏せると、２人に向けてＡｋ－４７を射撃する

「ぐあっ！！」「ぶるぁ！！」

また戸川組団員が倒れると、希はとっさに近くの自販機に身を隠すと半身で残りの人数を確認する

（残り６人、幹部はどこに！？）

希の目の前には戸川組団員が４人、ブラックイーグルの戦闘員が１人、幹部の紀代の姿は確認できない

幹部を逮捕できなければ今回の作戦は失敗である、希に若干の焦りが湧く

（どこ！？、どこにいったの！？）

希は幹部を逮捕しなければならいないという焦りからか遮蔽物を飛び出した瞬間！！

「このクソガキがァ！！」

「！！」

２メートル近くあるスキンヘッドの戸川組団員が日本刀を手に切りかかってきた次の瞬間には戸川組団員が日本刀を振り落とした！！

しかし、ガキィン！！という音が辺りに鳴り響く

「！？」

戸川組団員が驚いた瞬間にはボゴォ！！と顔面に強い衝撃が走った

「ぐあああ！！」

戸川組団員が悶える側で希はニューナンブをホルスターから引き抜いていた

「何とかなったなぁ・・・」

希は冷静になりながら、特殊警棒を戻していた。

さっきの音は日本刀を希の特殊警棒で受け止めた音だったのだ

「これで残り5人！！幹部は！？」

希はそう言いながら幹部の紀代を捜索するため走っていたが、ガチャリ！！という音に立ち止まり辺りを振り返ると・・・

「代表！！包囲しました！！」

希の周りを戸川組団員が包囲していた

「し、しまった！！」

希がそう叫んだ瞬間には、戸川組団員達が持つコルトローマン、上

下二連装ショットガン、マカロフが希に向けられていた

「よし！！やれ！！」

戸川組代表の兵藤がそう叫んだ瞬間、団員達は持っている銃を一勢に発砲した

ズダァーン！！、ズドォーン！！、バギューン！！バギューン！！

重なり響きあう銃声、銃弾が希を蜂の巣にする

はずであった・・・

「”ロードチェンジ！！”」

弾丸が放たれるより前に希がそう叫ぶと、放たれた3つの銃の銃弾が進路変えた！！

その進路の変わった弾丸の新しい進路は・・・

バギィ！！（↑近くにあった看板が散弾で撃ちぬかれる音）

「ぐあっ！！」「ぎゃああ！！」「ぐえっ！！」

3人の戸川組団員が悲鳴を上げて地面に崩れ落ちる

そう、希のロードチェンジにより進路を変えた銃弾は”銃弾を放った戸川組団員に向かった”のである。

ショットガンの散弾は近くにあった看板に、コルトローマンの弾は

マカロフを放った団員に
マカロフから放たれた2発の銃弾はコルトローマン、ショットガンと持った団員に命中させたのである
「・・・ふぅ」
「う、うわあああああああああああ！！バ、バケモノだあああああああああ！！」
兵藤はの希のロードチェンジを目にし、恐怖のあまり持っていたトカレフを地面に落とし
近くに止まってあったベンツに飛び乗りその場を逃げ出そうとした、
ブロオオオオオ・・・という音を立て走り去ろうとするベンツに向けて希がデザートイーグルを向け狙いを定め、そして・・・
ズドォーン！！というマグナムの銃声が鳴り響き、ベンツのタイヤを撃ち抜く
ズドォォォォン！！という音と火花を散らしながら兵動の乗ったベンツがロールオーバーしながら転がっていく
「戸川組はコレで全滅！！残りはブラックイーグルの幹部だけ！！」
希はデザートイーグルのマガジンを交換し、残る標的のブラックイーグル幹部の紀代の姿を探していた
「どこ！！、どこにいったの！？」

そう言う希の声には明らかに怒りが混じっていた

「絶対に逃してたまるか！！」

目の前にいた、憎き敵、父についでタカまでも奪ったブラックイーグルへの憎しみを声にしながら希はブラックイーグル幹部の紀代の姿を探す

希は残り弾数少なくなったデザートイーグルの代わりにデトニクスとニューナンブをホルスターから抜き紀代を捜索してた

その時！！

ＢＡＲ　Ｍ１９１８Ａ２を持った一人の女声が希に話しかけた

「おめぇ、ウチを探してるんだろ？」

「！！」

希は振り向きざまにデトニクスとニューナンブを向ける

憎き敵、ブラックイーグル幹部の紀代に・・・

「・・・」

「ははは、どうしたんや？そんな怖い顔して？」

希の顔には怒りが現れていた、その顔を見て紀代は軽くあざ笑う

「あなたが先輩を・・・・！！」

「先輩？何のことや？ウチには何のことかさっぱりや？」

「ふざけないで下さい！！」

希は怒りを込めてニューナンブのハンマーをガチャリ！！と起こす

「ああ、思い出した。確か、鷹山の戦兄妹か」

「そうですよ・・・」

「戦兄を助けるためにたった一人で戸川組団員の連中を片付けたのか、やるねぇ。まぁ、あんなクズ共がお前に全滅させられても不思議じゃないな」

紀代は希が全滅させた戸川組団員達を見ながら感心したようにそう言い放つ

「・・・」

希はただ黙ったまま、ニューナンブとデトニクスを紀代に向ける

「確かお前の名は・・・、風連・・・希だったか」

「どうして私の名前を？」

「あの”傷だらけの”鷹山の生徒手帳にお前の名前が書いてあったんや」

「！？」

傷だらけという紀代の発言にピクッ！！と反応する希

それを見て紀代はニヤリと笑い、こう続けて言い放つ

「今頃本部の檻の中で悶えているやろうな～、はははっ！傑作や」

希の頭の中で悶え苦しむタカの様子がハッキリと浮かぶ

『はぁ・・・、はぁ・・・、はぁ・・・』

そのタカの様子はいつ死んでもおかしくないものであった、希は更に怒りを積もらせていく

それを見て紀代は逆撫でする様にこう言い放った

「もう”3日後には死んでるだろうな”」

その紀代の一言に希の堪忍袋の緒が切れた！！

「このぉ！！」

バギューン！！ズギューン！！と希のデトニクスとニューナンブが火を吹いた

「おお！、キレた、キレタ！！」

紀代は笑いながらＢＡＲのコッキングハンドルを引き希に向けて射撃する

ドドドドドドドッ！！

ＢＡＲの銃口から３０－０６スプリングフィールド弾が希を目掛けて発射される

ズダズダッ！！と希が隠れている立木に銃創が開いていく

「よくも先輩を！！」

ズダァーン！！ズギューン！！と希も応戦する

紀代はそれを軽く回避する

「くっ！！」

「ハハハ！！おもしろくなってきたの～～！！」

希の反応を見て紀代はますます笑い声を大きくしていく

「何がおかしいんですか！？」

「いやぁ～傑作や、ただのＤランク武偵が単純な罠にハマった”クズ”の先輩を助けるためにここまで切れるとはな！！」

「先輩を・・・、先輩をバカにするなぁぁぁ！！」

希はデトニクスとニューナンブをホルスターに戻すと、デザートイーグルを取り出し紀代に向け発砲する

「先輩は、自分の命を危険にさらしても自分を救ってくれた人なのに！！それをクズだなんて・・・、絶対に許さない！！」

希は怒りを４４マグナムの銃声に変えるようにデザートイーグルを発砲する

ズドォーン！！ズドォーン！！とデザートイーグルから発射される４４マグナムを交わしながら紀代は懐から”ある物”を投げつけた

「！！」

希はそれに見覚えがあった

タカが拘束された現場に転がっていた”空き缶型閃光手榴弾”だ

希が目を塞いだ瞬間、バン！！という音を立て閃光手榴弾が炸裂する

希は目を塞ぎながら、デトニクスを紀代のいる方向にむけて発砲し追撃するが・・・

ドスッ！！という衝撃が希の腹に走った

「かはっ！！」

希がそういった瞬間には、希は紀代に一本背負いされていた

ドスッ！！と背中から地面に希は叩きつけられる

「うっ！！」

希はそう悲鳴を上げながらも、デトニクスを紀代に向けようとした
しかし、それよりも先に・・・
ジャキッ！！
「大人しくした方が長生きできるで♪」
「！！」
希の口の中には紀代の持つＭ１９１７リボルバーが突っ込まれていた
「アンタ、なかなか腕あるな。たいしたもんやで」
紀代はそう言うと、希の口の中からＭ１９１７リボルバーを出した
「アナタみたいな人に言われたくありません！！」
希が自由になった口でそう言うと、紀代は腰から漁師マキリを取り出した
「口と戦闘能力は確かだから、次は・・・”お前の体”を調査しようかな」
紀代はそう言うと、希の防弾制服を漁師マキリでビリビリッ！！と引き裂き始めた！！
「ひっ！！」
恐怖で悲鳴を上げる希を見ながら紀代はニタリと笑いながら作業を

続ける

ビリビリ！！と言う音がしばらく鳴り、希の防弾制服が切り裂かれ希の上半身が”裸体”で紀代の前に姿を表す

「おお！！」

「イヤ、イヤァ・・・、見ないで・・・」

希の裸体を見てスイッチが完全に入った紀代は”野獣と化した”

「ッムグ！！」

紀代は強引に希の唇を奪う、そして右手を希の胸に当て揉み始めた

「～～～～！！」

希は声にならない悲鳴を上げるが、紀代の舌は構わず強引に希の口内を蹂躙する

（ダ、ダメェ！！）

ジョロオオオオオオオオオ・・・

紀代の行為の激しさのあまりに希のデルタからアンモニア水が溢れ出す

「うおっほ・・・？」

紀代はコレを見て次の行為に出る

紀代は希を抑えつつ希の両足を脇に挟み込む、そして口を開けて希のデルタに顔を近づけて

「んぐっ！！んぐっ！！」と希のデルタから溢れ出すアンモニア水を飲んでいく

「イヤァ！！、イヤァ！！、お願い！！飲まないで！！」

希の叫びを無視して、紀代は希のアンモニア水を飲んでいく

「ぷはぁ！！」

希のアンモニア水を飲み終えた紀代は、希のアンモニア水でグショグショになったショーツを漁師マキリで切り裂いた！！

「イヤァ！イヤァ！」

希の叫びを無視して紀代は希を生まれた時の姿にしていく

そして・・・

「そそられるのぉ・・・？」

「ひぃぃぃ！！」

ジョオオオオ・・・・とまた、希のデルタからアンモニア水が流れ出す

全裸でガクガクと震える希を前に紀代が舌で唇を怪しく、不気味に

ペロリと舐める

「アンタ、先輩を助けるためにウチを逮捕しに来たんやろ？」

「は、はひぃぃ・・・」

「けど、それは無理な話や」

紀代はそう言いながら希の顎をクイッ！と上げる

「戸川組の連中を倒すことが出来ても、ウチのようなブラックイーグル幹部を倒すことなんてアンタには一生無理や」

希の首に漁師マキリを当てながら紀代は続ける

「こんな、小便ドバドバと漏らして、首に刃物当てられるお前みたいな人間がブラックイーグルを倒すことはできん・・・」

「あ・・・、あぁ・・・」

希の頬を涙が伝っていく、自分がこの後どうなるかは予想が付いていた

「それにや、ブラックイーグルに損害を与えた以上は生かしておくことはできんのよ・・・」

紀代は漁師マキリを希の大動脈に押し当てた

希は死を覚悟した

「けど、ウチは心優しい女や生かしてあげるで・・・」

希は紀代のこの発言に一瞬安心した、しかし！！紀代が次に言い放った言葉が希を絶望に突き落とした

「アンタをウチの”性奴隷”にしてやるよ」

性奴隷という言葉に希は絶望し、泣き崩れた

「うわあああああああああああああああああん！！」

止まらない涙を流しながら、希は心の中で謝ることしか出来なかった

先輩ごめんなさい・・・、

先輩を・・・、

助けることできませんでした・・・

ごめんなさい・・・

希は心の中でそう思い、迫ってくる紀代を前にただ泣くことしか出来なかった

その時であった！！

「謝る必要は無いぜ、希」

一人の男の声がしたかと思った次の瞬間！！

バギューン！！バギューン！！

2発の銃声が紀代の足元に着弾した

「！？」

紀代は驚きながらも漁師マキリを取り出し、希を人質にしようとするしかし、

バギューン！！

という銃声と同時に紀代の手に持っていた漁師マキリが吹き飛ぶ、

それに続いて、

ズガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！

という数丁の銃の銃声が鳴り響き、紀代の足元に着弾する

「クソッ！！」

紀代はＭ１９１７をホルスターから抜き、希に向けて射殺しようと希に向けて瞬間には

シュッ！！という強風が吹くような音がした思った時には希の姿は無かった

「！？」

紀代が驚いた、次の瞬間には

「こっちだ変態」

紀代の真後ろから声がした

「！？」

紀代が驚きながら後ろを振り向く、そこには・・・

「願・・・、先輩・・・」

「希、もう大丈夫だ」

希を姫さま抱っこする願の姿があった、その顔は優しいものであったが、

明らかに尋常じゃない殺気が辺りに漂っていた

それに続いて、ジャキ！！ジャキ！！ジャキ！！と銃を向ける音がする

願の横には、Ｇ３を持つ翠、ＳＡＡを構える桂、ＡＫ－１０２を持つ遼、グロック１７を二丁拳銃した竹崎
Ｍ６０軽機関銃を持った景明、

彼らの顔には怒りが隠されること無く、怒りの表情が紀代に向けられていた

そして・・・

「希！！」

ＭＡＣを構えたミキの姿があった

「くそっ！！」

紀代がそう言うと、願はこう言い放った

「お前みたいな奴は絶対に許さねぇ・・・！！」

願はそう言いながらデザートイーグルを紀代に向ける

それに続いて、ミキが口を開く

「タカを拐っただけじゃなく、希も傷物にしようとしたアンタ、ア

ンタだけは・・・！！」

ミキは一回息を吸うと、怒りを露わにこう言い放った、それに次ぐように願も口を開く

「絶対に許さない！！」

「生きて帰れると思うなよ・・・」

## 希、たった一人の”戦争”、そして、恐怖と救援・・・（後書き）

どうも、白石です。いや～、今回の話は圧倒的に長いですね～

書いていて疲れましたよ、それにしても・・・

紀代の奴、どうしようかな・・・、希に手出したんだから・・・”殺すか”

『よし!!、殺そう!!』（↑ｂｙ：Ｉ○の酢豚）

後、希・・・Ｄランクだよね？

書いていて「Ｄランクの戦いかこれ？」って、何度もなりましたからｗｗｗ

次回は、紀代ＶＳ願達、紀代の意外な戦闘能力の高さ、願＆ミキの本気などがメインの話になります

後、最近、希にコルト２５オート持たそうかなと考えてます

それでは、次回もお楽しみに!!

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8089s/

緋弾のアリア　防人の４５口径

2011年12月17日07時54分発行